瀨古確著

近代日本文章史

東京
育英書院發行

瀨古確著

近代日本文章史

東京 育英書院發行

Ø

近代日本文章史

目次

近代日本文章史

瀬古確著

緒言

一

支那文物の移入と共に漢字漢文の招來となり古代人はその思想感情を外來の表現形式たる漢文によつて發表しようとしたのである。日本人のうちにも漸く漢文を巧みに驅使するものも現れ古事記とか日本書紀とかの編纂となつたのであるが、そこには日本人の想情を盛るに適せしめむとして既に早く和臭ある漢文の表記を見出すのである。特に古事記にあつては日本語の特質たる敬讓語とか助辭とかの表現に力を用ひ、よく古代人の生活感情をわれわれに傳へてゐるのである。

平安朝に至つて假名の發生を見るや、漢字の佶屈さから逃れてはじめて思ふが儘に自己の想情を書記する事が出來るやうになつた。漢字漢文の尊重せられた時代だけに、假名は女文字として漢字の下位におかれたがために源氏物語とか枕草紙などの王朝文學の優篇は共に女流作家によつてものせられたのである。女流によつて假名文の使用せられるを見るや、男性にあつても紀貫之の如く早くも女の名に隱れてまで自由な表現をとらうとして土佐日記をさへ著したのは如何にも卓見と言ふべきである。

平安朝時代における如く優美な宮廷生活を背景として自然と人生とを描出するにあたつては流麗纎細な假名文が最も適當したものだつたらうけれども、鎌倉時代となり武勇を尊び潔白を旨とする武士の世となつては女性的な假名文には最早滿足する事が出來なくなつたのも當然の數と言ふべきである。かくて武士階級の生活を描き彼等をその讀者層とした軍記物語にあつては、所謂和漢混淆文の出現をみねばならなくなり、假名文と漢文とはこゝに完全に握手する事となつたのである。

かくの如く假名文とか和漢混淆文の發生の事情を見るもその時代の社會層に適當したものの現れてゐるのを思ふとき、明治の新文章の發生についても容易にあるヒントを得る事が出來る

やうである。

鎖國の夢から醒めた明治新人は何れも「文明開化」を合言葉としては一日も早く西歐文物の普及を目的としたのである。

新文化の普及にあたつて在來の漢文や雅文を以てその儘新生活を描き出す事の不可能なのは言ふまでもない。

一人も多く文明の恩澤を蒙らせむとする實用的な意味からも平明と簡潔とを尊び言文の一致を望む傾向も亦こゝに胚胎したのである。

彼の二葉亭が「めぐりあひ」とか「あひゞき」などによつて當時の讀者を驚嘆せしめたのは一に清新な歐文脈に負ふものなるを思ひ、更に逍遥美妙四迷鷗外などと明治の新小說に力を致した人々の盡くが英獨露の外國文學の何れかに深い教養を有してゐるのを思ふとき新文章における歐文脈の勢力の拔くべからざるもののあるを推察するにかたくないであらう。

實に近代の新文章は歐文脈を主流とし言と文との一致をはかる事によつて淸新複雜な想情の表現に適應せしめようとしたものであつた。卽ち日本の文章は明治二十年前後を期して新文化と共に招來された歐文脈を主流として文章史上稀にみる大轉廻を試みたものと言ふべきであ

る。しかもこの轉廻こそ平安朝の假名文の發生鎌倉期の和漢混淆文の成立と共に特筆せられねばならないのである。

近代の新文章言文一致の發達を述べるにあたり、或は紅葉を以て或は漱石藤村を以てその完成者とみる考もあるけれども、私は寧ろ大正期の白樺派の作家有島武郎・武者小路實篤などの文章に目覺ましい發展の姿を見出すものである。

紅葉は文章報國を念願として表現に腐心したばかりでなく「二人女房」や「多情多恨」に言文一致の筆を揮つて「……である」止を完成し永く今日まで文の結尾樣式となり了つたのを見ても言文一致は彼によつて著しい進展を示したものと言ひうる。けれども彼の文章にはどことなく戯作臭味が漂つてをり特に最後の大作「金色夜叉」に至つて再び雅俗折衷體によらねばならなかつたのによつても彼を目して言文一致の大成者と斷言する事は出來ないであらう。

更に漱石とか藤村に至れば言文一致の新文章も一段の進展を示し最早硯友社一派の如く誇張とか粉飾とかを事とするやうな傾向は見られなくなり歐文脈の使用も巧みを極めた點において彼等の功績には沒すべからざるものがあるのである。けれども彼等の文章には未だ文語的臭味を離脱しきつてをらず言文一致の目標だつた Spoken language をその儘表現に採入れてゐる

ものとは思はれないのである。更に新文章に決定的な方向を指示した歐文脈も明治期にあつては巧みに使用されてはゐるけれども、未だ自由自在に驅使せられるまでには至らなかつたのである。

即ち大正期に入り白樺派の出現と共に有島武郎の如く歐文脈を自由に驅使する作家も生れ武者小路實篤の如くつとめて Spoken language によらむとするものも現れてこゝに言文一致の新文章は略々その完成を告げたものと見る事が出來るのである。

かくの如くわれわれは大正期の白樺派にまで下降して言文一致の完成を求めむとするものであるが、更に新現實派の菊池寛の文を見るに、こゝには最もよく近代文章の特質が窺はれるばかりでなく歐文脈の如きも如何にも生活に即して來てゐるのが見られるのである。

近代日本文章史を叙述するにあたりわれわれの大正期を以て一線を劃せんとする所以も亦ここにあるのである。

二

本書にあつて近代の新文章を論ずるにあたり私は先づ第一篇においては「作家を中心として

の考察」と題して展開的に之を眺めたいと思ふのである。

明治初年早くも見る所あつて文體の平易化につとめ一人も多く文明の恩澤を蒙らせむものと努力したのは福澤諭吉であつた。西歐文物の吸收に燃えさかつてゐた當時の人々に西洋の事情なり新知識なりを授けるにあたつて、彼がその表現に達意平明を主眼とした事は如何にも時宜を得たものであつた。その著西洋事情の著者の手より發賣せられたもののみにても十五萬部を下らぬと言はれてゐるのも一にはその平明暢達なる表現形式によるものなる事は明かである。しかも彼の文章は語尾だけ變へれば直ちに言文一致體となるのによつても假名垣魯文の如き舊樣式の表現から言文一致の新文章への橋梁の役目をなしてゐるものとしてその功績は重視せらるべきであらう。

ついで坪内逍遙の「小說神髓」は明治の新小說の向ふべき道を指示したものとして文學史上忘れられないものであるが、その「文體論」に俗文の價値を認めては新俗文の出現を待望し、間もなく現れた二葉亭の「浮雲」に呼びかけてゐる點においても亦尊重せらるべきである。

二葉亭と美妙齋とは共に言文一致體の創始者として永くその功績を記憶せらるべき人であるが、その新文章は何れも外國文學の素養によつて導き出されたものである。

小說と言へば何かストライキングな事件のみを取扱ふものとしか考へてゐなかつた當時の讀者にとつては平凡人の間に醸される平凡な事件を書き綴つた二葉亭の「浮雲」(明治二十年)は確かに驚嘆に値するものだつたに違ひないのである。この作品の重んぜられたのは單に內容ばかりではなく表現形式に新味を採り用ひた事が與つて力あつたものの如くである。特に二十一年に發表せられた「あひゞき」とか「めぐりあひ」などは共にツルゲネフの作品を譯出したものであつたが、その自然描寫の如きは在來の作品には未だ嘗て見られなかつた程甚しく緻密詳細を極めてをり永く文壇に範を垂れる事となつた程である。

美妙齋も西歐の表現にヒントを得、二十年頃より當時としては寧ろ耳障りな程斬新な形式によつて讀者の目を奪ひ一躍文壇の寵兒となつたのであるが、今まで俗文として嘲笑的に呼ばれてゐたものに言文一致なる對等な稱呼を與へたばかりでなく、屢論難の矢面に立つて大いに新文章の喧傳につとめた點は二葉亭などよりも積極的であつた。

西洋崇拜のほとぼりの冷めかけたのと共に反動的に國粹保存の運動も興るやうになり、今まで見るものゝなかつた古典を眞面目に研究するものも現れるやうになり二十年代の如きは西鶴熱を煽り露伴や紅葉さへ西鶴張の文章をものするやうになつた。

雅俗折衷の文體も亦この潮流に棹して勢を得たものであり特に紅葉露伴をはじめ鷗外緑雨一葉など當時有名な作家が多くこの文體によつてゐたがために言文一致も一時その光芒を掻き消されたかの觀があつた。

しかるに新狀勢を早くも見て取つてか二十四年紅葉の「二人女房」に言文一致體を採り用ひるに及んで再び新文章も隆盛の氣運に立向ふ事となつたのである。特に二十九年に發表された「多情多恨」には「……である」止を完成して永く今日まで口語文の結尾形式となり了つたばかりでなく、最後の大作「金色夜叉」の如きも再び雅俗折衷の舊樣式を採り用ひてはゐるものの、よく和漢洋の三文脈を融合して豐麗な表現となりえてをり、特に歐文脈の使用においては寧ろ美妙以上だつたのを思ふとき近代の新文章は紅葉の手を經てはじめてその方向を明示せられたものと言ふべく彼の「文章報國」の念願も殆んど達せられたものと言ひうるであらう。

俳句の革新とか歌壇の淨化に力を致した正岡子規は一方寫生文を提唱して自ら之を習作し、虛子とか漱石などに至つて大成せられたばかりでなく、その影を自然主義作家の作品にまで投げかけてゐるのを思へば、相當注目せられねばならないのである。子規としても最初から言文一致の筆を遣つたものではなく、寫生を唱導して硯友社一派の誇張とか粉飾とかを却けようと

するや「平々淡々のうちに極めて精細に極めて深刻に事實を叙すること」の出來るこの文體によらないではをられなかつたのであつて、こゝには美妙とか紅葉などよりも一層必然的なものが漂つてゐるやうである。即ち美妙は斬新な表現をとらむとして言文一致によつたものであり紅葉もたゞ隆盛な新文章に動かされて之を試みたものにすぎず、是非とも之によらねばならなかつた理由は見出しえないのである。之に反して子規は「寫生」を旨とし「客觀的態度」を持した結果、いやでも新文章によらねばならなかつた所に前二者との根本的な相違が見られるのである。

島崎藤村が「詩から小說の形式を選ぶやうになつた」最初の所產はかの「千曲川のスケッチ」であつたが、そこにもわれわれは厭くまで客觀的な寫生的態度を看取しうるのであつて、子規一派の提唱にかゝる寫生文の投影をも見逃しえないであらう。更に三十七年起稿の最初の長篇「破戒」に至れば寫生文以後發展してきた客觀描寫の筆を揮ひ地方色を濃やかに出してゐるばかりでなく歐文風な巧みな表現も亦見受けられるのである。四十年東京朝日に連載せられた「春」は前の作品よりも一層個性の色の鮮かなばかりでなく歐文脈の如きも亦消化し盡されてをり凡手でない彼の貫錄を示すに充分であつた。更に四十二年に着手せられた「家」に至れば歐文脈

も手際よく攝取せられて日本文として目立たないまでになつてをり、この方面での藤村の功績も見逃す事は出來ないのである。

夏目漱石は子規派の俳人として先づ世に知られ、子規の寫生文の運動に動かされて三十八年始めて「我輩は猫である」を發表して一躍文壇にその名を謳はれるやうになつたのであるが、われわれはこゝに寫生文の完成の姿を見うるのである。猫には寫實的態度も見られるのであるが、簡明な文章の中にもゆつたりした餘裕と落着とが見られ、自然派全盛の時代にあつて餘裕派なる一派を樹立して一歩も譲る事のなかつた後年の偉大さを窺ふに足るものがある。

猶三十九年九月新小說に發表の草枕は餘裕派としての特色をけざやかに現してゐる作品であつて讀者をして「すこしの間でも非人情の天地に逍遙」させたいとの念願から生み出されたものであつた。そこには峠の茶屋の一節の如く寫實の妙を得たものもあつて漱石の如何に寫實家としての天分に惠まれてゐたかを物語つてゐるのである。

更に四十年六月から朝日新聞に掲載せられた「虞美人草」にも「草枕」と共に漱石獨特の新文章を示してをり、繪畫的な手法によつてゆつたりとして逼らぬ文の見られるばかりでなく飄々たる情趣を漂はせた漢文脈も用ひられてユーモアに富んだ齒切のよい表現となりえてゐる。

かくてわれわれは藤村漱石の努力と精進とによつて明治二十年前後から漸次進展して來た新文章の二大高峯を示されたわけで、彼等の功績の決して小さくないのを信ずるものである。けれども眞の口頭語的表現とか歐文脈の驅使せられた姿は白樺派の作家によつてはじめて示されたものである。

白樺派の作家有島武郎の作品を見るに四十三年十月白樺揭載の「かん〳〵蟲」に於て既に絢爛多彩な歐文表記も見られるのであるが、「カインの末裔」(大正六年)「小さき者へ」(大正七年)に至れば淸新な自然描寫や巧みな擬人法に歐文の呼吸をも感ずる事が出來るのである。更に「或る女」(大正八年)の豐麗奔放な筆致はよく斬新な比喩と調和して目も眩い程な歐文脈を示してをり、われわれはその芳香に醉はされずにはをられないのである。

新文章の方向を指示したものとも言ふべき歐文脈は有島の作品においてはじめて自由自在に驅使せられたものと言つても過言ではないであらう。

武者小路實篤は白樺派の驍將として盛に活躍し自由淸新な形式を文壇におくつたものであるが、中でも眞の言文一致の標本を示しえた點は彼の功績としていつまでも忘れられないものである。

彼の表現は如何にも自由であつて無器用な美とでも言ふべきものを含んでをり、特に口頭語をその儘巧みに文章に寫してゐるのは、近代文章の當初の目標にはじめて到達したものとも言ひうるであらう。

卽ち大正元年發表の「世間知らず」を見るも滑らかな口頭語的な表現が見られるのであり、文語的臭味の感ぜられないのはもとより、まゝ冗長と思はれるほどあらゆる角度から縷述しようとする傾向も見受けられるのである。

更に「彼の三十の時」（大正三年）を見るに彼の特色は一層けざやかに現れてをり、眞の言文一致の姿を示してゐるばかりでなく、同じ言葉を何度もかまはずに用ひては、寧ろこゝにリズムをさへ求めてゐるのではないかと思はれるものもあるのである。しかも題名から「彼が三十の時」とある如くこの作品には彼を中心とした獨語的な場面がその大部分を占めてゐるのであるが、かゝる獨り物を言ふやうな書き振りも彼の特色として全作品に現れてゐる所である。

かゝる獨語的な傾向は「ある日の手紙」（大正十年）とか「一休の獨白」（大正十三年）となつて現れてをり、更に大正十二年作の自叙傳小說「或る男」の如きはかゝる傾向の頂點に達したものであつた。

彼の作品には獨語風若くは對話式のものが多く「……の話」といつた題名さへ幾つも見受けられるのであるが、こゝにも作者の話言葉を好んで用ひた一つの理由があるやうである。有島とか武者小路などの功績を思ふとき、白樺派の作家の文章革新に對する力の甚だ大きかつた事を認めないではゐられないであらう。

自然主義の作家を人生の從軍記者と言へるならば寧ろ人生の戰士として血みどろな實生活を描かんとして生れ出でたものに新思潮の一派があるが、中でも菊池寛はいゝ意味での現代を代表し屢文壇の大御所などと言はれてゐる。

彼の作品には初期の短篇においては有島の如く華麗にして人の目を奪ふと言ふよりも、つゝましやかな中にもゆとりのある表現を示してゐる。しかも漱石などの文に見える佶屈な漢語などは全くその影をひそめてをり、平易な語句のみでその用を辨じてゐるのは新文章の特色を最もよく具現してゐるものとも言ふべきである。

即ち彼の「無名作家の日記」(大正七年)を見るも、句讀點の非常に多い短い文より成つてをり、しかも常識的な語句の連ねられてゐるがために、簡明直截な文章となりえてをり、更に「恩讐の彼方に」(大正八年)を見るも、流麗な自然描寫の見受けられるばかりでなく、氣のきいた

歐風の筆致も亦認められるのである。

かくの如く短篇小說においては簡明素朴な筆致を示した菊池寛も、一度轉じて長篇をものするにあたつては、前には全く見られなかつた程な絢爛さを示してゐるのは注目に値するであらう。

即ち大正九年大每東日に連載の「眞珠夫人」を見るに歐文脈を多分に取入れてゐる事は彼の表現に明朗さと絢爛さとを與へるのに役立つてゐるやうである。更に「慈悲心鳥」（大正十年）「火華」（大正十一年）「新珠」（大正十二年）などに至つては淸新な言ひ廻しとか巧みな比喩によつて初期の作品には決して見られなかつた豐麗な文章を示してゐるのであるが、內容によつて形式を決しようとする彼が華美な有產階級の生活を描くにあたつて從來の素朴な形式を捨てゝ目も眩いほどの絢爛多彩な表現へと移つて行つたのも亦當然と言ふべきである。しかも菊池寬の長篇においては歐文脈の地についてゐるのも歐風の新生活が漸く目立たないまでに落付いて來た事を物語るものに外ならぬのである。

三

新文章の推移發展の跡を展開的に眺めたわれわれは更に横の考察へと筆を轉じて第二篇にあつては「文脈を中心としての考察」を行ひ、第一に漢文脈の消長第二に國文脈の系統第三に歐文脈の陰影を檢討し、歐文脈を主流としてこれらの融合調和の上に近代文章の成立を見んとするものである。

明治の新時代には寧ろ早く清算せられた筈の漢文脈のかなり根強く小說界に勢を占めてゐるのみならず一見新奇な飜譯物の世界においてさへ數多の漢語の使用せられてゐるのを思ひ、併せて評壇における漢文崩しの隆盛を考へるとき、漢文脈の消長を外にしては到底新文章を論ずる事は出來ないのである。

西歐心醉の反動として國粹運動の擡頭を見るや今まで顧みられなかつた國文學の尊重せられるに至り、雅俗折衷の文體の如きも紅葉露伴をはじめ綠雨鷗外一葉などの當時有名な作家が多く之によつたがために、一時は言文一致をさへ凌ぐかの勢を示してはゐたけれども將來を約束された文體だとは當時の人とても思はなかつたやうである。

落合直文一派の提唱にかゝる美文の流れも亦國文復興の潮流に棹して生れ出でたものでありその中には小說的な可憐な作品も見受けられるけれども、折衷體と同じく新文章の摸索時代に色々

と試みられた表現形式の中かなり有力なものだつたと言ふに過ぎないであらう。
近代文章に最も重大な影響を與へ、しかもその方向をさへ決定したものは、何と言つても歐文脈であつた。
西洋文脈を始めてけざやかに傳へたものは新文章の導火線ともなつた二葉亭の作品「浮雲」であるが、それよりも寧ろ「あひゞき」「めぐりあひ」などに至つて一層細やかな歐文の匂ひを感ずるのである。更に二葉亭と共に言文一致の育成に力を致した美妙齋も、當時としては耳障りな程斬新な表現を敢てしてゐるのである。しかも紅葉漱石藤村などの作品によつて歐文脈も巧みに使用せられたのであるが、之を自由自在に驅使して華麗奔放な筆致を見せたのは何と言つても有島武郎であつた。
歐文脈の流入こそ近代文章に劃期的な變動を與へその新方向を指示するに決定的な力を有したものであつて近代日本文章史における横の考察にあたつては最も重大な部門をなすものと言はねばならないのである。
第一第二篇において近代文章の縱横の考察を行つたわれわれは更に第三篇においては近代文章の特質を抽出して

一、言文二途より漸次その一致を見るに至つたこと。
二、和漢洋の三文脈が漸次融合調和せられて今まで見られなかつた新文章を形造つたこと。
三、平明達意を旨とすること。
四、簡明なる一面と共に精緻なる反面を有すること。
五、個性的色彩の濃厚なること。
六、修辭的に歴史的現在を好んで用ひ、擬人法の多く見られるばかりでなく漢語の振假名にも工夫を擬してゐること。
七、形式中心より內容形式融合へと移りいつたこと。

などの七ケ條を列擧したのであるが、中でも特に大書しなければならないのは「歐文脈の流入」と「言文の一致」とであつた。

即ち歐文脈は近代文章の方向を決定し、從來の表現と截然と區別せしめた所に、假名文の發生和漢混淆文の成立と共に日本文章史上に一時期を劃するものと言はねばならないのである。更に言文の一致は新文章の目標として高く揭げられたものだけに近代日本文章史は一に言文一致の發達史とも稱すべきものである。

最後に第四篇として「文章論の推移」を考察したのは文章理論が如何に新文章の發達に役立つてゐるかを眺めんとしたものに外ならぬのである。

言文一致體の發生した明治二十年前後から新文體を繞つて贊否の論は漸く喧しく、三十五年頃に至つても猶排言文一致會なるものさへあつて「大日本と文章的國民」なる新文章排擊の著書さへ現れてゐるけれども、言文一致講說會もその講演筆記を出版しては言文一致論集と名付け最後の逆襲を見事に擊退してからは、秀でた作品の現れるのと共に非難の聲も靜まつていつたのである。

三十七年には「破戒」、三十八年には「猫」、三十九年には「坊ちやん」「草枕」などの名文が相繼いで現れたばかりでなく、坪內逍遙は「言文一致について」（三十九年）なる文をものして俗談體を以て「理想的言文一致體の主なる土臺石」たるものだとその利點を數へたてゝは言文一致の價値も大いに定まつたものと言ふ事が出來る。しかも明治末期においては「虞美人草」とか「平凡」「春」などの作品の如く明治文學の金字塔も築かれはしたけれども猶未だ文語臭味から完全に離脫する事は出來なかつた。

大正期に入れば今まで言文一致體と呼びなされてゐた新文體は何時ともなく口語文と呼ば

れるやうになつた。

大正五年坪內逍遙は「文章上の擧國一致」を叫び、更に十年には文部省自らが「口語文用例集」を刊行するに及んで、口語文の使用圈は益々擴大充實せられる氣運に向つた事は確かである。

しかも白樺派の作家有島武郎によつて歐文脈の自由に驅使せられたばかりでなく、武者小路實篤によつて眞の口頭語的表現の示されたのを思へば新文章の陣容はこゝに全く成つたものと言ふべきである。

內容によつて形式を決定してゆかうとする傾向は既に自然派の中に萠したものであつたが、白樺派に至つて一層けざやかとなり、更に新思潮一派によつて內容卽形式論にまで築き上げられたのである。

新文章の發生當初にあつては作者も讀者もその文章の新奇なる事を望み、小說には一々題目と共にその文體を銘打つてゐたのを思ひ合すとき、明治大正のわづか五六十年間に驚くべき進展を遂げたものと言ふべきである。

かくて理論的にも實際的にも近代の新文章は大正期においてはじめてその陣容を整備したも

のであり、本書においてわれわれの明治大正を通覧せむとする所以も亦こゝにあるのである。

第一篇　作家を中心としての考察

第一章　假名垣魯文の文章

一

政治の根本的改造に國を擧げてひたむきであつた明治の初期の文學界は、わづかに江戸時代からの戲作者流の盆と正月との二期にその續物を發表して出版書肆を賑はせてゐたのみであつて、未だ小說神髓を振翳すものも現れず、從つて又浮雲の如き佳作を見る事は到底不可能であつた。物質文明の建設に新日本の發展の驚嘆に値する程めざましいもののあつたのに反して、文學の方面は甚しく寂寥たるものであつて、その盛なる活動は餘程後年を待たねばならなかつた。かかる時代に江戸期の呼吸をわづかに呼吸いてゐた戲作者連の中にあつて最も頭角をあらはし舊い形式ながらも新時代の氣風を巧みに盛り込んで行つたのは何と言つても假名垣魯文であつた。

魯文ははじめ英(はなぶさ)とか鈍亭とか稱へてをり、「政談青砥碑」（弘化元年）を處女作として合卷物、滑稽本などを相繼いで發表してゐたが萬延元年「滑稽富士詣」を著すに及んでその文名を一世に謳はれるやうになつた。彼の本領は滑稽的な方面にあつたものの如く、明治に至つて發表した「西洋道中膝栗毛」（明治三年）や、ついで著した「安愚樂鍋」（明治四年）「胡瓜遣」（明治五年）などは皆彼の長所を發揮したものであつた。三馬流の諷刺と皮肉とを連發せしめたうちにも時代の動きを敏感に獲へ得てゐるのは、彼をして江戸の餘喘を僅かに喘いでゐた無氣力な當時の文壇にあつて珍らしい存在たらしめるに充分であつた。

二

時流の好みを見るのに敏捷であつた魯文もその表現形式をば一新するまでには到らず江戸時代に於ける所謂戲作者臭味から脫し切る事は出來なかつた。

明治三年に初篇を出した「萬國航海西洋膝栗毛」の趣向は言ふまでもなく一九の「東海道中膝栗毛」を模倣したものであつて、西洋事情、西洋旅案內、輿地誌略などの著をはじめ宮田砂燕の實話などに材料を得てゐる事はその卷頭の凡例に見るも明かである。

〇元祖十返舍一九が作なる道中膝栗毛の初編刊行なりて世に流布せしは享和二壬歳の春にして、當年を去こと既に六十九年に及べり。滑稽の妙、逆旅の奇、至れり盡せりと雖、所謂流行後れ（遲れ）の類ひに落、目今の形勢に比すれば、今はむかしとなりにたり。僕年來戲作の筆に口を糊せど、滑稽の道に疎く、笑語類に不可にして斯る稗史を綴らんこと世の嘲りを招くに似たれど活計を如何せん。

〇趣向新奇を競ひ、標目未發なるを可とするがゆゑに、彌次北八の三世の孫等外國廻りの滑稽をもて此稗史の大意とす。さるからに題號も西洋道中の目あり、遮莫僕が文盲なる書は草册子の外を讀まず、何ぞ學ばん異邦の事情。然れども文物盛典の德たる近世福澤先生を始め、諸々の洋學先生が著述されし飜譯の書とぼしからねば、その階梯にとりつきて大略お茶を濁すものなり。杜撰麁漏は稗官者流の性來なれば、必ずしも論じて意中をそこね給ふな。恥書ことを平常とすれば恥と思ふ事あらじ。嗚呼自己ながら達者なる哉。

なる凡例は正直に本書の種本を物語つてゐるものであるが、漢文句調を用ひ當字を平氣で使つてゐるのなどは戲作者の當套手段を用ひてゐるものと言はねばならないのである。更に本文の上海見物の條も亦戲作者の手法を見逃す事は出來ないであらう。卽ち

去程に彌次郎、北八の二人は彼の旅舍の大不可にて、荷主廣藏を不快しが例の狂歌のでたらめに却つて笑ひの種となり、また飮みなほしに夜を更し、翌日遲く起き出でたるが、廣藏は日本にて知己の支那人を逗留中訪ねんと、今朝はやく他出せしと聞くより、二人は徒然にたへかね、通辯役の通次郎をそゝのかして、建安の城下を彼處此處見物せんと談合なしつゝ、通次郎の居間に至るに、一人の支那人通次郎とうち語らひ居るは兼ての懇意と見ゆれば、兩人ずつといり、彼の支那人に目禮すれば、支那人も禮をかへす。兩人は座に着き 彌「トキに通さん親王(廣藏をさしていふなり)は何處へか出かけたといふから此方も市中をちつとぶらついて見やうじやアねえか」通「オヽおいらも今おめへ方を誘引て素見ときめやうと思つてゐる處へ、この南京さんが横濱からの知己サ、ところでおいら達が昨日着いた噂を聞いてたづねてござつたから尻をすゑたのヨ」北「どうだ〱出かけねえ〱」通「大よし〱トキに此南京さんは壽長家の目出度やの若松といふ女郎衆の情人にとられて居る陳海さんといふ人で、長く濱に居たから日本語にはよく通じて居る。意氣なおけしだから市内案内に此の人をたのむことにしちやア どうだらう」彌「そいつは奇妙オウライト」北「サア〱すぐに進發々々」通「マアしづかにしねえ、外の者に知れると我も行から、

おれも行からでうるせえのみか、女どもが從いて來ると足手纏ひで厄介だからア」北「さうとも〳〵モシ陳さん、どうかおねがひ申しやす。」と手まねでしかたを早くものみ込み

陳「あなたまはろ〳〵わたしおとも」とこれより四人やどをたち出で、あちこちと市中の家々を見あるくに見るものごとに珍らしければ一々立止まり、北「オヤ〳〵此處の家は何商賣だらう。暖簾に何か書いてあるはえ。エヽ、何頭店。ハヽア何でも大店だな」彌「オイ北や、てめへどうして此の家が大店と分つたのだ」北「それでも頭の店と看板を出しておく位じやア抱の鳶人足が多勢集つて、でも居るんだらう」彌「べらぼうめえ、その上に一字書いてあるのを讀めねえからそんな寢言よみをすらア。ありやア剃頭店。といふので日本の髮結床だ」北「ハヽアなる程髮結床が剃頭店。湯屋が洗頭店。着物がてんつるてんで、懷中がすつてんてんか聞いてあきれらア」彌「コレ〳〵北や、この國は文字の國だから、めつたなことを言ふとけし坊主に笑はれるぜ、生聞に讀めるふりなんぞはよすがいゝ、知れねえことがあつたらソツトおれに聞け、外聞がわるいよ」北「イヤハヤたまにわかつたと思つて强勢に幅をきかせるぜ。そんなら向うの生薬屋の看板に出てある字は何と讀むのだ」

彌「ドレ〳〵ウヽ、あれか、エヽとあれはエヽ、どうも日本の字引にやあんな字はねえが、あ

りやア大概此國のこさへ字だらう」北「アハヽヽヽ負けをしみもいゝかげんにしねえ、字といふ物は元、支那から渡つたものぢアねえか。それにからの字引だの日本の字引だのと別け隔てはあるめえと思ふぜ」彌「イ、ヤ字の渡つたのは支那からじやねえ」北「そんなら何處からだヨ」彌「イ、ヤ渡つた處はヱ、とから〱わたるのオ、が日本ばし――だいがかはれば八百や〱」と足を早めて先へ行きたる支那人と通次郎のあとを追ふ。

の例にも明かな如く文語體の地の文の中に會話の部分だけを口語で表記してゐるのをはじめ、難かしい漢語に平易な振假名を施したり括弧のうちに註を書き入れたりしてゐるのは江戸の戲作者達の表記形式をそのまゝ採り用ひてゐるものと言はねばならないのであつて、會話の文に話者を小書して行も改めずに書き列ねてゐるのも亦彼等の手法を一歩も出でないものであつた。

ついで翌四年に現れた牛店雜談安愚樂鍋（一名奴論建）は牛店に出入する西洋好とか墮落個とか鄙武士とか野幇間、諸工人、生文人、商個、藪醫、文盲その他種々の人々の獨言に托して諷刺と皮肉と滑稽との筆を遣つたものであるが、自序には

世界各國の諺に。佛蘭西の着倒れ。英吉利の食だふれと。食堂に並べて謂ど。衣は肌を復

ふの器。食は命を繋ぐの鎖。心の猿の意馬止めて。咲いた櫻の花より團子。色則是食色氣より餐氣を前の佳味肉食。牛にひかれて膳好方便。佛徒家の五戒さらんパア。虚と實の內外を西洋風味に索混て。世に克熟し甘口とは。作者が例の自己味噌。家言もあしの不果旅行。彼小便の十八町。慢々地急案即席調理。刻葱の五分ほども透ぬ測量のタレ按排。生肉の替りは後輯にして。一帙端を採給へと。文明開化開店の。告條めかして演述になん。

の如く對句とか懸詞を用ひ語呂を整へてゐるのなどは所謂戯文句調を襲つてゐるものであるが、本文にあつてもはじめには例へば西洋好の聽取に見えるが如く、

▲年ごろは三十四五の男いろあさぐろけれどシヤボンをあさゆふつかふと見えてあくぬけていろつやよくあたまはなでつけか、そうはつにでもなるところが百日このかたはやしたるを右のかたへなでつけもつともヲーテコロリといへる香水をつかふとみえてかみのけのつやよく云々(下略)

などと人物の素描を文語文にて行つた後その長口舌をば口語體によつて

モシあなたヱ牛は至極高味でごすネ此肉がひらけちやアぼたんや紅葉はくへやせんこんな清潔なものをなぜいままで喰はなかつたのでごウせう、西洋では千六百二三十年前から專ら喰ふやうになりやしたが、そのまへは牛や羊はその國の王か全權と云つて家老のやうな人でなけりやア平人の口へは這入やせんのサ追々我國も文明開化と號つてひらけてきやし

たから我々までが喰ふやうになつたのは實にありがたいわけでごスそれを未だに野蠻の弊習と云ツてネひらけねえ奴等が肉食をすりやア神佛へ手が合されねえのヤレ穢れるのとわからねえ野暮をいふのは究理學を辨へねえからのことでげスそんな夷に福澤の著た肉食の說でも讀せてえネモシ西洋にやアそんなことはごウせん（この人ござりませんをごウせんござりますをげスなどいふくせあり）云々（下略）

の如くまくしたててゐるのである。

猶その長口舌をふるつてゐるうちにも時々作者の語の見られる事は上揭の例によつても之を窺ひうるのであるがその他にも

○愉快きはまる陣屋の酒えん中にますら雄美少年（トはなうたをうたひながらあらく／＼しくかた引なたさげたけのかはづつみなつかにかけて）女子またくるぞ（トほゝの木ばのはきものがらがらおもてへたちいで）（鄙武士の獨盃）

○此間內證の千臆さん（此花樓主人の俳名をしかいふ）へ廿海宗匠からの傳言をたのまれやした（野幇間の詣訣）

○すべて衣食のおごりはどうかひどく禁じたいものぢやテ（トこのはなしのうちちよくのとりやりもしなべをくふことありとしるべし）（復古の方今話）

○當時俳優は今戸（河原崎權之助）に限りやすね（此客一たい三升びいきと見えたりよつてかくいふ也）（芝居者の身贔屓）

〇人力車(りんりきしや)で（人力車をリンリキ車とおぼえてゐるなり）その日に横はまへ行ツて（茶屋女(むすめ)の隱食(かくしぐひ)）

などと幾つでもた易くその例を拾ふ事が出來る。

更に安愚樂鍋の中には

だから理づめほどこはいものはねえと思ふョこはいといやア此牛肉(うし)は屠立(しめたて)だと見えてだいぶこはいぜ（文盲(ものしらず)の無益論）

の如く語呂を弄ぶ傾向の見受けられるばかりでなく、

僕が處(とこ)の豕兒もサヱ何〇ウ、豕兒ぢやアわかるめえ支那風でいふから解さねえもむべなり〱我家(うち)の孩兒(がき)サこれも今年八ツになるから去年くり〱坊主にしておいた白雲頭。（新聞好の生鍋）

の如く文語脈を取入れたり、

しかし傳聞の誤がねえともいはれねえ横濱の毎日新聞に假名垣魯文が往還へ小便をして伐錢を取られて狂歌を詠(よ)んだなんぞといふ大虛說が次號まで二日とも出てゐるが當人は虛名家だから歡喜雀躍(くわんきじやくてき)滿足でゐるさうだがずゐぶんをかしい間違サネ（同前）

の如く作者自身の滑稽な動作を描出したり

此文面を鍋と酒のかはりめに一寸讀ンできかせやせうへ、ン(同前)

と言つて長々と建白書を書きつけたり第三編の卷末に及んで

第四五編ひきつゞいて出版此次輯は西洋栗毛の六編にて御披露の當世流行のさんぎりあたま洋學書生の大穿ち其塾中實地に渉りたる滑稽の恢諧御評判々々々

と結んだりしてゐるのは戯作者の表現形式をそのまゝに用ひてゐるものと言はねばならないのである。

三

以上の如く眺めるとき魯文は單に一九とか三馬とかの流を汲みながら而もそれ以上に出でる事も出來ずたゞ舊い形式をそのまゝに滑稽諧謔を弄してゐたのに過ぎなかつたものの如くである。しからば明治初期の文壇にあつて彼の重んぜられた所以は何處に求められるべきであらうか。他の作家連が依然として江戸時代そのまゝの舊い内容より他に盛りえなかつたのに反して彼は早くも時代の動きを見る所あり之を一々その作品に現して行つたのである。西洋膝栗毛の如きも一にも開化二にも開化の時代思潮を巧に反映せしめてゐる點において人氣を呼んだもの

の如く、又彼の安愚樂鍋の如きもその「はじめはきびがわるいしこんな物をたべちやアかみほとけへ手があはされないこといちづに思」(歌妓の座敷話) ふ人の多かつた牛肉が大にもてはやされ中には「三日にあげずたべないとなんだかからだのぐあひがわるいやうだ」(同前)と言ふ人まであるやうになつて、あちらこちらに遽かに牛店のふえた當時の模様を巧みに寫したものであり、更に胡瓜遣の如きも當時西歐文化の紹介に大童であつた福澤諭吉の窮理圖解を直ちにもぢつて天地の道理を茶化し去つたものに外ならぬのであるが、流俗の嗜好に投ずる事甚だ妙であつたと言はねばならないのである。

かくの如く魯文の他の戲作者に優れ、一世に重んぜられた所以はよく時勢の推移に應じその內容を變化させて行つた所に求められねばならないのである。

かくて魯文は皮相な觀察ではあつたけれども時代の推移を見逃さなかつた點に於て明治初期に於ける戲作者の中にあつて代表的な人物と目さるべきものであるが、その內容の新鮮だつたのに對して、表現形式には江戸時代の戲作の手法をそのまゝ襲用してゐたのは如何にも惜しい事と思はれるのである。

卽ち會話の文だけは話言葉を用ひながら、地の文に文語を用ひてゐるのは江戸時代そのまゝ

であり、かの萬葉の詞書の漢文的表記なるに對して歌言葉の純日本式の表現なると軌を一にしてゐるものとも言ふべく、何となしに不調和な感をまぬがれぬものがある。

更に途中に註を文語にて附記したり語呂を合せ地口を弄び好んで兩用言葉を用ひ、作者の滑稽な動作を作中の人物に物語らせる事によつて讀者を笑に導くのみならず、卷尾に次輯の發行を述べて「御評判〻〻〻」などと結んだ態度もかの戯作者流と少しも異る所はないのである。

深刻な觀察とまではいかないにしてもその內容に巧みに當時の世俗人情の歸趨を盛り得て戯作者の中にあつては最も進步的だつた魯文でさへ猶江戸時代そのまゝの表現手法を採り用ひてゐたのを思へば、當時の文壇に於ける表現形式の單に江戸の餘喘を喘いでゐたのに過ぎない事を知りうるのみならず、文章史上特に注目すべき展開をこゝに求めるの不可能さをも容易に看取する事が出來る。

魯文一派の戯作者達の文章は江戸の惰力によつてものされたものとも言ふべく從つて新鮮味に缺けてゐるとの非難はまぬがれぬのであり、明治の新文章の發生も猶後年を待たねばならなかつたのである。

第二章　福澤諭吉の文章

一

西歐の高度文明に眩惑された明治初年にあつては、外的物質的に彼等に追隨する事のみに日も猶足らぬ有樣だつたので、內的精神的に思想とか文學を顧みる暇はなかつたのであるが、物質的模倣のある程度の安定をみるや精神的の方面にも西歐の流風を取入れようとする傾向を導き出すに至つたのである。かゝる潮流に棹し西歐文物の紹介指導に大いに力めたのは何と言つても福澤諭吉であつた。

彼は江戶三田に慶應義塾を開いて子弟の教育にあたり政治經濟の方面に有能な學徒を養成したばかりでなく、封建臭味の濃厚な舊文化とか舊習慣とかの打破を叫び平明暢達な文を遣つて或は「西洋事情」を著して時人の渴を癒し「學問のすゝめ」によつて實學的な研究態度を力說し「窮理圖解」によつて新知識洋學の門を窺はしめ、又は七五調の「世界國盡」を著し自然に世界地理の大略を覺えしめるなど西歐文明の紹介に力めた功績は文化史上彼をして何時までも

忘れられない人物たらしめるに充分であつた。

如何にこの時代の人が西歐の文物に對する知識慾に燃えてゐたかは彼の著西洋事情の「最も廣く世に行はれ」て「其初編の如き著者の手より發賣したる部數も十五萬部に下らず之に加ふるに當時上方邊流行の僞版を以てすれば二十萬乃至二十五萬部は間違ひなかる可し」（全集緒言）と彼自ら語つてゐるのによつても明かである。彼の假名垣魯文の作西洋道中膝栗毛のよく賣れたと言つても數百部しか出なかつたのを思ふとき諭吉の文章の如何に世に行はれたかを知りうるのみでなく、西歐を宗とする時代の流風をも察知するに難くないのである。

二

諭吉は飜譯その他によつて西歐文物の吸收に燃えさかつてゐた當時の人々の知識慾を滿たし世人を導いて文明開化に赴かしめた文化の恩人として忘れられない人物であるのみでなく、その文章に於ても魯文一派の戯作者流の如く江戸の殘肴を甞める事もなく硬直な漢文句調をも力めて之を淸算せんとし此處に文語と口語とを巧みに融合渾一された明暢達意の新文章を創始するに至つた事は明治文章史上に特筆せられねばならないであらう。

彼の文章の概して平易にして讀み易いのはその師たる大阪の大學醫緒方洪庵に負ふ所が多いやうである。卽ち彼がその門下にあつて蘭人ペルの著築城書の飜譯に當つてゐた時分師の洪庵は彼を戒めて「今足下の飜譯する築城書は兵書なり兵書は武家の用にして武家の爲めに譯するものなり、就ては精々文字に注意して決して難解の文字を用ふる勿れ其次第は日本國中に武家多しと雖も大抵は無學不文の輩のみにして是れに難解の文字は禁物なり試に彼等を平均して見よ足下などは年も少くして固より漢學の先生には非ざれども士族の中では先づ知字の學者が洋書を譯するに難字難文を用ひんとすれば唯徒に讀者の迷惑たる可きのみ故に飜譯の文字は單に足下の知る丈けを限りとして苟も辭書類の詮議立無用たる可し云々」（全集緒言）と言つてゐるのによつても彼の暢達な文章のよつて來る所の甚だ遠いものあるを窺ひ知る事が出來る。

士族の敎養としては猶依然として漢學の流行してゐた當時にあつてしかも洋學社會の著譯の動もすれば漢語を用ひて行文の正雅を貴んでゐた時分に早くも見る所あつて「行文の都合次第に任せて遠慮なく漢語を利用し俗文中に漢語を挾み漢語に接するに俗語を以てして雅俗めちやめちやに混合せしめ恰も漢文社會の靈場を犯して其文法を紊亂し唯早分りに分り易き文章を利用して通俗一般に廣く文明の新思想を得せしめん」（全集緒言）としたのは彼の見識の甚だ高かつ

た事を物語るものでなければならないのである。

一旦漢文に無頓着たる事を決定してからは「之を知らざるに坐する」又は「此事を誤解したる罪なり」などのさまでの難文でない漢文句調をも態と改めて「之を知らざるの不調法なり」とか「此事を心得違したる不行届なり」などと記すやうに力めたり、草稿を女子供に讀ませて は分らぬと言ふ漢語を改めたのも教育のない百姓町人に分る程の達意の文章を書きたいと言ふ彼の念願のほとばしりに外ならないのであるが、少年時代から漢文に慣れ親しみその素養も相當積んでゐた彼にしては甚しい轉向と言ふべく從つて非常な努力の拂はれた事と思はれるのである。

更に彼の父福澤百助が豐前中津藩の文壇を專らにして敢て爭ふもののなかつたのを目擊し、しかも父と親交のあつた高谷龍州が或時彼の家を訪れ「今日足下の著譯書を見るに文章甚だ妙なり唯遺憾なるは足下が漢文を知らずして假名交りの俗文に偏するの一事のみ左れば足下も今より志を立てて正文を學ぶの意なきや若しも其意あらんには他人を煩すに及ばず拙者自から之を教授す可し足下の才を以て勉强すれば僅に半年を費し忽ち日本一の文章家となつて第二の福澤百助先生を生ずるは拙者の確に保證する所なり云々」と親切に勸告してくれたけれども諭吉

は今更漢學漢文の先生たるを好まないばかりでなく寧ろ之を排斥せんとして勉强してゐる事とて氣の毒ながら體よく斷つてしまつた。之を機會として彼は「何處までも世俗平易の文章法を押通し世俗と共に文明の佳境に達せんとするの本願」を成就する事に力めます〳〵俗文主義を發して印章にまで三十一谷人の五字を用ひるに至つたのである。

三

福澤諭吉の著西洋事情の如何に世の人に受けたかは著者の手より發賣したもののみにても十五萬部を下らぬと言はれてゐるのによつても之を窺ひ得るのであるが、何故にこの著がかくまで日本の全社會を風靡したのであらうか。卽ちこの書は開國の必要を感じ文明に赴かんとする朝野の人士の高度文明を有する西洋の事情について少しでも多くを知りたいとあせつてゐた時代に唯一の西洋紹介書として出版せられたからでなければならぬ。この書は初篇を慶應二年に二篇を明治二年に發兌せられたものであるが、その文章を見るに

〇西洋各國の都府は固より村落に至るまで學校あらざる所なし學校は政府より建て教師に給料を與へて人を教へしむるものあり、或は平人にて社中を結び學校を建て教授するもの

あり、人生れて六七歳男女皆學校に入る、或は家に眠食して毎日校に行く者あり初て入る學校を小學校と云ふ先づ文字を學び漸くして自國の歷史、地理、算術、天文、窮理學の初步、詩、畫、音樂等を學ぶ（初篇卷之一）

○學問上の發明に由て新工夫を成すも其工夫を施行するに當て世間一般を一家の如く爲さざれば不便利なることあり瓦斯(ガス)燈の發明あらざりし以前は毎戶唯油、蠟燭を用ひて夜光を取り其用法人々の意を從て便利を達したりしが瓦斯の發明世に行はれてより之を以て家業とする者は社中を結び一局の仕掛を以て千萬の家を照らし世間の便利を爲したり然れども斯る商業を一社中の手に引受るときは獨り壟斷を私して非常の利を貪る弊なきに非らず

（外篇卷之二）

の如く未だ漢文句調から脫するまでには至つてゐないけれども、猶平易な語を用ひんとする意途も窺はれるのである。更に假名垣魯文と同じく

○英國との戰爭終らんとするの時に當てアルゼリー國（地中海の南岸にある亞非利加州の一國にて後佛蘭西の所領となれり）（初篇卷之二）

○取締の權を半ば其土地の官吏に委任して公事を處理せしむ即ち「ロカル、マジストレート」「ポリス、コムミッショ子ル」の如き是なり（日本にて云へば名主庄屋の類にて權威ありて町內又は一村の事を取捌くが如し）（外篇卷之二）

の如く細字の註を入れたり「大統領沙夕華盛頓（ジョージワシントン）」「嗹國人（デンマルク）」「阿爾蘭（アイルランド）」などと難しい人名地名にルビーを施して讀み易くするやうに力めたり或は

○慘酷（てひどい）の甚しきものと云ふ可し（外篇卷之三）

○貧窶（くらしかねる）の苦界に陷入るもの少なからず（同前）

○世間の稗益（ためになる）を成せしことは擧て云ふ可らず（同前）

の如く漢語に意譯的な假名を振つたのなども朧氣ながらも達意と平易とを志してゐる彼の態度を此處にも既に見出しうるのである。

西洋事情は慶應時代から引續いて出版せられたもので純粹に明治に入つてものせられたものではないが、明治五年に著はされた學問のすゝめこそ實に新時代の氣運を誘導すべく生れ出でたものであつた。

學問とは唯むつかしき字を知り解し難き古文を讀み和歌を樂み詩を作るなど世上に實のなき文字を云ふにあらず、これ等の文學も自から人の心を悅ばしめ隨分調法なるものなれども古來世間の儒者和學者などの申すやうさまであがめ貴むべきものにあらず古來漢學者に世帶持の上手なる者も少く和歌をよくして商賣に巧者なる町人も稀なりこれがため心ある

町人百姓は其子の學問に出精するを見てやがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり無理ならぬことなり

と言つたのなどは學問のための學問を極端にきらつた彼の實學的な態度を明確に現してゐるものと言はねばならないのである。しからば實學とは如何なるものか。

イロハ四十七文字を習ひ手紙の文言帳合の仕方算盤の稽古天秤の取扱等を心得尚又進んで學ぶべき箇條は甚だ多し云々

と言つて地理學究理學歷史經濟學修身學などをあげてゐるのによつても、彼の庶幾した實學なるものを窺ひ得るのであるがこれに附加へて

是等の學問をするに何れも西洋の飜譯書を取調べ大抵の事は日本の假名にて用を便じ或は年少にして才文ある者へは橫文字をも讀ませ一科一學も實事を押へ其事に就き其物に從ひ近く物事の道理を求て今日の用を達すべきなり右は人間普通の實學にて人たる者は貴賤上下の區別なく皆悉くたしなむべき心得なれば此心得ありて後に士農工商各其分を盡し銘々の家業を營み身も獨立し家も獨立し天下國家も獨立すべきなり

と言つたのによつても實學を中心とする彼の大抱負を窺ひうるのみでなく漢語よりも假名を使

用すべしとする彼の實用主義からの考へ方も亦見逃す事は出來ないのである。西洋事情に於ては未だ漢文の生硬さから免れえなかつた諭吉の文章も平易な言語を多く使用する事によつてやはらかな丸みを帶びたものとなり、平明暢達な域に進まうとしてゐる事は明かである。

學問には文字を知ること必用なれども古來世の人の思ふ如く唯文字を讀むのみを以て學問とするは大なる心得違なり文字は學問をするための道具にて譬へば家を建るに槌鋸の入用なるが如し槌鋸は普請に缺く可らざる道具なれども其道具の名を知るのみにて家を建ることを知らざる者はこれを大工と云ふ可らず正しくこの譯にて文字を讀むことのみを知て物事の道理を辨へざる者はこれを學者と云ふ可らず所謂論語よみの論語しらずとは卽ち是なり我邦の古事記は暗誦すれども今日の米の相場を知らざる者はこれを世帶の學問に暗き男と云ふ可し(中略)是等の人物は唯これを文字の問屋と云ふ可きのみ其の功能は飯を喰ふ字引に異らず云々

と言つてゐるあたりは彼の口にする學問の如何なるものかを示すばかりでなく、「俗文中に漢語を挾み漢語に接するに俗語を以てして雅俗めちや〳〵に混合せしめ」(全集緒言)た暢達な彼の文章としてよい見本でなければならないのである。漢語よりも俗語を、難しい語句よりも平易

な言葉をと心掛けた事は緒言の中にも屢見られる所であるが、我々はこれらの例からも彼の意途の那邊にあつたかを看取するに難くないのである。

四

世界の進展に盲ひてゐた浮浪人が外國人を暗殺したり洋學者を要撃したりする事の頻々として行はれた文久年間にあつて既に唐人往來を手記して江戸中の爺婆にまで開國の必要を力說せんとし

日本國中の學者達は勿論餘り物知りでもなき人までも何か外國人は日本國を取りにでも來たやうに鎖國の攘夷の、異國船は日本海へ寄附けぬ、唐人へは日本の地を踏ませぬなど仰山に唱へ觸らし間には外國人を暗打にする者など出來て今のやうに人氣の騷立つは唯內の騷動ばかりでない。

と言ひ日本人の保守的な態度を非難して

兎角改革の下手なる國にて千年も二千年も古の人の云ひたることを一生懸命に守りて少しも臨機應變を知らずむやみに己惚の强き風なり

などと機微を穿つたのは開化の指導者として一歩世に先んじてゐた彼の卓見を示すものであるが、我々はこの文章にも既にくだけた俗語の多分に採用ひられてゐるのを見逃す事は出來ないのである。

かくてこそ「學問のすゝめ」においても學問のための學問をきらつて人生のための學問を强張したのであるが、文章上より見るも西洋事情などに見られた硬直さが少くなり漢語と俗語とを巧みに混へた所謂「雅俗めちや〳〵」な一體を創始した點は注目せられねばならないのである。彼が如何に自らの文章を通俗にせんとして力めてゐたかは全集緒言に於て彼自ら語つてゐる所であるが、石河幹明氏の「福澤先生の文章」は最もよくこの間の消息を物語つてゐるものの如くである。卽ちそのうちに

先生の文章は誠に通俗ですら〳〵と暢びた文章ですから定めて一瀉千里の勢ですら〳〵と書き流さるゝやうに一寸思ふ人もありませうが凡そ今の日本の文章で讀み去りて一點の滯りもなく至極分り易い文章は七六かしい漢文流の形容詞又は然り豈に夫れ然らんやなどの左樣然らば體の堅苦しい文章に較ぶれば文を書くには却て骨の折れるもので執筆者の苦心工夫は容易のことでない云々

と言つてゐるあたりは漢學の教養の深いものの雅俗混用體を驅使する桎梏となつた事を物語ると共に、諭吉の並ならぬ努力と見識とを認めしめるに足るものである。

諭吉の文章は無學のものにもどんな內容を盛つたものか位は解らせやうとしたために平易と暢達とを主眼としかくて雅俗混用の新樣式の創始にまで導かれて行つたものであつた。勿論未だ純粹の言文一致と同一視する事は出來ないけれども、彼の漢文脈の生硬さを完全に離脫し俗語から來る柔みと圓みとを巧みに利用してゐる點は當に言文一致と紙一重の感を强くせしめるものがある。

かくて諭吉の文章史上の功績は戲作者流の表現から早くも足を洗つて雅俗混用の新文章を創始し、次に來るべき言文一致の時代を誘導せんと力めた所に求められねばならないのである。

第三章　坪內逍遙の文章

一

明治も十七八年ともなれば文運も漸く盛となり稗史小說の世に出るものも少くはなかつたけ

れども、馬琴種彦の糟粕を嘗めたり一九春水の贋物の多いのを歎いて小說神髓を發してその向ふべき道に巨火を點じたものは坪內逍遙その人であつた。

逍遙に從へば我國のならはしとして主眼を勸善懲惡に求めこれを敎育の一方便と見做してゐながら、その實際は殺伐慘酷なもの若くは猥褻な物語を歡迎するといふ風があつた。見識のない作者は輿論の奴隸となり、流行の犬となつて競つて時好に投ぜんがため好んで殘忍な稗史陋猥な情史を綴るに至つたけれども表向の名義たる「勸善」の二字をいつまでも捨去る事が出來ず、人情を枉げてまで無理な脚色をする事となつた。ために拙劣な趣向は益々拙劣となり大人學者の眼から見ては殆んど讀むに堪へないものであつた。幼い時分から古今の小說を讀み小說の目的の何處にあるかをも會得してゐた逍遙にしてはこの情勢を默止するに忍びずその著小說神髓を世に問うたわけである。

二

小說神髓はたゞに小說界に反響を呼んだばかりでなく、文學全般にわたつて革新を促した點においては正に明治新文學の曉鐘とも言ふべきものであつた。

小說を作るに際して如何なる文章を選ぶかは明治の作家の一つのなやみとも言ふべきものであつたが、逍遙とてもこの點に觸れないではをかれなかつたとみえて小說神髓の下卷に特に文體論なる一條を設けてゐるのである。

> 文は思想の機械(どうぐ)なり、また粧飾(かざり)なり。小說を編むには最も等閑にすべからざるものなり。脚色(しくみ)いかほどに巧妙なりとも、文をなさなければ精通せず、文字如意ならねば摸寫も如意にものしがし。支那および西洋の諸國にては言文おほむね一途なるから殊更に文體を選ぶべき要なしと雖も我國にては之に異なり。文體にさま〴〵の差異(しな)ありて、各々一失一得あり、利不利その用ひどころによりて異なる由あり。是小說に文體を選まざるべからざる所以なり。

の如く、小說における表現を重視し、しかも我國においては文語と口語との二途あるがために各その特質を考へ表現にあたつては文體を選ばねばならぬと述べ、更に雅と俗と雅俗折衷との文の三體を擧げてその優劣を論じてゐる。

卽ち第一の雅文體とは所謂倭文であるが「優柔にして閑雅」なために「婉曲富麗の文」をなすのには適してゐるけれども「活潑豪宕の氣」には缺けてゐるため「激切の感情、豪放の擧動、

もしくは跌宕なる情況」などを寫し出すのには不似合としてゐる。しかも跌宕（サブリミチイ）と富麗（ビウチイ）と哀情（パソス）と滑稽（リヂクラスネツス）とは所謂華文の屬性であつて殊に小說の文章には離れる事の出來ないものであるから、此の四つの中一つでも缺けてゐては其の他の場合には如何に似つかはしくとも決して完全な文體とは言へないとして昔ながらに雅文のみを用ひる事の非なるを力說してゐるのである。

第二に俗文體とは通俗の言語をそのまゝに文をなしたものであるから文字の意味も平易であり、從つて之を解し易いばかりでなく別に活動的な力もこもつてゐるので、所謂華文として必要な簡易明晰の點はもとより峻拔雄健な勢力とか追懷愛慕の想念などを導出す事が出來る。けれども我國にあつては言文一途に出てゐないために文章語俗話語とはさながら氷炭の相違があり、從つて俗言のまゝに文をなす時には氣韻の野に失し雅びたる趣向もために鄙びたるものとなり俚猥の譏をもまぬがれぬ事が多い。たゞ當世の物語（世話物語）はこの文體にて綴つたならば內容形式共によく適つて甚だ妙を得たものだけれどもそれとても幾分か之を斟酌して折衷するにこした事はない。けれども俗言のまゝを寫せば相對して談話するが如き興味があり雅俗折衷の體を以て文を綴れば書簡を讀むの思ひがあると言つてゐるのは逍遙がこの俗文體にいかに

心をひかれその價値を充分に認めてゐたかを知りうるのであるが、俗文の不便を除く方法がないので自らその範を垂れるまでには至らずわづかに「嗚呼我黨の才子、誰か此法を發揮すらむ。おのれは今より頸を長うして新俗文の世にいづる日をまつものなり」と結んで自らを慰めねばならなかつた。

第三の雅俗折衷體をば彼は大別して二とし、一を稗史體と言ひ一を草冊子體と呼んでゐる。稗史體とは彼に從へば「地の文を綴るには雅言七八分の雅俗折衷の文を用ひ、詞を綴るには雅言五六分の雅俗折衷の文を用ひる」ものを言ふのであるが、地と詞との間に甚しい文調の相違が見られないため上中下の情態を叙するのにも遠い昔の景情を寫すのにも共に最も適當したものであつて時代物語に適する文章はこの外にはないとまで評してゐる。

次に彼の言ふ草冊子體とは稗史體よりも俗言を多く用ひる代りに漢語はほんのわづかしか使はれないものを言ふのであつて、この體は又時代物語の文章には決して適當なものではないが世話物語に好適のものであり、將來の小說家もこの體に改良工夫を施したならば完美完全な世話物を編む事が出來るであらうと述べてゐるのである。

かくて逍遙は俗文體にもかなり心をひかれてゐるものの猶雅俗折衷體を重んじ中でも俗語を

多く含み漢語を用ひる事の少い所謂草冊子體なるものを將來の作者は宗とすべきであると說いてゐるものと思はれるのである。

三

逍遙は小說神髓を著して小說家の進むべき道を指示したのみならず自らも當世書生氣質をものして之を世に問うたのであつた。そのはしがきにおいて

予晩近『小說神髓』と云る書を著して大風呂敷をひろげぬ。今本篇を綴るにあたつて理論の半分をも實際にはほと／＼行ひ得ざるからに江湖に對して我ながらお恥しき次第になん。

と言つてゐるが如く、理論と實際とは大分かけはなれたものであり、小說神髓の眞の精神は二葉亭四迷によつてはじめて具現せられたのであるが、書生氣質とても新舊思想のうづまいてゐた當時の大都會において車夫と共に最も數の多かつた書生世界を寫實的に描いた點においては確かに明治の新文學の先驅をなすものであつた。その文章にも會話の部分には

○「ア、暑うてたまらん／＼。ヤイ須河。マアおれの部屋へ來いといふにマア來いョ。甘い

ものがあるぞ。」須「なんぢやア。また菓子パンぢやらう。我輩の部屋へ來てみイ。えい桃を買うて來たぞ。　オイ桐山こつちへ來いョ」桐「なんだ桃だ。おれは西瓜を一つ買うて來たがなア。切るものがなうて困つてをるがなア。小刀があるなら桃と一所に持て來いョ。」須「西瓜か。そいつはえいワイ。今直に行くぞ。まてまて。」トいひながら暫くあつて須河悌二郎は兩方の袂へ桃を一杯入れてぶらさげつゝ桐山の部屋へ入り來りて　須「オイ我輩の處にもナイフはナイフぢや。宮賀が持てるぢやらうと思ふが留守に引出しを開たらまた怒りをるぢやらう。如何しようなア」

○還「ヤア隨分亂暴な飜譯だナ。エートなんだ。……是ニ因テ之ヲ觀レバ陪審裁判トイフ制度ノ、因テ以テ原因セシ、所以ノ道理ハ、蓋シ遼隔ナルサキソン時代ノ、王政ノ頃ニアリシヤ、決シテ疑フ可キ事ニ非ザルナリト、余輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザル事トイフ可シ。……ハ、、、、。イヤに冗長な曲りくねツた、變に讀惡い文章だなア。羊の腸よろしくたア、如斯(かういふ)文體をいふんだらう。就中「因テ以テ原因セシ所以ノ道理」なんさア、實に重複極るぢやアないか。ナゼこんなに文を延すンだらう。反語ばかりいやに重なつて、讀惡くツて解りにくくツて、是ぢやア素人にやア解りやアしないぜ。」山「ハ、、、、。ぶツつ

け書きだものを、文はどうせ無茶苦茶さ。しかし長くしたは此方の策さ。反語を澤山使つたり、同じ事を繰返して居りやア、骨がちつとも折れないで以て、直に一枚だけ出來るだらう。何々せずんばあるべからざるなりと歟、夫れ然り豈それ然らんやなどとやつて居ると、十行二十行は二十分位に一枚かけツちまふ。是之を economy of labour (ほねをりの儉約)といふ。」纏「ヤレヤレ、斯ういふ飜譯者の手に成た飜譯書を買ふ奴は不憫だ。しかし我輩も其法でやらかさう。二三枚原書の散亂になつたのを貸たまへ。」山「オット承知だ。それぢやア二十葉から、かうつと……三十葉まで、君にやらう。汗牛堂へは明後日ゆくから、なるべく精だして譯したまへ。十枚で二圓五十錢にやアなるから。」

などの例によつても明かな如く書生特有の轉訛方言とか頓智とかを寫す事によつて清新な感じを與へてゐるのは、彼自ら小説神髓に於て當世の物語に用ひたならば内容形式共によく適つて甚だ妙であると言つた俗文體の效果をよく發揮せしめたものでなければならないのである。

しかしながら地の文にまで俗文體を思ひ切つて用ひる事は出來ず、

〇さま〴〵に移れば變る浮世かな。幕府さかえし時勢には武士のみ時を大江戸の都もいつか東京と、名もあらたまの年毎に、開けゆく世の餘澤なれや。

の如く懸詞を含めた七五調の馬琴張の文を用ひたり、

○エ。そんなら守山君もプレイ（遊郭などへ行くことをいふ當時の書生の通語なり）するかなア。

○實に日本人のアンパンクチュアル（時間をちがへる事をいふ）なのには恐れるヨ。

○オイ／＼田のちゃん。行るべし／＼。僕が尻押をしてやるから且は（妙なところへ六かしい言葉をつかふくせあり）いま鬼ごつこをしておくとお座敷で轉ばない稽古になるよ。

などと割註を入れたり更に

【作者いはく、以下の話譚は小町田粲爾が守山への話なれども小町田の言葉をもていはしめては、十分に其情を述べつくしがたきおそれあり。殊に文の冗長になり行かむかとおそるる故にわざと平常の物語のやうに寫しいだしぬ。見る人其心して讀ませたまへ】

【作者曰く。本篇中に寫しいだせる書生の如きは概ね書生界の上流を占るものなり。故に其の語らふ所もやゝ高尚なる所ありて、今日市中を渡りあるくガラクタ書生とは大いに異なり。勿論左樣の書生は官立大學の學生に多く、私塾の生徒には稀なるものなり。私塾の書生輩の情態の如きは陋猥にして野卑殆ど寫しいだすに忍びざるものあり。故に余は故意に上流の風儀を寫しぬ。活眼家幸に咎むる勿れ】

などの如く話の中途とか切目において作者の長々しい說明を附記してゐるのなどは、かの戲作者の手法を未だに留めてゐるものと考へられるのである。

四

逍遙の小說神髓は暗雲低迷の當時の文壇にあつて寫實主義を眞向に翳してその進むべき道を指示した點において正に明治新文學の曉鐘とも言ふべきものであるが、このうちには文體に關する論も見られ、著者は雅俗折衷體に最も心を引かれてゐるものの如くだけれども俗文の迫眞力の强い事をも力說しないではおかなかつた點は當時にあつては靑天の霹靂として珍重すべきものでなければならなかつた。

逍遙は文壇の標準線からは少くとも十年位は優に前に進んでをりよく之を誘導してゐたのであるが、書生氣質の如きも彼の小說論に從つて書き下し世の稗史小說家の向ふべき所を實例によつて明示したものに外ならぬのである。即ちその內容に舊思想に喘いでゐる社會を背景にして新思想のいぶきのかゝつた書生を描く事によつて新舊兩思想の衝突を巧みに盛つてゐるのも新文學の先驅として相應しいものであるが、その形式に至つては會話の部分において所謂書生

言葉を忠實に寫して迫眞力の强いものとするに役立たせてゐるけれども地の文においては猶雅俗折衷體を捨て去る事が出來ず七五調の美文を遣つたり懸詞を用ひたりしてゐるのは、十年の隔たりを埋合せんがための作者の老婆心に出でたものとも考へられるものの、新文章の創始者としての榮冠を彼に捧げる事の出來ないのは惜しい事である。

俗文體の長所を認めて折衷體と之を比較し

俗言のまゝに詞をうつせば相對して談話するが如き興味あり。雅俗折衷の文をもて詞をつゞれば書簡(てがみ)を讀むの思あり。其おもしろみの薄かることいふまでもなきことなりかし。

と極力賞讃の言葉を惜まなかつた逍遙も自ら書生氣質をものするに當つて地の文にまで之を及す事の出來なかつたのを思へば文章史上彼の價値は聲を大にして俗文體を鼓吹し

俗文の利すでに斯のごとし。唯憾むらくは世に其不便を除くの法なし。嗚呼我黨の才子誰か此法を發揮すらむ。おのれは今より頸を長うして新俗文の世にいづる日をまつものなり。

などと俗文を驅使する作家を期待しその氣運を釀成した所に求められねばならないのである。

かくて小說神髓によつて唱へられた寫實主義の好例は彼の著書生氣質よりも寧ろ二葉亭の浮雲に見られるのと同じく新俗文體の出現も亦同じく浮雲を待たねばならなかつたのである。

第四章　二葉亭四迷の文章

一

斯界の先覺者坪内逍遙は小説神髓を發して在來の勸懲小說を排し、寫實小說を鼓吹したばかりでなく自らも當世書生氣質を著してその理論を例によつて示した點において明治の新文學の指導者としていつまでも忘れる事の出來ない存在であるが、小說神髓の趣旨を最もよく具現したものは逍遙自身の書生氣質よりも寧ろ二葉亭四迷の浮雲であつた。

浮雲は三篇よりなつてをり、一・二兩篇は逍遙との共著として世に現れたが小說といへば何か異常な事件を書き綴るべきものとのみ考へてゐた當時の一般讀者にとつてはこの作の如く平凡な人物の間にかもされる平凡な事件を取扱つたものを示されては驚嘆の目を見はらないではをられなかつた。二葉亭が文學を遊戲視する事なく人生を眞面目に觀察して日常平凡な生活の中に小說の題材を選び出したのも彼のロシヤ文學に對する深い敎養に根ざしてゐるものであるが、浮雲の重んぜられたのはたゞにその內容ばかりではなく表現形式の新樣式を採り用ひてゐ

る事も讀者を驚かす有力な資料となるに充分であつた。
逍遙の如きも俗文の價値を相當認めてはゐながら猶雅俗折衷體なる迷夢から醒めきる事は出來ず書生氣質においても會話の部分を除いては全く戯作者的手法から脫する事は出來なかつた。かゝる時代にあつて言文一致の浮雲の著されたのを見ては世人の等しくその新奇な樣式をもてはやさないではをられなかつたのも無理からぬ事である。
浮雲が小說神髓の主張を最もよく現したものなる事は前にも述べた所であるが、その文體に言文一致を用ひたのなども亦逍遙の教示によるものなる事は彼自ら
もう何年ばかりになるか知らん、餘程前の事だ。何か一つ書いて見たいとは思つたが、元來の文章下手で皆目方向が分らぬ。そこで坪内先生の許へ行つて何うしたらよからうかと話してみると、君は圓朝の落語を知つてゐよう、あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。
で仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京辯だ。卽ち東京辯の作物が一つ出來た譯だ。早速先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが忽ち礑と膝を打つてこれでいゝ、その儘でいゝ生じつか直したりなんぞせぬ方がいゝ、と

から仰有る。

自分は少し氣味が惡かつたが、いゝと云ふのを怒る譯にも行かず、と云ふものの內心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角圓朝ばりであるから無論言文一致體にはなつてゐるが、玆にまだ問題がある。それは「私が……で厶います」調にしたものか、それとも「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪內先生は敬語のない方がいゝと云ふお說である。自分は不服の點もないではなかつたが直して貰はうとまで思つてゐる先生の仰有る事ではあり、先づ兎も角もと敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑もである。（余が言文一致の由來）

と語つてゐる所によつても明かである。しかも逍遙の「少し美文素を取り込め」（同前）と言つたのに對して彼はそれが嫌ひだつたと言ふよりも寧ろその入つて來るのを排斥しようとしてゐたのなども逍遙の消極的な態度に比して彼が如何に勇氣を以て言文一致の筆をとつたかを物語るものであつて、山田美妙の如くこの運動のために大いに氣を吐くと言ふやうな事はなかつたけれども、いちはやく新奇な表現樣式を採り用ひた點において注目せられねばならないのである。

小說神髓において逍遙がその利を讃へては

おのれ今より頸を長うして新俗文の世にいづる日をまつものなり。

と結んだ新俗文は二葉亭四迷を待つてはじめて世に出でたものと言ひうるのであり、かの戲作者流の文章に見えるが如き會話と地の文との不調和もこゝにおいて完全に除去せられる事となつたのである。

從來の戲作者流の文章の福澤諭吉を經て平易暢達を旨とするものと改められたのであるがそればかりでなく更に逍遙によつて俗文の利點さへ鼓吹せられては小說の文體の俗文に統一せられるのも遠くはあるまいと思はれるに至つたが、この機運に乘つても最も早く言文一致の作を世に問つた功は何と言つても二葉亭に歸すべきものである。

二

小說をものするにあたつてその內容はもとよりこれを盛る表現形式を如何なるものとするかは當時の作家の等しくなやみとしてゐた所であり、その序文において文體の事にふれぬものはないのであるが、二葉亭四迷とてもこの例にもれず浮雲のはしがきにおいて「薔薇の花は頭に

咲いて活人は畫となる世の中獨り文章而已は黴の生えた陳奮翰の四角張りたるに頬返しを附けかね又は舌足らずの物言を學びて口に涎を流すは拙し。是はどうでも言文一致の事だと思立ては矢も楯もなく云々」と言つて思ひ切つて言文一致の文體を用ひた彼の意氣を示してゐるのは注目せられねばならないであらう。

會話文の如きも

「お……お……お勢、あれ程呼ぶのがお前には聞えなかツたかエ。聾者ぢやあるまいし、人が呼んだら好加減に返事をするがいゝ……。全體まア、何の用が有ツて二階へお出でだ。エ、何の用が有ツてだエ。」

ト逆上せあがツて極め付けても、此方は一向平氣なもので

「何にも用は有りやアしないけれども……。」

「用がないのに何故お出でだ。先刻あれほど、最う是からは、今迄のやうにヘタクタ二階へ往ツてはならない、と言つたのが、お前にはまだ解らないかエ。さかりの附いた犬ぢやアあるまいし、間がな透がな、文三の傍へばツかし往きたがるよ。」

「今までは二階へ往ツても善くツて、是からは惡いなんぞツて、其樣な不條理な。」

「チョツ解らないネー、今迄の文三と文三が違ひます。お前にやア免職になツた事が解らないかエ。」

「オヤ免職に成ツてどうしたの。文さんが人を見ると咬(かみ)付きでもする様になつたの、へー然(さ)う。」

「な、な、なんだとお言ひだ……。コレお勢、それはお前、あんまりと言ふもんだ。餘り親を馬、馬、馬鹿にすると言ふもんだ。」

「ば、ば、ば、馬鹿にはしません。へー私は、條理のある處を主張するので御座います。」

ト唇を反らしていふを、聞くや否や、お政は忽ち顔色を變へて手に持ツてゐた長羅宇の烟管を席へ放り付け

「エ、、くやしい。」

ト歯を喰切ツて口惜しがる。その顔を横眼でジロリと見たばかりで、お勢はすまアし切つて、座舗(ざしき)を立出でて仕舞ツた。

などとくだけた言文一致の文體によつて巧みに母親とお勢との氣持を表現してゐるばかりでなく、話者を小書して、地の文に書き綴けた舊様式を完全に放棄して、話者毎に行を改めて並記

したのなどは地の文と會話の文との區別を截然とせしめるに役立つてをり、これ以後の小說には誰しもこの樣式を採り用ひてゐるのである。

更に注目すべきは、逍遙の如き進歩的な人まで折角俗文を賞揚しながらも「但し地の文にいたりては俗言をもて寫すべからず。蓋しこれが爲に物語の進歩をさまたげむかと恐るればなり」(「小說神髓」中の文體論參照)と言はないではをられなかつた時代にも拘らず、敢然として地の文をも言文一途の新文體によつて寫し出した事は特筆せらるべき彼の功績でなければならないのである。即ち

○今年の仲の夏、或る一夜、文三が散歩より歸ツて見れば、叔母のお政は夕暮より所用あツて出た儘未だ歸宅せず、下女のお鍋も入湯にでも參ツたものか、是も留守。唯お勢の子舍に而已光明が射してゐる。文三初は何心なく二階の梯子段を二段三段登ツたが、不圖立止まり何か切りに考へながら、一段降りてまた立止まり、また考へてまた降りる。……俄に氣を取直して、將に再び二階へ登らんとする時、忽ちお勢の子舍の中に聲がして

「誰方」

トいふ。

「私」

ト返答をして、文三は肩を縮める。

○文三が二階を降りて、ソツトとお勢の部屋の障子を開ける其の途端に、今迄机に頬杖をついて、何事か物思ひをしてゐたお勢が、吃驚した面相をして些し飛上ツて居住居を直した。顔に手の痕の赤く殘ツてゐる所を觀ると、久敷頬杖をついてゐたものと見える。

○あれほどまでにお勢母子の者に辱められても、文三はまだ園田の家を去る氣になれない。但だそのかはり、火の消えたやうに、鎭まツて仕舞ひ、いとど無口が、一層口を開かなくなツて、呼んでも捗々敷く返答をもしない。用事が無ければ、下へも降りて來ず、只一間にのみ垂れ籠めてゐる。餘り靜かなので、ツイ居ることを忘れてお鍋が洋燈の油を注がずに置いても、それを吩付けて注がせるでもなく、油が無ければ無いで、眞闇な座舖に悄然として始終何事をか、考へてゐる。

などの如く地の文も今までの雅俗折衷體の文にくらべると如何にもなめらかに運ばれてをり、會話の文との調和もしつくりしてゐるのであつて、名實共に言文一致の新小説は二葉亭四迷によつてはじめてものせられたと言つても過言ではないのである。

會話の文のみならず地の文まで言文一致の新文體を使用するには一方ならぬ果斷と努力とを必要とするのであつて、日頃ロシア文學に親み新しい文學についての造詣の深い二葉亭の如き人にしてはじめて敢行する事が出來たのである。初めて試みられた新文章としてはすこぶる巧なものなる事は前掲の例によつても明かであり、彼の筆力の偉大さを容易に認めうるのであるが彼とてもその時代の文壇に呼吸(いきづ)いてゐただけに全くその氣運から脱し切る事は出來なかつた。わづかではあるけれども所々に

○藻に住む蟲の我から苦しんでゐた……。是からが肝腎要(かなめ)囘を改めて伺ひませう。

○お政は獨り徒然(つくねん)と長手の火鉢に凭れ懸ツて、斜に坐りながら、火箸を執ツて灰へ書く樂書(いたづらがき)も倭文字、牛の角文字いろいろに、心に物を思へばか、快々たる顔の色。

○歸ツて來ぬ間にチョツピり此男の小傳をと言ふ可き處なれども、何者の子で、如何な敎育を享け、如何な境界を渡ツて來た事か、過去ツた事は山媛の霞に籠ツておぼろ〳〵、トント判らぬ事而已。風聞に據れば總角の頃に早く怙恃を喪ひ、寄邊渚の棚なし小舟では無く宿無小僧となり、彼處の親戚、此處の知己(しるべ)と流れ渡ツてゐる内、曾て侍奉公までした事が有るといひ、イヤ無いといふ、紛々たる人の噂は滅多に恃(あて)にならぬ坂や、兒手柏(かしは)の上露よ

りもろいもの、と旁付けて置いて、さて正味の確な所を摘んで誌せば産は東京で水道の水臭い士族の一人だと履歴書を見た者の噺、是ばかりは僞でない。

などの如く懸詞を用ひたり漢語に平易な振假名を附けたり遊戯的な文をやつたりして戯作者流の手法を完全に捨て去るまでには至つてゐないのである。

かくて浮雲は極めて平凡な園田一家の事件を巧みに小説の題材とした所に内容上より見て近代小説の魁をなすばかりでなく、特に表現上未だ何人にも試みられなかつた地の文にまで言文一致を用ひて會話の文とのなめらかな調和を圖りこゝに完全に近代的な文章を確立した點において文章史上に特筆せらるべき作品でなければならないのである。

三

浮雲は逍遙の寫實主義をそのまゝ地で行つたものであり、平易平凡な事件を取扱つたのは後の自然主義に呼びかけるものとも言ひうるのであるが、果して彼は自然主義の時代にも平凡の如き佳作を世に問ふ事が出來たのである。そのうちにも

○さて、題だが……題は何としよう？　此奴には昔から附け倦んだものだツけ……と思案

の果、磕と膝を打つて、平凡！　平凡、に限る。平凡な者が平凡な筆で平凡な半生を叙するに、平凡といふ題は動かぬ所だ、と題が極る。

次には書方だが、これは工夫するがものはない。近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の經驗した愚にも附かぬ事を、聊かも技巧を加へず、有の儘に、だら〳〵と、牛の涎のやうに書くのが流行るさうだ。好い事が流行る。私も矢張其で行く。

で題は「平凡、」書方は牛の涎。

さあ、是から本文だが、此處で回を改めたが好からうと思ふ。

○お糸さんが、お燗を直しに起つた隙に、爰で一寸國元の事情を吹聽して置く。

○二葉亭が申します。此稿本は夜店を冷かして手に入れたものでございますが、跡は千切れてございません。一寸お話中に電話が切れた恰好でございますが、致方がございません。

などの如く戲作者流の手法も全く跡を斷つまでには至つてゐないけれども浮雲當時の文章から見れば格段の進展を示してをり特に

ジャン〳〵と放課の鐘が鳴る。今迄靜かだつた校舍内が俄に騷がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して慌だしくパツ〳〵と開く。と、その狹い口から、物の眞黑な塊りがド

ツと廊下へ吐出され、崩れてばら〳〵の子供になり、我勝に玄關脇の昇降口を目蒐けて駈出しながら、口々に何だか喚く。只もう校舍を撼つてワーツといふ聲の中に、無數の圓い顏が默つて大きな口を開いて躍つてゐるやうで、何を喚いてゐるか分らない。又それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又紛々と入亂れ重なり合つて、腋の下から才槌頭が偶然と出たり、外齒へ肱が打着かつたり、靴の踵が生憎と霜燒の足を踏んだりして、上を下へと揑返した擧句にワツと門外へ押出して東西へ散々になる。

仲善二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨當箱をポンと抛り上げてはチョイと受けて行く頑童がある。其隣は往來の石塊を蹴飛ばし〳〵行く。誰だか、後刻で遊びに行くよ、と喚く。蝗を取りに行かないか、といふ聲もする。君々と呼ぶ背後で、馬鹿野郎と誰かが誰かを罵る。あ痛ツ、何でい、わーい、といふ聲が諤然と入違つて、友達は皆道草を喰つてゐる中を、私一人は駈脫けるやうにして側視もせずに切々と歸つて來る。

などの如くきび〳〵した清新な表現の中にユーモアをもたゞよはせてぐん〳〵讀者をひきづつてゆく力のこもつた文をなすまでに至るのである。

四

逍遙の小說神髓及び書生氣質は共に明治の新小說の曉鐘とも言ふべきものであるが、とかく實際は理論通りに行はれないものであつて、小說神髓の理論の實際は逍遙の書生氣質よりもむしろ二葉亭の浮雲の方に一層けざやかに之を見うるのである。文章上より之を見るも書生氣質においては會話の文はともかくも地の文をば全く舊樣式の雅俗折衷體によつて綴つてをり、彼自ら對談するの趣があると言つた俗文によつて連ねる迄には至つてゐないのであるが、浮雲にあつては會話の文に流麗な筆致を見受けるのみでなく地の文にまで所謂俗文をおし廣め終に會話の部分も地の部分も共に言文一途の文體によつて記されてゐるのである。

しかもその會話の部分の如きも話者を小書して逐次書き連ねるなどの舊樣式を廢して各々行を改めて之を書記し前後の會話の區別を明瞭にした點においても後の小說の魁をなしたものであるが、更に地の文と會話の文とを共に言文一致によつて寫さうと試みたばかりでなく、はじめての試みとしては、すこぶる成功してゐるのは、新文章の創始者として彼の價値を一層高めるものでなければならないのである。

彼は逍遙の新俗文の說をそのまゝこの作に實行して成功を收めた點において美妙齋の如く聲を大いにして言文一致の運動には力めなかつたけれども新文章の創始者としての功績は蔽ふべくもないのである。

しかもその奉ずる寫實主義は自然主義とも一脈の相通ずるものがあつたため後年自然主義の時代にいたつても猶自然主義の作家の中に伍して優に平凡なる佳作を著し、浮雲以上の文のさえを見せる事が出來たのは、時代と共に移る事の出來た彼の偉大さを物語るものでなければならないのである。

第五章　山田美妙齋の文章

一

二葉亭と共に言文一致の發達に與つて力のあつたのは美妙齋山田武太郎であつた。美妙は明治七年芝の神明町に在住して私立烏森學校に通つてゐた頃既に尾崎紅葉と相知るやうになつた。その後明治十七年には、豫備門に入學し、翌十八年二月には紅葉思案九華等と共に硯友社

を結び、我樂多文庫を發行した。
明治二十年十二月の出版にかゝる第十五號に美妙は「花の茨茨の花」なる短篇を寄せたが、從來になかつた新文體を用ひたため忽ち世人に認められ、一躍文壇の寵兒となる事が出來た。彼が早くより如何に文章の語尾構成に腐心してゐたかは、丸山九華氏の親しく語つてゐる所によつても明かである。(「硯友社と我樂多文庫の由來」參照) 即ち彼は「……であつた」「……した」「……面白かつた」などとしてはあまりぞんざいなやうだし、それかと言つて「……でありました」「……しました」「……面白うございました」などの如くあまり叮嚀に書き下せば冗語が多くて甘つたるくなり、強い力を與へる事の出來なくなるのを憾みとした。かくて幾度か訂正考案の結果、從來の地の文と言語とを七分三分につきまぜそれに歐文の——とか　!とか　?とかを利用してはじめて出來上つたものがこの「花の茨茨の花」であつたらしく、彼自ら之を言文一致と言つてゐたさうである。
これまで俗文としてやゝ嘲笑味を帶びて迎へられてゐたものもこゝに言文一致なる稱呼を與へられて正當な待遇を受けるやうになつたのであるが、その名付親こそ實に美妙齋その人であつたのである。彼は言文一致の文を作品によつて示したばかりでなく言文一致論概略(學海指針)の如

く口を大きくして將來の文はかくあるべきであると當時雜然たる文章のうちに彷徨してゐた世人に知らしめるやう力めてゐるのである。

彼は二葉亭と共に言文一致の創成に努力した人として忘れる事の出來ない人物であるが、二葉亭の作品のみによつてデビューしたのに反して美妙齋は作品のみならず新聞雜誌によつて盛にその宣傳に努力したため彼の功績は一層華かなものとなりえたかの如くである。

二

學海指針に言文一致概略を發表した明治二十一年には、美妙は初めて印刷に附する事となつた硯友社の機關雜誌我樂多文庫に「情詩人」なる小説を收めてゐる。この號の「心織筆耕」なる大見出しのもとに

五　月　鯉　第一回(言文一致體)　漣　山　人
風流京人形　第一回(雅俗折衷體)　紅葉山人
情　詩　人　第一回(言文一致體)　美　妙　齋

の如く三篇の小說を載錄してゐるのであるが、各々の文體までを見出しに書列ねてゐる事によ

つても、當時の作者が如何にして獨自の表現を見出すべきかに腐心してゐたかを知りうるのみならず、一般讀者も亦內容よりも表現形式に一層注意を拂つてゐたものなる事を推察するにかたくないのである。

處は何處かの田舍です。時候は五月の下旬です。草や若葉は既に雨で綠を十分染上げ、而も一ツの露の外は塵をも寄附けぬその正しさ、「あれが私の亭主なら嘸かし賴母しいだらう」とは浮氣な良人を持つて居る丑滿連の考です。あちこちの花が吐出す種々の芳香、それが風の中で調和されてつれ彈ではない「つれ香ひ」が、優にやさしく薫る鹽梅「己の身が切めてあの位ならば」とは三年の勉强でまだ音律の合ふか合はぬか聞分けられぬ器用な伶人の述懷です。兎に角雨あがりの春景色……洋服ならセルにおしよと言はぬばかりの日の照方。其暑さを怯れてか抑〱日に燒けるのを心配してか、多分後の方を心配の根に持つて居るだらうかと思はれる處女三人、凉しさうな木蔭で睦ましさうに話しを爲て居ます。

は情詩人第一回かいまみの冒頭であるが語尾を「……です」で留めては齒切のよいなめらかな文をなしてゐるのである。「……であつた」と言ひ切つてはあまり輕卒すぎるし「……でありました」としたのでは又冗長にすぎると考へあぐんだ末漸く決定したのがこの「……です」止の

形式であつたらしいのであるが、ユーモアにとんだ淸新な文を遣る事の出來たのは彼の成功と言ふべきであらう。

彼の文には擬人的な手法が屢用ひられてをり、

〇洋服ならセルにおしよと言はぬばかりの日の照方

〇夢となればやがて誰やらの美くしい顏を見るべき眼も空しく天井に垂線を立てて薄暗いランプが畫いた圓の邊をさまよつて居ます。

などの如く巧みなものもあれば、

〇いつか目は疊の編目の中の芥塵を調査して居ていつか身は罪も無い疊の絲を刻み觴にして居ます。

〇日來(ひごろ)は快活といふ衣のためにさしも濃い餡(あん)の甘味のあどけなさも無殘に形を匿して居ましたが今は衣も粘る涎と共に解けて一層の見榮がします。

などの如くに誇張にすぎるやうな傾きのものも見られるのである。

更に春子と夏子との二人の令孃がお客の詩人に出す料理をと命ぜられてお臺所に下りてみたあたりを寫すにあたつて

から焦燥ツて見たりまた沈着いて更に夏子と談合して見たり一年の間の苦辛といそがしさをば今日の臺所に集めて居ます。

と記したのなども如何にも西洋風な斬新な叙述と言ふべきである。

けれどもそのうちには

〇この三人を文學の專門で批評して姉がトラゼデイに次がコメデイ其次がトラゼコメデイと言つた人も有ツたさうです。その評の當ツて居るのか居ないのかはまだ作者にも言へません。

〇それでも春子と夏子とは見ることの發議者たる株をば互に讓りあツて居ます（乙女心は妙なもの）いや君子、はて禮讓の人。

の如く說明に墮したものや

〇美妙齋が數年の後空中船をこしらへたならこの速力を應用して船を進めて御覽に入れます。どうしてあなた汽車なンぞ……

〇さア共所で肝心な本街道をそつちのけにして仕舞つてつい筆の尖を二毛ほど減らしました（離妻の明さ）さて其處でと、其處でその若い男は……へイもう是から眞面目になつて

申しますよ……

などの如く作者自らのおどけた氣持を描いてゐるのは共に戲作臭味から足を洗ふ事の出來なかつた證とも見られるであらう。

嶄新な表現の見受けられる反面において、かなり多くの舊樣式の叙述のその跡を留めてゐる事も亦見逃せない事實であつて、中には

心を籠めて酒宴をば客も心を籠めて食べ親も心を籠めて食べあまり「籠める」が流行るため、遂にいつしか夜をさへ籠めて談笑の聲の中に一時を知らせる掛時計の聲をさへ籠めました。

の如く語尾だけわづかに「ました」で止め他は盡く舊樣式によつて貫かれてゐるものさへあるのである。

新しい文章と言つても盡くが直ちに舊態を一變すると言ふが如きは到底望まれない事なのを思へば一方に斬新味に富んだ文をものしてゐる美妙の作に未だ舊樣式の戲作臭味の濃やかな事も時代色を反影したものとして許容せられねばならないと共に、新文章の創始からその完成までには猶相當長い年月を要するものなる事も推察するに難くないのである。

三

更に同年都の花に掲載された花ぐるまの巻頭を見るも、

夜はやゝ九時に近い頃で、途端の瓦斯の光は川霧に掻消されて薄暗い淋しさも一入加はり影に吠える犬は霜を吐いて聲にも寒氣を含んで居ます。二三日このかた曇ツたり晴れたりして今猶雨にならうか、雪にならうかと相談最中ででもありさうな空合、此頃は一體缺かさずに出る星も前に薄綿の幕を引かれて仕舞ツて下界に目瞬(めばたき)をすることも出來ず、その恨を分ツてか月は雲の高低の角々へ妬ましさうな光を噴掛けて朧銀(ろうぎん)の襞や滅金(めつき)の條(すぢ)をつくツて居ます。

の如く例の擬人法を利用して巧みに筆を運ばせてゐるのであるが、第二輛目の終には著者の註として

附言。親子應答の處は地方語で爲るのが至當ですが大した關係のことでもあまりせんゆゑ、すべて東京語を用ゐさせました。

と記してゐるのである。この附言はこれまでの小說作者の註と同じく作の手法についての但書

ではあるけれども作中人物に方言を用ゐさせなかつた事の辯明たる點に我々の興味はかゝるのである。「親子應答の處は地方語で爲るのが至當」とは認めてゐながら、「大した關係のことでもありません」位の理由で東京語で一貫させ、かへつて迫眞力の弱いものたらしめたのは彼美妙のために惜しまれるのである。

猶その中には

○顏を見ると前夜見た阿梅に似て居たか。などと此處では看客も御たづねなさいませう。が決して左樣でもありません。前夜見た時にも顏形まではわかりませんものを。

○何のためにその氣が出たか、それは力造にもわかりません。まだ作者も言ひますまい。

○牛込へまゐりましたら、ね、伯母さん(後でわかります)も待ツて居らツしやいまして、それから例の話に爲りましたの。

○力造の消防で提灯の火は消えました。しかし杉田の不番は消えません。

などの如く遊戲的な語句を弄したものや、戲作的臭味の高いものも見受けられるのである。

更に翌明治二十二年國民の友の附錄として發表した胡蝶には美妙とても非常な自信をもつてゐたものなる事は、既にその序文に

實の處これこそ主人が精一杯に作つた作で決していつもの甘酒では有りません。匇忙の中の作だの何だのと遁辭をば言ひません、只是が今の主人の實の腕で善惡に關せず世間の批評をば十分に頂戴します。

と言つてゐるのによつても之を知る事が出來る。

猶胡蝶の表現にあたつては

○「御心細くも侍らん。然はあれども源氏あざむかんには二位こそ此上なきものなるを」

○「かくては爭でか逃れ果つべき。早く心をすることそ好けれ」

○「胡蝶、いくさは如何にぞや」

の如く會話の文をばわざ〳〵文語體によつて寫し時代の臭ひを濃やかにしたのなども、彼の工夫のあとを物語るものであるが、その序文に

中の人物の言葉は矢張り、武藏野と同樣つとめてその時代の口氣を寫しました。時代物に必ずその時代の言葉を用ゐるといふことは全體たしかに是と言つて褒めるほどの事でも有りません。たゞ目先を變へただけです。

と記されてゐるのによつても之を窺ひ得るであらう。

しかし彼の工夫にも拘らず會話の文と地の文との不調和は之を如何ともする事の出來ないのは事實である。地の文にあつては

○淸くて優美でそして愛らしいものは六七歳の少女と浦の春景色ででも有りませう。その眉のまだ纖くて薄くその顏のまだ肥えて固まらず、薄絹の頰に笑靨の泉をたゝへてこぼさうとは思はずに愛嬌の露をこぼす有樣を見ては誰が一片きはめて高尙な愛情を起さずに居られませう。夕日の紅を解かして揉碎いて居る波の色、その餘光を味ふといふ有樣で反射の綾模樣を浮織にしてゐる苫屋の板びさし、しかも昨夜過ぎた春雨の足跡をば銀象嵌とも見立てられる蝸牛のぬめりに見せて居ながら、それで尙水際立つて見える工合の美しさ、餘情は以心傳心です。

○はや時も曙ちかく爲ると覺しく闇が暫時濃く爲つて星も光を隱して居ます。殘酷な羽音を響かせて血に乾いた咽喉を鳴らす梟。人を嘲るか、冷淡に戸の隙間をすりぬけて肌膚を薄淋しく背める山風。其處へ立つて居る胡蝶、實に花をはづかしめた美人の胡蝶は殺氣を含んだ目元を屹と見張つたまゝ闇にも晃く短刀を拔離してぢつと眺めて息を一吹。寢入つて居る良人二郎の顏をのぞき込みました、極めて冷かに。

などの如く圓滑流麗な筆の冴えを見せてゐるばかりでなく中には

○西山を銜む二十三夜の殘月、今些し前まで續いた五月雨に洗はれた顏の淸さ、まだ化粧は止めずに雲の布巾を携へて折々はみづから拭つて居ます。夜半、それが此時の「美」の原素で。山里、それがこの處の「美」の源です。消迷ふといふ樣に淡泊な朦朧な光を受けて沐浴したまゝ露を滴らせて居る新樹の影も咽ぶやうで、そして僅にかよわい呼吸を吐く風に戯れられては辛く浮世の宿を求めた梢の雫も落ちてはまた雨と作ります。

○思ひの外の無禮な言葉。婦人ながらも軍馬の間を經て來た胡蝶、これには赫となりました。物をも言はず睨付けるを雜兵は更にかまひません、袿衣の袖を取らうとする。今は胡蝶もこらへかねて、振拂ふや否や、身を躍らせて近い處の船に飛込まうとは爲ましたが、運わるく足が滑りました。滑りました、眞逆さま……跡は水烟と呆れた雜兵の顏ばかりです。

などの如く歐文脈を多分に取入れた淸新なものもあれば、文の終止の如きにも

○胡蝶が船端まで來た頃には旣にはや水烟が……

○やゝ敵の眼の遠く爲つた處へ來て、やれ安心と思ふと一途に典侍の方の船の影は……折

角の骨折も水の泡……

の如く省略法を用ひて……によつて餘韻をひゞかせたり、

〇折々は僅の目を偸んで懐かしい今までの御座船を見返ればその今まで皇居とした御座船には雜人ばらが早亂入して……きらめく劍戟の影のするどさ。

〇愛情の點に於てはまだ度は減らぬいとしい二郎、しかし怨みの點に於ては流石忍兼ねるおのれ二郎。

〇その内に、無殘、勇氣！　にはかに始まる泣聲。物音。

の如く名詞止としたり或は又

〇弱りました、これには胡蝶も。

〇寢入つて居る良人二郎の顏をのぞき込みました、極めて冷かに。

などと倒置法を用ひたものも見受けられて、彼の工夫の跡を知るに難くないのである。

けれども、中には

夜半、それが此時の「美」の原素で。山里、それがこの處の「美」の源です。

の如く說明に過ぎたいやみのある修辭もわづかながらも認められるのである。

胡蝶は文體の新奇なばかりでなく裸體美人の繪を挿入したために世の讀者の驚嘆の的となり、美妙の都の花編輯以來ろくに交際もしなかつた紅葉までが、ついつりこまれて我樂多文庫第十五號の街談巷說の項に胡蝶殿なる一文をものさずにはをられなかつたのであつた。

四

更に同年の「この子」にも

わたしは醫者で、何でも物を叮嚀に見たり考へたりするのが私の性質です。それゆゑ職業を行ふにも考へが綿密に行き亙るためか、敏捷なことをば爲ませんが、また非常な失策をしたことも無く、そして婦人科と小兒科には性質が適當して居ますので終にこの二つを專門としました。

の如く「です」口調のなめらかな文が見られるのであるが、その序に

文體は言文一致の中流ですが、出來るだけ敬語と助動詞の數を減らしました。時(過去現在および未來)の用ゐ方も今度は成るたけ律で推せるやうに勉めました。

とその文體について數行も物語つてゐるのによつても作品をものするにあたつて彼が如何に表

現特に文體に留意してゐたかを知るに難くないのである。

美妙はその時代の作家と共に文の末尾を如何に結ぶべきかに苦心し工夫をこらした結果、「……だ」でも輕すぎるし「……であります」では又少し冗長に失するのを憂へて遂に「……です」止を用ひたばかりでなく、西洋風な清新な表現を試み省略法擬人法などをも屢採り用ひて新鮮味の溢るる彼の所謂言文一致の文をものしてゐるのであるが、文章史上に特筆せらるべき彼の功績はむしろ言文一致の運動のために新聞雜誌に氣を吐き、自ら批評の矢面にも立つて勇敢にその育成に力を致した點に求められねばならないであらう。（「文章論の推移」參照）

紅葉などの硯友社の幹部に比べて彼が早くも名をしられたのは一にその新奇な文章によるものであるが、内容よりも形式に走り、文章のために文章を作るかの如き缺點をあらはし、紅葉ほどの教養もなかつたため、内容のこれに伴はなかつたことは彼をしてその名聲を保たしめなかつたのであるが、言文一致の新文章の恩人として文章史上忘れえない一人物たるを失はないのである。

第六章　尾崎紅葉の文章

一

尾崎紅葉は大學豫備門の頃より既に石橋思案山田美妙等と共に硯友社を組織し、その機關雜誌として我樂多文庫を發行して文章研究に專念した。しかも初は各自の原稿を持寄つて回覽に供してゐたのに過ぎなかつたが初一番の尾崎が披露の文を見るも

我樂多文庫御披露檄して曰くはチト大業、處して參るはヤヤ艶めく、則ち書て以て才子諸君に告まつる。それ人各樂しみあり。隣の壁から燈を盜みて書讀むも樂なり。銅臭を喜ぶ守錢奴、一簞の食に事足るとする淸貧家も亦樂むところなからずやは、傾城の淚に家藏の雨漏を顧みず、あるは二合半の寢酒に布袍を打殺して飛だ罪つくるも亦罪障のひとつぞかし。されど隣の壁ぬかば尻を喰ふ恐れなきにあらず。銅臭きはぢゞむさし、さりとて冷飯は腹こわばりて病や起らむ、家を持たねば傾城の雨漏り處なく、無一文にては寢酒も飮めず、あゝ何とせうどうせうと、凝つては思案のいらばこそ、筆の林に閑居して、不善はさ

らぬ君子等の、快樂の一派和歌詩文の上品より、小說狂文詩歌俳句、四面に堅き角を取り、端唄都々一の心意氣、一切無差別書集め、我樂多文庫の名にしおく、諸彥も我も樂多き雜誌を月に編じて、而して讀書餘閑の憂晴らし、噫是れ天下無上の快樂供にせむとの有志の君達、珠玉を空しく秘め給はず、うらんかな〳〵とのたまへば、我も言はん買んかな〳〵。

明治十八年彌生の末つかた　半可通人　白樂

柳翠花紅樓のあるじ

の如くこの遊戲的な態度を見逃す事は出來ないのであるが、かゝる遊戲的な手法は硯友社同人の著しい特徵として後々までも拾ひあげられねばならない所であつた。しかも紅葉は舊い殼の中に安住する事が出來ず傳統文學の反映の强く見られる反面にあつてたえず新しいものへとあがいてゐた事も見逃し得ない事實である。

明治二十一年の五月から印刷に附せられる事となつた我樂多文庫に紅葉は風流京人形を連載してゐるのであるが、特に雅俗折衷體なる見出しをつけてゐるのによつても美妙とか漣とかと

共に新文體を創り出さうと努めてゐた彼の面目を窺ふ事が出來るのである。

泉水に映る夏の空雲むして奇峯白く一片の風さへ門涼みの夕暮を樂みに日盛りには輕々しく吹かねば向ふ岸の浮萍も落つきて靜かなる其水底を窺へば黄金の鈴沈めり――幾房となく黄金の鈴。いかに大氣なる人の麁忽ぞ目に見ゆるものを拾ひあげぬとは……松火かふ世話もなきに――一文ならぬ重寶なるに――仰で見れば池に指出たる岩が根に枇杷の大木一株。汀より隔たること飛石五ツ六ツ露もしたゝるばかり生々しき青簾深くたれて椽より內見透すべくもあらず家內は寂寞として人々は外出やしたる晝寢やしつる軒端の風鈴絶え絶えになつて錦魚鉢に躍る。

はその冒頭であるが自由に俗語を取用ひたため文語體のみからくる硬直さからまぬがれて巧みに圓滑な筆致を示してゐるけれども未だ美妙の如くその名を謳はれるまでにはならなかつた。

翌二十二年一月、新著百種の第一篇として二人比丘尼を出版するや世人の好評を博し一躍文壇の寵兒となり得たのである。西鶴張のこの書の賞讚を受けたのは一にその文によるものと思はれるのであるが、彼もこの文には餘程の自信を持つてゐたものゝ如く、冒頭の自序にも文章の事にふれて

一、文章は在來の雅俗折衷をかしからず。言文一致このもしからずで。色々氣を揉みぬいた末。鳳か雞か――虎か猫か。我にも判斷ならぬかゝる一風異樣の文體を創造せり。おまりお手柄にあらずと言へど。これでも作者の苦勞はいかばかり。それをすこしは汲分けて。御評判を願ふ。

一、對話は淨瑠璃體に今時の俗話調を混じたるものなり。惟みるに。これを以て時代小說の談話體にせんとの作者の野心

と言つてゐるのである。これによつても作者が從來の文語文は勿論、自ら強調した雅俗折衷體をも面白からずとして一種異樣な新樣式を創造したものなる事を明かにする事が出來る。

蕭寂はそも如何ならん。片山里の時雨あと。晨より夕まで。昨日も今日も風の烈く。あるほどの木々の葉――峯の松のみ殘して――大方吹落しぬれば。山は面瘦せて哀に。森は骨たちて凄じ。

茶の煙だに擧らずば。山賤も知らぬ谷陰に誰がすむ庵ぞ。かくても尙捨難き浮世の面影のこす菱垣。疎に結ひ繞し。竹は蝕み。繩朽ちたれど。枯蔦の名殘惜しく絕れるまゝに倒れもやらず。二本の黑木を入口の標に茅葺の屋根は歲に黑み。落懸る檐風に傷はしく。風情

は月にばかりの破壁。強くは踏れぬ竹緣。切株の履脫より左に三尺。其處に筧の。水ほど
にもなく絕えせぬ雫。閼伽桶に滴る音の。やう〳〵幽に疎に成り行くは樋の口凍るにやあ
らん。夕暮の風寒し。

なる冒頭の文をみるもきび〳〵した西鶴臭味の感ぜられる中に擬人法とか――などの歐文脈を
取入れてゐるのに依つても表現上における「作者の苦勞」も推察せられるであらう。

對話の文も著者自ら「これを以つて時代の談話體にせん」と言つただけあつて

○「（上略）目出度歸るを待つて居よ……此一言が今だに恨めくてなりませぬ。水くさい……口ばかりその樣な氣安め……鎧櫃の內にはこの書置……兼て討死の覺悟なら。かう〳〵となぜ打明けて有仰つて下さりませぬ……恨で御座りまする。其とお話し下すつたら。何の未練がありませう。夫の目前で自害遂げ。冥土へ參つて待つて居りまするに。命長へよの……夫を持てのと……其ばかりか去狀まで……見るも汚らはしい。其場で引裂いて……了ひました。」

○「いゝ所存――いゝ覺悟。さりながら御身が勢は無慙な敗軍……あれ……あれ味方が揚げる鯨波。（下略）」

○「情ないとは何が……今となつて後れたか。さ……さ……勝……勝……」
などの如く、——や……やを巧みに用ひて自由に斷續を示し息のと切やはずみまでも寫しえてゐるのは妙と言はねばならないであらう。

二

紅葉は美妙と氣まづい關係上色懺悔にあつて新文體を開いては山田の言文一致に對抗しようとしたけれども彼とても新文學の教養は寧ろ美妙以上にあつただけに言文一致への關心を持たないではをられなかつた。かゝる態度の最もけざやかに現はれたのは明治二十四年八月都の花に掲載された二人女房であつた。

二人女房のうちには所々例の雅俗折衷文が用ひられてをり純粹に言文一致をもつて貫かれたものではないけれども文章史上彼の作品中最も重要視せらるべきものである。即ちこの作において紅葉は文の終止にはじめて「……である、」調を用ひたのであるがこの調子の今日最も普通に使はれてゐるのを思ふとき言文一致の發達上注目せらるべきものと言ふ事が出來る。しかもその文體の末尾を見るに

○鬼千疋！　と嫁は怖毛(おぞけ)を震ふのである。

○此(この)(が)と聞いた時。隱居の目は鮑貝(あはびがひ)を日向で一寸動かしたやうに。きらりと光つてお銀の眉間を睨みつけたのである。

○餘り切なさに。無駄とは知りながら折折周三に口說くと。おつに翻弄(はぐら)かされて。太平樂の仕舞は定文句の。我(おれ)を誰だと想ふ。澁谷周三だ。お前たちを乞食にはさせぬからと大きく蔽冠(おツかぶ)せられてすごすごお酌するが例である。

の如く「……である」調を創始したのであるが之ばかりでは單調に陷るのを恐れて寧ろ多くは

○之を聞くと母親は懵然(ぼんやり)疊を瞶(みつ)めてはゐながら。一寸苦笑(にがわらひ)をしたばかり直に又眞面目に復つて思案してゐる中に。啣(くは)へてゐた楊枝をぷつつり前齒で咬折る。

○其は人の屑といつて。紙屑。絲屑。鋸屑ほども役に立たねば。好くしたもので買手もない。

○此時を二身同體といつて。彼も無く我も無く。夫の心は妻の心。今日は花見に行かうか。向島へね。其が可(いゝ)。お酒はおよしなさい。うゝよさう。と恁(かう)云ふ場合には琴瑟和合の鬪々雎鳩のといふ語などは已に迂(まだる)こしい。

○最少し外に職がありさうなものだと首を拈る。

などの如く動詞形容詞の終止形を用ひたり、

○「さうね。」と肚裏では隨分可笑かつたやうな顏色。

○「それほど氣になるなら戸棚へでも仕舞つておけ。」と父親に窘められても。猶且氣になつて竊に一策を案じ。戸棚に鏡を立てゝ置いて。隙を覗つては一寸々々見に來るといふ寸法。

の如く名詞止を用ひたりして、力めて變化を求めてゐるのは彼の並ならぬ工夫の揮はれた所であらう。

○扨留守居の我一人が貧乏鬮だと。先から愚知の出ぬ中此方から一合增といふ觸込に。父親は醉はぬ前から口が利けずに頷いて。早御自身に德利を提げて。裏口から買ひに出られるといふ手廻しの好さ。此方も早くと。塗る。着る。車が來る。乘る。走る。

の如く短い句切によつて巧みにその動作の推移を寫したものもあれば

　憶起しても腹が立つ。今日の始末は何だ。我が話を爲懸ければ。何處に火事があるといふ顏をして新聞を讀みくさる。母親が娘に會ひに行くからは。色々話のあるのは知れた事だ。

側に他人にゐられては骨肉同士の話は爲惡いぐらゐは誰でも知つてゐる事だ。それが解らない位なら山出しの田舍ものだ。おゝ田舍者だつけ。第一隱居といふものは。隱居所へ引籠むで。猫火鉢にかじりついて。新聞でも見てゐれば可いのだに。妙にしや〳〵り出して奈何いふ意(つもり)だらう。

の如くきび〳〵した表現によつて隱居の不機嫌に心よからず歸つてきた里の母親の心持を寫しえてゐるものもある。

けれども中には

澁谷(しぶや)は翌日の退省(ひけ)に山口を伴(つれ)歸り。客間の緣近に。マホガニイの小卓子(こテーブル)を据えて。これに淡泊(あつさり)とした者を三品ばかり列べ。献酬(やりとり)なしと定めて。小さな臺付の硝子盃(コツプ)と京燒の小德利を銘銘に控へ。山口は葛布の洋服をば。糊にぴんと張つた客浴衣に衣更へて。紅革の裀の上に割膝をして庭の盆栽棚に喚懸けた柘榴(せきりう)の盆栽をまじまじ眺めながら。髭(ひげ)を撚(ひね)つて待つ所へ、主人も浴衣になりて。濡髮を拭きながら。のつし〳〵と出て來て。

の如くどこまでも切目のない舊樣式の長い文章も見受けられ

猪口を捺したやうな五紋の紗の羽織のどう疊むでも。鎭(おし)を置いても。自體絲が性を失つて。

揉めたら些と伸びにくい皺が。最多く裾の邊に髣髴たるを。殊更に折目正しく着做したるが。一心に道を急いだ所爲か。四分五厘ほど拔衣紋になつて。然のみならず背縫が二十三度ばかりも曲つて、御紋の上り藤が風に吹かれてゐる。

の如くぎこちない言文一致も見られるのであり猶又

○嫁入は女子一生の大事なり。可か。否かは風邪氣の時に浴の分別をするとは大きに寸法が違へば。

○之に乘れば。往はよい〱還は早いで。日沒前に家に着くと。洋燈掃除で火屋を壞して。指を切つて狼狽してゐた父親が。やれ待兼ねたと飛んで出る。

○お神樣達娘子供が花嫁子を見物に出てゐる。車の音を聞くと齊しく。彼地の窓から首がでる。此地の格子から體が現れる。それが無遠慮に噪ぎ立てゝ。其甚しきに至りては。從々と車に近寄つて。阿部宗任が八幡太郎の寢息を候ふといふ身で。幌の內を瞰きこむのがある。暗い中に白いものが見える許で。あれは紀國密柑船だか。何だか解るもので無い。

などの如く戲作的な手法もあちらこちらに見出されるのである。けれども反動的に文語文をものした紅葉がとかくこの文體に引づられ言文一致の文を記す場合にまでその混入を餘儀なくされ

たのは自然の勢であり、遊戯的氣分の濃厚だつた彼の作に戯作的分子の混つてゐるのも亦當然と思はれるのである。

三

二人女房にあつては「……である」の結び方もまだ初めてわづかに試みられたにすぎず、むしろ動詞、形容詞の終止止の方が多かつたのであるが、二十九年二月起稿の多情多恨に至つては「……である」式の結びも漸く勢力を得、

○彼の胸にはその可愛い可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。

○學院では實に難有い大事の人になつてゐるのである。

○彼が他の思はくをも管はず、直に（妻が）と言ふのも、不吉と言はれて、今腹を立つたのも皆此子供らしさからである。

○葉山が强いて言ふならば、隨分學校へも出るのである。掃憂とならば葉山と連立つて何處へでも行くのである。

○然し、葉山の家ばかりは柳之助の思案する理がある。それは自分と地下の類との他に知

るものは無い。さすがの葉山も之を知らぬ。知らぬのではない。知らせぬのである。知らせぬのではない、知らせる事が出來ぬのである。知らせては一大事なのである。などの如く至る所にその例を見出すばかりでなく、つゞけざまに二つも三つも用ひられてゐるのに依れば、この結びの如何に力強いかを認めた作者が漸く試みの時代を過してはじめて實用にうつしたものと考へられるのである。

勿論この作にも

○思ふまいとしても、忘れようとしても、寐れば夢を見る、起きてゐれば、唯其事が紛々と胸に集る。

○返答に窮へてゐる間に葉山はコツプの酒を飲盡して更に一盃を注がうとすると、半分よりは無い。

の如く動詞、形容詞の終止形止によつて結びの變化を求めたものもあちらこちらに見受けられるけれども、「……である」止の多く用ひられてゐる事は紅葉によつてこの用法の愛好せられた事を物語るものであつて、今日の口語文の結尾の一般が、これによつてゐるのを思ふとき、紅葉の功績も亦大きいものがあると言はねばならないであらう。

しかも多情多恨にあつては既にその卷頭から

鷲見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる。去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては今朝のやうに、唯の今のやうにも思ふ。餘り思ひ窮めては未だ生きてゐる樣にも思つてゐる。なるほど病の爲に敢無くはなつた、氷のやうに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも斂めたれば、葬送も出した、谷中の土に埋めて榇の位牌になつて了つて、現在此に在るからは、假でもなければ、夢でもなく、確に死ぬだに極つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の內にはその可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。

の如く斷續自由な、なめらかな文を示してゐるのによつても、本篇に至つて言文一致の文章も漸く確かな基礎を得たものと言へるであらう。

會話の文章にあつても漸く洗錬彫琢を加へられて

「貴方は生涯今の不自由で在つしやる御意ではないのでございませう?」

「如何いふ義ですか、今の不自由で……?」

お種は言ひかへて、

「いづれ又お宅をお持ちになるのでございませう。」
「それは持つても可いですけれど、然し何ですな、僕は永遠も御厄介になつて居りたいのですが、御迷惑ですかな。」
「宅に在つしやる分は些とも迷惑な事はございませんのですけれど、恁して在しつては、貴方は永遠も御不自由で、寂しい思ひをなさらなければなりませんよ。」
「那様事は決して無いです。」
と速りに頷いて柳之助は獨りで心得てゐる。それでは全で寸法が違つてお種は大に考へる
「それでは不自由でもなくお寂しくもないのでございますか。」
「不自由ですけれど、其はもう爲方が無いと諦めて居るです。寂しいのも、貴方が恁して家內のものゝやうにして下さるから、僕は滿足して居ます。可いです、是れで可いです。」
「何も貴方强いて御不自由をなさらんでも可いぢやございませんか。」
「强いて爲るぢやありません、是は究竟自分の不幸なのです。」
「でも今後の御不自由は貴方が强いて爲さるのぢやございませんか。」
「それは何故ですか。」

お種は姑く考へ澄ましてゐたが、
「御繼をお聘ひなさいましな。」
「繼聘を？　妻をですか。」と柳之助は顏の色を變へる。お種は故と事も無げに、
「然うでございます。」
「那樣氣は有りません。」と決然とした挨拶。
「御不自由をなすつても？」
「はあ」
「それで御病氣にでも御成なすつた時は誰がお世話を致します？」
「…………」
「お年を取つた後の事も考へて御覽なさいまし。御掛りになる子供衆も無くて、六十七十にお成なすつて御自分でお働きなさる事が出來ますか。」
「…………。」
「そこらも少しお考へなさらなければなりますまい。一體如何いふ御考で御繼はお聘ひになさらんのでございます。」

思案に晦れてゐるが、柳之助は熟と面を背けて何の答も無い。

の如くすつきりと垢拔のした得意の筆の冴えを見せてをり、豐麗な地の文と共に言文一致の完成に大なる役割を演ずる事となり、高山樗牛等の反紅葉熱に發奮して發表した著者會心の作だけあつて表現の上にも大家の貫祿を示すに充分であつた。

即ち二葉亭、美妙を經て漸次進展を示してきた言文一致の文章は文章報國を念とした紅葉によつてはじめてどつしりした礎石を据ゑられることとなり新文章としての面目を備へることとなつたのである。

四

金色夜叉は紅葉が前後六年病中をも冒して筆を執り、しかも未完成のまゝ逝つた彼にとつては最大長篇の作であつた。彼の江戸趣味的な凝り方はその文をも目もまばゆい程の絢爛華麗なものとさせないではおかなかつた。「七たび生れかはつて文章を大成せむ。」のいまはの言葉を殘した紅葉の文章報國の信念と鍛錬無比の精進との最も圓熟した結晶の姿はこの作品をおいて他に求められないであらう。

その文章の雅俗折衷體より轉化したものなることは、一作毎にその表現形式に腐心した著者の苦心の現れとも見られるのであるが、又一方において雅俗折衷の様式に慣れた著者が力作を發表するにあたつて自然にこの體に落ちついたものとも考へられるのである。

輙ち橋を渡りて僅に行けば、日光冥く、山厚く疊み、嵐氣冷に壑深く陷りて、幾廻せる葛折の、後には密樹に聲々の鳥呼び、前には幽草歩々の花を發き、逾よ躋れば遙に木隱の音のみ聞えし流の水上は淺く露れて驚破や、斯に空山の雷白光を放ちて頽れ落ちたる乎と凄じかり。道の右は山を劉りて長壁と成し、石幽に蘚碧うして、幾條とも白絲を亂し懸けたる細瀑小瀧の珊々として濺げるは、嶺上の松の調も、定めて此緒よりやと見捨て難し。

の如く巧みな叙景の見られるばかりでなく、

○久しく人氣の絶えたりし一間の寒は、今俄に人の溫き肉を得たるを喜びて、直ちに咬まんとするが如く膚に薄れり。宮は慌忙しく火鉢に取り附きつゝ、目を擧げて書棚に飾れる時計を見たり。

○彼の六時間の學校に在りて歸來れるは、心の瘦するばかり美しき俤に饑來れるなり。彼は空しく饑ゑたる心を抱きて慰むべくもあらぬ机に向へり。

○花の散りかゝる中を進來つゝ學生は帽を取りて、
「姨さん、參りましたよ。」
母子は動顚して殆ど人心地を失ひぬ。母親は物を見るべき力もあらず呆れ果てたる目をば空しく瞠りて、少時は石の如く動かず。宮は、あはれ生きてあらんより忽ち消えて此土と成了らんことの、せめて心易さを思ひつゝ、其の淡白き唇を咬裂かんとすばかりに咬みて止まざりき。

○法律は鐵腕の如く雅之を拉し去りて、剩さへ杖に離れ、涙に蹌ふ老母をば道の傍に蹴返して顧ざりけり。

○昨日こそ誰乎彼の黯黮にて、分明に面貌を辨ぜざりしが、今の一目は、躬も奇なりと思ふばかり奇くも、彼の不用意の間に速寫機の如き力を以てして、其の映じ來りし形を總て脫さず捉へ得たりしなり。

などの如く歐文脈を取入れる事によつて文に淸新味を與へたり、
兩個は較熱かりし其日も垂籠めて夕に抵りぬ。むづかしげに暮山を繞りし雲は、果して雨と成りて、冷々と密下るほどに、宵の燈火も影更けて、壁に映ふ物の形皆寂しく、愁ひ

に起きて在るべき夜頃ならず。さては貫一も枕に就きたり。
ラムプを細めたる彼等の座敷も甚だ静に、宿の者さへ寐急ぎて後十一時は鳴りぬ。
凄じぎ谷川の響に紛れつゝ、小歇もせざる雨の音の中に、彼の病憊れたるやうの柱時計は
息も絶氣に半夜を告げわたる時、兩箇が閨の燈は乍ち明かに耀けるなり。

の如く和文脈によつて靜寂な夜半の情景を描き、或はまた、

○雨は此時漸く霽れて、軒の玉水絶々に、怪禽鳴過る者兩三聲にして、跡松風の音颯々たり。
○片側町なる坂町は軒並に鎖して何處に隙洩る火影も見えず、舊砲兵營の外柵に生茂る群松は颯々の響を作して、其の下道の小暗き空に五位鷺の魂切る聲消えて、夜色愁ふるが如く、正に十一時に垂んとす。

の如く漢文句調によつて力強い響を與へようと力めたところも見られるのである。

更に會話の文を見るに、

「さあ、早く歸れ！」
「もう二度と私はお目には掛りませんから、今日の所は奈何とも堪忍して、打つなり、毆く

なり貫一さんの勝手にして、然うして少小でも機嫌を直して、私のお詫に來た譯を聞いて下さい。」

「えゝ、煩い！」

「それぢや打つとも毆くともして……。」

身悶えして宮の縋るを、

「那樣事で俺の胸が霽れると想つて居るか、殺しても慊らんのだ。」

「えゝ殺されても可い！　殺して下さい。私は、貫一さん、殺して貰ひたい、さあ、殺して下さい、死んで了つた方が可いのですから。」

「自分で死ね！」

彼は自ら手を下して此身を殺すさへ屑からずとまでに己を鄙むなる乎、餘に辛しと宮は唇を咬みぬ。

「死ね、死ね。お前も一旦棄てた男なら、今更見とも無い態を爲ずに何爲死ぬ迄立派に棄て通さんのだ。」

「私は始めから貴方を棄てる氣などは有りはしません。それだから篤りとお話を爲たいので

す。死んで了へとお言ひでなくても、私はもう疾から自分ぢや生きて居るとは思つて居ません。」

「那様事聞きたくはない。さあ、もう歸れと言つたら歸らんか！」

「歸りません！　私は甚麽事しても此儘ぢや……歸れません。」

…………………………（中　　略）……………………………

「これ、人が來る。」

「…………………」

宮は唯力を極める。

不意に此體を見たる老婢は半啓けたる紙門の陰に顏引入れつゝ、

「赤樫さんがお出になりまして御座います。」

窮厄の色は衝と貫一の面に上れり。

「あゝ、今其方へ行くから。――さあ、客が有るのだ、好加減に歸らんか。えゝ、放せ。客が有ると云ふのに奈何するのか。」

「ぢや私は此に待つて居ますから。」

「知らん！　もう放せと言つたら。」
用捨もあらず宮は捻倒されて、落花の狼藉と起き敢へぬ間に貫一は出行く。
の如く思ひ迫つた宮と貫一との會話も洗錬に洗錬を重ねて描かれたものであつて息づまるやうな切迫感をいだかせるに充分であつた。
上述の如く金色夜叉の文章に和漢洋の三様式を渾一融合しきつた艶麗華美なものを見受けられるのによつても、一作毎にその表現形式に腐心し文章報國を以て自ら任じた作者紅葉の不斷の努力を認めなければならないのである。
紅葉は美妙などよりも新文章についての深い教養を持ちながら力めて舊様式の文體によらんとしたのは一に美妙との心よからぬ關係上反動的對抗的な氣分から行はれたもの丶如く、既に近代の小説の著者も
紅葉は美妙に對抗してわざと「紅子戯語」と言つたやうなものや、「色懺悔」「王昭君」と言つたやうなものを書いた。
といつてゐるが如くである。
けれども紅葉とても時代の動きを他處にする事は出來ず、言文一致の作品を示せば二人女房

とか多情多恨の如く、「……である」止の新様式を開き、永く口語文の結尾となり了つたのを思ふとき、更に最後の大作金色夜叉の如く舊様式の殼からぬけきらぬものもあつたけれども、しかも和漢洋の各様式を程よく融合して豐麗な表現となつてゐるばかりでなく、圓熟した迫眞力に富む會話の文をみるとき、明治の新文章は彼紅葉の手を經てはじめてその大道を指示せられたものとも言ひ得るのであり、文章史上彼の偉大さも亦こゝに求められねばならないのである。

かくて「一七たび生れかはつて文章を大成せむ」と言つた彼の言葉も空しくなかつたと言ふ事が出來る。

第七章　正岡子規の文章

一

子規の名は俳句革新者歌壇淨化者として明治文學史上何時までも忘れられないばかりでなく寫生文を唱導して自らも之を習作し遂には他日漱石の猫とか節の土とかを生むに至つた母胎をなした點に於て文章史上にも亦注目せらるべき存在でなければならないのである。

子規の寫生文は俳句に於て唱導した寫生を文章にも應用したものであるが、眞實の體驗に立脚したものだけに美辭麗句を連ねて美文呼ばはりをしたり、外國文學や元祿文學などの形骸のみを模倣して粉飾を事としてゐた人々にとつては確に頂門の一針であつた。

子規を中心として山會（ヤマ）なる會合があり、各自文章を持寄つては之を朗讀するのを常とした。山會は文章も一つの山のやうなもので裾野もあれば頂上もあるとの考から起つた名稱である。山會はその會の人々の中から他日俳諧師（虛子）猫（漱石）土（節）などの大文章の生れる溫床の役目をなした點にその價値を認めらるべきものであつて、その當時には大した活動をしたものではなかつた。

彼は文章に寫生の大切なる事を唱へた許りでなく自らその模範文を示す事を忘れなかつた。

去年の暮、虛子が生ける小鴨一羽を贈つてくれたので盥に入れて飼ふて居た。夜は緣側に盥を据ゑて雨戸をしめて置く。我は障子の内に居て何か書いて居ると、鴨は盥の中に置いてある石の上へ上つて時々羽ばたきする樣子で、それからしばらくすると緣側へ飛び出してコツコツと步行（ある）いて居る樣子で、終にはランプの最も明るく映つて居る障子へガサと搔きつからうとする樣子である。それがうるさいので試に盥共に障子の内へ入れて我机の向ふ

へ置いてやると少しも騷がないで靜かに三尺の池に浮いて居る。物書きながら餘り靜かだから最う寢て居るのだらうと思ふて鴨を見ると、なか〳〵寢て居ないので丸き小き眼をランプに光らせて居る。さなくとも早寢がちの根岸、冬の夜の十二時過ぎては死んだやうな靜かさで笹一枚動く音もせぬ。其しんとした中に我と鴨とが起きて居ると思ふと淋しいやうな寒いやうな心持がして、いつ迄も鴨と離れたくなかつた。（根岸草廬記事）

の如く小鴨一羽を描くにも精緻な寫生的な手法を用ひてをり、

坂を下りて提灯が見えなくなると熊手を持つて歸る人が頻りに目につくから、どんな奴が熊手なんか買ふか試に人相を鑑定してやらうと思ふて居ると、向ふから馬鹿に大きな熊手をさしあげて威張つてる奴がやつて來た。職人であらうか、しかし善く分らぬ。月が後から照して居るので顏ははつきり見えぬが何でも慾ばつて居るやうな人相だ。こんな奴には屹度福は來ないよ。身分不相應な大熊手を買ふて見た處で、いざ鎌倉といふ時に寶船の中から鼠の糞は落ちようと金が湧いて出る氣遣は無しさ、まさか大佛の簪にもならぬものを屑屋だつて心よくは買ふまい……やがて次の熊手が來た。今度は二人乘のよぼ〳〵車に窮屈さうに二人の婆さんが乘つて居る。勿論田舍の婆さんで其中の一人が誠に小さい一尺ば

かりの熊手を持つて居る。若し前の熊手が一號といふ大きさなら此熊手は廿九號位であるであらう。其小さな奴を膝の上にも置かないで矢張上向けて大熊手を持つたやうに差あげて居たのもをかしい。其無邪氣な間の拔けた顏は慥に無慾といふ事を現して居るので、こいつは大に福を與へてやりたかつた。自分が福の神であつたら今宵此の婆さんの內に往て、そつと其枕元へ小判の山を積んで置いてやるよ、あしたの朝起きて婆さんがどんなに驚くであらう。併し善く考へると福相といふ相では無い。寧ろ貧相の方であつて、六十年來持來つたつぎまぜの財布を孫娘の嫁入に讓つてやる方だ。して見ると福の神はこんな皺くちや婆さんを嫌ふのであらうか。或は福の神は此の婆さんの內の門口迄行くのであるけれど、婆さんの方で福なんかいらないといふて追ひ返すやうな人相と見える。

(熊手と提灯)

の如く寶を得ようとして熊手を買つて歸る人々を寫すにあたつても細かな觀察を基礎として自己の感じをも附加する事を忘れなかつた。

これらの例によつても明かな如く子規の唱へる寫生文とは緻密な觀察とか確實な經驗とかを基として、繪畫に於ける寫生の手法を以て細かに書きあげたものの如く、紅葉を宗とする硯友

社一派にあつても猶かなり濃厚に動いてゐた戯作者的な虚飾は此處には全く淸算せられてゐるのである。しかも寫生文は自己の體驗を無視した空疎虚僞な粉飾を却けた點に於てついで起るべき自然主義の文學に呼びかけたものとも見るべく、以後の文學に影響する所はかなり大きかつたやうである。

二

更に明治卅二年九月にものされた「墓」なる短篇を見るに、自ら死者となつてからの墓地での生活をかなり詳しく滑かな筆致に諧謔をも漂はせて描き出してゐるのであるが、

オヤ動き出したぞ。墓地へ行くのだナ。人の足音や車の軋る音で察するに會葬者は約百人新聞流でいへば無慮三百人はあるだらう。先づおれの葬式として不足も言へまい。……アヽやう〳〵死に心地になつた。さつき柩を舁ぎ出された迄は覺えて居たが、其後は道々棺で搖られたのと寺で鐃太鼓ではやされたので全く逆上してしまつて、惜い哉木蓮屁茶居士などといふものはかすかに聞えたが、其後は人事不省だつた。少し今、ガタといふ音で始めて氣がついたが、いよ〳〵こりや三尺地の下に埋められたと見えるテ。靜かだツて淋し

いツて丸で娑婆でいふ寂寞だの蕭森だのとは違つてるよ。地獄の空氣は確かに死んでるに違ひ無い。ヤ音がする、ゴーといふのは汽車のやうだがこれが十万億土を横貫したといふ汽車かも知れない。それなら時々地獄極樂を見物にいつて氣晴らしするもおつだが、併し方角が分らないテ、滅多に闇の中を歩行いて血の池なんかに落ちようものなら百年目だ、こんな事なら圓遊に細しく聞いて來るのだツた。オヤ梟が鳴く。何でも氣味の善い鳥とは思はなかつたが、道理で地獄で鳴いてる鳥ぢやもの。今日は弔はれのくたびれで眠くなつて來た……

の一節を見ても讀者は直ちに

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合はせる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入つたきり殆ど出て來る事がない。家のものは大變な勉强家だと思つて居る。當人も勉强家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ樣な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく晝寢をしてゐる事がある。時々讀みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帶びて彈力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤス

ターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寢て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はないと。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで、彼は友達が來る度に何とかかんとか不平を鳴らして居る。

なる漱石の猫（明治三十八年ホトトギスに發表）の筆致を想ひ浮べるであらう。即ち我々は漱石が山會の同人であつたのと、更に病中の子規に書を寄せて

（上略）御前兼て御趣向の小説は已に筆を下したまひしや今度は如何なる文體を用ひたまふ御意見なりや委細は拜見の上逐一批評を試むる積りに候へども兎角大兄の文はなよなよとして婦人流の習氣を脱せず近頃は篁村流に變化せられ舊來の面目を一變せられたる樣なりといへども未だ眞率の元氣に乏しく從ふて人をして案を拍て快と呼ばしむる箇處少きやと存候總て文章の妙は胸中の思想を飾り氣なく平たく造作なく直叙スルが妙味と被存候さればこそ瓶水を倒して頭上よりあびる如き感情も起るなく胸中に一點の思想なく只文字のみを弄する輩は勿論いふに足らず思想あるも徒らに章句の末に拘泥して天眞爛漫の見るべき

なければ人を感動せしむること覺束なからんかと存候（下略）
とまで憚る所なくその缺點を指摘してゐるのや、子規は又先輩の氣で俳句でも詩でも散文でも漱石のものに何時も手を入れてゐた程の間柄なのを思へば、子規の「墓」より漱石の「猫」への發展は寫生文の大きな展開を示すものとも言ふべく、此處に一線を劃する事は何等不自然とは思はれないのである。

三

寫生文に於ける寫生は勿論當時流行しはじめた洋畫の影響によるものであるが、子規の寫生文觀は「叙事文」なる一篇に之を詳しく窺ひうるであらう。
即ち彼の言ふ寫生文とは古文雅語などを用ゐて言葉の飾りを主としたものを言ふのでもなく作者の理想などを巧みに述べて趣向の珍しいのを言ふのでもなかつた。例へば或景色とか人事を見て言葉も飾らず誇張をも加へずに只ありのまゝ見たまゝを模寫したものを彼は寫生文と名付けたのであつた。換言すれば對象への客觀的な觀察を基として出來るだけ主觀的な色彩を混へない文を言ふものの如くである。

かくて子規は寫生文を唱導することによつて硯友社一派の技巧を主とした遊戯的な文章を淸算放棄したのであるが、觀察の跡を克明に記述せんとすればどうしても言文一致の文體を採らねばならなかつた。けれども子規とても初は言文一致を好んではをらなかつたらしく、

言文一致者流の文已に平易ならず、解し易からず、おまけに冗長にして雅味なし。地の文に禮儀上の語を書きて讀者をして不愉快ならしむるとせば一ツも取り處なきなり。

と之を非難して自らも文語體の文章をのみ作つてゐたものであつたが、誇張と粉飾とを極度に却ける寫生文をものするにあたつて必然的に言文一致體に轉換しなければならぬやうになり、遂にはホトトギス第三卷第七號にあつて「平々淡々のうちに極めて精細に極めて深刻に事實を敍することを得て其味は表面にあらずして深き裏面に在ること」を述べ「言文一致は遠からず凡てのものを記述する唯一の文體として普通に採用せらるゝに足る」とまで極言しないではをられなかつたのによつても如何に忠實な寫生に從來の文章が不適當であつたかを物語つてゐるものでなければならぬ。子規が言文一致を用ひるに至つたのは寫生文を記すことから必然的に導かれたのであつて、美妙の如く試みとしてでもなければ、紅葉の如く氣まぐれからでもなかつた。

子規の寫生文にも小園の記（明治三十一年十月作）の如くその初期の作品にあつては、

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば青空は庭の外に擴がりて雲行き鳥翔る樣もいとゆたかに眺めらる。始めてこゝに移りし頃は僅に竹藪を開きたる跡とおぼしく草も木も無き裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を栽ゑて稍々物めかしたるに、隣の老媼の與へたる薔薇の苗さへ植ゑ添へて四五輪の花に吟興を鼓せらるることも多かりき。

の如く文語體によつて記されたものも見受けられるけれども、翌卅二年一月には既に「一夢」なる小品に

先日徹夜をして翌晩は近頃にない安眠をした。其夜の夢にある岡の上に枝垂櫻が一面に咲いてゐて、其枝が動くと赤い花びらが粉雪のやうに細かくなつて降つて來る。其下で美人と袖ふれ合ふた夢を見た。病人の柄にもない艶な夢を見たものだ。

の如く短文ではあるけれども言文一致體を用ひてゐるのは注目せらるべきであらう。

更に同年四年には「蝶」をものして

空はうらゝかに風はあたゝかで、今日は天上の神様たちの舞踏會のあるといふ日の昼過、

白い蝶と黄な蝶との二つが餘念無く野邊に隱れんぼをして遊んで居る。今度は白い蝶の隱れる番で、白い蝶は百姓家の裏の卯の花垣根に干してある白布の上にちよいと、とまつて靜まつて居ると、黄な蝶はそこらの隅々を探して、釣瓶の中や井の中を見たが何處にも居らんので稍々失望した樣子であつた。忽ち思ひついたかして彼方の垣の隅へ往て、葵の花を上から下へ一々に覗いても矢張こゝにも居らんので、仕方無しにもとの井戸端に歸らうとして、ふと干し布の上の白い蝶を見つけた。

の如く滑かな文によつてユーモアをも漂す事の出來る程な餘裕のある筆遣を見せてゐるのである。ついで發表せられた「酒」(同年六月)を經て十月にものせられた「飯待つ間」の如きは寫生文としてはかなりな成功を收めてゐるものと言ふべきである。その文は

さつき此庭へ三人の子供が來て一匹の仔猫を追ひまはしてつかまへて往つたが彼等はまだ其猫を持て遊んで居ると見えて垣の外に騷ぐ聲が聞える。竹か何かで猫を打つのであるか猫はニヤー〳〵と細い悲しい聲で鳴くすると高ちやんといふ子の聲で「年ちヤんそんなに打つと化けるよ化けるよ」と稍々氣遣はしげにいふ。今年五つになる年ちヤんといふ子は三人の中で一番下であるが「なに化けるものか」と平氣にいつて又強く打てば猫はニヤー

ニヤーといよ〳〵窮した聲である。三人で暫く何か言つて居たが、やがて年ちヤんといふ子の聲で「高ちヤんそんなに打つと化けるよ」と心配さうに言つた。今度は六つになる高ちヤんといふ子が打つて居るのと見える。やゝあつて皆々笑つた。年ちヤんといふ子が猫を抱きあげた樣子で「猫は、猫は、猫は宜しうござい」と大きな聲で呼びながらあちらへ往つてしまつた。

の如く朝飯を食はぬ事にきめてゐる病床の作者が午砲がなつてもまだ出來上らぬ晝飯を待つ間の觀察、卽ち病室から目に見えるわづかな範圍と耳に聞える聲色を基礎として巧みに描寫したものである。この文章にあつて特に注目すべきは末尾に虛子記として載せられてゐる次の言葉であらう。卽ち

子規子より「飯待つ間」の原稿送り來されたる同封中に猫の寫生畫二つあり。一は顏にして、一は尻高く頭低く丸くなりて臥してゐるところなり。

とあるのは虛子の手になつたものであるが、子規が猫の寫生文をものした際に、又一方においてその寫生畫二つをも作るのを忘れなかつた事を物語るものでなければならぬ。

かくて我々は寫生畫から導き出された寫生文の存在を確につかむ事が出來るのみならず、子

規自身が同じ猫を文にも畫にも作つてゐるのによつて文を記すにも畫を書くにも同じ手法を好んで用ひてゐた事を容易に認める事が出來るのである。

「飯待つ間」によつて可成の纒りと進展とを見せた子規の寫生文は根岸草廬記事（明治三十二年十二月）熊手と提灯（同前）ランプの影（三十三年一月）などと精緻な觀察をもととして之に作者の微妙な氣持の動きまで織混ぜた作品にまで展開して行つた事は前に例示した如くである。

四

子規とても最初から言文一致の筆を取つたものではなかつたけれども寫生を唱導して硯友社一派の誇張と粉飾とを却けようとするや「平々淡々のうちに極めて精細に極めて深刻に事實を叙すること」の出來るこの文體に就かないではをられなかつたのであつて、此處に美妙とか紅葉とかの動機とは違つて必然的なものが漂つてゐるのを認めなければならないのである。

寫生を重んじた結果は客觀的な態度を喜び、自己の死をも客觀的に觀察した「墓」とか「死後」などの作も見受けられるけれども、その他の作品は勿論これらの諸作にあつても全然主觀の色彩を塗りつぶすといふよりは寧ろ之をほんのりと匂はす事によつてより優れた寫生文とな

り得てゐるやうに思ふ。

更に子規は寫生を守り、緻密精細な文を遣るにはどうしても言文一致體に落付かねばならない事を確認してからは、小品はもとより小說にも評論にも隨筆にも凡て盡くこの體を用ゐてゐる事は特に注目すべき事柄である。卽ち二葉亭の如きは言文一致體を創始したとは言へ小說に之を試みたに過ぎず文章報國を以て念とした紅葉にしてもはじめて二人女房に試みついで多情多恨にあつては巧みな筆致も見せてはゐるけれども、最後の力作金色夜叉を草するにあたつては再び雅俗折衷體を取り用ひてゐるのを思へば言文一致體をあらゆる場合に使用して之を一般化した功績は當然子規に歸すべきものでなければならないであらう。

しかもその寫生文は虛子・漱石・節などによつて大成せられたのみならず、硯友社文學と對蹠的な立場に立つ自然主義文學の中にその觀察の態度なり描寫の方法に濃淡の差こそあれ永くその色彩を留めてゐたのを思へば、子規の投じた寫生なる一石の描いた波紋の以外にも大きなものだつた事を知りうるのであつて、彼の文章史上における地位は美妙や紅葉の下にあるものではないと言つても過言ではないであらう。

第八章　島崎藤村の文章

一

明治も十九年頃はじめてその誕生を見た言文一致の文章は四迷美妙齋の二先覺者の努力を經、文章報國の念に燃えた紅葉の手を通つて漸くその進路を見出したのであるが、その全く一般化せられるには寫生文を唱導して虛飾とか誇大とかを極度に厭つた正岡子規の出現を待たねばならなかつた。

子規の寫生文はホトトギス一派によつてその成長を續け虛子の「俳諧師」を經、節の「土」、漱石の「猫」に至つて完成の姿を見出されるのであるが、從來の戲作的手法を盡く淸算し去つた態度は又自然主義文學の中に永くその色彩を留める事となつたのである。

藤村は初め詩の世界に沒頭し、明治三十年彼の二十六歲の時若菜集を出したのを端緒としてその翌年「一葉舟」とか「夏草」などをものし更に三十三年には詩集「落梅集」を世に送つてゐる。

明治三十二年小諸義塾の教師として信州に赴任しては、今も千曲川の斷崖に藤村詩碑として刻まれて有名な

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす蘩蔞は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香も知らず
淺くのみ春は霞みて
麥の色はづかに靑し
旅人の群はいくつか

畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

の如き「千曲川旅情の歌」などを口吟んでゐたものであつたが、彼とてもいつまでも韻文の世界にばかり閉籠つてはをらなかつた。この頃から彼は所謂研究をはじめて言文一致や寫生文の運動に動かされたばかりでなく、外國文脈をも巧みに攝取して「千曲川のスケッチ」を筆にしたのである。その題名にスケッチとあるのによつても子規の唱導した寫生が如何に色濃く彼の文章の上に反影してゐるかを知るに難くないのであるが、又直接三宅克巳とか丸山晩霞などの洋畫家の寫生的態度に刺戟せられたことも見逃せないであらう。

て散文へ轉向當初の彼の傾向を窺ひ知る事が出來る。即ち千曲川のスケッチは「詩から小説の形式を擇ぶやうになつた」藤村の所謂研究の所產であつ

○私は今、小諸の城址に近いところの學校で君と同年級な學生を教へて居る。君は斯ういふ山の上への春が奈何に待たれて、そして奈何に短いものであると思ふ。四月の二十日頃に成らなければ、花が咲かない。梅も櫻も李も殆んど同時に開く。城址の懷古園には二十五日に祭があるが、その頃が花の盛りだ。すると、毎年きまりのやうに風雨がやつて來て一時にすべての花を浚つて行つて了ふ。私達の教室は八重櫻の樹で圍繞せられて居て、三週間ばかり前には、丁度花束のやうに密集したやつが教室の窓に近く咲き亂れた。休みの時間に出て見ると、濃い花の影が私達の顏にまで映つた。學生等はその下を遊び廻つて戯れた。殊に小學校から來たての若い生徒と來たら、あつちの樹に隱れたり、こつちの枝につかまつたり、まるで小鳥のやうに。どうだらう、それが最早すつかり初夏の光景に變つて了つた。一週間前私は晝の辨當を食つた後、四五人の學生と一緒に懷古園へ行つて見た。荒廢した、高い石垣の間は、新綠で埋れて居た。（學生の家）

○一雨ごとに溫暖さを增して行く二月の下旬から三月のはじめへかけて櫻、梅の蕾も次第

にふくらみ、北向の雪も漸く溶け、灰色な地には黄色を増して來た。樂しい春雨の降つた後では、濕つた梅の枝が新しい紅味を帶びて見える。長い間雪の下に成つて居た草屋根の青苔も急に活き返る。心地の好い風が吹いて來る。青空の色も次第に濃くなる。あの羊の群でも見るやうな、さま〴〵の形した白い黄ばんだ雪があだかも春の先驅をするやうに、微かな風に送られる。（春の先驅）

などの例にも明かな如く、そこにはあくまで客觀的な寫生的な態度が見受けられるのであり、長短句を巧みに入れ混ぜたり、句讀の打ち方にも細心な苦心の拂はれてゐるばかりでなく、全體として詩的韻致に富むものなる事は、後年の大成を約束づけるものの如くである。

更にこれらの文章にあつては歐文脈の躍動も見逃す事の出來ないものであつて、

○田畠も漸く冬の眠から覺めかけたやうに砂まじりの土の顏を見せる。（暖い雨）

○春雨あがりの朝などに、軒づたいに土壁を匍ふ青い煙を眺めると、好い陽氣に成つて來たとは思ふが、食物の乏しいには閉口する。（山上の春）

○いくら山の上でも、一息に冬の底へ沈んで了はない。（小六月）

○障子を開けると、木の葉は部屋の内までも舞込んで來る。空は晴れて白い雲の見えるや

うな日であつたが、裏の流のところに立つ柳なぞは烈風に吹かれて、髮を洗ふやうに見えた。（落葉の三）

〇隱居は何か思ひ付いたやうに、私達の方を振返つて、白い短い鬚を見せた。（麥畑）

〇舊士族には奇人が多い。時世が彼等を奇人にして了つた。もし君が斯のあたりの士族屋敷の跡を通つて荒廢した土塀、礎ばかり殘つた桑畑なぞを見、離散した多くの家族の可傷しい歷史を聞き、振返つて本町、荒町の方に町人の繁昌を望むなら、『時』の步いた恐るべき足跡を思はずには居られなからう。（古城の初夏）

などの如く擬人法や比喩法を巧みに利用した淸新な文章をあちらこちらに多く見出す事が出來るのである。

二

千曲川のスケッチによつて散文への關心を持ち始めた藤村は翌三十四年には小說「舊主人」をものして新小說に寄せたけれども不幸にも發賣禁止の厄に遇つた。これと前後して出來上つたものに「藁草履」なる短篇がある。この小說には

長野縣、北佐久郡、岩村田町、大字金の手の角にある石が旅人に敎へて言ふ。是より南甲州街道。

なる冒頭の文章から既に歐文脈の攝取せられたのを見受けられるばかりでなく、

山氣は襲ひかゝつて人の背をぞく〳〵させる。見れば樹葉を泄れる月の光が幹を傳つて、流れるやうに地に落ちて居りました。

の如く清新蕭洒な表現も見られるのであり、更にその文の末尾を見るに、

それ、さういふ男です。高慢な心の悲しさには、『自分が惡かつた』と思ひたくない。なんとか言譯を探出して、心の中の恐怖を取消したい。と思迷つて、何故、お隅を打つたのか其が自分にも分らなくなる。『痴め』と源は自分で自分を叱つて『成程、打つたのは己が打つた、女房の命は亭主の命、女房の身體は亭主の身體だ、己のものを己が打つたからとて、何の不思議はねえ。』辯解(いひほど)いて見る。思亂れてはさま〴〵です。源の心は明くなつたり、暗くなつたりしました。

の如く「……です」とか「……ました」とか「……だ」とかで止められたものは勿論、動詞形容詞の終止形止のものまで見られるのは、恰もこれまでに用ひられた結尾形式の展覽を見るか

の感があるであらう。即ち「藁草履」には歐文脈の呼吸の認められるばかりでなく、これまでに試みられた文の終結樣式を盡く採り用ひてゐる點に於て文章史上注目せらるべき作品でなければならないけれども、それだけまた獨自の表現を取る事が出來ず、未だ習作の域を脱しないもののやうにも思はれるのである。

ついで三十七年稿を起し、翌年脱稿した最初の長篇小説「破戒」にいたれば寫生文以來發展してきた客觀描寫の筆を揮つて

〇郊外は收穫の爲に忙しい時節であつた。農夫の群はいづれも小屋を出て、午後の勞働に從事して居た。田の面の稻は最早悉皆刈り乾して、すでに麥さへ播附けたところもあつた。一年の骨折り報酬を收めるのは今だ。雪の來ない内に早く。斯うして千曲川の下流に沿ふ一面の平野は、宛然戰場の光景であつた。

〇寂しい晩秋の空に響いて、また蓮華寺の音が起つた。それは多くの農夫の爲に一日の疲勞を犒ふやうにも、樂しい休息を促すやうにも聞える。まだ野に殘つて働いて居る人々は、いづれも仕事を急ぎ初めた。今は夕靄の群が千曲川の對岸を籠めて高社山一帶の山脈も暗く沈んだ。西の空は急に深い焦茶色に變つたかと思ふと、やがて落ちて行く秋の日が最後

の反射を田の面に投げた。向うに見える杜も、村落も、遠く暮色に包まれて了つたのである。

○何か敬之進は言ひたいことが有つて、其を言ひ得ないで、深い溜息を吐くといふ様子だ。其時はもう百姓も、橇曳も出て行つて了つた。餘念も無く流許で鍋を鳴らして居る主婦、裏口の木戸のところに佇立んで居る子供、この人達より外に二人の談話(はなし)を妨げるものは無かつた。高い天井の下に在るものは、何もかも暗く煤けた色を帶びて、昔の街道の名殘を顯して居る。あちらの柱に草鞋、こちらの柱に干瓢、壁によせて黄な南瓜のいくつか並べてあるは、いかにも町はづれの古い茶屋らしい。土間も廣くて、日あたりに眠る小猫もあつた。寒さの爲に身を竦(すく)め乍ら目を瞑つて居る鷄もあつた。

などの如く地方色を色濃く描出してゐるばかりでなく、

○目に入るものは何もかも――錆を帶びた金色の佛壇、生氣の無い蓮の造花、人の空想を誘ふやうな天界の女人の壁に畫かれた形像(かたち)、すべてそれらのものは過去つた時代の光華(ひかり)と衰頽(おとろへ)とを語るのであつた。

○急に本堂の內部(なか)は闃として、種々の意味ありげな裝飾が一層無言のなかに沈むだやうに

見える。

○猜疑(うたがひ)、恐怖(おそれ)——二六時中忘れることの出來なかつた苦痛(くるしみ)は僅かに胸を離れたのである。

今は鳥のやうに自由だ。

などと歐文脈の巧みな表現の見受けられるのによつても、小說作家として彼の世に認められるに至つた大作だけあつて形式上文脈の一般化に與つて力のあつたものの如くである。けれどもそのうちには猶

○地は日の光の爲に乾き、人は運動の熱の爲に燃えた。

○勝つも負けるも運は是一つにあると、打込む勢は獅子奮迅。

などの舊樣式のぎこちない表現もわづかながらにその影を留めてをり、未だ後年の圓熟しきつた筆致をこゝに見る事は出來ないのである。

三

「春」は明治四十年東京朝日新聞に連載せられたもので、作中青木として現はれる透谷とか岸本と稱へられてゐる藤村とかを中心とする文學界同人の消息を物語つたものであるが、その文

章は「破戒」などよりも一層個性色の鮮かなものとなつてゐるのは見逃しえない事實である。
この作のあちらこちらに英詩の引用せられてゐるのは人の目を引かないではをかないのであるが、
○夕方に湖水の上を飛ぶ螢は、よく彼の部屋の內までも迷つて來た。あの英吉利の湖畔詩人が寂しい山家の娘の歌――丁度、その中に、彼は自分を見出した。
○『細君には御迷惑だらうけれど。』と菅は熱心を顏に顯して言つた。
○橋の下を流れる濁つた水、低く舞ふ鷗、紡つてある船、それから、腰を曲めて船板を洗つて居る男――なにもかも黄昏時の空氣と煙とに包まれて見えた。
○ある時は强い酒の香なぞを嗅いで、僅かに生命の火をかき立てようとした。
○馬はいさましさうに嘶いた。慘憺とした思を傍觀する人々に殘して置いて、馬車は庭の小石の上を軋り乍ら出て行つた。
などの如く歐文脈の巧みに消化せられてゐるものも多いのである。更に
○辻に居る車夫から『奧さん』と言はれて、顏を紅めた頃は未だ無事であつた。岡見の妹の名を賞めて、凉子とは好い名だ、峰なんていふのはありふれて居て面白くない、斯う言

つて笑つた頃の眼は未だ無事であつた。岸本の爲に旅の着物を縫ひながら『私がもし男なら、貴方と御一緒に旅でも何でもするんですけれど——女の身體といふものは左樣思ふやうにいかないことが有るんですから、』と言つた頃の眼は未だ〳〵無事であつた。

○書棚の側にはサツパリとした浴衣を着た足立が居る。地味な絣を着た菅が居る。足立の母親が居る。自分も居る。

○自分故に君も其樣な風に成つたか、と考へると可傷しい、斯う書いてある。……中略……自分も女らしい道を歩みたい、斯う書いてある。……中略……吾等二人、何といふ薄い緣であらう、斯う書いてある。……中略……なにも自分一人が女といふ譯でもなし、斯樣なことも書いてある。斯の心情の解らない人は、假令狂じみてゐると言はうが、何と言はうが、言つても關はない、聞入れもしない、斯う書いてある。『あゝ、わが身はすでに死せるなり、殘るはたゞ君を慕ふ心あるのみ』斯う書いてある。

などと疊みかけ繰返して同じ言葉の書かれてゐるものもあれば、

會葬者は水を手向けて、思ひ〳〵に歸つて行つた。別離を告げて歸る爲に、連中も交る〳〵亡くなつた友達の前に立つた。

などの如く墓標の文字をそのまゝ記して讀者の想像にまかせたのなども凡手でない彼の貫錄を示すに充分である。或は

『捨』

斯う呼び起す母親の聲に驚かされて、岸本は眼を覺ました。四邊は薄暗い。部屋の内には洋燈が細目に點けてある。四月中旬のある曉のことである。

などと呼聲から筆をおこして終にいたつてはじめて時を明かにしたのも面白い筆致である。更に

其日、別れ際に、岸本は自分の持つて居た帛子を勝子にやつて、勝子が持つて居たのを自分の方へ貰つた。勝子のは、すこし汚れて、クシヤ〳〵に成つて居たので、そんな物を取換すのは可羞しくも有り失禮でも有ると思つた樣子であつたが、岸本の方で無理に貰ひ受けた。それが岸本の袂にある。彼はその鼻洟をかんだり涙を拭いたりしたやうな帛子を大事さうに取出して、それを自分の顏に押當てた。そして可懷しい人の肌膚を嗅ぐやうな思をした。

なる叙述は直ちに花袋の「蒲團」の主人公時雄――なつかしい芳子の常に用ひてゐた萌黄唐草の蒲團を引出しては心ゆくばかり女の匂を嗅いだ――を思ひおこさせるものがあり、自然主義作家としての藤村の一面はこゝにも窺ひ得られるのである。

四

更に明治四十二年に着手せられた「家」に至れば、彼の筆力も圓熟を極め、言文一致體の完成の姿ははじめてこゝに見られるやうな感があるのである。

爐邊は廣かつた。其一部分は艶々と光る戸棚や、清潔な板の間で、流許で用意したものは直にそれを爐の方へ運ぶことが出來た。暗い屋根裏からは、煤けた竹筒の自在鍵が釣るしてあつて、その下で夏でも火が燃えた。斯の大きな、古風な、どこか嚴しい屋造の內へ靜かな光線を導くものは、高い明窓で、その小障子の開いたところから靑く透き徹るやうな空が見える。

の如くローカルカラーの豐かなすつきりした表現の見られるばかりでなく、歐文脈もすつかり融和しきつて

○暮れかゝつて來た。屋根を越して來る山の影が、庭にもあり、一段高く斜に見える藏の白壁にもあり、更に高い石垣の上に咲く夕顏南瓜などの棚にもあつた。

○宿へ戻つて復たお種は自分一人を部屋の內に見出した。

○夕立を帶びた雲の群は山の方角を指して松林の上を急いだ。

○曾根が一人で訪ねて來たといふことは、ある目に見えない混雜を三吉の家の內へ持來した。曾根は戶の間隙からでも入つて來て、何時の間にか三吉の前に座つて居る人のやうであつた。

○白い制服を着た看護婦は病室を出たり入つたりして居る。未だお房は子供ながらに出せるだけの精力を出して、小さな頭腦の內部が破壞れつくすまでは休めないかのやうに叫んで居る。――思ひ疲れて居るうちに、三吉は深いところへ陷入るやうに眠つた。

などの如く日本文として目だたないまでに至つてゐる。

更に省略法も巧みに用ひられて、

倒死するとも歸るなと堅く言つてよこしたといふ名倉の父の家へ、果してお雪が歸り得るであらうか。それすら疑問であつた。お雪は入籍したものである。法律上の解決は自分等

の離縁を認めるであらうか。それも覺束なかつた。三吉はある町に住む辯護士の智慧を借りやうかとまで迷つた。蚊屋の內へ入つて考へた。夏の夜は短かゝつた。

の如く詳細なるべき所にはいくらでも筆を惜しまないかはりに、急所でない所は簡單に「夏の夜は短かゝつた」位に片付けてさつさとその進行を渉らせてゐるのも亦巧みと言ふべきである。

○一年たつた。三吉は沈んで考へてばかり居る人ではなかつた。

○紳士風の夏帽子を手に持つて出て行く森彥を送つて間もなく三吉は姉を迎へた。

などの如く筆をはしよつて文の弛緩を防いでゐるのも注目せらるべきであるが、これがため極めて細緻な筆遣の場面の一層ひきたゝせられてゐる事も亦見逃せないであらう。

雪はまだ深く地にあつた。馬車が淺間の麓を廻るにつれて、乘客は互に膝を突合せて震へた。二里ばかり乘つた。馬車を下りて、それから猶山深く入る前に、三吉はある休茶屋の爐邊で凍えた身體を溫めずには居られなかつた。一里半ばかりの間、往來する人も稀だつた。谷々の氾濫した跡は眞白に覆はれて居た。

訪ねて行つた友達は牧野と言つて、邊鄙な山村に住んで居た。ふとしたことから三吉は斯の若い大地主と深く知るやうに成つたのである。そこへ訪ねて行く度に、斯の友達の靜か

な書齋や樹木の多い庭園や、好く整理された耕地など――それを見るのを三吉は樂しみにして居たが、其日に限つて心も沈着かなかつた。主人を始め細君や子供まで集つて廣い古風な奥座敷で話した。斯の溫い家庭の空氣の中で唯三吉は前途のことを思ひ煩つた。事情を打明けて話して見やうと思ひながら、翌日に成つてもついそれを言ひ出す場合が見當らなかつた。

到頭、三吉は言はず仕舞に牧野の家の門を出た。そして、制へがたい落膽と戰ひつゝ、元來た雪道を歸つて行つた。一時間あまり乘合馬車の立場で待つたが、そこには車夫が多勢集つて話したり笑つたりして居た。思はず三吉も喪心した人のやうに笑つた。やがて馬車が出た。沈んだ日光は寒い車の上から彼の眼に映つた。林の間は黄に輝いた。彼は眺め、且つ震へた。

家へ歸つてからも、三吉はさう委しいことを家のものに話して聞かせなかつた。末の子供は炬燵に寄せて寢かしてあつた。暦や錦繪を貼付けた古壁の側には、お房とお菊とがお手玉の音をさせながら遊んで居た。そこいらには、首のちぎれた人形も投出してあつた。三吉は炬燵にあたりながら、姉妹の子供を眺めて、奈何して自分の仕事を完成しやう、奈何

してその間この子供等を養はうと思つた。

お房は――三吉の母に肖て――頬の紅い、快活な性質の娘であつた。丁度牧野から子供へと言つて貰つて來た葡萄ジャムの土産があつた。それをお雪が取出した。お雪は雛でも養ふやうに、二人の子供を前に置いて、そのジャムを嘗めさせるやら、菓子麵包につけて分けて呉れるやらした。

三吉が奈何いふ心の有様で居るか、何事もそんなことは知らないから、お房は機嫌よく、父の傍へ來て、斯樣な歌を歌つて聞かせた。

『兎、兎、そなたの耳は、
　どうしてさう長いぞ――
おらが、母の、若い時の名物で、
　笹の葉ッ子嚥んだれば
　それで耳が長いぞ。』

これはお雪が幼い時分に、南部地方から來た下女とやらに習つた節で、それを自分の娘に教へたのである。お房が得意の歌である。

三吉は力を得た。其晩、牧野へ宛てゝ長い手紙を書いた。

なる一例を見るも如何に「家」の文章に歐文脈が攝取せられ、しかも手際よく咀嚼せられてゐるかを窺ひうると共にすら〳〵と運ばれてゐる藤村の個性味豐かな表現をも味はふ事が出來るであらう。かくて言文一致の一高峰は此處にも見られるものと言ふべく、その一般化普及化に藤村の關與する所も甚だ大なるものがあつたと言はねばならないのである。

藤村の表現には硯友社一派の如き人工的な脂粉の跡が少しも見受けられないばかりか、彼獨特のスタイルを築き上げるにまで至つてゐるのであつて、「家」の如きは明治文壇の最大傑作の一つでなければならないのである。

既に破戒の出た頃、夏目漱石の嘆稱するところとなり「あれは明治の小説として後世に傳ふるに足る傑作なり。金色夜叉抔の類にあらず」(高濱虛子へのはがき)と言はれたり、「破戒讀了。明治の小説として後世に傳ふべき名篇也。金色夜叉の如きは二三十年の後は忘れられて然るべきものなり。破戒は然らず。僕多く小説を讀まず。然し明治の代に小説らしき小説が出たとすれば破戒ならんと思ふ。」(森田草平へのはがき)と言はれてゐるが如く、破戒は新文學の先驅をなすものであるが、この頃からの努力精進の結果は「春」を經て「家」に至り漸く華やかな實を

結んだものとも言ふべく、表現上より之を見るも言文一致の一高峯を此處に見出す事が出來るのであつて、明治文壇の一大金字塔として永く人々に仰がれねばならないのである。

第九章　夏目漱石の文章

一

漱石は子規の流を汲むホトトギス派の俳人として先づ世に知られたが、子規の寫生文の運動に動かされて明治三十八年始めて隨筆とも小說ともつかぬ「我が輩は猫である」を發表して一躍文壇の寵兒となつた。

子規の唱へた寫生文は漱石の「猫」に至つてはじめてその完成の姿を見出したものと言ひうるのであるが、寫生文についての理論も當時の學者中最もよく彼の理解する所であつた。

彼に從へば寫生文家の觀察の態度は「大人が子供を視る態度」であり、「兩親が兒童に對する態度」である。子供は泣いても親の泣かない如く、「寫生文家は泣かずして他の泣くを叙するものである。」これに反して普通の小說家は隣の御孃さんの泣く事をかく時には、當人自身も泣い

て居るのである。「自分が泣きながら泣く人の事を叙述する」のと「我は泣かずして、泣く人を寫す」のとでは大いにその觀察の態度を異にするであらう。

吾が精神を篇中の人物に一途に打ち込んで、其人物になり濟まして、戀を描き愛を描き、もしくは他の情緒を描くのは熱烈なものが出來るかも知れぬが、如何にも餘裕がない作が現れるに相違ない。

と言つたのは、非餘裕派小說を却けたもので、低徊趣味を喜び非人情の世界を好む彼の態度を窺ひ知る事が出來る。

眞を描かうとする自然派などのせつぱつまつた小說に餘裕の見られないのに對して寫生文家の書いたものには何となくゆとりがあり、逼つてをらないために讀んでゐても伸び〳〵した氣がすると言つてゐるのによつても、彼の文章に漂ふ悠揚として逼らぬゆとりの依つて來る所を知りうるであらう。しかもかゝる餘裕ある態度は全く俳句から脫化して來たものであり、「泰西の潮流の漂うて横濱へ到着した輸入品ではな」く純東洋的なものなる事は明かである。

彼は文體の一長一短をも論じて、その小說には柔かい文體を用ひる事が多く、從つて兎も角結びだけは言文一致の樣式にはなつてゐるが、どちらかと言へば文章體漢字假名交りの文體、

若くは漢文脈をひいてゐる文章が好きであると言ひ、「然し乍ら夫は言文一致體などに多く慣れて居てたまに是を讀むのであつて、文章體そのものを特によいと認めて讀むと言ふ意味でもない。」と附加へてゐるのである。彼の文章に漢文脈の濃厚に見られるのもかゝる彼の嗜好によるものであらう。しかも言文一致體はこゝ數年間（大正五年執筆のもの）の中に、官廳の布告などまでに採用せられるに至り、其の擴がつて行く力はかなり盛なやうであるが、これは文章丈でなしに、言葉とか態度とかの變化に並行してゐるものと認めてゐる。

かくて彼の文章はゆとりのある中にしつかりとしたものとなり、草枕とか虞美人草のやうな名文にして平易な古今獨歩の大文字を生むに至つたものと言ふ事が出來る。

二

明治三十八年一月はじめて、ホトトギスに發表せられた「我輩は猫である」にも既に寫實的な態度が見られるのであり、しかもその觀察に逼つた所がないだけに簡明な文章の中にもゆつたりとした餘裕と落着とが見られるのであり、作家としての彼の貫祿を窺ふに足るものがある。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめ〳〵した所でニヤー〳〵泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間と言ふものを見た。然もあとで聞くと、それは書生といふ人間で一番獰惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕まへて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考へもなかつたから別段恐ろしいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハ〳〵した感じが有つた計りである。掌の上で少し落ち附いて書生の顔を見たが、所謂人間といふものの見始めであらう。此の時妙なものだと思つた感じが今でも殘つてゐる。第一毛を以つて裝飾されるべき筈の顏がつる〳〵して丸で藥罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會した事がない。加之顏の眞中が餘りに突起して居る。さうして其穴の中から時々ぷう〳〵と烟を吹く。どうも烟つぽくて實に弱つた。是が人間の呑む烟草といふものである事は漸く此頃知つた。

なる「猫」の冒頭の文を見るもよくこなれた彼の所謂寫生文の特質を具備するものと言ふべくせつぱつまつた感じはどこにも見る事が出事ないのである。

特に猫が臺所で雜煮の餅に食ひついてはみたものの嚙み切れないで取るには取れず困りぬい

てゐるあたりはよく寫實の筆を揮つたものであるが、「最後にからだ全體の重量を椀の底へ落とす樣にして、あぐりと餅の角を一寸許り食ひ込んだ」と猫の餅に食ひついたのを記すのにあたつても、その前に

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着して居る。白狀するが餅といふものは今迄一遍も口に入れた事がない。見るとうまさうにもあるし、又少しは氣味がわるくもある。前足で上にかゝつて居る菜の葉を搔き寄せる。爪を見ると餅の上皮が引き掛かつてねば〳〵する。嗅いで見ると釜の底の飯を御櫃へ移す時の樣な香がする。食はうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰も居ない。お三は暮も春も同じ樣な顏をして羽根をついて居る。子供は奧座敷で「何と仰しやる兎さん」を歌つて居る。食ふとすれば今だ。もし此機をはづすと來年迄は餅といふものの味を知らずに暮らして仕舞はねばならぬ。吾輩は此刹那に猫ながら一の眞理を感得した。「得難き機會は凡ての動物をして好まざる事を敢てせしむ。」吾輩は實を云ふとそんなに雜煮を食ひ度くはないのである。否、椀底の樣子を熟視すればする程氣味惡くなつて、食ふのが厭になつたのである。此時もしお三でも勝手口を開けたなら、奧の子供の足音がこちらへ近附くのを聞き得たなら、吾輩

は惜し氣もなく椀を見棄てたらう。しかも雜煮の事は來年迄念頭に浮ばなかつたらう。所が誰も來ない。いくら躊躇して居ても誰も來ない。早く食はぬか食はぬかと催促される樣な心持ちがする。吾輩は椀の中を覗き込み乍ら、早く誰か來てくれゝばいゝと念じた。矢張り誰も來てくれない。吾輩はとう〳〵雜煮を食はなければならぬ。

の如く餅に對する猫の氣持を長々と記さないではをられなかつたのも彼の低徊趣味の現れでなくて何であらう。

更に猫には歐文脈の巧みな攝取も見受けられるのは「横濱へ到着した輸入品」でなく純東洋趣味に立脚した寫生文を唱導しながらも、作者漱石が西歐文學に對する深い教養を有してゐたのによるものでなければならぬ。卽ち

○吾輩はいつでも彼等の中間に己を容るべき餘地を見出してどうにか、かうにか割り込むのであるが、運惡く子供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。

○僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きら〳〵する柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出づる樣に思はれた。

○赤松の間に二三段の紅を綴つた紅葉は昔の夢の如く散つて、つくばひに近く代る〴〵花

瓣をこぼした紅白の山茶花も殘りなく落ち盡した。三間半の南向の緣側に冬の日脚が傾いて木枯の吹かない日は殆ど稀になつてから、吾輩の晝寢の時間も狹められた樣な氣がする。

などの如く如何にも手についた歐文脈の用ひられてゐるのを見受けるのである。

一方においては又漢文句調のものも應々にして見られるのであるが、彼自らどちらかと言へば漢文句調のものを好むと言つてゐるのによつてもこの流風のかなり色濃く彼の文章中に侵染してゐるのを解するに難くないのである。

〇兎に角あの婦人が急にそんな病氣になつた事を考へると、實に飛花落葉の感慨で胸が一杯になつて、總身の活氣が一度にストライキを起こした樣に元氣がにはかに滅入つて仕舞ひまして只蹌々として踉々といふ形で吾妻橋へきかゝつたのです。

〇鼠はまだ取つた事がないので、一時はお三から放逐論さへ呈出された事もあつたが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云ふ事を知つて居るものだから、吾輩は矢張りのらくらして此家に起臥して居る。此點に就いては、深く主人の恩を感謝すると同時に其の活眼に對して敬服の意を表するに躊躇しない積りである。

などの如きは「猫」における漢文體漢字假名交り體の見本とも言ふべきものであつて、彼の東

洋趣味と漢文に對する素養とから生れ出でたものである。

「猫」もその逼らないゆとりと齒切のよい文章とによつて有名となつたが、三十九年四月ホトトギスに發表しはじめた「坊ちやん」はそのなめらかさにおいて文章上更に一段の進歩を示してゐる。

親讓りの無鐵砲で子供の時から損ばかりして居る。小學校に居る時分學校の二階から飛び降りて一週間程腰を拔かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出來まい。弱蟲やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて歸つて來た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を拔かす奴があるかと云つたから、此次からは拔かさずに飛んで見せますと答へた。

なる冒頭から

其後ある人の周旋で街鐵の技手になつた。月給は二十五圓で家賃は六圓だ。淸は玄關附きの家でなくても至極滿足の樣子であつたが、氣の毒な事には、今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つた。死ぬ前日おれを呼んで坊つちやん後生だから淸が死んだら、坊つちやんの

御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊つちやんの來るのを樂しみに待つて居りますと云つた。だから淸の墓は小日向（こびなた）の養源寺にある。

との結尾に至るまで、いささかの滯りもなくすら〳〵と運ばれてをり、讀者をして一氣に讀み了らせないではをかないのである。こゝに我々は「猫」を經てきた漱石の筆の漸く冴えてきたのを認めなければならないであらう。

三

更に「草枕」は同じ年の九月新小說に發表したものであるが、餘裕派としての彼の面目の最もよくあらはれてゐる作品として注目せらるべきものである。

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時詩が生れて、畫が出來る。

とその卷頭に言つてゐる所によつても明かな如く彼の考へる藝術とは住みにくい世の中を束の間でも住みよくするために存在すべきものであり、藝術家も「人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い」と考へられるのであつた。

「苦しんだり、怒つたり騷いだり泣いたり」の所謂喜怒哀樂は、世のつきものであるが、これを再び芝居や小說で繰り返へしてはやりきれない。俗念を放棄して、非人情の世界に逍遙する事によつて塵界を離れた心持になれるやうな小說がほしい。非常に世にもてはやされた「不如歸」にしても「金色夜叉」にしても共に世間を出る事の出來ないものであり、彼によれば何れも「浮世の勸工場」にあるものだけで用を辨じてゐるものにすぎなかつた。

暫くでも「超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持ちになれ」「すこしの間でも非人情の天地に逍遙したい」との願から漱石の餘裕派の小說は生れ出でたのであつた。餘裕派の小說は非餘裕派の小說の如く舶來の思潮に根ざすものでなく純東洋的な趣味から生れ出でた所に吾人の興味をそゝるものがある。

茫々たる薄墨色の世界を、幾條の銀箭が斜に走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思へば、詩にもなる、句にも詠まれる。有體なる己を忘れ盡して純客

觀に眼をつくる時、始めてわれは畫中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。只降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを氣に掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、畫裡の人にもあらず、依然として市井の一豎子に過ぎぬ。

と言つてゐるのによれば他の動作を觀察するに「大人が子供を視る態度」を以てするばかりでなく、自己を觀察するのにさへ忘我の境に至り純客觀的な態度をとる事によつてはじめてゆとりのある藝術は生れると言ふのである。しかも餘裕は畫や詩において必要であるばかりでなく文章にあつてもその必須の條件であるとは草枕のうちにも語られてゐる。

卽ち草枕の文章は彼の理論をそのまゝ地で行つたもので遍らない餘裕を主眼として作られたものとも言ひうるであらう。

「おい」と聲を掛けたが返事がない。

軒下から奧を覗くと煤けた障子が立て切つてある。向ふ側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から釣るされて、屈託氣にふらり〱と搖れる。下に駄菓子の箱が三つ許り並んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上に、ふくれて居た鷄が驚いて眼を

さます。ク……ク……と騒ぎ出す。敷居の外に土竈（どべつつひ）が、今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてる上に、眞黑な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か、銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから無斷で這入つて、床几の上へ腰を卸した。鷄は羽搏きをして臼から飛び下りる。今度は疊の上へあがつた。障子がしめてなければ奥迄馳けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけこつこと云ふと雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。丸で余を狐か狗の樣に考へてゐるらしい。床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顏で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。

なる峠の茶屋の一節の如きは寫實の妙を得たものであつて、彼の所謂寫生家として如何に漱石がすぐれた天分にめぐまれてゐたかを知りうると共に、明治の文章の行きつく所を示してゐるやうにさへ思はれるのである。

煮え切れない雲が、頭の上へ靠（もた）垂れ懸かつて居たと思つたが、いつのまにか崩れ出して、四方は只雲の海かと怪しまれる中から、しと／＼と春の雨が降り出した。菜の花は疾くに通り過ごして、今は山と山の間を行くのだが、雨の絲が濃かで殆ど霧を欺く位だから、隔

りはどれ程かわからぬ。時々風が來て、高い雲を吹き拂ふとき、薄黒い山の背が右手に見える事がある。何でも谷一つ隔てて向うが脈の走つて居る所らしい。左はすぐ山の裾と見える。深く罩める雨の奥から松らしいものが、ちよく〳〵顔を出す。出すかと思ふと、隱れる。雨が動くのか、木が動くのか、夢が動くのか、何となく不思議な心持ちだ。

路は存外廣くなつて、且平だから、あるくに骨は折れんが、雨具の用意がないので急ぐ。帽子から雨垂れがぽたり〳〵と落つる頃、五六間先から、鈴の音がして、黑い中から、馬子がふうとあらはれた。

「こゝらに休む所はないかね」

「もう十五丁行くと茶屋がありますよ。大分濡れたね」

まだ十五丁かと、振り向いて居るうちに、馬子の姿は影畫の樣に雨につゝまれて、又ふうと消えた。

の如きも寫生のうまみをよく現したものであつて、客觀的な餘裕ある描寫は文章の域を脫して一の風景畫としか思へない程、繪畫的な雅趣に富んでゐるものである。

草枕にはまた歐文脈の攝取によつて

○しばらくは路が平で右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。
○百万本の檜に取り圍まれて、海面を拔く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭ひは中々取れない。
○枝繁き山櫻の葉も花も深い空から落ちた儘なる雨の塊りを、しつぽりと宿して居たが、此時わたる風に足をすくはれて、居たたまれずに、假の住居を、さら／＼と轉げ落ちる。
○草山の向うはすぐ大海原でどゝん／＼と大きな濤が人の世を威嚇かしに來る。

などとその文章に新しみを求めてゐるものもあれば、漢文脈の驅使によつて、

○丹靑は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を淸くうらゝかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑（せきけん）なきも、かく人生を觀じ得る點に於てかく煩惱を解脫するの點に於て、かく淸淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て、――千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸運である。
○逡巡として曇り勝ちなる春の空を、もどかしと許りに吹き拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通

り拔けた前山の一角は、未練もなく晴れ盡して、老嫗の指さす方に巑岏と、あら削りの柱の如く聳えるのが天狗岩ださうだ。

などと「かたさ」のうちに「うまみ」をも漂はせてゐるものも見られるのであつて、明治期におけるあらゆる文脈を手輕にしかも巧みに驅使してゐるものと言ふ事が出來る。

四

四十年六月から十月に亘つて朝日新聞に掲載せられた「虞美人草」にも「草枕」と共に漱石獨特の新文章を示してをり、

○反を打つた中折れの茶の廂の下から深き眉を動かしながら、見上げる頭の上には、微茫なる春の空の、底迄も藍を漂はして、吹けば搖ぐかと怪しまるゝ程柔らかき中に屹然として、どうする氣かと云はぬ許りに叡山が聳えてゐる。

○振り廻した杖の先の盡くる、遙か向ふには、白銀の一筋に眼を射る高野川を閃めかして左右は燃え崩るゝ迄に濃く咲いた菜の花をべつとりと擦り着けた背景には薄紫の遠山を縹緲のあなたに描き出してある。

などの如く繪畫的な手法によつてゆつたりとして逼らぬ文の見られれのも草枕に於けると同様である。更に

紅を彌生に包む晝酣なるに、春を抽んずる紫の濃き一點を、天地の眠れるなかに、鮮やかに滴たらしたるが如き女である。夢の世を夢よりも艶に眺めしむる黑髮を、亂るゝなと疊める鬢の上には、玉虫貝を冴々と菫に刻んで、細き金脚にはつしと打ち込んでゐる。

の如く和文脈の濃厚にして絢爛多彩なものも見受けられるばかりでなく

美しき女の二十を越えて夫なく、空しく一二三を數へて、二十四の今日迄嫁がぬは不思議である。春院徒に更けて、花影欄に酣なるを、遲日早く盡きんとする風情と見て琴を抱いて恨み顏なるは嫁ぎ後れたる世の常の女の習なるに、麈尾に拂ふ折々の空音に、琵琶らしき響を琴柱に聽いて、本來ならぬ音色を興あり氣に樂しむは愈不思議である。

の如くに漢文脈によつて飄々る情趣を漂せたものや

○宗近君は四角な男の名である。

○女は首を傾けてホヽと笑つた。男は怪しき靨のなかに捲き込また儘一寸途方に暮れてゐる。

〇女の聲は靜かなる春風をひやりと斬つた。詩の國に遊んでゐた男は、急に足を外して下界に落ちた。
〇茶緣の疊を境に、二尺を隔てゝ互に顏を見合した時、社會は彼等の傍を遠く立ち退いた
〇「まあ、御坐り遊ばせ」と叮嚀な命令を下した。
などの如く歐文脈の攝取によつて新奇な表現となつてゐるものも多い。
會話の文の如きも
「ハ、、、夫で君は幾歲だつたかな」
「おれは幾歲より、君は幾歲だ」
「僕は分かつてるさ」
「僕だつて分かつてるさ」
「ハ、、、、ハ矢張り隱す了見だと見える」
「隱すものか、ちやんと分つてるよ」
「だから幾歲なんだよ」
「君から先へ云へ」と宗近君は中々動じない。

「僕は二十七さ」と甲野君は雜作もなく言つて退ける。
「さうか、それぢや、僕も二十八だ」
「大分年を取つたものだね」
「冗談を言ふな。たつた一つしか違はんじやないか」
「だから御互にさ。御互に年を取つたと云ふんだ」
「うん御互にか、御互なら勘辨するが、おれ丈ぢや……」
「聞き捨てにならんか。さう氣にする丈まだ若い所もある樣だ」
「そら、坂の途中で邪魔になる。ちよつと退いて遣れ」
の如くユーモアに富んだ齒切のよいものとなつてをり餘裕派の態度のこゝにも作用してゐるのを見逃す事は出來ないのである。
かくの如く眺めるとき、虞美人草はたとへ理窟に走りすぎた失敗の作であつたとしてもその文章にあつては草枕とともに目のさめる樣な絢爛なものとなり得てをり、明治の文章の頂點を示すものとして文章史の上にあつては特筆せらるべきものである。

五

草枕とか虞美人草とかは明治期における最もすぐれた文章の代表たりうるものであるが、そこには文章語としての口語が用ひられてゐるのであつて眞の意味での口頭語的な表現は未だここには見られないのである。卽ち草枕を見ても虞美人草を見ても何處かに文章語的な臭味の漂つてゐる事は蔽ふ事の出來ない事實であり、純粹な口頭語からは餘程遠いものなる事も容易に之を認めうるであらう。

言文一致の運動が叫ばれてより漸次その進展をつゞけてきた明治の文章も、漱石の草枕とか虞美人草において文章語的な表現法としては一時その完成を示したけれども純粹な口頭語的な表現となり眞に平明直截な文章となり了るためには大正の時代を待たねばならなかつたのである。

漱石の作品にあつても大正期に入つてものされた「三四郞」「それから」「門」などに至れば、「草枕」とか「虞美人草」などにおける純藝術派的な色彩を稀薄にして漸次自然派的な態度を持しただけにその表現も亦口頭語的なものとなつてゐるのが見られるのである。

草枕は明治の文學としてその內容形式共に異色あるものであるが、作者自身も餘程自信をもつてゐたものなる事は小宮豐隆、高濱虛子の兩氏へそれ〴〵

〇今度は新小說にかいた。九月一日發行のに草枕と題するものあり。是非讀んで頂戴。こんな小說は天地開闢以來類のないものです。（開闢以來の傑作と誤解してはいけない）

〇野間先生が草枕を評して明治文壇の最大傑作といふて來ました。最大傑作は恐れ入ります。寧ろ最珍作と申す方が適當と思ひます。實際珍といふ事に於ては珍だらうと思ひます。

などと書を寄せてゐるのによつても之を窺ひ得るであらう。

藝術は住み憂い世の中を少しでも住みよくするために存在するものと考へてゐた彼の作品だけに、或は又泣く人を寫すにあたつても自ら泣く事なく極めて冷靜なあくまで客觀的な態度を取らねばならぬと主張した彼の作物だけに、「草枕」は餘裕派としての漱石の特色を最もけざやかに現してゐるものであつて、眞に迫つて人を泣かしめる力には缺ける所があつても、ゆつたりと畫の世界とか詩の世界にでも遊ぶやうな感じを抱かせるものがある。しかもその表現にも亦迫らないゆとりの見られるばかりでなく目もまばゆい程な多彩絢爛さを示してをりいさゝか

の滯をも感ぜしめぬ手輕な筆觸の見受けられるのによつても藤村と共に明治の末年を飾るに最もふさはしい文豪であつたと言はねばならないのである。

しかも漱石の文章は藤村などのそれと較べて又一種獨特な境地を開拓していつたものではあつたけれども、程度の差こそあれ共に明治期にあつては文章語的な表現を揚棄する事の出來なかつたのを思へば眞の意味での口語文は大正期に入つて初めてその完成を告げたものとも言ふべく明治の文章史は言文二途より漸次その一致を見んとするに至る努力精進の過程を物語るものに外ならないのである。

第十章　有島武郎の文章

一

自然主義に對抗して人道主義を豑し雜誌「白樺」の發刊せられた明治の末年を以て有島武郎の作者としての活動は始るものであるが、彼の文名の漸く高くなつたのは大正五六年のことであり、その代表作は何れも其の後數年のうちにものせられたものであつた。

同じ白樺派の志賀直哉などの簡潔な文章に比して、豪華な近代色を盛るがために、著しく絢爛多彩な表現を採り用ひてゐるのは注目せられねばならないであらう。しかしその表現にみられる絢爛さとか多彩さとかは巧みな歐文脈の驅使に俟つものが多いのであつて、明治以降漸次進展してきた歐文脈の表記は彼によつて最も自由に最も滑らにしかも最も手極よく操られたものであり、文章史上の彼の功績も亦こゝに求められねばならないのである。

二

彼が二十九歳の明治三十九年ワシントンにおいて執筆し、白樺創刊と共に四十三年十月號に掲載せられた「かん〳〵蟲」を見るも既に彼の特質はけざやかに感ぜられるのである。卽ち

ドウニパー灣の水は、照り續く八月の熱で煮え立つて、總ての濁つた複色の彩(いろ)は影を潛めモネーの畫に見る樣な、强烈な單色ばかりが、海と空と船と人とを、めまぐるしい迄にあざやかに染めて、其の總てを眞夏の光が、押し包む樣に射(さ)して居る。丁度晝辨當時で太陽は最頂(まうへ)、物の影が煎りつく樣に小さく濃(こ)く、それを見てすらぎら〳〵と眼が痛む程の暑さであつた。

なる冒頭をみるも絢爛多彩眼の痛むのを感ぜずにはゐられないのであるが、一にその歐文表記の巧みさによるものなる事も亦この例によつて明かである。

更にそのうちにはうるささうに人の言葉を聞いてゐるヤコフ・イリイツチを寫すにあたつて

　彼は始めの中こそ一寸熱心に聽いて居たが、忽ちうるさ相な顔で、私の口の開いたり閉ぢたりするのを眺めて、仕舞には、我慢がしきれな相に、私の言葉を奪つてから云つた。

の如くねばりの多い豪華な表現を取り用ひてをり、殊に「私の口の開いたり閉ぢたりするのを眺めて」には、何を言つてゐるかには少しも注意せず只うるささうに眺めてゐる人物を點出し得て妙である。猶

　氣心でかヤコフ・イリイツチの聲がふと淋しくなつたと思つたので、振向いて見ると彼は正面を向いて居た。波の反射が陽炎（かげらふ）の樣にてら／＼と顔から半白の頭を帶めるので、うるさ相に眼をかすめながら、向うの光つた人造石の石垣に圍まれたセミオン會社の船渠（ドツク）を見やつて居る。自分も彼の視線を辿つた。近くでは、日の黄を交へて草綠なのが、遠く見透すと、印度藍を濃く一刷毛（ひとはけ）横になすつた樣な海の色で、それ丈けを引き放したら、寒い感じを起すにちがひないのが、堪へ切れぬ程暑く思へる。殊にケルソン市の岸に立ち並んだ

例のセミオン船渠(ドック)や、其の外雑多な工場のこちたい赤靑白等の色と、眩(めま)ぐるしい對照を爲して、突つ立つた煙突から、白い細い煙が喘(あへ)ぐ樣に眞靑な空に昇るのを見て居ると、遠くが霞んで居るのか、眼が霞み始めたのかわからなくなる。

などの如きは「波の反射」「半白の頭」「白く光つた人造石の石垣」とか、或は「日に黄を交へた草綠」「印度藍」更にまた「工場のこちたい赤靑白等の色」とか「白い細い煙」とかとあだかも色彩の展覽の如くわづらはしい程の色彩を點出してゐるのも近代的な繪模樣の景色を描き出すのに相應しい試みと言はねばならないのである。更にその文體も

何處からか枯れた小枝が漂つて、自分等の足許へ來たのを、ヤコフ・イリイツチは話しながら、私は聞きながら共に眺めて、其の上に居る一匹の甲蟲(かぶとむし)に眼をつけて居たのであつたが、舷(ふなばた)に當る波が折れ返る調子に、くるりとさらつたので、彼が云ふ樣に憐れな甲蟲は水に陷(はま)つて、油をかけた綠玉の樣な雙(さう)の翅を無上(むしやう)に振ひ動かしながら、絶大な海の力に對して、餘り悲慘な抵抗を試みて居るのであつた。

の如くねばりのあるものであり肅洒な比喩や淸新な歐文句調によつて早くも豐麗な表現を示してゐるのである。

大正六年新小説に發表のカインの末裔を見るに自然を描寫するにも
○森も畑も見渡すかぎり眞靑になつて、堀立小屋ばかりが色を變へずに自然をよごしてゐた。
○大濤のやうなうねりを見せた收穫後の畑地は、廣く遠く荒凉として擴がつてゐた。
○から風の幾日も吹きぬいた擧句に雲が靑空をかき亂しはじめた。霙と日の光とが追ひつ追はれつして、やがて何處からともなく雪が降るやうになつた。
などの如く巧妙な擬人法や淸新な比喩によつて歐文句調の華やかな文章が繰廣げられてゐるのである。

更に翌七年の一月號新潮に登載の「小さき者へ」を見るに、
○二つの生命は昏々として死の方へ眠つて行つた。
○暫らくしてかすかな產聲が息氣もつけない緊張の沈默を破つて細く響いた。
○どういふ積りで運命がそんな小康を私たちに與へたかそれは分らない。
などの如く「生命」とか「產聲」とか「運命」などの抽象的なものにまで好んで擬人法を用ひてゐるのも、

表面には十人並みな生活を生活しながら、私の心はやゝともすると突き上げて來る不安にいら〳〵させられた。

の如くなくてもすむ「生活」なる目的語をわざ〳〵添加してゐるのなども共に歐文の句調を巧みに寫しえてゐるものでなければならないのである。更に

私の仕事？　私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまつた。

の如く疑問の形を借り？　までも附する事によつて讀者の注意をこゝに集中させようとしたのなども亦歐文風な表記を踏襲したものに外ならないのである。

更に「或る女」はその前篇二十一までを既に「或る女のグリンプス」として白樺に發表せられたものであるが、その後の新作を合せて世に問はれたのは大正八年の事である。この作品において我々は始めて絢爛多彩目も眩いほどの歐文脈の芳香に醒ふ事が出來るのである。

〇改札の眼の先きで花が咲いたやうに微笑んで見せた。

〇倉地は致命傷を受けた獸のやうに呻いた。

〇乘客一同の視線は綾をなして二人の上に亂れ飛んだ。

〇燒き捨てたやうに古藤の事なんぞは忘れてしまつて、手欄（てすり）に臂をついたまゝ放心して、

晩夏の景色をつゝむ引き締つた空氣に顏をなぶらした。
○愛子も貞世も見違へるやうに美しくなつた。その肉體は細胞の一つ〳〵まで素早く春を嗅ぎつけ、吸收し、飽滿するやうに見えた。

などの例にも明かな如く華麗奔放な筆致はよく淸新な比喩と調和して未だかつて見られなかつた程の歐文脈の完成の姿をはじめてこゝに見出すかの觀があるのである。

彼の創作において目も眩いほどに歐文脈の驅使せられてゐるのも一に彼の英文學的教養のしからしめてゐるものであるが、後の歐文脈陰影の章下に少しく詳細に述べてあるから、この位で筆をはしよつて、こゝでは更に日記とか書簡の文を顧みてみたいのである。

三

日記は自己の內的生活の記錄としてその日その日に長年月にわたつて記されるものであり、しかも私人の覺書たるがために、その文章の如きも統一をかき、修飾味の少ないものとなるのを當然の歸結とするものであるが、そこに我々は飾らないその人の表現に接するの便利を有するものである。從つてまた作者の表現上の特色も不用意のうちにけさやかに現はされてゐるも

のであつてその文章を論ずるにあたつては相當注目せられてしかるべきである。

有島武郎の日記は彼が札幌農學校にゐた明治三十年彼の二十歳の時よりはじまるのであるが冒頭の四月二十七日の條を見るも

四月二十七日。火。晴天。朝六時半起床、出校す。此日大島先生、Harthborn を送らんが爲め室蘭に行かれしを以て化學は休業なりき。又小寺先生の動物と英語と兩方共休みなりしかば、此三時間の中 Base ball をなせり。午後よりも亦 match あり。夕刻に至る。夕刻大島氏歸宅せらる。夜十一時半頃、北二條東一丁目の私立小學校に火事あり。夜十二時就寢。發便なし。買物なし。脇坂氏より受便す。

などの如く極めてその要點のみを摘記してゐるのに過ぎないのであつて何等の修飾をもそこに見出す事の出來ないのみでなく未だ口語文の片影さへも見受けられないのであつて、たゞ覺書たるの條件を充してゐるに止まるものである。

日記は斷續しながら綴られてゐるけれども彼がはじめて口語文の日記を書いたのは三十六年二月五日であつた。即ちその冒頭に

僕はこれから、日記は僕の身に大事件が起つた時のみつける事にしようと思つたが、矢張

りそれは駄目な樣である。日記をつけ慣れた身には、日記を一日怠る事は一日を全生涯から控除した樣な氣がする。それ故これから再び毎日の日記を始め樣と思ふ。今日は其手始である。

と記してゐるのによつても、日記をつけ慣れた作者がその日その日の記錄を書きとゞめておかない事が如何に淋しい氣持を誘ふものかを物語つてゐるばかりでなく、文語文における如きぎこちなさからまぬがれて滑らかに筆の進められてゐる事も認められねばならないであらう。けれどもまだ文語文の簡潔さを淸算しきれなかつた事は

十時頃吉川銀之丞氏が來られた。色々農場の話などして中食を共にした。午後一時半頃歸つた。土地の主なる事件は

(1) 小作料を低減する事

(2) 防風林の貸付を乞ふ事

(3) 市街の住宅選定の事

(4) 全地積の二割を殘すを得る開墾法は採用すべきや否や。

等なりき。

などとその痕跡を留めてゐるのによつても明かである。果して二月八日からは再び前の文語文にかへつてをり、その後も多少口語文にものせられた所もありはするけれども主として文語文を以て貫かれてゐるのは如何に作者が日記を書記するにあたつて簡潔な文語文に心ひかれたかを窺ひうるのみならず慣習の力の如何に偉大なるかを物語つてゐるとも考へられるのである。

しかもその文語句調のうちにも

○彼の面には悲惨なる人生苦闘史の一頁を讀み得るなり。（三十六年五月四日）

○怖るべき明日の日よ。汝は余に死を宣言せんとするか。生を宣言せんとするか。神よ、我が牧者よ！（同年五月七日）

○彼は實に偉大なる或者を有せり。彼は自ら歩む人なり。彼の苦がき杯を味ひ得る力は强し。（三十七年七月二十二日）

○Irving が其輕快の筆に、指して學者の墓場と云ひしも、眼のあたり之を見れば尊さに心ときめくを覺ゆ。塵を蒙りて表紙のみ人の目に觸るゝ幾百冊の書も、血もて成りし頭腦の所産なりと思へ。若し假りに此處にうたゝ寢して深更に至らば、我等は必ず名を擧げて或は人に知られずして世を去りし學者の靈魂が、交る〴〵來りて悲しき物語をすべしなど思

ふ。（三十九年十月二十八日）

などの如く歐文表記のものもあちらこちらに見受けられて、彼の創作における絢爛たる歐文脈の片影はこゝにも認められるのである。更に注目すべきは明治三十九年以後日記をものするにあたつても主として英文をもつてし、極稀に和文を用ひてゐる位であるが、こゝにも我々は作者の英文の教養の高かつたのを知りうると共に、彼の創作においてはじめて自由自在に歐文脈の驅使せられてゐるのも尤な事だと思ふのである。

四

日記の文の純私人的なものなるがために非修飾的であるに反して、書簡の文章は對人關係に制約せられて修飾的、儀禮的となり易いのは自然の勢である。

有島の書簡の文を見るに、明治三十二年頃には十二月二十六日に札幌から兩親に送つたものの如く

拜啓三十二年も愈々殘少く相成申候處、御多繁の間にも皆々樣益々御清適の筈慶賀此事に奉存候。小子亦幸に至て無恙に徂年し得申候段乍憚御休神奉願候。

などと儀禮的な候文のみをものしてゐるけれども農學校卒業の三十四年には足助素一氏宛の手紙の如く

今朝兄の血と涙に滿てる手紙を落手し繰り返して見、今夜も二度三度繰り返して見、僕は喜悅と恐怖と悲觀の不思議に混合せられたる感慨に滿ちた。僕は兄が眞面目に其疑惑を透視せんとし是を忘却せんと務められざるを喜ぶ。第二には兄が其深く暗く疑惑の解釋を僕に求められたるを怖れる。

などと、口語表記のものもはじめて見受けられるのであつて、そこには文語句調の含まれてゐるうちにも歐文脈の採り用ひられてゐるのは注目せらるべきである。

更に三十七年の五月二十二日米國から家族宛に送つた書信には

今日は日曜日です。殊に米國は此の日は靜かな日で汽車も往復の度が減るし、馬車馬も休ませてもらふのが多いし、人も室に籠つて讀書と手紙に時を費す有樣です。

の如く「です」止の形式の中にも「讀書と手紙に時を費す」などと歐文句調の挿入せられてゐるのは見逃せない事實である。

同年七月二十三日フランクフオード精神病院から家族に宛てられたものには

早四日になります。院内の樣子にも追々慣れて、何も不自由は感じません。每週四時間の自由なる休み時間が與へられます。私は今朝九時から午後一時までの休を得ましたので入浴してから、此手紙を書いて居るのであります。雨が降つて居ります。此三階は監督者の合宿で、大きな机の上に古い雜誌の表紙がなくなつたのが五六冊、昨夜私が摘んで來たスウイートピーがコツプに挿してあります。蠅がうるさい程居てあたりが靜かで雨垂れの硝子窓を打つ音が、しづまつたしつとりとした空氣に、單調な響を與へて居ります。

などの如く長短自由な口語文を操つてをり、歐文脈の用法も亦手について來てゐるのは特に注目せらるべきであらう。

書簡の文には儀禮的要素を多分に有してゐるがために、受信者の尊卑によつてその言葉遣にも差異が見られ、從つて結尾樣式の如きも或は「です」とか「ます」となり或は「た」「だ」「である」などとなるのである。

けれども大正三・四年頃までは候文もかなり多く見受けられるのであつて、口語文の優勢となるには大正五・六年を待たねばならなかつたのである。

しかも有島の書簡の中には、

東京も秋です。いくら暑くつても秋です。頭が痛むので午後から獨りで代々木の原に散歩をしましたが、乘馬が二人原の中を乘りまはしてゐるのを見ても秋です。その姿に秋が迫つてゐます。秋になつてしまへばもう觀念します。秋は秋なりにいゝなと思ひます。（書簡二四二）

などの如く秋なる言葉を何度も繰返す事によつてほのかなリズムをさへ感ぜしめるやうなものもあり、

奪ふために與へるのではありません。愛する事がそのまゝ奪ふ事であるが故に、與へる事も從つて奪ふ事になると云ふのです。（書簡三四六）

などと「奪ふ」とか「與へる」とかを交互に錯綜させる事によつて滑らかなうちにも正確な表現となりえてゐるものもあるが、共に歐文脈に負ふ所大なるものあるのはもとよりであつて、彼の創作における巧みな歐文驅使の鋭鋒は、こゝにも作用してゐると考へられるのである。

五

有島の文章は極めて華麗絢爛なものであつて、特に明治以降漸次發展してきた歐文脈は彼に

よつてはじめて飜譯口調の域を脱して自由に驅使せられるまでに至つたものとして文章史上大書せられねばならないのである。「或る女」などに見える豪華奔放目も眩いほどの華麗な筆致はまた表現技巧の一頂點を指示したものと記憶せられねばならないのであるが、同じ白樺派の志賀直哉などの直截簡明な表現と比較するとき我々はそこに著しい差異を見出さずにはをられないのである。卽ち直哉の文章は

○前後はわからない。が其頃に違ひない。私は一人茶の間で寢ころんで居た。其處に父が歸つて來た。父は默つて、袂から菓子の紙包みを出し、茶箪笥の上に置いて出て行つた。私は寢た儘、じろ〱とそれを見てゐた。父が又入つて來た。そして今度は紙包みを戸棚の奧へ仕舞ひ込んで出て行つた。私はむつとした。氣分が急に暗くなつた。（暗夜行路）

○寢坊をして十一時になつた。雪のあしたには珍しい薄曇りの日だ。雪は枝の先にはもう無かつた。太い所、股になつた所に水氣を含んで殘つてゐた。（雪の遠足）

などの例によつても明かな如く無駄のない簡明なものであつて、有島の如くまはりくどい程の技巧をこゝに求める事は困難である。從つて有島におけるが如くねばりのあるものとはちがつ

て、その句切の如きも非常に短い事は例示した所によつても明かである。

即ち有島武郎の文章は同じ白樺派のうちでも志賀直哉などとは對蹠的な立場に立つてゐるものであつて、華麗絢爛な技巧は時に重厚さにおいて缺ける所はあるにせよ、明治以降漸次その發展途上にあつた歐文脈を最も巧みに驅使し、その完成の姿を示してゐる點において文章史上特に注目せられねばならないのである。

第十一章　武者小路實篤の文章

一

武者小路實篤は白樺派の驍將として盛に活躍し新しい形式を文壇におくつた點においては彼の有島武郎と共に文章史上特に注目せられねばならないものである。

言文一致の新文章にその方向を指示したものと言ふべき歐文脈の自由に驅使せられた姿は有島の作品においてはじめて見受けられる所であるが、一方において眞の言文の一致は武者小路によつてその見本を示されたものとも言ひうるのである。

彼の表現は如何にも自由であつて無器用な美とでも言ふべきものを含んでをり、有島と共に歐文脈の匂の甚だ高いばかりでなく、特に口頭語をその儘巧みに文章に寫してゐる點においては、近代文章の當初の目標にはじめて到達したものとも言ふべく、彼の功績の又小さくないのを知る事が出來る。

彼が自然主義一派の所謂平面描寫に心よからず思つてゐた事は「彼の三十の時」において自分は今迄隨分損して來たと思はないではゐられなかつた。彼は自分の內にある自由な創作的エネルギーが日本の自然派の空氣、殊に平面描寫の空氣に、しなびさせられたことを感じないわけにはゆかなかつた。

と言つてゐるのによつても明かであるが、一方自叙傳小說「或る男」にあつてはしかし彼は自然主義の御利益はうけた。言文一致の運動は、彼にも筆をとる自由を與へた。彼は嘘のことを書かないでいゝ、又感じないことを書かないでいゝ、又皮膚のやうに內容とぴつたりした文章をかき得るやうになつたことを彼はよろこんだ。

と語つてゐるのによれば彼とても自然主義の御利益を認めないわけにはゆかなかつたものである。

内容によつて表現を決定してゆかうとする傾向の既に早く自然派のうちに萌しつゝあつた事はその恩恵として武者小路も數へたててゐる所であるが、白樺派に至つて一層その色彩を濃厚ならしめたものの如く、更に新現實派に至つては内容卽形式論とまで發展して行つてゐるのが見られるのである。

「自分の文章」において作者自ら語つてゐる如く武者小路は特に「調子にのつた文章や下品な文章や、空虚な文章」を嫌ひ「内容と一番ぴつたりあつた」表現を用ひようとし、從つて彼は自己の「文章の單調無味を恐れると共にそれを内容の美で光らさなければならない」事を辨へてゐるのである。

しかも彼は「自分のリズム」で「自分の得た眞實」を表現しようとしたのであるが、難解な言葉に緣の遠い彼はつとめて平明な言葉を使はうとし、こゝに口頭語をその儘に用ひ自由率直にして粉飾の少い形式を選ぶに至つたものと考へられるのである。

この内から溢れ出る生命の美を平明な表現を通じてその儘盛らうとする運動は當時の文壇に新しい空氣を吹き込まずにはをかなかつたのであり、彼の功績も亦こゝに求められねばならないであらう。

二

明治四十一年の作「芳子」を見るに

明治四十一年一月二十五日、自分は生れて始めて新派の芝居を見た。舊派の芝居も三つか四つの時見た外は見たことがないが、新派の芝居はこの時始めて見たのである。それも自分から進んで見たのではない。兄が「篤ちやんが見にゆけばもう一ますとつて從妹達をつれて見にゆくからゆかないか」と勸めたからだ。自分は今迄見なかつたのだから餘り見たくはなかつた。しかし見たくないこともなかつた。されば兄にから勸められると行く氣が出て行くことを承知した。かくて同勢十人で見に行つたのである。劇場は東京座だつた。

なる冒頭から如何にも屈託のない話言葉をその儘文章としたものであつて、些か冗長繁雜と思はれるほど平明を重んじてをり、所謂技巧の跡を認めないのである。こゝにはまだ「されば」とか「かくて」などの如く Written language の名殘を留めてゐるものもあるにはあるけれども、又一方にあつては

歸るとすぐ母はどうだつたと聞く、自分は小さいのに驚いたとか、行水をつかはしてゐる

時蛙のやうだつたとか、顏を動かすのを見てゐると可愛くつてならないとか、何處か兄に似、何處か嫂に似てゐるとか母が何度も云つたことを又云ふと、母は嬉しさうにほんとうにさうだね、さうだらう、さうかね、と云ふ。如何にも嬉しさうだ。

などと短い言葉によつて母の嬉しさうな氣持を巧みに寫してゐるものも見られるのである。

更に四月二十一日以後屢日記を引用して芳子の病狀を記錄してゐるのも、彼の表現手法の一つとして以後の作品にあつてもその例を見出すに難くないのである。しかもその中には

○嫂はもう十日もたてば赤坊を生むと云ふ身體だつたから行かなかつた。

○目が覺めてゐる時は時々嫂や母や、世話してゐる女中が抱いておもりするよりも、おもりされてゐた。

○いかなるものも芳子と云ふ產れて八ケ月の赤坊が吾家の人を喜ばすだけ我家の人を喜ばすことは出來ない。實に芳子は吾家の天使である。芳子がたゞ機嫌よくしてゐれば母も機嫌よく、嫂も機嫌がよかつた。芳子は實に或意味では吾家の中心である。母や嫂の精神上の君主である。

などと有島の華麗さは見受けられないけれども素朴のうちにも猶歐文脈の勢力の侮りえない事

を示すものも見受られるのである。

更に四十三年二月完成の「お目出たき人」を見るにこゝにも歐文脈を主とした文章の

○誠に女は男にとつて「永遠の偶像（エターナルアイドール）」である。

○その後自分は鶴のことを空想の倉から出して記憶の倉の中へ入れようと努力した。しかしそれは徒らに淋しい苦しい努力であつて無益（むだ）な努力であつた。時間の手に任せるより仕方がない。

などの如く見受けられるはもとより

美しい、美しい、優しい、優しい、氣高い、氣高い、鶴は女だ！

の如く女を修飾すべき三つの形容詞を必ず二度づゝ反復せしめてゐるのなども技巧を好まない作者の無器用な美しさを示してゐるものとも言ひうるであらう。更にこの作品にあつては特に「自分」を中心として獨り物を言つてゐるのは彼の作品を蔽ふ傾向の早くも現れたものと考へられるのである。

自然派に對して快からず思つてゐた武者小路は、當時の文壇において最も漱石を崇拜し「多くの批評家が夏目さんの惡口を云つてゐるのに腹を立てゝゐた」（「或る男」）程なので白樺の創

刊せられるや「それから」の批評を載せる事とした。

こゝにもわれわれは作者の息切の長い表現に接するのである。卽ち「それから」の著者夏目漱石氏は眞の意味に於ては自分の先生のやうな方である、さうして今の日本の文壇に於て最も大なる人として私かに自分は尊敬してゐる、さうして「それから」は氏の作の內でも最も深い大きいものゝやうに自分は思つてゐる、自分は氏の前に出たら恐らく「それから」を誠に感心して拜讀いたしました、としか云へないであらう。

なる冒頭の一文を見るも、「さうして」によつて接續されること二回、如何に息切の長い表現なるかを知りうると共に兎角四角張り易い批評文においてさへ出來るだけ平明な言葉遣をしようとしてゐる所も亦見逃し得ないであらう。

轉じて大正元年發表の「世間知らず」を見る。そこには一層滑らかな口頭語の用ひられてゐる事は

C子から始めて手紙をもらつたのは五月十五日の夜だつた。よかつたら來たいと云ふ手紙だつた。

知らない女の人が來たいと云ふのは生れて始めてだつたから圖々しい女もゐるものだと思

つた。一方では又ある期待もあつた。しかしその期待は恐らく破られるにちがひないと思つた。しかし逢ふだけは逢つて見よう、さぞ自家の奴はおどろくだらうと思つた。それが又面白くも思へた。さうして來てもいゝが豫期を少しでもつくつて來たら失望するだらうその覺悟で來るならば火木土の內午後一時半迄に來てもらひたいと云つて返事を出した。なる卷頭の文を見るも明かであり、屡C子からの手紙を引用してゐるのも亦既に見られた所と同樣である。更にその中には

自分はC子の手紙に同一のことがいろ〳〵の方面からくりかへしくりかへし書いてあるのを嬉しく思つた。又文章に內容にあふりズムがあるのを嬉しく思つた。

と書いてあるのもよく彼の文章に對する好惡を物語るものとして注目に値するものであるが、實際彼の文章には一つのことをあちらからもこちらからもあらゆる角度からつとめて具體的に縷述しようとする傾向が明かに見受けられるのである。猶

C子にある危險なる性質は皆よりいゝ美しいものの爲に燃やすことが出來る。C子には愛と自負と謙讓な心がある。自分は何時もになくC子を理想的の女に築きあげて勢ひよく家に歸つて自分の室に入らうとした。すると室に母が立つてゐた。そして自分の机の上にC子か

らの手紙が一通のつてゐた。見つかつたなと自分は思つた。
などには歐文脈を豐かに湛へてをり長短自由な表現によつてよく母に感ずかれた前後の事情を物語つてゐるのである。

かくの如く彼は「世間知らず」によつて素朴自由な表現を示し彼獨特の文章を開拓したものであつたが、この傾向は更に「彼の三十の時」(大正三年)に至つて一層進展していつてゐるのが見られるのである。即ち既にその卷頭から

彼は夢を見た。
死んだ嫂が出て來て、彼に彼が人殺しをしたと言つた。彼はそんなことはないと云つた。だが嫂はたしかに彼が人殺しをしたと云つた。彼はいろ〳〵のことを考へて見た。だが人を殺した覺えはなかつた。
「どうしてもない」と云つた。だが彼はさう云つた時何んだか、人を殺したことがあるやうな氣もした。しかしはつきりは思ひ出せなかつた。恐怖が頭をもたげて來た。

の如く同じ「云つた」なる言葉を何度もかまはずに用ひてゐるのも、繰り返しを好む彼の文章の特質を示すものではあるが、作者は寧ろこゝにリズムをさへ求めたものではないかと思はれ

るのである。更に

○その時の淋しさからくらべれば今は幸福だと思つた。彼は自分と同じ目的の火があつちこつちに燃え出したことを感じることが出來たから。

○彼は妻が不平を起して妾の方からは折れないと思つてゐる意志を感じた。生意氣だ、彼はさう思つた。彼は又自分のふり向くことを豫期してゐることを感じて、誰がふり向いてやるものかと思つた。

○作者も内からあふれる勢ひに身動きも出來ない程緊張を強ひられ、征服の慾望と勝利の自覺に胸が燃えてゐることを感じた。若い人でなければかけない、強さがあると思つた。この人には生きることが苦しかつたにちがひないと思つた。この人の最後が思ひやられる氣がした。

などの如く殆んど氣付かれないまでに歐文脈の熟して用ひられてゐるものも亦多く見受けられるのである。

題名から既に「彼が三十の時」とある如くこの作品には彼を中心として獨語的な場面がその大部分を占めてゐるのであるが、かゝる獨り物を言ふやうな書き振りも彼の特色として數へら

れねばならないであらう。

更に大正五年ものされた「姉」を見るに

自分は一人の姉があつた。自分の十五の時に死んだ。死んだ人は懷かしいものだ。殊に自分は姉が生きてゐてくれたらと思ふ。姉は自分よりは六つ上だつた。二十歲の時に理學士の人に嫁して一年たつかたゝない內に死んだ。自分は姉についてあまりよくは知らないが姉が生きてゐたらばと思ふ。姉は小說をよむことが好きだつた。紅葉が好きだつた。その時分僕の家では誰も文學好きはゐなかつた。姉は一人で好きだつた。今生きてゐればきつとよく自分の所に來てくれて、いろ〳〵と話をして行つたらうと思ふ。

の如く滑かな口頭語その儘によつて例の獨語的な表現を示してをり、しかもその中には「死んだ」とか「生きてゐれば」とか「好きだつた」とかを二度も三度もかまはずに用ひてゐるのは一には彼の物の見方にもよるものだけれども、われわれはこゝに無器用の美しさを見出さずにはゐられないのである。

大正八年十二月の「A夫婦」には短篇とは言ふものの對話を以て貫いてゐるものも彼の表現形式の自由さを物語るものである。更に「一休に聞いた話」（大正九年二月）にあつては

一休は君も知つてゐる通り、事實なかつたことを如何にも事實あつたやうに話す男だ。つまり時々嘘をつく。しかしその嘘が反つて本當のことが多い。だから僕の一休から聞いた事實も事實あつたことか、なかつたことか知らない。

などと平明な話言葉によつて特に第二人稱たる「君」に物語つてゐるのであるが、彼によれば時代の隔りなどは問題でなく作者は直ちに一休の言葉なるものを聞くことが出來るのであり、全篇一休の獨語に終つてゐるかの感もあるのである。

更に彼の獨語的な傾向は「ある日の手紙」（大正十年八月）の如く手紙の形式をかりて現れ、遂に「一休の獨白」（大正十三年六月）の如く獨白の形にまで進展せずにはをかなかつた。

大正十二年作の自叙傳小説「或る男」はかゝる傾向の頂點に達したものとも見られるのであるが、その冒頭に

彼のことを一番よく知つてゐるのは恐らく自分であらう。自分は彼のことは殘らず知つてゐるはずだ。自分は彼自身だからである。

と言つてゐるのは自己を寫すにあたつて彼と呼びつとめて客觀的態度をとらうとする作者の用心深さを見うるのである。猶彼とても獨白的表現を以て最上のものとは思はなかつたものの如く

單調に陷るのを恐れてわざ〳〵
「彼のことをかくのはいゝが、御自慢だけはよしてもらひたい」
自慢出來ることがあれば自慢したいが、しかし彼の今迄來た生活は至極無難で、色彩が乏しい。自分は彼のことを今かく氣はあまりしないのだ。
「それなら書かなければいゝぢやないか」
書かないつもりでゐた。始めたのまれた時、自分はすぐ斷つた。處が自分は今一つ他に仕事をしてゐるので、自分はその方に自分の想像力を全部つかはうと思つてゐるので、彼のこと以外に別に面白いものをかくわけにはゆかないのだ。
などの例にも明かな如くわざ〳〵對者の言葉をさへ挿入してゐるのも、例の對話好みの彼の手法の現れに過ぎないけれどもその表現に變化あらしめてゐる事も爭へない事實である。
こゝには全く巧みな言文一致が見受けられ歐文脈も自由に用ひられてゐるばかりでなく
彼は勉强を嫌つた。同じ處を二度よむことは彼にはつまらなく思へた。もう知つてしまつたことをくり返すのは子供の知識慾に反してゐるやうに彼には思へる。彼は從弟と一緒に自分の家の書生に敎へてもらつてゐたが彼は少し勉强するとすぐあきた。書取なぞは殊に

嫌ひだつた。彼の嫌ひな課目は、體操と、圖畫と、作文と、習字と、唱歌だつた。の如く彼の「勉强を嫌つた」事を寫すにあたつてあらゆる方面から之を具體的に說明しないではをられないのなども、既に前にも指摘した所であつて彼の表現上の一つの特質を示すものである。

彼は夜の海の凄さと美しさを金田で知つた。金田では東京へゆく汽船は夜の十二時頃でなければ出なかつた。彼は東京に歸る人を送つたり、自分が東京に歸る時、いやおうなしに眞夜中まで海岸にゐて、汽船のくるのを待たねばならなかつた。彼等子供はその間ぢつとして待つてゐられなかつた。火をもしたり、歌をうたつたり、海に石を投げこんで夜光蟲の光るのを面白がつたりした。

人々は雨の夜には滅多に歸らなかつた。いゝ天氣でなぎの時に歸ることにした。だからさう云ふ夜は星が一ぱい天にちらばつてゐた。そして波は靜かによせては又歸していつた。濱は海よりも暗かつた。しかし舟は一層黑かつた。彼等は舟をあそび場所にして、その上にのつたりおりたりした。

そして汽船のくるのを待つてゐた。夜が段々深くなつて來た。夜露がおりて來た。彼等は

段々ねむくなつて來る。それをさますためになほさわいだ。遠くから汽笛の音がする、まだ舟は岬に姿を見せない。房州の連山があるが、それはあまり高くはなく、星は地平線の近くまで見える。

やがて舟の明りが、見えだす、マストとへさきに青色と赤色のあかりが見える。子供達はよろこぶ、汽笛がなる。ハシケが用意される。歸る人が挨拶する。

「さよなら」

「さよなら」

そして歸る人々は舟にのる。汽船からはさいそくの汽笛がなる。船頭は舟の前に滑棒をおく。そして舟をおす。波のなかにすべつて入つてゆく。波が舟にあたつてくだける。艫の音がして舟は進んでゆく。

「さよなら」

「さよなら」と彼等はよびかはす。

そして家に歸らうとする。夜の浪のよせてはくづれ、くづれてはよす音が彼等をおくる。やがて又汽笛がなり、スクリユが動き出し、そして船の明りが去つてゆく。彼等はそれを

ふり返りながら一種の淋しさをうける。

などには金田の海濱において東京行の汽船を送迎する子供の氣持を描きえてをり、彼の名文として推すに憚らないものであるが、こゝには言文の完全な一致が見られるばかりでなく「汽笛がなる。ハシケが用意される。歸る人が挨拶する。」などときびく〳〵した短い句切によつて送る人送られる人の迫つた氣持を巧みに捕へてゐるものも見受けられるのである。

三

武者小路は單に小説のみでなく感想隨筆の方面にあつても又よく平明な口頭語を使用してをり、獨語風もしくは對話式によつて自由率直な表現を示してゐるのである。

大正元年に執筆の「西洋の文豪」を見るに

自分は西洋の第一流の人のかいた評論を見て自分の同感の出來ない場合にはいろ〳〵考へて見る、さうしてどうしても同感が出來ない時に一種の自信が出來る。少し前までは不安を感じたものだが。自分は西洋の文豪がまだ手をつけない、つけられない問題に手をつけたい。自分達は何時までも西洋人の足あとをついてゆきたくない。西洋人以上の仕事を日

本人の手でしたい。殊に文藝上や直接人生と交渉のある點でしたい。

出來ないことではないやうな氣がする。

などには獨語風のうちに話言葉を巧みに操つてをり、更に大正三年の「尊敬するのは夏目さんだけだ」には

「今の日本の文壇で君の幾分でも尊敬する先輩は誰だ」

「夏目漱石氏だけだ」

「その他は」

「その他の生きてゐる先輩は輕蔑する」

「なぜ夏目さんを尊敬する」

「あの人には普通の人よりはノーブルな神經があるからだ」

の如く感想をかくにも對話にせずにはゐられなかつた所に彼の文章の一般を知りうるのであるが、かゝる傾向も話言葉を尊重し、「皮膚のやうに内容とぴつたりした文章」を書かうとした彼の努力を物語るものでもある。

更に彼の戲曲を見るも、對話とも戲曲ともつかないやうな作品もあつてこゝにも彼の型にと

らはれない自由奔放な形式を見る事が出來る。たとへば彼の「浦島と乙姫」(大正十五年)を見るも、紹介者の言葉について浦島が日本或はその國についての感じを述べるあたりは全く彼の獨壇上であつて堂々七頁の長きにわたつて辨じ立ててゐるのなどは戲曲としての效果はともかく獨白を好む彼の傾向のこゝまで及んでゐるものとして興味のあるものである。

かゝる傾向の頂點を示すものは何と言つても「一休の獨白」(大正十三年)であらう。この作品にあつては

皆さんよくおあつまり下さいました。私が一休と云ふ坊主です。皆さんは私を生き佛のやうにおつしやる。皆さんのおつしやることに噓はないと思ひますから、私も自分で自分を生き佛なのだらうと思つてゐます。云々。

の如く終始獨白を以て一貫してゐるものであるが、戲曲集の間に一つだけこの作品の收められてゐるのによつても、「浦島と乙姫」などの戲曲に見られる獨白の傾向を更に發展せしめたものとも考へられるのである。

歴史劇にあつて「楠木正成」(大正十二年)が藤房に向つて「藤房さん」と呼びかけてゐるのを見ても時代物における會話にさへ如何に豐かに近代色を盛りえてゐるかを推察するに難くな

いのであるが、「日本武尊」（大正五年）を見るも

尊。どうだ之で女に見えるか。

甲。（笑ひながら）まるで女としか見えません。

尊。どうだ、熊襲建兄弟が俺を見て心を動すだらうか。

甲。大丈夫で御座いませう。

尊。それならそろ〳〵出かけるかな。

乙。まだ少しお早いで御座いませう。

尊。まだ早いか。どうだ皆、俺の化けやうはうまいだらう。まづい處があつたら知らしてくれ。

丙。誰が見ても本當の女としか思へません。本常にお美しくゐらつしやいます。

尊。隨分大きな女もあるものと思ふだらう。だが運さいよければ、今夜こそあいつ達を殺してやる。俺の胸も今夜のことを思ふと動悸がする。

などと全くの近代語の使用せられてゐるのを見受けるのである。

小說においても既に話言葉を自由に驅使し時に冗長の憾さへあつたのを思ふとき、對話を中

心として事件を進展せしめて行く戯曲にあつて口頭語の巧みに操られてゐるのに何の不思議もないのである。けれども浦島の獨白の如く劇の效果を減殺しはしないかと思はれるものまで白由に包含せられてゐるのはかへつて彼の表現の素朴さを示してゐると共に、既に小說に於てみられた獨語的な表出法の戯曲にまで及んだものと考へられるのである。

四

以上によつて明かな如く武者小路は調子にのつた文章とか空虛な文章とかを嫌ひ、つとめて內容とぴつたりあつた表現を求め、こゝに眞の意味での言文の一致を將來したものと言ひうるのである。

言文一致は文章として最上のものかどうかは兎も角、近代文章の出發當初の目標であつた。而して明治時代にあつては未だ Written language としての色彩を拭ひ去る事は出來ず、大正期に至つて武者小路の出現と共にはじめてその目的を達成する事が出來たのである。

しかも彼がその表現に話言葉を用ひないではゐられなかつたのは一に彼の物の見方にもよるものであつた。卽ち彼は一つの事象を寫すにあたつても、つとめて之を多方面から眺め、屋冗

長と思はれるほど縷々として述べたてないではをかなかつたのであるが、これがためにも話言葉は是非とも用ひられねばならなかつたのである。

更に彼の文章には獨白的な傾向が強いのであつて近代人の獨り物を言ふ手法も彼によつて創始せられたものとも言ひうるのである。この傾向は特に著しく彼の小説に現れてゐるのであるが、更に進んでは寧ろその效果を殺滅するとも考へられる劇においてさへ長大な獨白を見出しうるのである。

又感想文においてさへわざ〳〵對話の形式を採用ひてゐるのも戯曲とか對話とかを好んで創作した彼として當然考へ出されたものであらう。

かくて武者小路は眞の意味での言文の一致を達成したものとしてその名譽を擔ふのみならず獨白的な手法を創始し素朴自由な表現を示した點においても、當時の文壇に新しい空氣を吹き込まずにはゐなかつたのである。

第十二章　菊池寛の文章

一

菊池寛は芥川などと共に新思潮により所謂テーマ小説を以て文壇にデビューしたものであつたが現今にあつてはいゝ意味での近代日本の作家を代表してゐるものとも言ふべく新聞雜誌に屢文壇の大御所などと敬稱をさへ奉られてゐるのである。

彼は漱石などから流をひく理智主義を宗とするものであつて明朗透徹な理性を根底としてその作品を基き上げてゐるものであり、洗錬した表現よりも寧ろ充實した內容を重んじてゐる點において近代文章の特筆を最もよく具現してゐる作家とも言ひうるであらう。

彼が自然主義作家の所謂「牛の涎」(二葉亭・平凡)の如き冗長な文章から脫却してよく明快直截な表現をとらえてゐるのは明治の新文章の到達點を示してゐるものとも見られるのであつてその內容に近代人の生活感情を盛り得てゐるのと共に讀者の目を奪はないではおかないのである。

彼がよく自然主義の影響をまぬがれ新しい天地を開拓してゆけたのは一に青年時代に三四年の間文學を遠ざかつてゐたためであるとは彼自ら半自叙傳において物語つてゐる所であるが、もしも「その三四年間、文學に熱心だつたら、きつと自然主義の使徒になり、到底文壇に出ることは出來なかつた」（半自叙傳）かも知れないのである。彼が自然主義に親しまなかつた事は、彼をして次の文壇に顏を出し得る要素を蓄積せしめるに充分であつたのである。

彼が「ある批評の立場」（大正九年二月）なる評論において「藝術は表現なり」との說を紹介してゐるのは一見形式を重んじてゐるやうであるけれども最後に

自分は、藝術の能事は表現の盡きて居るとは、思つて居ないので、「藝術は表現なり」と云ふ命題には可なり大きい疑問を持つて居るけれどもかうした批評の立場は無害であり公平であるので一寸紹介した。

とか、更に

この批評に從へば、藝術の形式などは、問題にならなくなつて來る。書かうと思ふことが書けて居れば、それでいゝことになるわけだ。武者小路氏の戯曲やら對話やら分らないものも、立派な藝術品であり得ることが、此批評に依つて肯定せらるゝと思ふ。

と言つてゐるのによつても表現以外の内容的價値を重視してゐるのを看取しうるのであるが、果してまた「文藝作品の內容的價値」なる評論をものにして

芥川氏の「蜜柑」と云ふ小品がある。私は、あの題材を芥川氏から、口頭で聽いたとき、既にある感動に打たれた。

又私の「恩讐の彼方に」と云ふ小說、あの筋書は、ちやんと耶馬溪案內記に載つて居るのであるが、案內記で讀んでも、既にある感動に打たれるだらうと思ふ。

文藝作品の題材の中には、作家がその藝術的表現の魔杖を觸れない裡から、燦として輝く人生の寶石が澤山あると思ふ。

などとも言つてゐるのである。彼が「藝術は表現なり」との定義を便宜踏襲しながらも猶藝術的價値以外の內容的價値を認めないではをられなかつた氣持は最後に

文藝は經國の大事。私はそんな風に考へたい。生活第一、藝術第二。

と言ひ放つてゐる所にも明らかに之を窺ひうるであらう。

二

大正五年九月發表の彼としては最も初期の作品「身投げ救助業」を見るに、

自殺をするに最も簡便な方法は先づ身を投げる事であるらしい。之は統計學者の自殺者表などを見ないでも、少し自殺と云ふことを眞面目に考へた者には氣の付く事である。所が京都にはよい身投げ場所がなかつた。無論鴨川では死ねない、深い所でも三尺位しかない。だからおしゆん傳兵衛は鳥邊山で死んで居る。大抵は縊れて死ぬ。汽車で轢かれるなどと云ふ事も無論なかつた。

の例によつても明らかな如く華麗にして人の目を引くと言ふよりもつゝましやかな中にもゆとりのある表現を採つてゐるのである。此處には漱石などの文に見られる佶屈な文字は全くその影をひそめてをり、平易な語句のみで充分にその用を辨ぜさせてゐるものと言ひうるのである。しかもその中には

○然し、身體の重さを自分で引き受けて水面に飛び降りる刹那には、どんなに覺悟をした自殺者でも悲鳴を擧げる。之は本能的に生を慕ひ死を怖れるうめきである。然しもう何うともする事も出來ない。水烟を立てゝ沈んでから皆一度は浮き上る。その時には助からうとする本能の心より外何もない。手當り次第に水を掴む、水を打つ、あへぐ、うめく、もがく。

〇老婆には驚愕と絶望との外、何も殘つて居なかつた。
〇老婆はそれ以來淋しく、力無く暮して居る。彼女には自殺する力さへなくなつてしまつた。娘は歸りさうにもない。泥のやうに重苦しい日が續いて行く。

などの如く歐文脈の流を汲むものもわづかには認められるけれども、有島における如く之を好んで驅使してゐるとも思はれないやうであり、更に短い句切によつて自殺者の迫つた氣持を現し得てゐるものも見られるけれども之とても既に紅葉などによつて試みられた所なのを思へば初期の菊池寛の文章は素朴簡明にして自然主義作家の冗長さから完全に離脱しきつた所にその史的價値を求められねばならないであらう。

更に大正七年三月文章世界に發表の「勳章を貰ふ話」を見るに、

春が來た。歐洲大戰第二年目の春が來た。凡ての物を破壞し、多くの人類を殺傷して居る戰爭も、春が蘇つて來るの丈は、何うする事も出來なかつた。
戰爭の荒し壞す力よりも、もつと大きい力が、砲彈に碎かれた塹壕のへトンとペトンの割目から綠の芳草となつて萌え始めた。砲戰に頂を削り去られた樺の樹にも、下枝一杯に瑞瑞しい若芽が、芽ぐんで來た。

なるその冒頭の文章によつても、彼の表現の平明さを説明しうるやうである。即ち「春が來た。」の如く極端に短いのは例外としても概して短文から成つてをり、しかも句讀點を非常に多く使用してゐることは常識的な語句を驅使して決して佶屈な言葉を用ひなかつたのと共に彼の文章をして讀み易いものたらしめないではおかなかつたであらう。こゝにも我々は

彼は自ら死を追つた。が、死は容易に彼の要求を、許さなかつたのである。

の如く擬人法の抽象的のもとにまで及んでゐる例を見出しうるけれども、これも既に明治以來屢々用ひられた所であつて事新しく取上げる程のものではないのである。

同年七月號の中央公論に掲載された無名作家の日記は同九月發表の忠直行狀記と共に彼の文壇的地位を確立した點に於て注目すべき作品であるが、その冒頭の文章を見るも

九月十三日

到頭京都へ來た。山野や桑田は、俺が彼等の壓迫に堪らなくなつて、京都へ來たのだと思ふかも知れない。が、何う思はれたつて構ふものか。俺は成る可く、彼等の事を考へないやうにするのだ。

今日初めて、文科の研究室を見た。思の外にいゝ本が澤山ある。蠶が桑の葉を貪るやうに

片端から讀破してやるのだ。研究と云ふ點に於ては、決して東京の連中に負けはしないと

俺はあの研究室を見た時に、全く心丈夫に思つた。

の如く句讀點の非常に多い短い文から成つてをり、しかも常識的な語句の連ねられてゐるがためにに簡明直截な表現をとりえてゐるばかりでなく「蠶が桑の葉を貪るやうに、片端から讀破してやるのだ。」の如く適切な譬喩も見受けられるのである。

四月五日。

『×××』は、第二號を發行した。山野は『邂逅』と云ふ短篇を發表した。俺は又夫を、飛び附くやうにして讀んだ。さう佳作ばかりが、續く譯はないと思つたからである。が、俺の安心は直ぐ裏切られた。

の如きは特に短い句切によつて主人公の切迫感を巧みに讀者に移入しうる點において、彼の表現に於ける美點の最もけざやかに現はれたものと言ふ事が出來る。

更に忠直卿行狀記の如き時代物のうちにもやはり

○家老達も、御父君秀康卿以來の癇癖を知つて居る爲に、たゞ疾風の過ぎるのを待つやうに耳を塞いで、俯伏して居るばかりであつた。

○忠直卿は初花の茶入と、日本樊噲と云ふ美稱とを、自分が何人よりも秀れたる人間であると云ふ、證券として心の裡に銘じた。

○右近の言葉を用いた忠直卿の心の中に、そこに突如として感情の大渦卷が聲を立てゝ流れ始めたのは無論である。

○彼の少年時代からの感情生活は、右近の一言によつて、物の見事に破産してしまつて居た。

などの如く清新な譬喩や歐風な表現をいくつも見出す事が出來るのであつて、彼の文章の初期の特徴をこれらの作品に見出す事が出來るのである。

大正八年一月中央公論に收錄せられた「恩讐の彼方に」を見るに

筑紫の秋は、驛路の宿り每に更けて、雜木の森には櫨赤く爛れ、野には稻黃色に稔り、農家の軒には、此の邊の名物の柿が、眞紅の珠を聯ねて居た。

の如く流麗な自然描寫の跡も見受けられ、

○山國川の水は、其の絕壁に吸ひ寄せられたやうに、此處に慕ひ寄つて、絕壁の裾を洗ひながら、濃綠の色を湛へて、渦卷いて居た。

○洞窟の外には、日が輝き月が照り、雨が降り嵐が荒んだ。が、洞窟の中には、間斷なき槌のみがあつた。
○實之助は、その悲壯な、凄みを帶びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近づくに從つて、玉を打ち碎くやうな鋭い音は、洞壁の周圍にこだまして、實之助の聽覺を、猛然と襲つて來るのであつた。

などと氣のきいた歐風な筆致の認められるばかりでなく、市九郎とお弓との江戸逐電を寫すにあたつても

後には、當年三歳になる三郎兵衞の一子實之助が、父の非業の死も知らず、乳母の懷ろにスヤ〳〵眠つて居るばかりであつた。

の如くそこに眠つて居る實之助のある事を忘れなかつたのは、後の伏線を設けたものとして巧みであり、更に市九郎が鎖渡しの難所に隧道を開鑿せんとする誓願をおこしては難事業に從事するにあたつても

槌を振つて居さへすれば、彼の心には何の雜念も起らなかつた。人を殺した悔恨も、其處には無かつた。

と言つてゐるのも後の

市九郎の健康は、過度の勞働に依つて、痛ましく傷けられて居たが、彼に取つて、夫よりももつと恐ろしい敵が、彼の生命を狙つて居るのであつた。

なる文と共に市九郎と實之助とを結びつけるものとして亦巧みと言ふべきである。

以上眺めた所によつても明かな如く初期の短篇物に見られる彼の文章の特質は素朴簡明にして如何にも讀み易い所に求められるのであつて、しかもその平易さはセンテンスの短いこと句讀點の數多く用ひられてゐること、用語の常識的なことなどから導き出されたものである。

三

轉じて長篇小說を見るに、短篇には見られなかつた程の絢爛さを見出さずにはをられないのであつて、初期の作品におけるが如き素朴さなどはその影をひそめてしまつてゐるのである。

大正九年十一月より大每東日の二大新聞に連載せられた長篇小說「眞珠夫人」を見るも、その冒頭から

汽車が大船を離れた頃から、信一郎の心は、段々烈しくなつて行く焦燥しさで、滿たされ

て居た。國府津迄の、まだ五つも六つもある驛毎に、汽車が小刻に、停車せねばならぬことが、彼の心持を可なり、いら立たせて居るのであつた。

彼は、一刻も早く靜子に、會ひたかつた。そして彼の愛撫に、渴ゑて居る彼女を、思ふさま、いたはつてやりたかつた。時は六月の初であつた。汽車の線路に添うて、潮のやうに起伏して居る山や森の綠は、少年のやうな若々しさを失つて、むつとするやうなあくどさで車窓に迫つて來て居た。たゞ、所々に植付けられたばかりの早苗が、輕いほのぼのとした綠を、初夏の風の下に、漂はせて居るのであつた。

の如くに歐風の文脈を多分に採入れた多彩絢爛なものとなつて來てゐるのであるが、前にも見られたセンテンスの短いこと、句讀點の極めて多いことなどはこの文章にあつても猶けざやかに認められるのであつて、彼の表現をして明確なものたらしめるのに役立つてゐるやうである。

更に歐文脈の

〇此の驛が止まりである列車は、見る〳〵裡に、洗はれたやうに、虛しくなつてしまつた。

〇絕えず吐く、黑煙と、喘いで居るやうな恰好とは、何かのろ臭い生き物のやうな感じを見るに人に與へた。

○藝術と云つたやうなものに、粟粒ほどの理解も持つて居ない父が悲しかつた。
○瑠璃子の心に伸びた空想の翼は、また忽ち半以上切り取られてしまつた。
○夫人の温い薫るやうな呼吸が、信一郎のほてつた頬を、柔かに撫でるごとに、信一郎は身體中が、溶けてしまひさうな魅力を感じた。

などの如くあちらこちらに數多く用ひられてゐるのは、

含羞性(シャイネス)　輕動(ジャン)　蒲團(クツション)　衝動(ショツク)　大評判(センセイショナル)　横顔(プロフアイル)　頭光(ヘツドライト)　西洋料理店(レストラン)
致命的(フエータル)　『許し難いこと(イントレランス)』

などの如く地の文とか會話の文に盛に英語の振假名の用ひられてゐるのと共に彼の表現に明朗さと絢爛さとを與へないではおかなかつたものの如くである。

大正十年五月より婦女界に連載された慈悲心鳥を見るも冒頭に男二人女一人と題して蘆屋處女の傳說を描いてゐるのも、「千年の昔に苦しんだ人間苦の一つを、今も苦しんで居る一人の少女の身の上」をつゞいて寫き出さんとする此の小說の序曲としては如何にも相應しい試みであつて、その文章にあつても、

早春の日がうらゝかに攝津國菟原郡蘆屋の里を照して居る。今から千年も昔の話である。

犬黄楊の垣根が、春の氣を享けて、ほの赤く芽ぐんで居る。その垣根に圍はれて、母と少女の住んで居る小さい家が立つて居る。家の小さい窓の下を生田川が流れて居る。うらゝかな日を受けて、川の水が溫み始めたのだらう、浮いて居る水鳥が、時々春の來たのを欣ぶやうに羽搏きする。その羽に、その水沫に春の日が輝く。

機を織る梭の音が聞える。靜な川の水面を走つて遠くまで聞える。その梭の音を慕うて近づいて行くと、それが犬黄楊の垣に圍まれた小さい家の中から、聞えて來るのが分る。機を織つてゐるのは、蘆屋處女である。一つの眸が鳩のやうに柔しい、下ぶくれの頰が、雪のやうに白い。が、雪のやうに冷たい感じはない、鳩の胸毛のやうに溫かさうだ。顏全體が、薄桃色に匂つて居る。

の如く句切の短い表現のうちにも淸新な言ひ廻しや巧みな比喩によつて初期の作品には決して見られなかつた豐麗な文章を示してゐるのは注目せられねばならないのである。

しかもこの小說には

○荒々しい壯士達の足音が、聞えなくなると、家の內を恐ろしい沈默が、支配してしまふ。娘は泣き伏したまゝ、そのまゝ石に化つたやうに、微動もしない。

○スイスイと、柔かい霞の中に伸びた春の草のやうに無邪氣に生ひ立つた靜子は、生れて最初の煩悶を、身體中で味つたのであつた。

○靜子の心に、不安が黑い凶鳥のやうに、羽ばたきをして、大きな翼を擴げた。

などの如く巧みな比喩もあちらこちらに見受けられるのであつて歐風な表現と共に華麗絢爛なものとなりえてゐるのである。

更に大正十一年四月より東日と大每との二新聞に連載せられた火華を見るに、

○その夜、夜が更けて蒲郡の町に眠られない二つの頭があつた。一つの頭は、海岸の漁師の汚ない家の柱に靠(もた)せられてゐた。他の一つの頭は常磐館の美しい夜具の中に、埋つてゐた。二つの頭とも生れて初めて受けた侮辱のために燃え狂つてゐる。

の如く歐風な表現も見受けられゝば

○惡事の現場を發見せられたやうに、狼狽て取りみだしたおひさの容子を見てから、淳の彼の女に對する疑惑は、墨のやうに濃くなつてしまつた。

○星が眞蒼な空に、磨かれたやうに輝いてゐる夜だつた。

などの如く蕭洒な比喩も見出されるのであるが更に之を强調しては

○書生は、やつぱり貧乏人には吠える犬であつた。

の如き用例をも認めうるのである。

しかもその冒頭を見るも、

東海道の汽車に乗つた人々は、大抵は記憶して居るだらう。東から西へ向ふ時でも、西から東へ向ふ時でも、長い間陸地の單調に飽いたとき、ふと車窓に、小松の茂つた丘陵の間から、青く静な海を見付けた欣びを。一體此の邊は何(ど)の邊(へん)だらうと思ひ、注意してゐると間もなく御油とか蒲郡など云ふ停車場を走り過ぎるだらう。

の如く歐文脈も全く地について有島の文章におけるが如く目障りに感ぜしめずして流麗な筆致を示してゐるばかりでなく、客部を後まはしにしたのも、よくこの文を冗長さからまぬがれしめるのに役立つてゐるものであるが、これなども簡潔を庶幾した彼として巧みな試みだつたと言ふべきである。

更に大正十二年七月より婦女界に連載しはじめられた新珠を見るも、爛絢多彩目もまばゆい程な彼の表現に接するのである。卽ち

○第一の曲目は、ブニヤーニ作『前奏曲(プレリユード)』と『快進曲(アレグロ)』だつた。場内は、聲をひそめた巨

大な呼吸器のやうに、靜かになつた。微妙な韻律が、人々の上に漂ひ始めた。
○堀川は、先刻から燗子の無邪氣に心配する美しさを、享樂してゐた。
○背廣を着た若い青年紳士の審判官のプレイと言ふ聲が水を打つたやうな、緊張さを、コートの周圍に持つて來た。

などと西歐文脈を主とした華かな表現の見られるばかでなく、更に

が、遺作展覽會の華かさは、消えんとし燈火が、一時パツト燃え盛つたやうな華かさに過ぎなかつたのだ。深夜の街を歩くものが、その寂しさに堪へかねて、歌など口ずさむと、その後で却つて、寂しさがはげしく身に迫るやうに、人爲的に篠崎家を賑かさうとした催しが終ると、却つて大風の吹き過ぎた後のやうに、一家は氣の拔けたやうな物寂しさに沈んでしまつた。

の如きは全くむせるやうな芳香を放つ比喩によつて讀者の目を奪はないではおかないのであつて、あまりにも洗錬された彼の筆の冴えを認めないではおられないのである。しかも彼の表現が當初の素朴さを失つて華麗絢爛へと移つて行つたのと共に、漸次短文より長文へと文の構成法を轉換して行つたのも亦當然と見らるべきものであるが、新珠の如きは今までになかつた程

の長文から成るものを含んでゐるのである。

四

轉じて昭和三年五月より文藝春秋に連載しはじめた半自叙傳を見るに我々はこゝにも彼の表現の一面を見出す事が出來るのである。半自叙傳とは大正八年頃迄の彼の前半生の出來事を思ひ出すまゝに書き綴つたものであるが、そこには全く文章語的な口吻は認められないのであつて、我々は純口頭語的な文章に接する事が出來るのである。

私の家は高松藩の藩儒であつたと云へば、體裁はいゝが、恐らく三兩五人扶持と云ふやうな小祿の家であつたに違ひい。それでも、二百坪位の邸であつた。家は六間位であつたらう。

私は少年時代のことは何も書くことはない。私は幼年時代には割合可愛い子供であつたらしい。そのことを云ふといつも妻にひやかされるのであるが、しかし尋常一年生時代女の先生に非常に寵愛された記憶があるし、あるとき道端で熊のは入つた檻を置いてあり、それを多くの子供達が圍んで見てゐた時、その熊の所有主が「お前は可愛い子だから見せて

やらう」と云つたことを記憶してゐる。久米は十八まで美少年であつたと自慢してゐるが恐らくさうであつたかも知れないし、私も十位までは、可愛い子であつたのであらう。私は、十四五歳になり、身體が、發達するに從つて醜くなつた。父に「お前位おとなびた變な顏をしてゐる奴はない」と云はれて、いやな氣持をしたことを覺えてゐる。

なる冒頭の一節をとつてみても如何に彼が文章語から離れて口頭語によらうとしたかがよまれるのである。こゝに我々は白樺派の武者小路一派によつて試みられた純口頭語的な表現の流を認めうると共に、內容に卽した表現をとらんとした作者の意圖を汲むことも餘り難くはないであらう。

菊池寛は表現よりも內容を重んじた點、自然主義の冗長さから脫却してよく明快直截な文を遣つた點において注目せられねばならないばかりでなく、長篇小說にあつては、短篇における如き素朴な表現を放棄して絢爛多彩な文章をものしては、その內容によく近代的想情を盛り得てゐるのと共に、匂ふが如き豐麗なる作品を示してゐる點において近代の小說家を代表してゐるものと言はねばならないのである。

しかも短篇長篇共に餘韻を感ぜられない程よく纒り過ぎた作品となり了つてゐるのは、最も

よく西歐小說の長所を採り入れたものとして彼の努力の跡を認めねばならないのであるが、生活第一藝術第二と藝術價値以外の內容的價値を高唱しながら、その樣式に從つて表現形式に意匠を凝らしていつたのは彼の偉大さを物語るものでなければならないのである。

かくて菊池寛は內容形式兩方面に亙つて最もよく近代の小說作家を代表してゐるものと言ふべく、斯界の第一人者とし屢々文壇の大御所などと尊稱せられるも、たゞにヂャーナリズムの誇張のみではないのである。

第二篇　文脈を中心としての考察

第一章　漢文脈の消長

一

明治大正の六十年間はめざましく國運の伸張した時代として近世史に輝かしい多くの頁を占めてゐるばかりでなく、之を文章史の上に見るも亦著しい進歩發展の跡を認めないではをられないのである。

近代の文章史は舊樣式の混沌たる表記法より出發して言文一致の哺育に轉じ更にこの完成への一筋道を歩んだものに外ならないのであるが、その道程には短かいながらにかなり複雜な變化をも見る事が出來るのであり、日本文章史の中では最も興味ある時期を形造つてゐる。

第一篇に於いては代表的な作家を通じて近代文章の展開相を窺ひ主として縱の觀察を行つたのであるが本篇にあつては和漢洋三文脈の消長を述べる事によつて主として横の考察に移りた

いと思ふのである。

文脈の上より之を見るに和文と漢文との融和は既に久しいものであつて古事記の昔よりいづれの文章にも濃淡の差こそあれ、その陰影を認めないものはないのである。即ち明治までの文章は和漢の二要素の混合の比率如何によつてそれ〴〵その文を特色づけてゐたものに外ならぬのであるが、明治以降歐文脈の流入と共に文章史上嘗て見られなかつた程の甚だしい變化を件ふ事となり、こゝに和漢洋の三文脈を要素として複雜多岐な明治の新文章は導き出されて來たのである。

二

明治の文章史に於ける三つの大きな要素の中、最も力强く全期を通じて脈うつてゐるものは何と言つても漢文脈であつた。

漢文脈と言つても、明治の新時代に漢文その儘の表記法が横行濶歩してゐたのでないことは勿論である。單に漢文様式の漢字假名混り文が行はれたに過ぎないのであるが、その勢には侮り難いものがあり、全期の何れの作品にもその陰を多少とも留めてゐないものは稀な位である。

所謂漢文崩しの文は勢のあつただけにその量も最も多く、その範圍も非常に廣かつたが、この文體を遣つた中で注目すべきものには德富蘇峯・竹越三叉・山路愛山等の民友社派と三宅雪嶺・井上哲次郎・陸羯南等の政教社派とがあつた。

明治の評壇にあつては漢文崩しの勢力が最も強く且つ大きかつたと言はねばならないのであるが、そのうちでも德富蘇峯は老いて猶壯者をしのぐ程の健筆振を見せその文の如きも時と共に移つて行つては、簡勁重厚な風を築上げてゐるのであり、漢文脈の流れは彼の作品において最もけざやかに之を見る事が出來るのである。

明治二十年九月經濟雜誌社から發兌せられた「將來の日本」の如きは既に早く樗牛によつて讃嘆せられた如く、實に「當時にあつては破天荒の文字」だつたのである。その文章は

人ノ恆ニ知ラント欲スル所ノモノ將來ヨリ甚敷モノハアラザル可シ。而シテ殊ニ我日本ノ將來ヨリ甚敷モノハアラズ。何トナレバ現今ノ所謂ル日本ナル者ハ、ノアノ兒孫ガ芳草萋々タルベーベルノ原野ニ於テ天ニ達セントスルノ石塔ヲ築カント企テタル上古ノ文明ヨリ。北狄蠻人ノ繼續者ガ鐵ト電氣トヲ以テ殆ンド地球上ノ表面ヲ一新スル近時ノ文明ニ至ル迄。凡ソ人類ノ記憶ニ存スル時代ノ歷史ヲ以テ此ト比較セント欲スルモ。殆ド其比類ヲ尋

ヌルニ苦ム程ナル一種奇々怪々喜ブ可ク驚ク可キノ時代ナレバ也。

なる緖論の一節を見るも明かな如く漢文崩しを主流とするものであつて、漢文に好んで用ひられる漸層法の見られるばかりでなく、「芳草萋々」とか「北狄蠻人」とか「奇々怪々」とかのしかつめらしい漢語が新らしい言葉と共にあちらこちらに採用ひられてゐるのである。

更に二十六年十二月に出版せられた吉田松蔭を見るに、

國家生存問題の重なる一は、如何にして國民が、其の祖國を愛し、其の祖國を敬し、其の祖國を信じ祖國の爲めには其の勞苦も、其の困難も、其の身體も、其の財産も、即ち其の生命及び之に附屬する一切の事物をも、擧げて之に獻ぐるを辭せざるの精神を養ふ可きかによつて、解決せらる。極言すれば、國家は此の精神の爲めに生存し、此の精神を失墜して、衰頽し、滅亡す。東西古今の歴史、實に其の擧證者たり。固より是を以て、唯一の原因と稱するを得ず。然も重なる原因、玆に在り、主なる原因玆に在り。

の如く、漢文様式特有の同じ言葉を故意に繰返さうとする傾向の見られるばかりでなく、

人に百歳の壽なく、社會に千載の生命なし。流石に社會的經綸の神算鬼工を施したる徳川幕府も定命の外に出づ可らず。二百年の泰平は徳川幕府の賜物なり、而して徳川幕府も亦

た其の泰平の爲めに倒る可き數を擔へり。生産的進步は爭亂の時代と並存せず。天下泰平は武備機關の制度と兩立せず。今や武備機關の整頓は、其の生存と兩立せざる平和を齎らし來れり。而して平和は何物を齎らす。平和は富の使者なり、富は進步せり、非常に進步せり、而して其の富は皆な封建武士以外の富なりき。平和は富の生産を齎らすのみならず亦た富の快樂を齎らせり。富の快樂を齎らすのみならず亦た富の崇拜を齎らせり。封建武士を中心として組織したる社會、焉んぞ此に到りて其の中心點の傾斜せざるを得んや。

の如く對句や繰返しも見られ更にその中には「生産的進步」とか「富の使者」『富の快樂』『中心點の傾斜」などと新しい熟語、歐文風の表現もまゝ見受けられて、佶屈な漢文様式に一脈の淸新味を投げかけてゐるのである。

彼の「嗟呼國民の友生れたり」を見るもその爽快活潑なる筆勢は萬里の長江一瀉して來るが如くであるが、

嗟呼改革の健兒たる諸氏は、或は煩惱の夢に驚かされざる、幽靜なる黃泉に於て安眠し、或は禁殿に於て顧問官となり、元老院に於て評議官となり、或は世襲の爵を賜ひて貴族に列し、皆天恩の隆渥なるに浴し、優游殘年を樂み以て安息することを得たり、然らば則ち

改革彼自身も亦た安息することを得可き乎、曰く、否、改革よ、改革よ、汝は決して安息することを得ざるなり、

の例にも中止法によつて綿々としてつきる事のない長い文章の見られるばかりでなく、そこには歐文脈による新鮮な色彩の織り込まれてゐる事も見逃せないであらう。

かくて漢文脈と言ふも明治の新時代に純然たる漢文表記のものの存在してゐたのでない事は勿論、そこには和文脈なり歐文脈なりの混淆の行はれてゐる事も言ふまでもないのである。即ち明治の新文章はこれ三文脈の融合調和によつて築き上げられたものに外ならないのであり、從つて初期にあつてはともかく後期に至つては純然たる漢文脈のみよりなる作品は殆んど稀と言ふべきである。

或は雜誌「日本」とか「日本及び日本人」などによつて國粹保存主義の勃興以來思想界に重きをなした雪嶺の文「偉人の跡」（明治三十一年）を見るも

副島伯に對しては人多く唐虞三代を聯想したり、唐虞三代の事は頗る詳密を缺き、史實の上よりせば、未開の痕跡往々唾棄すべき行らんも、傳說と共に自然に人の想像に浮び彷彿として眼前に現るゝ無からず、而して先づ思ひ及ぶは伯の人格にして伊尹太公は如何の人

物なるかと問ふ、則ち或る點に於て伯に類せざるやを疑はざる能はず。古傳の如くんば伊尹太公は王佐の材。任重く功大、容易に比擬すべきに非ざるに似たれど、伯と雖も志は其の上に出づるも決して其の下に降らず、一時は全く同樣の位置に在りしと謂ひて妨げなし。の如く純然たる漢文崩しによつてその評論の筆を運ばせてゐるのである。

更に明治四十五年山路愛山のものした「勝海舟を論ず」を見るに

勝氏の人物論は、毎度先輩諸君の論ぜられたる所にて、今さら我等の贅辯を費すに及ばぬことながら、此に手短に我等の心に印象したる所を云ふべし。勝氏の人柄は快晴の天氣の如く、からりと致し居りて少しも陰氣の所なし。着眼は若き時より世界大に廣がり居りて議論は常に時世の要所、大所を捉みたり。他人は室内に呻吟するに勝氏は野外に大聲を發す。殆ど天下を小とし世人を愚とする概あり。

の如く同じく漢文崩しとは言ひながら間々俗語を混用する事によつて非常にくだけた筆致となり、所謂漢文の佶屈さからまぬがれ、しかもその氣品を保つてゐるものとも言ふ事が出來る。

以上の評論界の雄が盡く漢文崩しを主流として之に多少の歐文脈とか幾分の俗語調を交へてその文を遣つてゐる中に在つて楞牛とか桂月とかの同じ評論に筆を染めながらも漢文脈の中に

巧みに優婉な國文脈を織込ませる事によつてその行文に流麗圓滑の趣を加へてゐるのは注目せらるべきである。

樗牛の評論にも勿論小說革新の時機(三十一年三月)に見える如く、

凡そ文學を與へざるの世は則ち是れあり、文學を要めざるの世は則ち是れあらざる也。唯〻夫れ缺けたる所、必ずしも充たさるるものに非ず、往々、事志と違ひ、物其の願に稱はざれば、玆に懊惱煩悶の病を生ず。吾れは思ふ、今の社會は文壇に對して是の病に罹れるに非ざる乎。

吾が見る所を以てすれば、今の文壇は何れの方面に於ても落莫を極めたり。青春の意氣は殆ど消磨し去りて、老衰の死相何處にか現じ來らざる。さながら紅花綠葉の面影は、ゆく春と共に名殘なく、黃茅白葦の秋風に搖落するを眺めて、雁に懷を遣るが如し。

などと純たる漢文崩しのものも見受けられるけれども一方においては學者と文章の如く、

歷史は哲學よりも更に多く文章に待つあるもの也。歷史とは古文書の綴合せの謂に非ず、過去の時代を活けるが如く描寫し、其の精神をさながらに發揮するが本旨なり。是の本旨を遺憾なく達せむには、古文書の蒐集索とより必要ながら、叙述の一段に至つては、詩人

の想像力と文章とに待たざるを得ず。ギボン、マコーレー、カーライル、ランケ、フルード等の著書が世に重きを爲すは、其の文章與つて力あることは言ふまでも無きこと也。我邦の歴史家中には、哲學者に於けるよりも能文の士多けれども、歴史家らしき文章を書き得る人とては極めて少數ならむ。所詮は、事實を取調ぶるをのみ歴史家の本領と心得、想像と文章との他面を閑却したる弊ならむと思はる。

などとくだけた書振りのものの見られるばかりでなく、「月夜の美感に就いて」の如くに美はしき物の例へにも月花とぞ云ふめる。まことに月夜の美感を讃ふるにふさはしき言葉は、この世に幾何もあらさらむ、人はたゞ詩人の筆の短きを恨みとすべきなり。今や秋も末になりて蟲の聲も絶え〳〵なり、人は三秋の月夜を如何に過ごしけむ、試みに過去の情を緬想して吾等と共に月夜の美感を考ふる、亦可ならむ乎。

などと國文脈の多分に加味せられてゐるのは柔らかな筆致を感ぜしめるに充分であるが、こゝにも我々は一方において

世にも哀れは平家とぞ云ふめる。まことにこの一門の盛衰を考ふれば心も言葉もなか〳〵に及ばざりけり。

按ずれば一旦の榮華にふけりて百年の計をおもはず、秋や嵐の吹きすさばむずあした、なほ春の夜の夢おぼろにして、醒めての後は、行手をば流石に浮世と觀じても、先世後代、既に梭をかへたるを如何にすべき。今を昔にかへさむ術も片糸の、よりくづれたる世こそかへすぐ〳〵も是非なけれ。

なる平家雜感の如き哀情切々として迫る純國文をものしうる作者の技量を認める事が出來るのである。

或はまた當時の中學生の文體を半ば一變せしめたとさへ言はれてゐる大町桂月の文を見るに

○實に、人の運は不可思議なる哉。われ年壯なりし時、安藝守となりて、船に乘りて、熊野沖を通りしが、鱸一尾、はからずも船中にとび込めり。これ大いに家を興すの吉兆なりとの事故、雀躍して、自から料理して、舌鼓打つて食ひ、家臣にも、お裾分けしてやりしが、その時は、まさかに、武家に例のなき、太政大臣に上り、外戚となり、數百年來政治の舞臺を獨占したりし藤原氏を投げ出して、代りて、天下の權を握らむとまでは思もかけざりき。（平清盛　明治三十八年）

○「鎌倉や畑の中に月一つ」と正岡子規の詠じけむ、我れ鎌倉に遊びしこと前後幾回なるを

知らず。今でこそ旅館多く、別莊建ち續きて一大熱鬧地を現出したれ、明治二十年頃までは、荒凉たる遺墟なりき。三方、山に圍まれ、一方海に面したるの地、處々に古き社寺あるのみにて、當年の邸跡は畑となり、大佛は寂しげに露に立ち、五山の鐘聲雲に響き、人をして懷古の感に堪へざらしめたり。源頼朝父子三代の覇を唱へし處、北條九代の治を圖りし處、足利の一族の居を構へし處、上杉氏の權を握りし處、前後幾百年、興亡一ならず。雄圖一夢に歸し、鮮血土花を染め出だして碧也。されど普通世に鎌倉時代といふは頼朝が幕府を興してより北條氏が亡ぶるまで、凡そ百五十年間の事也。（鎌倉武士・明治四十二年）

などの如くその評論には漢文脈に幾分の國文脈俗語調をも加味して所謂漢文の佶屈さからまぬがれ我々に親しみ易い筆つきを示してゐるのであるが、中には

○佛敎盛んなるに及びて寺田あり。その寺田だん〳〵增して、平安朝の末には、一寺にて數千の僧兵を養ふだけの領地ありたる也。（源頼朝・明治三十八年）

○範頼はうすのろ也。生かして置いても差支はなけれど、頼朝が富士の卷狩の際、頼朝死せりとの流言を聞きて、政子に向ひて、我れあり安んぜよとの、とんまな失言は、嚴正なる頼朝の氣象、癪にさはつてたまらざる也。云々（同前）

などと、くだけた俗語を多分に採入れながらも今一歩の所で踏みとゞまり、進んで言文一致をものし得なかつたやうなものも見受けられるのである。

桂月が流麗な筆を以てしてもその評論に於いては遂に言文一致によりえなかつたのによつても、如何に評論界が漢文脈を尊重してゐたかを知りうると共に彼が評壇を去つて紀行文をものするに至つても

○ことしは、雨多き年なる哉。春多くふりたり。更に四月の始めに大雪ふりたり。六月に入りて、雹さへ降りたり。この具合にては、梅雨の候は、所謂、虚梅雨なるべしと思ひしあても、外づれて、大いに降る。降らぬ日とて、陰にくもりて、いつ降り出すかもわからず、思ひ切つて散歩も出來ざりしが、一日、うけあひの天氣となりぬ。鬼の來ぬ間の洗濯、この雨あがりにとて、中野あたりさして、ぶら〳〵歩く。（中野あるき・明治四十三年）

○金さへ返せば、鬼も佛。重荷の一部がおりたかと思へば、我心も輕くなり、金なほ餘れるに、家に歸るより早く、さあ來い、何處へでも、伴れて行つてやらうと、次男と三男とをつれて、立ち出でたり。長男は、近く箱根へつれて行きしことあり、學校の都合もあり、殊に、この日、家にあらざりければ、つれさる也。（親馬鹿の旅・明治四十年）

などの如く口頭語を多分に交へながらも猶容易に漢文脈から脱却する事の出來なかつた事情をも推察するに難くないのである。

かくて樗牛とか桂月とかの文壇に關係のあつた人々には國文脈の流入によつて柔かな親しみのある文も見られたけれども評論界一般としては明治の全期を通じて漢文脈を宗としてゐたのであつて、この流風の如何に一般社會に根強い力をもつてゐたかをも知る事が出來るのである。

三

轉じて文壇の方面を見るに、小説の作品においてもかなり後まで漢文脈の認められるのは寧ろ驚くべき程で、この流風の如何に根強く我が文章界に侵染してゐたかを窺ひうるのである。事皆改まる明治の新時代に獨り文章のみ依然として黴の生えた舊樣式そのまゝのものの用ひられてゐるのを歎いて、斷然言文一致の新文章を創始した二葉亭の如きも、一方においては

○父親は舊幕府に仕へて俸祿を食んだ者で有ツたが、幕府倒れて王政古に復り、時津風になびかぬ民草もない明治の御世に成つてからは、舊里靜岡に蟄居して、暫く偸食の民となり、爲すこともなく昨日と送り今日と暮らす內、坐して食へば山も空しの諺に漏れず云々

〈浮雲第二回風變りな戀の初峯入上〉

○庭の一隅に栽ゑ込んだ、十竿ばかりの纖竹の葉を分けて出る月のすゞしさ。月夜見の神の力の測りなくて、斷雲一片の翳だもない蒼空一面にてりわたる清光素色、唯亭々皎々として雫も滴るばかり。初は隣家の隔ての竹垣に遮られて庭の半より這初め、中頃は縁側へ上つて座鋪へ這込み、稗蒔の水に流されては金瀲灔。簷馬の玻璃に透りては玉玲瓏、坐賞の人に影を添へて、孤燈一穗の光を奪ひ、終に間の壁へ這上る。涼風一陣吹到る毎に、ませ籬によろぼひ懸る夕顏の影法師が婆娑として舞ひ出し、さては百合の葉末にすがる露の珠が、忽ち螢と成つて飛迷ふ。〈浮雲第三回、同前下〉

などと間々漢文崩しそのまゝの表出法をとらないではゐられなかつたのによつても、漢文脈の勢力の侮る事の出來なかつたのを知りうると共に、漢學の教養のある著者がたとへ言文一致の新文章を創始したとは言へ、遽かに舊樣式を淸算しきれなかつたのも無理からぬ事と思はれるのである。

妹背貝をものした小波の如きも讀者心得の第三條に「文體は例の言文一致。少し何かかかぶれた所あれども、此作者ならでは斯うは書けず。有り難く拜讀すべき事。」と大見得を切つては

その冒頭に

日本橋から南の方へ二三里、同じ東京府の內ではあるが、馬車の喇叭、初鰹の賣聲も玆には耳珍らしく、十二時の號砲さへ、聾でなくても聞きもらす位な處。然し此頃は此の邊にも鐵道が敷かれ、向うの森蔭にヒユーと云ふ聲、時ならぬ雷を地に轟かせて、物なれぬ藪鶯を驚かすのを、ハテ殺風景な世になつたト、眉を顰める隱者もあるとやら。（春）

などと新鮮な屈託のない文章を示してはゐるものの

吾も可笑いと思つた事、是或は……。

今まで角を出さなかつた疑念の鬼、於是そろそろ跋扈しはじめた。斯う成つて來ると、眼には疑念の網膜、耳には疑念の鼓膜。見に就いて見る事聞く事皆可笑く感じられた。然し只可笑く感じたばかりではすまない。必ず之に伴つて一種不愉快な感情が起る。（夏）

の如く歐文脈のうちに漢文調の織込まれてゐるものも見受けられ、更に

それやこれやで腦はヅキヅキ、——醫者も藥も、陶犬瓦雞。（冬）

の如く全く漢文句調のものも不調和ながらに取入れられてゐるのも亦注目せらるべきであらう。

紅葉は美妙との關係上、彼に對抗せんとして故意に古い表現形式に則り、雅俗折衷體に力をそそいでゐたやうであるが、彼とても美妙以上に西歐文學への深い理解のあつただけに、漸く盛になつてきた言文一致に對して全く無關心である事は出來ずはじめて二人女房にこの體を試み多情多恨に至つては今日一般に廣く用ひられてゐる「……である」止の結尾樣式を完成してゐるのであるが、これらの作品にさへ漢文脈の姿は猶全然影をひそめて了つてはゐないのである。即ち二人女房にあつても

○子を見ること親に如かずと云へど。子を見損ずるも親に如かず。女親はお銀の容色をば。たしかに實價の五倍も買冠つてゐて。お銀ほど美しいものは。世間に二人とは無いものゝやうに想つてゐる。

○猪口を捺したやうな五紋の紗の羽織の。どう疊むでも。鎭を置いても。自體絲が性を失つて。揉めたら些と伸びにくい皺が。最多く裾の邊に髣髴たるを。殊更に折目正しく着做したるが。一心に道を急いだ所爲か。四分五厘ほど拔衣紋になつて。然のみならず背縫が二十三度ばかりも曲つて。御紋の上り藤が風に吹かれてゐる。

などの如く漢文句調を交へたぎこちない口語文も見られるのであり、多情多恨に於てさへ

彼は月給を當の其月暮で十圓の餘裕も無い、が若金力で自由になるものならば、如何なる艱難をしてなりとも、それだけの金額を積むで、再びお類を此世に活したいと念ふ。吁、死は君王の貴きにさへ諂はぬ！　定業は移すべからず。人の死んだのは紙のめら〳〵と焚えて了つたのと同じ事で吁といふ間にもう回復がならぬ。お類は赤土に埋まつて、恁してゐる間に漸々朽つてゆくのであると思へば、情無さも情無し、氣も亂れるばかりに失望が劇くなる。

の如く時に漢文崩しの文章を混へないではをられなかつたのによつても、更に一旦言文一致に筆を染めながら最後の大作金色夜叉をものするにあたつて再び雅俗折衷の體にかへり、しかもその中には

○片側町なる坂町は軒並に鎖して、何處に隙洩る火影も見えず、舊砲兵營の外柵に生茂る群松は颯々の響を作して、其の下道の小暗き空に五位鷺の魂切る聲消えて、夜色愁ふるが如く、正に十一時に垂んとす。

○雨は此時漸く霽れて、軒の玉水絶々に、怪禽鳴過る者兩三聲にして、跡松風の音颯々たり。

の如く漢文脈の表現の見受けられるのを思へば紅葉の作品に如何に根強くこの文體の勢力をもつてゐたかを推察することが出來るのである。

更に文章にも餘裕を必要として子規の唱導した寫生文を大成し、草枕とか虞美人草とかの古今獨歩の大文字を示した漱石の文を見るも、亦漢文脈の勢力の侮る事の出來なかつたのを認めなければならないのである。

兎角に住みにくい「人の世を長閑にし人の心を豐かにする」所に藝術家の使命を見出した漱石は草枕に於て最もけざやかにその理論を地で行きかなりの成功を收めてゐるやうに思はれるのであるが、こゝにも

○住みにくき世の中から、住みにくき煩ひを引き抜いて難有い世界をまのあたりに寫すのが詩であり、畫である。あるは音樂と彫刻である。こまかに云へば寫さないでもよい。只まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落とさぬとも璆鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世を、かく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうららかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人生を觀じ得る

の點に於て、かく淸淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て――千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

○畫であり詩である以上は地面を貰つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲けする了見も起らぬ。只此景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此景色が景色としてのみ、余が心を樂しませつゝあるから苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力は是に於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

などの例に明かな如く疊みかけたり繰り返しを用ひたりしてゐるばかりでなく、多くの漢語を取入れてゐるのによつても、如何に漢文脈が明治の小說界に大きな力を持つてゐたかを知りうるのである。更に時治の文章の頂點を示すものとも思はれる虞美人草を見るも柔らかな和文脈淸新な歐文脈の驅使せられてゐるのと共に、

○花の香さへ重きに過ぐる深き巷に呼び交はしたる男と女の姿が死の底に滅り込む春の影の上に、明らかに躍りあがる。宇宙は二人の宇宙である。脈々三千條の血管を越す、若き

血潮の、寄せ來る心臟の扉は戀と開き戀と閉ぢて、動かざる男女を、躍然と大空裏に描き出してゐる。二人の運命は此危き刹那に定まる。東か西か、微塵だに體を動かせばそれ限りである。呼ぶは只事ではない、呼ばれるのも只事ではない。生死以上の難關を互の間に控へて、驀然たる爆發物が抛げ出されるか、抛げ出すか、動かざる二人の身體は二塊の薇である。

〇金は色の純にして濃きものである。富貴を愛するものは必ず此色を好む。榮譽を冀ふものは必ず此色を選む。盛名を致すものは必ず此色を飾る。磁石の鐵を吸ふ如く、此色は凡ての黑き頭を吸ふ。此色の前に平身せざるものは彈力なき護謨である。一個の人として世間に通用せぬ。小野さんはいゝ色だと思つた。

などの如く漢文脈の攝取によつて力強いなめらかな文章となり得てゐるものもあるのである。

漱石の文章には柔らかな國文脈や淸新な歐文脈の含まれてゐるばかりでなく、漢文脈の多分に取入れられてゐるのは、彼が西歐文學を專攻しながら、かへつて東洋的なものに心をひかれ、その藏書目錄にも多くの漢籍の見受けられるのによつても、彼の敎養の程度を窺ひ知る事が出來る。漱石は小說の內容には勿論、その表現にまで餘裕のある逼らないものを必要とし、所謂

餘裕派として自然主義の隆盛なる時にあつて、悠々自適文壇を睥睨したのも痛快ではあるが、「餘裕」なる言葉の「泰西の潮流に漂うて横濱に到着した輸入品ではなく」俳句から脱化した純東洋的な產物なるを思ふとき、漱石の文に漢文句調のかなり力強く脈打つてゐる事をも容易に推察することが出來るであらう。しかも彼は文體の一長一短を論じて自らの小說には柔かい文體を用ひる事が多く、從つて兎も角結びだけは言文一致の樣式にはなつてゐるけれども、どちらかと云へば漢文假名交りの文體とか漢文脈をひいてゐる文章が好きであると言つてゐるのによれば、漢文脈に對する彼の愛著の程を知り得ると共に、この文脈の特に力強く彼の作品に働きかけてゐる理由をも窺ふ事が出來るやうである。

四

明治の新時代にあつては既に早く淸算せられたかの如く思はれる漢文脈は、かなり强く明治の小說界にも作用してゐるのであつて、一見飜譯の文章らしく思はれる作品の中にさへ、その譯語として多くの漢語の用ひられてゐるのを見れば、明治の文壇における漢文派の勢力の侮ることの出來なかつた事を知りうるのであるが、更に評壇にあつては漢文崩しは殆んど全分野を

占め、しかも明治の全期を通じてこの文體によつてゐたのを見れば近代文章史における漢文脈の勢もかなり大きなものだつたとも言ひうるのであり、この流風の消長を度外視しては到底近代の文章を論ずる事は出來ないのである。

第二章　國文脈の系統

一

明治十年の末葉から廿年の初頭にかけて祖國日本は西歐崇拜の念の極度に高揚せられた時であるが、その渦中にうごめきながらも既に反動的に國粹保存の運動も現はれてをり、新しい國文學者大和田建樹・落合直文などの努力の結果はこゝに漸く日本文學を顧るものも少くないやうになつたのである。しかも彼等二先覺者は古典を尊重研究したばかりでなく、自らもその形式を古典にかり新しい想情を盛つて華麗な作品を多く發表した。中には小說らしくまとまつた可憐な作さへ見受けられるのであるが、この文體は門下生桂月をはじめ雨江羽衣などの人々によつて繼承發展させられてをり、世に美文とか新國文とか言はれてゐるのはこの流を指すもの

に外ならぬのである。

落合直文はつとに短歌の革新を叫び自らも

櫻花しばしは散るなゆく水に痩せし二人の影うつし見む（大町桂月と小金井に物して）

父君よ今朝は如何にと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

などの如く新しい境地を詠出してゐるばかりでなく新體詩をものしては、

夜もやうやうにあけはなれ
心もなにかありあけの
月のひかりの影おちて
庭のやり水おとすごし
少女は寺をたちいでゝ
まだものくらき杉むらを
たどりてゆけば遠かたに
きつねの聲もきこゆなり

などの如く七五調の平明流麗な佳作を示して流石は國文學者たる貫錄を示してゐるのである

が、更に

○後を顧みれば、龜山空に聳え、前を望めば、海原雲に連れり。北の方には平四郎岬、唐人濱、外の濱など、おもしろき所見え、南の方には末濱、鵠島、佛磯、長浦、鰐浦など、をかしき所あまた見ゆ。東南の方には小豆島、鷺島、夫婦島など、波の上に浮び、東北の方には、あまの苫屋立ちならび、松青く砂白き所、風光明媚、畫よりもうるはし。（四愛双）

などと滑かにして平明な表現のうちに小説めいた内容をもつた所謂美文をも作つてゐるのはその流派のかなり力強く後の作家にも響いてゐる點において注目せらるべきものである。

直文の唱導した美文は彼の門下生たる大町桂月鹽井雨江武島羽衣などによつて一層その氣勢を添へられたのであるが、一方鷗外とか文學界同人の寄與をも亦見逃す事は出來ないのである。

鹽井雨江とか武島羽衣の如きには

○をりふしは、餘念なげにうちながめて、いつしか歩みを忘れたる如く、たゝずめば、やゝ行き過ぎたる牛の、主をうながすか、ふりかへりて、一聲、二聲、鳴きてよぶに驚かされて、ひたはしりに走りよるとはすれど、やがて、また、おくれがちなる袖、何に引かゝろ

ものならむ。招く尾花や、すがる白露、いづれ面白き秋の野邊。（ゆく水・雨江）

○余が歸りゆく路傍の田家には、はや三々五々として、燈火のかげほのめきみえぬ、折すごさじと鳴きいでたる蛙は穂のへをわたるそよ風に、聲打なびけて、一しほ夕ぐれの哀れをそへたり（霧分衣・羽衣）

などの例に見える如く、散文詩とも言はれる程な調子のいゝ滑らかな文章も見受けられて美文の一つの特色をこゝに見出しうるのであるが、羽衣の作品には、

宿のあるじが鼻うごめかして、いと誇りかに、語りしても理なり。近く、總房の山々を初めとして、遠くは、甲信野州の岑嶺まで、ひとしく雙眸のうちに集りて、渺瀰たる保田灣の烟波、只こゝもとに寄りくる日本寺の風光には、物うかりし旅の疲れも、いつしか名殘なう忘れはてぬ。（霧分衣）

の如く幾分の漢文句調を混へたものも見受けられるのである。

更に大町桂月は最も美文に力をそゝぎ古塚・病院・あだ形見・かた袖・須磨の一夜・鐵槌・風流鴨・畫ける美人などの小說めいた秀れた作品をも示してゐるのであるが、その文章には

○仰げば高き金剛、葛城の二山、天外に積翠を横へ、一條の大和川、平野の中に銀蛇を走

らすなど、なれにし故郷の山川の景色ながむるも、今宵ばかりかと思へば、何となくなつかしき心地す。（かた袖）

〇夜更けて凪全く死にたり。遠寺の鐘聲、烟霧の外に沈みて、人跡絶えたる白砂青松の間のしづけさは、梢より落つる露の聽くに聲あるばかりなり。（須磨の一夜）

などの例に見える如く漢文脈を攝取する事によつて、やはらかに過ぎて間々弛緩せんとする和文脈を引き締めてゐる事は既に第一章に於て述べた如くである。桂月は優婉な國文脈に配するに力強い漢文句調を以てして兎角弛みがちな美文を引締めてゐるばかりでなく、雨江とか羽衣よりも調子の高い文章をものした點において注目せられねばならないであらう。

二

鷗外は美文と同じ表現形式をとつて直文の運動に氣勢を添へたのであるが、彼が如何に國文脈の文章を好んでゐたかは、言文一致の盛に用ひられるやうになつたにも拘らず、四十二年頃までも依然としてこの文脈を守つてゐたのによつても之を知りうるのであるが、國文脈を宗とした殿の作者と見るべき一葉のたけくらべを評して

われは縱令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでもこの人にまことの詩人といふ稱をおくるを惜まざるなり

と絶大な讃辭を贈つてゐるのによつても亦之を推察するに難くないのである。

鷗外の文をみるに、二十三年一月國民の友に掲げた「舞姬」にしても、同年八月しがらみ草紙に載せた「うたかたの記」にしても、或はその翌年二十四年一月に新著百種に收めた「文づかひ」にしても

○今この處を過ぎむとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、聲を呑みつゝ泣くひとりの少女(をとめ)あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髮の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず(舞姬)

○先に立ちたるは、かち色の髮のそゝけたるを厭はず、幅廣き襟飾斜に結びたるさま、誰が目にも、ところの美術諸生と見ゆるなるべし。立ち止まりて、後なる色黑き小男に向ひ、「こゝなり」といひて、戸口をあけつ。(うたかたの記)

○すこし引下がりて白き駒控へたる少女、わが目がねはしばしこれに留まりぬ。鋼鐵いろの馬のり衣裾長に着て、白き薄ぎぬ卷きたる黑帽子を被りし身の構けだかく、今かなたの

森蔭より、むら／＼と打出でたる獵兵のいさましさ見むとて人々騒げどかへりみぬさま心憎し。（文づかひ）

などの如く流麗にして典雅な美文調のものを示してゐるのであるが、かゝる表現形式は明治四十二年のヰタ・セクスアリスに至つて

金井湛君は哲學が、職業である。哲學者といふ概念には、何か書物を書いてゐると云ふことが伴ふ。金井君は哲學が職業である癖に、なんにも書物を書いてゐない。文科大學を卒業するときには、外道哲學とSokrates 前の希臘哲學との比較的研究とか云ふ題で、餘程へんなものを書いたさうだ。それからと云ふものは、なんにも書かない。

の如く、はじめて言文一致に轉換する迄永く彼によつて好んで用ひられてゐたのである。

美文はまた一方文學界の人々によつて發展せしめられたのであるが、彼等は大町桂月などの國文脈を宗としたのに對して多分に歐文脈を攝取してゐる所にその特徴を見出されるであらう。即ち北村透谷の文を見るも

鴉こそをかしきものなれ。わが山庵の窓近く下り立ちて我をながし目に見やりたるのち、

追へども去らず、叱すれども驚かず、やゝともすれば、脚を立て首を揚げて、飛去らんとする景色を見すれども、わが害心なきを知ればにや、ただちよろ〳〵と歩むのみ。（秋窓雜記）

の如き純國文脈のものも見られる一方において、

○反動は愛山生を載せて走れり。而して今や愛山生は反動を載せて走らんとす。（人生に相渉るとは何の謂ぞ）

○吾人は記憶す、人間は戰ふ爲に生れたるを。戰ふは戰ふ爲に戰ふにあらずして戰ふべきものあるが故に戰ふものなるを（同前）

○女性は感情の動物なれば、愛するよりも愛せらるゝが故に愛すること多きなり。愛を仕向けるよりも愛に酬ゆるこそ其の正當の地位なれ。（厭世詩家と女性）

などの如く歐文脈の流入によつて甚しく新しみを求めてゐるものもあちらこちらに見受けられるのである。

更に同じ文學界の平田禿木の作品を見るに、透谷よりも一層歐文化した表現を取つてゐるのは注目せらるべきである。卽ち

○木のもとの一むらに、一輪の哀れなる花咲きそめけり、いみじうあえかなる姿して、なさけの溢るゝばかりなりければ、鶯のふところれを見て、いとゞ堪へがたう、やるかたもなき心の思ひの、哀れにも音にいでける、こを知るや知らずや、花はいらへだにせず、たゞひとしづくの露を葉にこぼして、かよわき枝力なくたれ、下なる大なる石の上に、寂しき影をうつしけるのみ（スミルナの花・明治二十七年）

なる一例にも明らかな如く透谷の文章よりも更に多くの歐文脈を取入れる事によつて清新華耀なるものとなつてゐるのは見逃せないであらう。

かくて同じ美文の中にも桂月雨江の如く國文脈を宗とするものと、透谷禿木の如くに歐文脈を攝取しようとするものとの二派に分れてゐるのであるが、此處にもわれわれは明治の新時代に純然たる國文脈のみよりなる文章を抽出する事の困難さを知りうるばかりでなく、明治の新文章の和漢洋三文體の融合調和の上に基き上げられてゐる所以をも知るに難くないのである。

三

轉じて文壇方面を見るに、文章報國を念とした尾崎紅葉の最も愛好した雅俗折衷體なるもの

も國文脈を宗とするものと言ひうるのであらう。彼が如何にこの文體に心をひかれてゐたかは一度二人女房とか多情多恨の如き言文一致の作品を示しながら、最後の力作金色夜叉をものするにあたつては、再び折衷體を用ひないではをられなかつたのによつても之を窺ひ得るであらう。

即ち多情多恨にあつてはその冒頭をみるも

鷲見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる。去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては、今朝のやうに、唯の今のやうにも思ふ。餘り思ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐる。なるほど病の爲に敢無くはなつた、氷のやうに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも斂めたれば、葬送も出した、谷中の土に埋めて、榛の位牌になつて了つて、現在此に在るからは假でもなければ、夢でもなく、確に死ぬだに極つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の內には、その可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。

の如くくだけた言文一致の筆を遣つては新文章の進むべき道を指示したかに見えたにも拘らず、金色夜叉においては

> 未だ宵ながら松立てる門は一樣に鎖籠めて眞直に長く東より西に横はれる大道は掃きけるやうに物の影を留めず、いと寂しくも往來の絶えたるに、例ならず繁き車輪の轍は、或は忙しかりし、或は飲過ぎし年賀の歸來なるべく、疎に寄する獅子太鼓の遠響は、はや今日に盡きぬる三箇日を惜むが如く、其の哀切に小さき腸は斷れぬべし。

の如くに再び時代に逆行してまで折衷體の表現にかへつてゐるのは、不思議に思はれるけれども、一大力作を發表せんとするにあたつて多年の工夫精進の結果作り上げた折衷體を捨去る事の出來なかつたばかりでなく、新たに精進を續けてゐる言文一致の筆を練るよりも、慣れて自信のある折衷體によらうとした彼の氣持も諒解するに難くないであらう。紅葉は美妙との對抗上寧ろ多分に新文學の教養を有しながらも反動的に古い文章にその範をとつたものの如く、西鶴の模倣より溯つて源氏にまで及んでゐると言はれてゐるのによつても雅俗折衷體の據つて來る所の甚だ遠いものなる事を知りうると共に、かくて生み出されたこの體をば遽かに捨てて顧みないやうにはどうしてもなれなかつた彼の氣持も察する事が出來るのである。

更に紅葉の好んで優しい女性を描くのに對して、意志強い男性を描くのに妙を得た幸田露伴の文を見るも多分に國文脈の臭味を感ぜないではをられないのである。

明治三十六年に發表せられた天うつ浪は宛然紅葉の金色夜叉に相當するものであるが、その表現をみるに、勿論そのうちには

○一體全體癪に觸る！　何を讀んでも何處へ行つても、此頃は戀愛といふ奴ばかり轉げて居るが、戀愛たあ何だ？　何だ正體は？　（日方の會話の一部）

○思有る身の水野一人は、景色も眼に更に見ざるがごとく、談話も耳に聞かぬが如く、身じろぎも多くはせで寂然と坐りつ、たゞ帶の間より時計を出して、恰も汽車の速力を疑ふやうに、幾度か其の針を甲斐なく眺めぬ。

などの如く歐文脈を引くものの見られればかりでなく、

○夜色は樓外に沈々として、澄みわたりたる天にかゝれる星斗は爛然と明らかに、明日は風にや共の大なるは、いづれも煌々と瞬目して、光の芒は搖ぎに搖げり。

の如くに漢文句調のもののもないではないけれども、その主流とする所は何と言つても國文脈であつた。卽ち

○秋は海樓の垂簾に動きてぱつと吹き來る沖の風は、夕日の餘光美はしきが中に、無限の爽凉の氣を齎らせば、白帆明るき遠方の船の數々も鉛色なして漫々たる潮の果に却つて物

淋しう見え渡りつ、竹芝の浦の浪靜かに、増上寺の鐘聲に暮れ行かんとす。
○一度あることは二度ありといふ世の諺の人を欺かず、水野はふたゝび熬りつくが如き變を抱いて南方に走りけるが、闇夜の道の捗取らずして、その相良の家を訪ひし時は既に遲く、舍の內はまだ燈火無くてはの頃ながら、戶外は既人顏定かなるほどになりて、かつて島木の寓より歸るさに訪ひし時と同じほどの明るさとはなり居たり。

などの例にも明かな如くくだけた國文脈を主としたものであつた。

かの五重塔に於ける暴風雨の一條とか、二日物語に於ける文章とかは露伴の表現の極致とも言はれてをり、國文脈中心の文章の一頂點を示すものとも言ひうるであらう。更に有福詩人は小說でありながら全篇會話によつて出來上つてゐる點において文章史上注目せらるべき作品である。

露伴は言文一致に轉換することも極めて遲かつたために紅葉の如くにこの方面での功績の特記するものはないけれども、國文脈を宗として之に歐文漢文の二文脈をも加味した表現形式を採り用ひてゐる點において明治の新文章の生れ出でる基礎を作つたものとして亦忘れられない存在たるを失はないのである。

折衷體の小說をものした最後とも言ふべきものは女流作家として重きをなした樋口一葉その人であつた。一葉の活躍はわづか四五年に過ぎなかつたけれども實に華々しく一躍文壇の寵兒となり老大家を後にして一葉時代を劃するに至つたばかりでなく讃仰の聲の最も高かつた時にあたつて忽然として逝つたのを思へば實に慧星的な存在とでも言はねばならないのである。

一葉の傑作たけくらべは、綿密纖細な觀察によつて廓近くの子供の生活を描いたものとして有名であるが、その表現をみるに、

廻れば大門の見返り柳いと長けれどお齒ぐろ溝に燈火うつる三階の騷ぎも手に取る如く明けくれなしの車の往來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれどさりとは陽氣の町と住みたる人の申しき。

の如き西鶴張の文章を以て始つてをり、露伴を宗とした彼女の筆致は旣にこゝにも窺ひうるのである。

更にたけくらべにはいつまでも切目なくなだらかなに長々と續いてゐるものもあつて王朝文學の影響を思はせるものがあるのである。

走れ飛ばせの夕に引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに人目

を厭ふ方樣もあり、手拭をとつて頬かぶり、彼女が別れに名殘の一打、いたさ身にしみて思ひ出すほど嬉しく、うす氣味わるやにた〳〵の笑ひ顔、坂本へ出でゝは用心し給へ千住がへりの青物車にお足元あぶなし、三島樣の角までは氣違ひ街道、御顔のしまり何れも緩みて、はゞかりながら御鼻の下なが〳〵と見えさせたまへば、そんじよ其處らに夫れ大した御男子樣とて、分厘の價値も無しと、辻に立ちて御慮外を申すもありけり、

などの如きはその一例に過ぎないのであるが、凡て句切が短くないのは、舊樣式の表記法を襲用したものに外ならないのである。

猶彼の女の作品にはすべて會話と地の文とを區別せずして同列に書き流してゐるのは露伴や紅葉などの判然と別行に書きわけてゐるのよりも一段と舊い形式によつてゐるものであつて、緻密な觀察によつてよく細かに男女五六人の子供の生活を描き出してはゐるものの、その形式は何と言つても舊樣式を襲用したものに過ぎないのであつて文章史的な價値はあまり認められないのである。

しかも當時の大家幸田露伴は彼女を推稱して

我が邦女流の文章を能くする者も亦多し。藤式部の優麗と、清少納言の清奇と、古來曾て

有らずして、後また及び難し。降つて阿佛尼あり、孝標女あり、又降つて斐子あり、武女あり、麗子あり。或は才或は學、皆各彤管光を發し、彩毫華を生ず、人をして巾幗の侮る可からず、鬚眉の或は愧づべきを思はしむ。然りと雖も二媛より以下、要するに是草間の蟲語、山徑の小花、たゞ其の淸韵佳色、悅ぶ可く憐む可きを見るのみ、文妙情深、人の耳目を奪つて、肺腑に沁せんとするものに至つては、悠悠幾百年殆どこれ有る無し、明治に迨びて、聖世隆昌、文運蔚興す、忽然として一葉女史樋口氏あつて出づ。不幸にして命を短うすと雖、其の作る所の諸篇、萬人を感動し、一時に流傳す。詞藻の秀潤と、才思の爛漫と蓋し人の耳目を奪ひ、肺腑に沁せんとするもの有り。嗚呼女史亦偉なりといふべし。

とまで言つてをり、めざまし草によつて凌辣な批評をあびせてゐた森鷗外さへ

われは縱令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、この人にまことの詩人といふ稱をおくるを惜まざるなり。

と最大級の讚辭を用ひてゐるのは何故であらうか。勿論一葉の女らしい緻密な觀察と優婉な筆致とによつて女性の心理を巧みに描き出した事にもよるだらうけれども、一面近代の小說の著者も旣に早く

かの女が文壇に知られたのは、明治二十七八年の頃で、『濁江』だの『たけくらべ』だのを出してから、急にその文句は高くなつて行つた。何方かと言へば『めざまし草』の大家連に持上げられたため、そのため一層名高くなつたといふ形があつた。それに、あの『めざまし草』の褒め方も、何か他に原因があつたやうに私は聞いてゐた。

と言つてゐる如く、所謂大家達が自己への非難を避けんとして、己れと形式を同じうする一葉に對して大いにかたを持つたものとも考へられるのである。

雅俗折衷體なるものは新文章の摸索時代に、一つの試みとして行はれたものに過ぎず誰しもこの體を以て將來あるものとは思はなかつたらしいけれどもかなり世にもてはやされた事は、紅葉はじめ露伴鷗外緑雨一葉などと當時有名な作家が多くこの體によつてゐたのによつても之を窺ひうるであらう。しかし既に國木田獨歩などの「その頃からさうした文體の不自由なのを說き、何うしてあの若い一葉があゝした文體に賴つたかと訝つてゐた」（田山花袋　近代の小說）如く、新しい文章も漸く試みられてゐた時代に不自由な舊樣式その儘の表現形式によつた事は一葉にとつてかへすがへすも惜しい事でなければならなかつた。

かくて一葉を最後として一時文壇を風靡したかの觀を示した雅俗折衷の文體も漸く文壇から

退くこととなり、今まであまり顧みられなかつた言文一致の新文章がこれと交代として漸次その勢力を擴大するやうになつたのである。

四

西洋崇拜のほとぼりのさめかけた明治二十年頃から反動的に國粹保存の運動もおこるやうになり、今まですてゝ顧みられなかつた古典の飜刻せられたばかりでなく之を眞面目に研究するものも現れるやうになり、二十年代の如きは西鶴熱が甚だ高まり、露伴や紅葉の大家さへ西鶴張の文章をものすに至つてその頂點を示すかの觀があつた。

雅俗折衷の文體の如きもこの國文尊重のあふりをうけて試みられたものであつて紅葉露伴をはじめ當時有名な作家が多くこの文體によつたがために廣く世に行はれる事となつたのである。しかも露伴の如きは最後の大作「天うつ浪」にいたるまでこの文體を捨てず簡勁直截な文章をものしてをり、一葉の如きは緻密な觀察によつて女らしい細かい描寫をなしえてゐるのであるが、たけくらべ執筆中源氏物語を淨書してその表現に近からんことを願つてゐたと言はれてゐるのによつても如何に彼の女がこの文體に心をひかれてゐたかを知りうるのである。

更に落合直文などの唱導にかゝる美文の流れも亦國文復興の潮流に乘つて生れ出でたものに外ならないのであり、中には小說的な可憐な作品も見受けられたけれども、折衷體と同じく將來の文章としての信賴をこゝに求める事は出來ず新文章の摸索時代にあつて色々と試みられた表現形式の中でかなり力の强かつたものと言ひうるに過ぎないのである。

かくて國文脈を主とする流は一葉あたりを最後として求められなくなつたのであるが、「たけくらべ」の文章が如何に女らしい纎細なものであつたとは言つても、西鶴とか源氏とかを宗としてゐるだけに、新時代の想情を發表するのには何となく不自由な感をまぬがれないのであつて二葉亭によつてものせられた「うき草」とか「平凡」などに見られる淸新な表現を思ふとき、彼女がよくもあんな舊い表現樣式であれほどまでに描き出したものだと寧ろ不思議に思はれる位である。

第三章　歐文脈の陰影

一

文明開化は明治新人の合言葉であり、すべて舊様式に拘泥するものは舊平として排撃せられねばならなかつた。

かくて舊いものの破壞せられて新しいものの築き上げられるまでには色々な悲喜劇が演ぜられた事も亦想像にかたくない所である。

即ち「斷髮頭をたゝいてみれば文明開化の音がする」と言はれた斷髮頭や洋服姿なども舊平の母親にとつては「イョー是れは何ンじやまあアタ形の惡い、丸で西洋人の樣な形をして、村の衆が見ても恥かしい。あつたら髮を斷すてて其まあ情ない頭は何事ぞいノウ。折角な人並に生れついて居りながら、久しぶりで歸るに、古郷へ錦をかざらいで、多くの人が畜生同樣じやと下しんで居る西洋人の眞似は何事ぞ、昔片氣の旦那殿が見られたら大抵の事ではあるまいノウ」（明治六年「開化の入口」横河秋濤）と言はねばならない程如何にも悲しいことに違ひなかつたであらうし、徴兵檢査の施行にあたつても「ソリヤコソ軍役にとられるワ、血を絞られる時刻が來たと、一家一門隣りの婆嬶一ト村中が寄集り、彼昔物語に一人女が人身御供に上る樣に、祖父が腰を拔かすやら母親が積氣を起して目を眩すやら、死に行く者かなんぞのやうに、村中の老若男女が見送ながら、潸々と泣くもあり、或は檢査の定日に到り俄に本人が脫走して戶長

や伍長が大迷惑となる」（同上）ものもあつたと言はれてゐるのも全く作物語の作爲のみとは考へられないのである。

猶一般に牛肉などを食べるやうになつたのも明治以降のことであるが、その當初は「大かたは只流行につれて、喰はねば外聞のわるい様に思ふて、いやながらも、我慢で喰ふたり、開化めかして喰つたりする人ばかりで」（明治六年「文明文化」加藤祐一）あつたやうであるが、かくてこそ、假名垣魯文の「牛店雜談 あぐら鍋」（明治四年）の如くに淺薄ながら時代を諷刺した作品も生れ出でたのであらう。

更に明治の初年から十年頃までにかけて小學校も漸く設けられるやうにはなつたが、「兎角頑固の風習は昨日今日には蟬脫やらず、區内の說得學資金の催促」（明治十二年「開化のは那し」辻弘想）などに里正は口も酸くなり脚も棒になる程盡力しなければならなかつた。しかも明治七年出版の岡本黄中講述の小學規則一夕譚によれば今迄商賣往來を寺小屋で敎へてゐたのに、それを習はさずに新に單語篇を敎材としたのに對して「學校へやれば、譯も分らぬ、アイウエオ、久いと、いぬ、いかり、ゐど、ゐのこ、ゐもり、アリヤ何の事ぢや、何にもならぬこと、アイウエオとやらは、西洋のいろはとか云ふもの、いと、いぬ、いかり、ゐど、ゐもり、位の事は、敎

へて受はいでも、知れたことぢや」などと惡口を言ふものもあつたやうである。
かくの如き矛盾と混亂との間にも西歐文化の潮流は盛に流入して、今日の飽和狀態に到るまで歐化の傾向は上昇に上昇を續けたのである。明治以降歐化の運動のめざましいもののあつたのと共に文章史上にあつても從來の和文漢文の系統以外に更に淸新な歐文脈の力強くこゝに作用してきたことは特筆せられねばならない事實である。
近代の文章は實にこの歐文脈によつて特色ずけられたとも言ふべく、他の時代の文章とは截然として區別せられるのも亦これがために外ならぬのである。
近代の新文章こそ和漢洋の三文脈の巧みに融合調和せしめられた所に始めて導き出されたものであるが、中でも歐文脈はその方向を指示した最も決定的なものだつたと言はねばならないのである。

二

先づ飜譯物の文章をみるに、明治初年にあつては、未だ歐文脈のけざやかに現れたものはなかつたと言ふのを至當とする。

即ち初期の飜譯の二つの流として國文脈を宗とするものと漢文句調を主とするものとを擧げ得るのであるが、前者のうちには伊蘇普物語（明治六年・渡邊溫譯）の如きは、

犬、肉舖より肉一塊盜出し、引くはへたるまゝ溝をわたるとて橋の中ほどに至りたる時、其影の水に寫れるを見て、他の犬己のくはへ居るより大きなる肉を銜居ると心得、夫をもまた吾ものにせんものをと、水に寫れる肉にくらひ付きしに、今まで己が銜し肉水底に沈み、前に得しものをさへ一時に併せ失ひけるとぞ。

などと、くだけた國文脈の文章をやつてゐるものもあり、歐洲小說哲烈禍福譚（明治十二年・宮島春松譯）

○巫山の夢の樂も、現と覺て跡とめぬ、雄龍士が解纜なしゝより、最心の樂ず、涙は袖におきの石、人こそしらね乾く間も、なき暮したる憂思ひ。

○いざとて先にたつか弓、ひかれ行身の哲烈は、父が蹤跡の手がかりを、知るやしら髮の萬執は首を垂て言語ず。云云。

などと多くの懸詞や緣語を用ひて力めてなめらかな純國文的のものとなつてゐるものもあり、更に自由太刀餘波銳鋒（明治十六年・坪內雄藏譯）の如く

こゝは羅馬の公園前、羅馬の國の大總裁ケイヤスジユリヤス獅威差が、さしもに猛き弃瓶(ポンペイ)を、攻滅して凱旋の、折にあひたる吉例の、競走(はしりくらべ)を遊覽せんと、最愛の夫人輕春尼娃(カルハルニャ)、議官マアカス舞婁多須(ブルタス)、マアク菴兎尼(アントニイ)、加須可(カスカ)、軻志亞須(カシアス)、支旋老(シセロ)等を前後左右に從へて四方に聞ゆる道樂(みちがく)の、響の中にしづ〳〵と、數萬の羅馬人民を眼下に見下し、練りて行く威風の程ぞ上もなき。(第一場　羅馬公園前の場)

などと七五調の華麗流暢な淨瑠璃體をとつてゐるものもあるのである。後者のうちにも歐洲奇談花柳春語(明治十一年・丹波純一郎)の如く

爰ニ説ス話柄ハ、市井ヲ距ル事凡ソ四里許ニシテ、一ツノ荒原アリ。綠草繁茂、怪石突兀、滿眼荒涼トシテ四顧人聲ナク、恰モ砂漠ノ中ヲ行クガ如ク、唯悲風ノ颼々トシテ草蕪ニ戰グヲ聞クノミ。

などと純然たる漢文表記のものもあれば、春風情話(明治十三年・橘顯三譯)の如く

聞道(きくならく)、往昔(そのかみ)「蘇格蘭(スコツトランド)」州の東、「魯志安(ロシアン)」の山陰なる、要衝の地に、「鳥　林(レベンスウード)」といふ一箇の堅城あり。これが城主の名は、同じく「鳥林」と呼て、遠き上つ世より、その系統綿綿として斷えず、家門富み榮えて、平彪武(ヘイヒユーム)、素因遁(スホントン)、道暗(ダウグラス)、なんど呼ばるゝ當國の名高き

豪傑と、累世秦晋の緣（よしみ）を結び、權勢肩を並ぶるものなく、世に知られたる門閥（いへがら）なり。」なる一例にも明かな如く、少しくくだけた漢文句調のものも見られるのであつたが、未だ歐文脈のけざやかに現れたものは見受けられなかつたのである。

かくの如く明治も二十年頃までは、西歐文學の飜譯にも國文脈を宗とするか漢文句調によるかであつて、未だ清新緻密な彼の地の響きを傳へうるまでにはなつてゐなかつたのである。

かゝる際に巧に飜譯文をものして最も精彩ある作を世に問つたものは、浮雲の發表によつて先に讀者を驚かした二葉亭四迷その人であつた。逍遙の如き進歩的な人さへ俗文を賞揚しながらも「但し地の文にいたりては俗文をもて寫すべからず。蓋しこれが爲に物語の進歩をさまたげむかと恐るればなり」（「小説神髓」參照）と言つてゐた當時にあつて、二葉亭が浮雲に會話の文のみならず地の文をも思ひきつて言文一致によつて描き出した事は特筆せらるべき彼の業績ではあつたけれども、その文章には猶舊文學の臭味の感ぜられるものもないではなかつたのである。

然るに浮雲の發表せられた翌年の明治二十一年にツルゲネフの作品「あひゞき」が國民の友に譯載せられるに及んで、浮雲に於て見られた舊文學の表記樣式はその影をひそめて行つたば

かりでなく、自然描寫の如きは甚しく緻密詳細を極めて讀者をして嘆ぜしめるに充分であつた。

秋は九月中旬の事で、一日自分がさる樺林の中に坐つてゐたことが有つた。朝から小雨が降つて、その霽間にはをりをり生暖な日影も射すといふ氣紛れな空合である。耐加の無い白雲が一面に空を蔽ふかとすれば、ふとまた彼處此處一寸雲切がして、その間から朗に晴れた蒼空が美しい利口さうな眼のやうに見える。自分は坐つて、四方を顧眄して、耳を傾けてゐると、つい頭の上で木の葉が微に戰いでゐたが、それを聞いたばかりでも時節は知れた。春のは面白さうに笑ひさゞめくやうで、夏のは柔しくそよ〳〵として、生溫い話聲のやうで、秋の末となると、おど〳〵した薄寒さうな音であるが、今はそれとは違つて、漸く聞取れるか聞取れぬ程の、睡むそうな、私語ぐやうな音である。力の無い風がそよ〳〵と木末を吹いて通る。雨に濡れた林の中の光景が照ると曇るとで間斷なく變つてゐたが、或時は其處に在るほどの物が一時に微笑でもしたやうに燦爛となると、むら〳〵と立つた樺の細い幹がふと白絹のやうな柔しい光澤を帶びて、其處らに落散つた葉が急に斑に金色に光る、そこで頭の茸々したパアポロトニク(蕨の名)の美しい長い莖までが最う秋だけに熟え過ぎた葡萄のやうに色ついて、際限もなく縺れつ絡みつして目前に透いて見える、か

樺の木立も光澤が失せて、宛然まだ冬の冷たい閃つく日光を受けぬ降りたての雪か何ぞのやうに白々となると——小雨が音のせぬやうに、忍んで、ぱら〳〵と降り出す。

と思ふとまた四邊一面に急に薄靑くなつて、瞬く間に煌煌した所が滅くなつて了へば、

なる冐頭の一例を見るも如何に精彩讀者の目を奪ふに足る新しい表現であるかを諒解するにかたくないのであるが、こゝには「その間から朗に晴れた蒼空が美しい利口さうな眼のやうに見える。」とか「小雨が音のせぬやうに、忍んで、ぱら〳〵降り出す。」などと淸新巧緻な歐文風な表現も見受けられるのである。かゝる歐文脈を宗とする表現はこの他

○何方を向いても嬉しさうに騷ぐ木の葉を透して蒼空が華やかに火花でも散らしたやうになつて見える。

○何か微な物音がすると、急に面を擧げて、四方を顧視して、大きな凉しい牝鹿のやうな眼を薄暗い木影で光らした。

などとあちらこちらに見出されて、飜譯文にあつては當時最も新鮮味にあふれたものと言ふべきであつた。

更に同年都の花に連載の「めぐりあひ」を見るも

〇いつも此家の窓をぴつたり釘附にした所は、盲目の老人が日向ぼこりでもしてゐるやうに見える。

〇けれども時は此女を避けて通つたと見えて、假面のレースに隱れなかつた顋の邊を見ると、小兒の面のやうにむつちりしてゐる。

などと歐風の目新しい表現の例を見出すのに難くないのである。

「あひゞき」と「めぐりあひ」とは共に後の文壇に影響する所は甚だ大きかつたけれども、當時はその奇妙な文體が人の目を引いた位で、あまり重んぜられなかつたやうである。その事はかへつて彼の文體があまりにも時勢の進展に魁けてゐたかを證するに足るものと思ふ。

更に四十一年九月出版の「うき草」の冒頭をみるも、

夏の靜な朝の事であつた。晴やかな空に日は最う高く昇つてゐたが、野は未だ露に煌いて、今しがた靄の霽れた谷間からは何處となく良い匂のする涼風が通つて、しつとり濡れた森の中には早起の小禽が面白さうに囀る聲がする。稍花を持ち出した裸麥が裾から巓に生上つて平な岡の上に小村が見える。今其小村を指して狹い田舍道を辿つて行く若い女があるが、見れば、白地のモスリンの服を着けて、圓い麥藁帽子を冠つて、手には傘を持つてゐ

る。其後から離れて傭男が伴をして行く。

の如く繪のやうな風景がなめらかな筆致によつてすら〳〵と運ばれてゐるのであるが、こゝにも「夏の靜な朝の事であつた」とか「裸麥が裾から嶺へ生上つて」などと歐文脈のすつきりした表現が見られるのであり、或はまたルーヂンなる男をうつすにあたつても

　入つて來たのを見れば、年頃三十五六の、背の高い、少し猫背で、縮毛の、色の淺黑い男である。男前の好いのではないが、締つて活々とした面持で、銳い青黑い眼にしつとりと光りを持つて、徹つた大きな鼻で、脣はクツキリ際立つてゐる。着てゐる衣服も左まで新しくもなく、而も窮屈さうで、着た儘成長したとでも云ひさうである。

の如くに精緻を極めてをりクツキリなどとわざ〳〵片假名書にして鮮明な印象を與へようとしたり「着た儘成長したとでも云ひさうである」などと巧な歐文風な表現も見られるのである。

彼が如何に飜譯に意を用ひたかは「コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にも亦ピリオドが一つコンマが三つといふ風にして、原文の調子を移さうとした。」(余が飜譯の標準)といつてゐるのによつても之を窺ひ得るのであるが、更にジユコーフスキー一流の巧みな意譯法を見るに及んでは「自分のやり方では、形に

拘泥するの結果、筆力が形に縛られるから、讀みづらく窮屈になる。これは宜しくジュコーフスキーの如く、形は全く別にして、唯原作に含まれたる詩想を發揮する方がよい」（同前）とも考へてゐたやうである。

兎に角二葉亭の目新しいすつきりした歐文風な表現は以後の文壇に反響を呼んだ點においてその成果は甚だ大きかつたものと言はねばならないであらう。

坪内逍遙は小說神髓によつて從來の勸懲小說を排撃して新小說の行くべき方向を指示したばかりでなく、自らも書生氣質を著してその理論を實際に移したのであつたが、更に多くの飜譯物をも示してこの方面にあつても亦新しい分野を開拓して行つたのであつた。

明治十六年刊の自由太刀餘波銳鋒（なごりのきれあじ）にあつては、華麗な七五調よりなる淨瑠璃體を守つてゐた事は既に述べた如くであるが、彼とてもいつまでもかゝる窮屈な文體を守つてゐる事は出來ずハムレット（明治四十年）の如きに至つては言文一致の文を遣つてゐるのであるが、しかもその第一幕第一場の初の部分をみるも

バア　何者ぢや？

フラ　あいや、其許こそ。待て、名宣らしめ。

バア　今上萬歳

フラ　バアナードどのか？

バア　さやう。

フラ　刻限通りにようこそお出下されました。

バア　恰ど十二時を打つた所ぢや。退つて休ましめ。

フラ　かたじけなうござる。嚴う寒うござる、心が切なうてなりませぬ。

バア　何も別條はおぢやらなんだか？

フア　鼠一匹出ませぬ。

バア　むゝ、休ましめ。自然我等が夜詰の同役、マーセラスとホーレーショーとにお逢やつたら、急ぎ參られいと言うておくりやれ。

の如くに中々舊樣式の臺本的な表現からぬけ切る事は出來なかつたやうである。けれどもかゝる形式もまもなく捨てられてヱニスの商人（大正三年）の如きにはなめらかな文が見られるばかりでなく

〇あそこへ御親戚のバサニオさんが見えた、それからグラシヤノもロレンソも。さやうな

ら。上等の御連中の方へ貴方を引渡します。
○溫かい血が通つてゐる癖に、祖父さんの大理石像のやうな面附をする必要はないぢやありませんか？

などと歐文風な清新な表現も亦所々に見受けられるのである。しがしながら彼の表現形式には未だ二葉亭の如くに新しみを求める事は出來ないのであつて、從つて文壇へのこの方面の影響もさして大なるものがあつたとは言へないのである。

逍遙と共に評論に筆をふるひ、逍鷗時代を現出した森鷗外も亦飜譯小說に筆を染めてゐるのであり、既に第一章及び第二章で述べた如く國文脈を宗としたり漢文句調を主としたりして華・麗纖細な文を遣つては二葉亭と共に飜譯界の二大名文家とせられてゐる。けれども彼は長い間所謂文語體の修飾的な文章をものしてゐたがために、新しみのある表現はあまり見受けられず、「埋木」とか「即興詩人」などにあつては

○今や新曲「惡魔」の名と俱に彼が名は萬人の口に上りて、世の人は訝り、伶人は笑ひぬ。
（明治二十三年埋木）
○若き棕櫚は重を負ふこといよ〳〵大にして、長ずることいよ〳〵早しといふ。我空想も

亦この狹き庭にとぢ込められて、却りて大に發達せしならむ。(明治二十五年即興詩人)

などの如くわづかに歐文脈の流れを看取しうるに過ぎないのである。

かくの如く眺めるとき飜譯界にあつて最も早く最も嶄新な表現形式を取り用ひたのは何と言つても二葉亭四迷であつて「あひゞき」に於ける自然描寫の如きは當時の人々の到底企及し得なかつた所であり、後の文壇への影響も亦最も大きかつたと言はねばならないのである。即ち二葉亭は言文一致の新文章の創始者としての功績を有するのみならず、その飜譯文學に未だ嘗つて見られなかつた巧緻纖細な文章を示して長く文壇への反響をとゞめたのを思へば文章史上の恩人として特に注目せられねばならないのである。

三

小說界における歐文脈の影響は明治も廿年頃から漸く見受けられるやうであり、その以前にも會話の文とか地の文とかにハイカラ振つていくらかの英語などの用ひられる事はあつたが、未だ文脈を動かすまでには至らなかつた。即ち坪内逍遙の書生氣質を見るも、

〇實に日本人のアンパンクチュアル(時間を違へる事をいふ)なのには恐れるヨ。

○彼の聖賢にあらざるよりは、それやア impossible（難行）だ。

などと英語の單語の挿入せられてゐるばかりでなく

○梓弓春としなければ、若人の心は戀に浮かるゝとかや。"In the spring, a young man's fancy lightly turns to the thoughts of love" げにさるものに有けるかし。

○賞る心はいつしか戀ふる心とうちとける、（Admiration melts into love.）

などの如く飜譯文とその原文とを兩つながら示してあるのも見受けられ、西洋臭味を漂はせてはゐるけれども、その飜譯にあたつては全然舊樣式を採用してをり特に枕詞をも使用してゐるのを見ては、西歐的な表現からは未だ遠いものだつたと言はねばならないのである。

文脈の上にまで西歐風の影響のうかゞはれるやうになつたのは、何と言つても明治廿年に著された二葉亭の浮雲においてゞあつた。

二葉亭の浮雲は從來の文體とは甚しく趣を異にし、會話の文は勿論地の文までをも言文一致の新形式を以てしてゐる點において文章史上特筆すべき作品であるが、彼がかゝる表現をとらねばならなくなつたのは一にその內容たる複雜な近代的な想情にもよるものではあるけれども一つには細緻巧妙な外國文脈に負ふ所も少くないであらう。

我々は浮雲においてはじめて歐文脈をひいた細やかな表現をみるのであつて

○「なまじひ力におもふの、親友だのといはれて見れば、私は……どうも……どう行ッても思ひ……。」

「アラ月が。……まるで竹の中から出るやうですよ。鳥渡御覽なさいよ。」

の如く清新な手法の見られるばかりでなく、

○「（上略）それよりか、まづ差當り、エート、何んだッけ……さう〳〵免職の事を叔母に咄して……嘸（さぞ）厭な面（かほ）をするこッたらうな。……しかし、咄さずにも置かれないから、思ひ切ッて今夜にも叔母に咄して……ダガお勢のゐる前では……チョッ、ゐる前でも關（かま）はん、お勢に咄して、イヤ……お勢ぢやない、叔母に咄して……さぞ……厭な顏……厭な顏を咄して……ロ……ロ汚なく咄……して……ア、頭が亂れた……。」

の如く當惑しきつた人の呼吸（いきづき）をも傳へる程な緻密な表現も見受けられるのである。

翌廿一年に譯された「あひびき」には一層細かな歐文風な表現の見られる事は既に述べた所である。

更に自然主義の華かな明治四十年の頃にも「平凡」なる作品を東京朝日に連載してゐるのは、

時代と共に移る事の出來た彼の偉大さを物語るものであり、その表現にも浮雲以上の冴えを見せて

○私に取つては、ポチは犬だが……犬以上だ。犬以上で、一寸まあ、弟……でもない。弟以上だ。何と言つたものか?……さうだ、命だ、第二の命だ。

○生命の殆ど全部を擧げて試驗の上に繫けてゐたから、若し其頭の私の生涯から試驗といふものを取去つたら、跡は他愛のない煙(けむ)のやうな物になつて了ふ。

○ジャン／＼と放課の鐘が鳴る。今迄靜かだつた校舍內が俄に騷がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して慌だしくパッ／＼と開く。と、その狹い口から、物の眞黑な塊りがドッと廊下へ吐出され、崩れてばら／＼の子供になり、我勝に玄關脇の昇降口を目蒐(めが)けて駈出しながら、口々に何だか喚く。只もう校舍を撼つてワーッといふ聲の中に、無數の圓い顏が默つて大きな口を開いて躍つてゐるやうで、何を喚いてゐるのか分らない。

などの如く歐文脈のいぶきのかゝつたすぐれたものもあるけれども、一方においては

○で、題は「平凡」、書方は牛の涎。

さあ、是からが本文だが、此處らで囘を改めたが好からうと思ふ。

〇あゝ、今日は又頭がふら〳〵する。此樣(こんな)な日にや。碌な物は書けまいが、一日拔くも殘念だ。向鉢卷でやッつけろ！

などの例に明かな如く舊樣式の表記から脫却しきつてゐない事も事實である。

山田美妙齋は聲を大きくして言文一致の運動に力めただけあつて、歐文脈の利用をも早くから心掛けてゐたやうであり、二十年十二月出版の我樂多文庫第十五號には花の茨茨の花なる短篇を寄せては、歐文の「—」とか「！」とか「?」などをも利用してゐるのであるが、翌年はじめて印刷に附する事となつた同誌に情詩人なる小說を載せては標題に言文一致體と銘を打つてゐるばかりでなく、

〇洋服ならセルにおしよと言はぬばかりの日の照方。

〇スープ製造法の備忘錄が俄に書齋の本箱を出立して水瓶の上に寄留したり、

〇一年の間の苦辛といそがしさをば今日の臺所に集めて居ります。

などの如く當時としては耳障な程新奇な表現をもとつてゐるのである。

更に明治二十二年國民の友の附錄として發表された胡蝶には作者も非常な自信をもつてゐたらしい事はその序文にも明かであるが、

○清くて優美でそして愛らしいものは六七才の少女と浦の春景色ででも有りませう。
○西山を銜む二十三夜の殘月、今些し前まで降續いた五月雨に洗はれた顏の淸さ、まだ化粧は止めずに雲の布巾を携へて折々はみづから拭つて居ます。
○その內に、無殘、勇氣！　にはかに始まる泣聲、物音。
○弱りました、これには蝴蝶も。
○蝴蝶が船端まで來た頃には旣にはや水烟が……。

などと新しい比喩や擬人法を用ひたり名詞止とか倒置法とかを使つてゐるばかりでなく、歐文の符號をも自由に採り用ひてめまぐるしい程の珍らしい表現をなしてゐるのは注目せらるべきであるが、彼の作品とても亦未だ全く舊樣式から脫却し切つてゐるのではなく

○「裏もかへさぬ」と馬琴なら言ふ荒壁に矢根が幾本も打付けてあつてそれに衣服調度のたぐひが吊されて有るさへも釘の用方がまだ自由で無いと思はれて生計の度の低いのが見えます。

の如く馬琴などを引合に出してゐるものの見受けられるばかりでなく、その歐文脈的な表現においてさへ間々奇警にすぎるやうなものも窺はれて二葉亭の如くこの方面に於ける深い教養を

もちあはせなかつたのと共に彼の名聲を一時的なものたらしめてはゐるやうだけれども、新しい表現の分野を開拓していつた功績は當然認められねばならないのである。

紅葉にはいつまでも戯作的な手法がつきまとつてをり、美妙との張合上長く雅俗折衷體を宗としてはゐたけれども、西歐文學に對する修養のあつた彼はいつまでもかゝる文體を墨守してゐる事は出來ず、二十四年八月都の花に發表の二人女房には言文一致への關心を示さないではをられなかつた。即ちその中には、

○父親は醉はぬ前から口が利けずに頷いて。早御自身に德利を提げて。裏口から買ひに出られるといふ手廻しの好さ。此方も早くと。塗る。着る。車が來る。乘る。走る。

の如く短い句切によつて動作の推移を巧みに描き出した新しい表記法も見受けられれば、或は又きび／＼した表現によつて娘の嫁入先の隱居の不機嫌さに心よからず歸つてきた里の母親の心持を寫しえてゐるものもあるけれども、とかく折衷體の文章に引づられがちであつて、戯作的な手法もあちらこちらにその影を留めてゐるのである。

二十九年二月起稿の多情多恨に至つては「……である」止の勢力の漸く決定的なものとなつたばかりでなく、垢拔けのした得意の會話の文は、斷續自由な豐麗な地の文と共に言文一致の

進展に大いに與つて力あつたものと言はねばならないのであるが、

○彼の胸の內には、その可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。

○例の同僚は嗤つた、鷲見は全力を擧げて其妻に惚れてゐるのだと。其通り（全力を擧げて）とは嘲弄でない、適評であつた。適評ではない、事實であつた。

○凡そ女子と云ふものは、柔に溫であるべきものである。（類さん）は十分に柔に溫であつた、と彼は信じてゐる。然るに葉山のお種樣は蠟石細工のやうに、硬くて冷たい。

○澄徹る空は藍でも滴れさうに、何處に一點の雲も無い。

などの如く力強く疊みかけたり、「蠟石細工のやうに」とか「藍でも滴れさうに」とか新しい比喩を用ひてゐるのなどは折衷體の文章に力をいたしたばかりでなく彼が如何に歐文脈に心をひかれてゐたかを知る事が出來るのである。

更に金色夜叉は彼が病中をも冒して前後六年の長きにわたつて執筆し、しかもその完成を見ずして逝つた彼の作品中最も長大なものであるが、その文章報國の熱情と不斷の努力精進との結果は、和漢洋の三文體もこゝにはじめて融合渾一しきつたかの如く見られるのであつて、

○久しく人氣の絕えたりし一間の寒は、今俄に人の溫き肉を得たるを喜びて、直に咬まん

とするが如く膚に薄れり。

○今の一目は蜗も奇なりと思ふばかり奇くも、彼の不用意の間に速寫機の如き力を以てして、其の映じ來りし形を總て脱さず捉へ得たりしなり。

などの如く歐文脈の陰影をもあちらこちらに認めうるのである。

紅葉は、戯作的な分子をも多分に留めてをり、美妙との關係上早くから言論一致に筆を染めはしなかつたけれども、文章報國を念として努力と精進とを續けた結果は、進んで「……である」止の新樣式を創始したばかりでなく、迫眞力に富む艶麗な會話の文をも示し、和漢洋の三文體は彼によつて完全に融合せられたとも言ふ事が出來るのであつて文章史上の功績は特に注目せられねばならないであらう。

ついで藤村の作品をみるに、詩から散文に轉じた最初の作品千曲川のスケッチにも既に外國文脈は攝取せられてゐるのである。即ち

○田畠も漸く冬の眠から覺めかけたやうに砂まじりの土の顔を見せる。（暖い雨）

○舊士族には奇人が多い。時世が彼等を奇人にして了つた。（古城の初夏）

などの例によつてもその一般は窺ひうるであらう。

ついで彼の最初の長篇破戒を見るに、こゝにも

○動揺する地上の影は幾度か丑松を驚かした。日の光は秋風に送られて、かれ〴〵な櫻の霜葉をうつくしく見せる。

○日の光は斯の小屋の內へ射入つて、死んで其處に倒れた種牛と、多忙しさうに立働く人人の白い上被とを照した。

○酷烈しい、犯し難い社會の威力は次第に、丑松の身に迫つて來るやうに思はれた。

○猜疑、恐怖――二六時中忘れることの出來なかつた苦痛は僅かに胸を離れたのである。今は鳥のやうに自由だ。

などの如く巧みな歐文脈表記のものも見受けられるけれども、一方においては猶

　勝つも負けるも運は是一つにあると打込む勢は獅子奮迅。

の如き舊様式の表記から足を洗ふまでには至つてゐないのである。

「春」は明治四十年東京朝日に連載せられたもので作中の青木とか岸本とかはそれ〴〵透谷藤村などをモデルとしたものと言はれてをり、その表現も前の「破戒」よりも一層はつきりと個性の色のよまれるものである。その中に屢々英詩とその譯文とを載せてゐるのは異國情調をそゝ

らせないではおかないものであるが、歐文脈の投影せられてゐるものも多く、
○あの英吉利の湖畔詩人が寂しい山家の娘の歌――丁度、その中に、彼は自分を見出した。
○『細君には御迷惑だらうけれど。』と菅は熱心を顔に顯して言つた。
○細い豆ランプの光は友達や妻子の寢顔を朦朧と映して見せる。薄暗い寂しい古壁の上にあるものは、唯悶きに悶いて居る彼自身の影ばかりであつた。
○漠然とした恐怖は絶えず彼の胸を往つたり來たりした。それのみならず、曾て家を忘れさせ、職業を棄てさせ、暗い寂しい旅にまで彼を押出した力は、軈て彼を無口にしたり、急に身體を震はせたり、譯もなく涙を流させたりする。麹町の學校を辭めて見ても、矢張り仕事は出來なかつた。
などの如くに巧みな表出法をとつてゐるものも少くないのである。
更に明治四十二年に筆を染めた「家」に至つては、言文一致體の一高峯を示してゐるが如くであるが、歐文脈も今迄の如く目立たないまでに融和し切つてをり、
○別離を告げて出て行く樣な汽笛の音は港の空に高く響き渡つた。お種の眼前には、青い明るい海だけ殘つた。

○表の門から、入つて、金目垣と窓との狭い間を庭の方へ拔けると、裏の女教師の家でも寢た。三吉の家の方へ向いた暗い窓は、眼のやうに閉ぢられて居た。

○復たポカ〳〵する季節に成つた。三吉が家から二つばかり横町を隔てた河岸のところには、黄綠な柳の花が垂下つた。石垣の下は、荷舟なぞの淀泊する河口で、濁つた黑ずんだ水が電車の通る橋の下の方から春らしい欠伸をしながら流れて來た。

などの如く細緻淸新な筆致は今までの歐文脈のものにも見られなかつた所であり、藤村はこの方面での大きな足跡を印してゐるものと言はねばならないのであらう。

眞を描かうとする自然派のせつぱつまつた小說に反抗して餘裕のある暢び〳〵とした所を庶幾し餘裕派なる一派を樹立しては自然派作家を向ふにまはしてその名を一世に謳はれた夏目漱石の文を見るも西洋文學に對する深い敎養のあつただけに旣に處女作「吾輩は猫である」においても氣のきいた歐文風の表現を見出すのに難くないのである。卽ち猫が臺所で正月の雜煮餠に食ひついてはみたものの嚙み切れないでこまりぬいてゐるあたりの描寫は、如何にも細やかであつて歐文の匂を感ぜしめるに充分であるが、更に

○吾輩はいつでも彼等の中間に己を容るべき餘地を見出してどうにか割り込むのであるが

運惡く子供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。

〇僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きら〳〵する柔毛の間より眼に見えぬ點でも燃え出づる樣に思はれた。

などと手についた歐文脈風の文章も見受けられるのである。

猫はその齒切のよい文章によつて有名となつたが、「坊ちやん」に至つては更に一段の進展を示し、漸く筆の冴えを見せるやうになつたのであるが、新小說に發表せられた草枕に於てはじめて餘裕派としての漱石の面目を最もけざやかに看取しうるのである。

峠の茶屋の一段の如く寫生の妙を得てゐるものであつて、文章といふよりは寧ろ繪畫としか思はれない程の雅致に富んでゐるものもあれば、

〇しばらくは路が平で右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。

〇草山の向うはすぐ大海原でど丶ん〳〵と大きな濤が人の世を威嚇かしに來る。

などと新しい歐文風な文章をも見受けられるのである。

或は朝日に連載された虞美人草も亦草枕と共によく彼の文章の特質を示してゐるものであるが、

〇微茫なる春の空の、底迄も藍を漂はして、吹けば搖ぐかと怪しまるゝ程柔らかき中に屹然として、どうする氣かと云はぬ許りに叡山が聳えてゐる。

〇振り廻した杖の先の盡くる、遙か向うには、白銀の一筋に眼を射る高野川を閃めかして、左右は燃え崩るゝ迄に濃く咲いた菜の花をべつとりと擦り着けた背景には薄紫の遠山を縹緲のあなたに描き出してある。

の如く歐文脈を宗とする巧みな表記も見出されるのである。

更に彼自ら文體の一長一短を論じてどちらかと言へば漢字假名交りの文體とか漢文脈を引く文體とかが好きだと言明してゐるのによつて窺はれるが如く、漢文脈の要素も多分に彼の文章に活きかけてゐることは既に述べた所である。

かくて歐文脈の使用度は廿年頃から年と共に增加の傾向を示してをり、二葉亭とか美妙齋とかに始められて紅葉を經、藤村漱石などに至つて如何にも手ぎはよくこなされるまでになつたけれども、これを驅使するまでに至るには猶大正期を待たねばならなかつた事は、眞の口頭語的な言文一致體の大正に入つてはじめて現れたのと同樣である。

大正期にあつて歐文脈を最も高度に攝取したのは白樺派の作家として神聖な愛を高唱してや

まなかつた有島武郎であつた。有島武郎はキリスト教的な素養を有し聖書とかホイツトマンの研究に造詣の深かつただけに、その作品には新鮮な歐文脈のあふれる程充滿してゐるのを見逃すことは出來ないのである。作家としての彼の活動は短かかつたがために大正五年以後數年を出でずしてその代表作はものせられてゐる。

大正六年新小說に發表のカインの末裔を見るもその冒頭から既に

長い影を地にひいて、瘦馬の手綱を取りながら、彼れは默りこくつて步いた。大きな汚い風呂敷包みと一緒に、章魚のやうに頭ばかり大きい赤坊をおぶつた彼の妻は、少し跛脚をひきながら三四間も離れてその跡からとぼ〳〵とついて行つた。

と記されてをり、細緻巧妙な描寫をなしてゐるばかりでなく、比喩の如きも甚だしく新味を帶びてゐるのは見逃せない事實である。

○大濤のやうなうねりを見せた收穫後の畑地は、廣く遠く荒涼として擴がつてゐた。

○蒸風呂のやうな氣持の惡い暑さが襲つて來て、畑の中の雜草は作物を乘りこえて徃のやうに延びた。

などと清新な比喩の見られるばかりでなく、

〇から風の幾日も吹きぬいた擧句に雲が靑空をかき亂しはじた。雲と日の光とが追ひつ追はれつして、やがて何處からともなく雪が降るやうになつた。

〇枝に殘つた枯葉が若芽にせきたてられて、時時かさつと地に落ちた。

の如くに擬人法による新しい表現の跡も見受けられるのであつて、歐文脈の匂ひは到る所に感ぜられるのである。

更に大正七年一月號の新潮に揭載せられた「小さき者へ」を見るに、巧みな比喩の見られるばかりでなく、擬人法の如きも、

〇夜の暗さがいつまでも部屋から退かなかつた。

〇二つの生命は昏々として死の方へ眠つて行つた。

〇お前たちが六つと五つと四つになつた年の八月の二日に死が殺到した。死が凡てを壓倒した。而して死が凡てを救つた。

〇深夜の沈默は私を嚴肅にする。

などと數多く用ひられてをり、しかも「夜の暗さ」とか「生命」とか「死」とか或は「沈默」とかの抽象的な事物に對してまで好んで擬人法の用ひられてゐるのは何と言つても歐文脈の著

しい影響と見ねばならないのである。或は、

表面(うはべ)には十人並みな生活を生活しながら、私の心はやゝともすると突き上ぎて來る不安にいら〳〵させられた。

の如きはたゞ「生活しながら」と言へば日本文としては完全なのに拘らず、わざ〳〵「生活を」の如く無くても事の足りる目的語をまで添加したのなども歐文の句調をそのまゝ寫したものであり、

小さき者よ。不幸な而(そ)して同時に幸福なお前たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開ける。行け。勇んで。小さき者よ。

などと呼掛の見棄を前後に一つづつおいたり、

私の仕事？　私の仕事は私から千里も遠く離れてしまつた。

の如く故意に疑問の形を借りて？　までつけ、讀者の注意をこゝに集めようとしたのなどもすべて歐文風な表記法を襲つたものでなければならないのである。

或は同年四月大阪毎日にその一部を掲載せられた「生れ出づる惱み」を見るに、

○私は、机の向うに開かれた窓から、冬が來て雪に埋もれて行く一面の畑を見渡しながら滯りがちな筆を叱りつけ〳〵運ばさうとしてゐた。
○太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り擴げて吸ひ込んでゐる。
○雷電峠と反對の灣の一角から長く突き出した造り損ねの防波堤は、大蛇の亡骸（むくろ）のやうな眞黒い姿を遠く海の面に横たへて、夜目にも白く見える波濤の牙が、小休みもなくその胴腹に噛ひかゝつてゐる。
○船はもう一個の敏活な生き物だ。船縁（ふなべり）からは百足蟲（むかで）のやうに艪の足を出し、艫（とも）からは鯨のやうな舵の尾を出して、あの物悲しい北國特有な漁夫の懸聲に勵まされながら眞暗に襲ひかゝる波のしぶきを凌ぎ分けて、沖へ沖へと岸を遠ざかつて行く。
などと好んで擬人法の用ひられてゐるばかりでなく、長く突き出た防波堤の夜の姿を寫すのに「大蛇の亡骸のやうな」と言ひ艪の足を描くのに「百足蟲のやうに」とたとへ、舵を現すのには鯨を以てしたりして、巧みに目新しい比喩もあちらこちらに見受けられるのである。

この作に於て表現上特に注意すべきは、

寒い。原稿紙の手ざはりは氷のやうだつた。

の如く長短自由の文を遣つてゐるばかりでなく

　私の心の奥底には確かに――凡ての人の心の奥底にあるのと同樣な――火が燃えてはゐた
　けれども、その火を燻らさうとする塵芥の堆積は又ひどいものだつた。

の如く――を用ひたり、或は

○汚い中學校の制服の立襟のホックをうるさゝうに外づしたまゝにしてゐた、それが妙な
　事には殊にはつきりと私の記憶に殘つてゐる。
○而してぢつと探るやうに私の顏を見詰めた。
○君は默つたまゝまじ〳〵と眼を光らせながら、私の云ふ事を聽いてゐた。
○豐滿の淋しさといふやうなものが空氣の中にしんみりと漂つてゐた。

の如く强調すべき修飾語などを假名書にして、、、を附したもの等でこれらはすべて歐文風の表記に負ふものと言はねばならないのである。かゝる表記法を好んで用ひてゐるのによつても如何に有島武郎が歐文脈を巧みに驅使してゐたかを知りうるのである。

「或る女」は旣に一部分を「或る女のグリンプス」として白樺に發表せられたのであるが、その後の新作の部分と合して世に問はれたのは大正八年の事である。この作には歐文脈の陰影が

最もけざやかに現れてをり、
○改札の眼の先きで花が咲いたやうに微笑んで見せた。
○青年の前で「若奥様」と呼ばれたのと、改札ががみ〳〵怒鳴り立てたので、針のやうに鋭い神經はすぐ彼女をあまのじやくにした。
○女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな日頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。
○倉地は致命傷を受けた獸のやうに呻いた。
○四角な箱に窓を明けたやうな、生々しい一色のペンキで塗り立てた二三階建ての家並みが、險しい斜面に沿うて高く低く立ち連なつて、岡の上には水上げの風車が、青空に白い羽根をゆるゆる動かしながら、かつたんこつとんと暢氣らしく音を立てて廻つてゐた。
○木村といふ大きな邪魔者を眼の前に据ゑておきながら、互の感情が水のやうに苦もなく流れ通ふのを二人は子供らしく樂しんだ。
などと清新適切な比喩の見られるばかりでなく、擬人法の如きも
○乘客一同の視線は綾をなして二人の上に亂れ飛んだ。

○燒き捨てたやうに古藤の事なんぞは忘れてしまつて、手欄(てすり)に肘をついたまゝ、放心して晩夏の景色をつゝむ引き締つた空氣に顔をなぶらした。

などと抽象的なものにまで及んでゐるのであり更に

○愛子も貞世も見違へるやうに美しくなつた。その肉體は細胞の一つ〳〵まで素早く春を嗅ぎつけ、吸收し、飽滿するやうに見えた。

○それなら何んでも勝手に云つて見るがいゝ仕様によつては默つてはゐないからといふ腹を、かすかに皮肉に開いた脣に見せて葉子は古藤に耳を假す態度を見せた。

○ひよつとすると貞世はもう死ぬ……それを葉子は直覺したやうに思つた。眼の前で世界が急に暗くなつた。電燈の光も見えない程に頭の中が暗い渦卷きで一杯になつた。

などと手についた巧みな歐文風な文章もいくらでも見受けられるのである。

更に大正九年三月にものせられた「惜しみなく愛は奪ふ」を見るに、擬人法の如きも

言葉は不從順な僕(しもべ)である。私達は屢々言葉の爲に裏切られる。私達の發した言葉は私達が針ほどの誤謬を犯すや否や、すぐに刄を反して私達に切つてかゝる。私達は自分の言葉故に人の前に高慢となり、卑怯となり、狡智となり、魯鈍となる。

などと無形のものにまで及んでゐるばかりでなく

然し私は生れた。私はそれを知る。私自身がこの事實を知る主體である以上、この私の生命は何んといつても私のものだ。私はこの生命を私の思ふやうに生きることが出來るのだ。私の唯一の所有よ私は凡ての懷疑にかかはらず、結局それを尊重愛撫しないでゐられようか。涙にまで私は自身を痛感する。

の如く意識的に何度となく「私」を反復する事によつてリズムをさへ感ぜしめるものもあれば、

神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。

の如くに文全體をもう一度そのまゝ繰返す事によつて意味の强調をねらつたものもあれば、或はまた

私の個性は私に告げてから云ふ。

私はお前だ。私はお前の精髓だ。私は肉を離れた一つの概念の幽靈ではない。また靈を離れた一つの肉の盲動でもない。お前の外部と内部との溶け合つた一つの全體の中に、お前がお前の存在を有つてゐるやうに、私も亦その全體の中で嚴しく働く力の總和なのだ。

の如く科學的な正確な文章も見受けられるのであつて、歐文脈の手法もぎこちなさの域を脱し

て適切巧妙を極めるやうになつたのは有島武郎の功績として文章史上特筆せられねばならないであらう。

有島以前にも既に早く明治二十年前後から歐文脈は小說界に攝取せられたけれども未だ舊樣式の表記法を止揚する事が出來ず、新奇を誇ることは出來たにしても、著しく不調和の感をまぬがれなかつたのを思ひ、更に明治全期を通じて歐文脈のさして進展しなかつたのを考へ合するとき、有島の文章に特に高度の歐文攝取の見られるばかりでなく、進んで之を驅使してゐるかに見えることは、何と言つても注目せられねばならないのである。

四

明治初年から十年頃にかけては新舊混淆時代とも言ふべく、舊いものの顧みられなくなつたのに拘らず新しいものの未だ出來上らぬといふ混沌たる狀態の中におかれてゐたがために、學問の如きも今までの漢學などはさらりと西の海に捨てて當世流行の洋學に走るものが多く、假名垣魯文をして「君の處の息もはやく洋學を學ばせなせえ方今の形勢では洋學でなけりやア夜は明けねえヨハテサ何にならうともおぼえさせておきやア商人は商人工人は工人だけの開化だ

われ云云」（「安愚樂鍋」）と新聞好の口をかりて言はしめた程であつた。この流行病に誘はれて英語は洋學生の日常會話に挿入せられたばかりでなく、西洋膝栗毛とか安愚樂鍋などの魯文の作品にも反影してゐるのであるが、

オイオイあねえ親方にラウスを大切にして焼鍋を一枚あつらへてくんなそして此のお客は煮たのがいゝと云ふからタレ抜のスウプへみりんと醬油をおとしてよく煮てくんな（「安愚樂鍋」新聞好の生鍋の條）

の如く多く聞きかじりの單語の好んで用ひられてゐるに過ぎないのであつて、未だ舊來の文脈を一新せしめる程の大變化をこゝに求める事は不可能なのである。

十年から二十年にかけては歐化の潮流に棹して西洋文學の飜譯せられたものも少くなかつたけれども、或は國文句調を主とし或は漢文脈を宗とするものであつて、甚しきに至つてはわざわざ緣語とか懸詞をまで用ひて力めて國文脈によらうとしたり、どの句をも七五調に譯出してどうにかして淨瑠璃體に則らうとした程であつたから、未だ原文の匂をもそのまゝに傳へえたものはなかつたのである。

しかるに明治も廿年前後から漸く西洋文脈の匂を感ぜしめるに足る作品を生むに至り、こゝ

において、我國の文章は今までに見る事のできなかつた淸新複雜なものへと轉向し始める事となつたのである。

西洋文脈を始めてけざやかに傳へたものは言文一致によつて近代文章の導火線ともなつた二葉亭の作品浮雲である。更にその翌年譯されたあひゞきに至つては一層細かな歐文風な表現を見出し得るのである。

二葉亭と共に言文一致の育成に與つて力のあつた美妙齋も早くから歐文脈の利用を心掛けてゐた如くであり――とか！　とか？　とかを好んで用ひてゐるばかりでなく、當時としてはかへつて耳障に感ぜられる程新奇な文章をも示してゐるのであり、新分野を開拓した功績は亦二葉亭に劣らないのである。

美妙との面白からぬ關係上紅葉は反動的に雅俗折衷體を宗としてをり、戯作的な臭味も全作品を通じてつきまとつてはゐるけれども、和文漢文の二系統ばかりでなく歐文脈をも多分に攝取してこれらの三文體は彼によつて完全に融合せられたものとも言ふ事が出來るのであつて、こゝにも彼の功績は認められねばならないのである。

藤村の作品には最初の散文千曲川のスケッチ（明治三十二年）に於ても旣に外國文脈の攝取を

見得るのであるが、「破戒」（明治三十八年）より「春」（明治四十年）「春」より「家」（明治四十二年）へと進むに從つて、歐文脈も漸次これまでの作品に於けるが如く目立たないまでに融合しきつてゐるのであつて、言文一致體の一高峯を認めうるのと共に、文章史上注目せられねばならないのである。

更に自然派を向うにまはして餘裕派なる一派を樹立し悠々文壇を席捲した夏目漱石も、西洋文學に對する深い敎養のあつただけに、如何にもこなれた巧みな歐文表記も見受けられるけれども、その根深い東洋趣味のために各作品にかなりけざやかに漢文的な句調も數多く用ゐられてゐるのを否む事は出來ないのである。

歐文脈の表記は明治も廿年頃から旣にあらはれてゐるけれども、その完成には大正期を待たねばならなかつた。

歐文脈を高度に攝取し之を驅使するにまで至つた功績は何と言つても有島武郎に歸すべきものであり、彼の文章史上における地位も亦之によつて決定せられねばならないであらう。

明治以降歐文脈の流入せられた事は我國の文章を全く一變せしめる程の大變革であつたが、明治年間には未だ之を高度に攝取するまでには至らず、之を自由に驅使するには大正期の白樺

派の作家有島の出現を待たねばならなかつた事は、かの言文一致の新文章が明治期に誕生しその成育をつゞけながらも、眞に口頭語的表現を見るには猶大正期を期待せねばならなかつたのと同樣である。

第三篇　近代文章の特質

一

明治大正の文化のわづかに五六十年の間に著しい發展と飛躍とを示したが如く、近代文章の上にあつても未だ嘗て見られなかつた程の急激な變化が見られるのである。

明治以降泰西の文物の潮の如く我が國に流入せられたのと共に、洋學研究の結果は從來の文章のスタイルを一變せしめる程な甚だしい變革を見るに至り、窮屈な文語表記を蟬脱して平明暢達な口頭語的表現に接近して行つたのであつて近代文章史の史的價値はこゝに求められねばならないのである。

第二篇に於て文脈を中心として主として横の考察を行つたわれわれはつゞいて近代文章の特質とも見るべきものをこゝに少しく概括しておくのが便利であらう。

二

近代文章の特質として第一に擧ぐべきものは言文二途より漸次その一致を見るに至つた事でなければならないのであり、近代文章史とは結局言文一致發達史に外ならないのである。けれども長い慣習を有する言文二途よりその一致を見出さんとするには中々容易な業でなく、多くの人々の努力と精進とがこゝに加へられねばならなかつた。

明治の初年にあつては新人の文學の方面を顧みるものもなく未だ全く江戸後期の繼續とも見るべきものであつて、作者の如きもわづかに江戸時代の餘喘を喘ぎながらその續物に間延のした筆を揮つてゐる位に過ぎなかつた。かゝる作家に新しい文章を求める事の出來ないのは勿論のことである。

かゝる時代にあつていち早くも文章の改革に手を染めたのは新文明の開拓者として有名な福澤諭吉その人であつた。

彼は漢文の素養もかなりあつたけれども、當時の飜譯界に專ら用ひられてゐた硬直な漢文句調に拘束せられる事なく、極めて自由に漢語と俗語とを融合して「雅俗めちや〳〵」の達意を主眼とした新文體を創始して「通俗一般に廣く文明の新思想を得せしめん」としたのは當時として彼の見識の甚だ高かつた事を示すばかりでなく、明治の新文章の進むべき方向を指示した

ものとして注目せられねばならないのである。

福澤諭吉が思ひ切つて平易暢達の文章を庶幾してから暫らくは文章史上さしてめざましい進展は見られなかつたけれども、廿年代となり二葉亭四迷とか山田美妙齋の出現と共に明治の文章も漸くめざましい展開の姿を見せる事となつたのである。

二葉亭はその作浮雲に於て逍遙の小說神髓の理論を最もよく具現したのであるが、その表現にあたつても、全く目新しい言文一致の新樣式を以てした事は文章史上特筆せられねばならないであらう。しかもその文體についても逍遙の少し美文素を取り込めと言つたのに對して、彼はそれが嫌ひだつたと言ふよりは寧ろ之を排斥しようとしたのは如何に果敢に彼が言文一致の筆を執つたかを物語るものと言はねばならないのである。

從來の戲作者流の文章は福澤諭吉によつて平明達意を旨とするものと改められたばかりでなく、更に逍遙を經て俗文の利點さへ唱へられるに及んでは小說の文體も俗文によつてものせられるのも遠くはないと思はせるに至つたのであるが、かゝる機運に乘じて早くも言文一致の作品を世に問つた事は何と言つても二葉亭の功績に歸すべきものである。

二葉亭と略同時に言文一致の作品を現し、しかもこの運動のために雄々しくも攻擊の矢面に

立つてこの新文體の育成に力めたのは山田美妙齋であつた。美妙齋はこれまで俗文としてやや嘲笑味を帶びて呼ばれてゐた新文章に言文一致なる稱呼を與へて正當な待遇を受けしめるやうにした點において言文一致體の名付親とも言ふべきである。

彼は二葉亭と共に新文章の創成に與つて力のあつたものであるが、二葉亭の、作品のみによつてこの運動に參劃したのに對して、美妙は作品のみならず、或は新聞に或は雜誌に盛に新文章を喧傳したがために彼の業績は一層華かなものとなりえてゐる。

紅葉は「……である」止を創始して普通文の終止形式を確立したのみならず、豐麗な會話の文には息づまるやうな切迫感を抱かせるに充分であつた。しかもその文章には和漢洋の三文脈が渾一融合しきつてゐるのを思へば、近代の新文章は文章報國の念に燃えた紅葉を經てはじめてその大道を歩み出したものとも言ひうるのである。

ついで文壇とは直接關係のなかつた俳人正岡子規によつて寫生文の唱導せられた事は、後の自然主義の作品にまでその影を投げかけたものとして注目せられればならなかつた。卽ち子規の所謂寫生文とは緻密な觀察と確實な經驗とを基としてかの繪畫に於ける寫生の手法を以て細かに書きあげたものであつて、紅葉を宗とする硯友社一派にあつても猶かなり色濃く動いてゐた

戯作者的な手法はこゝには全く見受けらないのである。かくの如く寫生文は自己の體驗を無視した空疎虚僞な粉飾を却けた點に於てついで起るべき自然主義文學に呼びかけたものと言ひうるであらう。

舊様式の表記に慣れきつてゐる作者が新様式の表現に轉換するにあたつては容易ならぬ努力と決心とを要し、しかも完全には之を脱却しにくかつた事は露伴が超然として後々までも雅俗折衷の孤城を固守してゐた事や、紅葉が一度新文章に筆を染めながらも最後の傑作をものするにあたつては再び折衷體に逆行せずにはをられなかつた事によつても容易に之を推測しうるであらう。

かゝる見地よりして紅葉とか露伴とかの所謂大家の新文體への轉換の甚だ至難だつたのを思ふとき流石は文章報國を以て念とした紅葉の偉大さを思ひ浮べる事が出來るのである。

これに反して何等舊い筆くせを持たぬ所謂新進作家達は少しの苦痛もなく始めから新様式の表現を採り上げる事が出來たのであつて、新文章の發展はこれらの新進作家に俟つ所が多かつたのである。

藤村にしても漱石にしても初めから言文一致體を遣る事が出來たために、紅葉や露伴や逍遙

鷗外の如くに文體轉換の苦悶を經驗する事もなく一意この文の發展に努力する事が出來たのである。

藤村とか漱石の努力によつて言文一致體も略々その完成の姿を見せる事とはなつたけれども共に明治期にあつては未だ文語的表現から足を洗ふ事は出來ず、眞の口頭語的な表現を採るには猶大正期を待たねばならなかつたのである。

白樺派の驍將武者小路實篤は獨語的な表出法によつて近代人の獨り物を言ふ方法を創始し自由奔放な形式によつて新しい空氣を文壇におくつたばかりでなく、特に眞の言文一致の見本を示した點においては文章史上特に注目せられねばならないであらう。

話言葉そのものを文章とするの可否はともかく言文の一致は近代文章の目標であり、武者小路までの文章はつとめて Spoken language に近づからうとしたものと言ひうるのである。

かくて近代文章の特質の一つは言文一致の誕生とその育成とに求められねばならないのである。

三

近代文章の第二の特質は和漢洋の三文脈が漸次融合調和せられて今までに見られなかつた新文章を形造つた事である。

中でも漢文脈は明治の全期を通じて力強く脈うつてをり、特に評論方面にあつては漢文崩しを宗とするものが多く樗牛とか桂月とかの如く優婉な國文脈を織込ませながらも、猶言文一致の新文章に轉換する事の出來なかつたのによつても如何にこの文體が評論界を風靡しておたかを窺ひうるであらう。

文壇の方面にあつてもかなり後までも漢文脈の浸染してゐた事は寧ろ驚くべきほどであつて言文一致の新文章を創始した二葉亭の如きも一方においては漢文崩しの表記をも全然捨て去る事は出來なかつたのも、慣習の久しきを思へば無理もないことであつた。

更に二人女房とか多情多恨とかによつて「……である」止の結尾様式を完成して後の文章の規範となつた尾崎紅葉の作品にも猶漢文脈の姿は全然影をひそめてはゐないのである。

或はまた子規の唱導にかゝる寫生文を大成し、餘裕派なる一派を樹立して草枕とか虞美人草などの傑れた作品を世に問つた夏目漱石にも漢文脈はかなりけざやかに作用してゐるのを思へば、明治の文壇を通じてこの文脈の勢力の侮ることの出來ないものゝあつた事も容易に推察せ

られるであらう。

明治も廿年頃までは西歐崇拜の傾向が高揚せられる一方であつたが、かゝる中にも反動的に國粹保存の運動も萌してをり落合直文一派の國文學者は古典の研究を續ける傍、自らも古典の形式に典り新しい想情を盛つては小說めいた華麗な作品をも數多く發表した。直文の唱へた美文は彼の門下生たる大町桂月とか鹽井雨江とかによつてその發展を期せられたばかりでなく、一方鷗外とか文學界の人々なども亦美文の完成に努力したのであつた。

美文を中心として國文脈を宗とする文體の行はれた事は上述の如くであるが、文壇の方面にあつても所謂雅俗折衷體なるものが盛に行はれてこの運動と呼應するかの觀があつた。この文體に最も力をそゝいだのは何と言つても尾崎紅葉であつた。彼が如何にこの文體に心をひかれてゐたかは一度二人女房とか多情多恨などの言文一致の文章を書きながらも、金色夜叉をものするにあたつては再び手慣れたこの文體を採り用ひないではゐられなかつたのによつても容易に之を窺ひうるであらう。

紅葉と共に紅露時代を現出した幸田露伴も漢文脈を帶びたものとか歐文句調の文章も書いてはゐるけれどもその主流とする所はやはり國文脈であつた。

更に彗星的に出現して一時に文壇の寵兒となつた女流作家樋口一葉も亦雅俗折衷體の文を遣つてゐるのである。

この文體は新文章の摸索時代に一つの試みとして生れ出でたものであつて、當時といへども心ある人々は將來あるものとは思はなかつたらしいけれども、紅葉が書き露伴が書き鷗外緑雨一葉などの當時有名な作家が多くこの文體によつてゐたのによつても、かなり廣く世にもてはやされた事を知りうるのである。

しかもこの文體は一葉あたりを最後として求められなくなつたのであるが、「たけくらべ」の如何に女らしい纖細な感じを盛り得たからと言つても、その形式は西鶴とか源氏とかを宗としてゐるだけに何と言つても不自由さをまぬがれないのであつて、彼女のために之を惜しむのは一人國木田獨歩のみではないのである。

漢文句調と和文脈との混淆は既に早く上代より認められる所であり、その融和の度合如何によつて或は物語の文章となり或は軍記・狂言の文體となり、更に浮世草紙・讀本などの表現ともなつてゐるのである。

けれども和漢のみならず歐文脈までも攝取せられて精細緻密な表現となり從來の文體を一變

するに至つたのは近代の文章における最も顯著な事實でなければならないのである。かくて近代の新文章は歐文脈によつて新しい方向を指示せられたものとも言ふべく和漢洋の三文脈のうち最も注目せられねばならない事は言ふまでもないであらう。

けれども明治も十年頃までは未だ破壞の時代であつてさしたる文化の建設も見なかつたがために文學の方面にも見るべきもの少く當時盛だつた洋學の影響の如きもわづかに假名垣魯文の作品などに聞きかじりの英語の單語がわづかに用ひられてゐる位に過ぎなかつた。

ついで廿年頃までにかけては世の歐化の潮に乘つて多くの飜譯物が相繼いで現れはしたけれども、これとても國文脈を宗としたり漢文句調を主としたりし甚しきに至つては懸詞とか緣語までかつぎ出したり、無理にも七五調の淨瑠璃體によらうとしたりして未だ彼の地の匂ひを感ぜしめるまでには至つてゐないのである。

所が明治廿年頃から漸く原文の味はひを多分に保持した淸新緻密な文章を生むに至りその方面の開拓者はかの浮雲の作品によつて有名な二葉亭四迷であつた。

二葉亭と共に言文一致の生みの親とも言はるべき美妙齋も亦早く歐文脈の利用を心掛け當時としては耳障りな程新奇な表現を敢てしてゐるのであつてこの方面の功績も亦二葉亭に劣らな

いものがあるのである。

更に尾崎紅葉の如きも雅俗折衷の文體を愛好してはゐたけれども西歐文學の教養もあつただけに歐文表記のものもあちらこちらに認められて和文脈漢文脈の驅使せられてゐるのと共に三文脈の調和融合した姿は初めてこゝに求められるのである。

ついで藤村とか漱石などの作には彼等が手慣れた文體をもたなかつたために最初から容易に新文體による事が出來たのみでなく歐文脈も多分に攝取せられて明治期の文章の行きつく所を示してゐるかの觀があるけれども、未だ歐文脈を驅使するまでには至つてゐないのである。

歐文脈を高度に攝取し、しかも手についた巧みな表現を見出すまでには大正期を待たねばならなかつたので、白樺派の作家有島武郎などには最もけざやかにその例を見得るのである。

有島の文章は豪華奔放目も眩いほどの華麗さを示してをり、時に重厚さにおいて缺ける所はあるにもせよ、近代文章に新方向を指示したとも言ふべき歐文脈は彼によつてはじめて飜譯句調の域を脱し、自由自在に驅使せられるに至つたのである。

彼の武者小路實篤によつてはじめて眞の言文一致の作品を示されたのを考へ合すとき、白樺派の近代文章への寄與の甚だ大なるもののあるを認めなければならないのである。

かくて近代の文章には歐文脈の作用する事によつて今まで見る事の出來なかつた精緻微妙な筆致となりえたのであるが、その特質は又和漢洋の三文脈の融合調和した所に求められねばならないのである。

四

近代文章の第三の特質として擧ぐべきものは平明達意を主とする事である。明治以前の文章が兎角誇張され勝でしかも讀みにくかつたのに反して、これらの虛飾を奇麗に捨ててわかりいゝ事を主とした所に近代文章の一つの特質は求められねばならないであらう。卽ち既に早くもかの福澤諭吉が佶屈聱牙な漢文句調よりも好んで俗語を用ひんとしたのは一に多くの人々に文明の恩澤に浴さしめようとする彼の念願より出でたものではあつたらうけれども、文體の平易化にも與つて力のあつた事は確である。

彼の如何に平易な文を庶幾してゐたかは從來ならば「之を知らざるに坐する」と言ふべき所を「之を知らざるの不調法なり」と和げて言つたり、當時の表現を以てすれば「此事を誤解したる罪なり」と言ふべき所を「此事を心得違したる不行屆なり」などと言つたばかりでなく出

來上つた草稿をば女子供に讀ませては分らぬと言ふ漢語をば力めて平易な言葉に書改めたのによつても之を窺ひうるであらう。

更に言文一致の世に行はれるに至つた結果、兎角修飾的傳統的となりがちな地の文をまで、修飾の少い會話の文によつて牽制する事となり、ひいては文章一般を平易化するに役立つた事は何といつても爭はれない事實である。

猶從來何等の句切もなく長々と書續けられてゐた地の文と會話の文とが判然と別行に書き記されて一目して之と識別する事の出來るやうになつた事も近代の文章を讀み易いものとするのに大いに役立つてゐるものの如くである。

明治初年にあつては勿論假名垣魯文の安愚樂鍋とか末廣鐵腸の雪中梅などに見えるが如く、會話の文と地の文とは何等區別せられる事なく書き流されたものであり、しかも會話の文には一々その話者を小書きしたものであつたが、明治二十年頃には二葉亭の浮雲に見えるが如く

文三初は何心なく二階の梯子段を二段三段登つたが、不圖立止まり、何か切りに考へながら、一段降りてまた立止まり、また考へてまた降りる。……俄に氣を取直して、將に再び二階へ登らんとする時、忽ちお勢の子舍(へや)の中に聲がして

「誰方」
トいふ。
「私」
ト返答をして、文三は肩を縮める。
「オヤ、誰方かと思ツたら文さん。……淋敷ツてならないから、些とお噺しに入らツしやいな。」
「エ、多謝う。だが、最う些と後にしませう。」
「何歟御用が有るの。」
「イヤ、何も用はないが……。」
「それぢやア宜いぢや有りませんか。ネー入らツしやいよ。」
などと地と會話とを別行に書きわけ判然としてまぎれる事のないやうにしたために今までの文における如き雜然さからまぬがれ、一々話者を小書する必要のなくなつたのみでなく、文に多分の平明さを加へたことも爭はれない事實である。
或は歐文に用ひられる ， ； ． などから刺戟せられて、とか。とかが添加せられるに至つた

ばかりでなく

○何も知らぬから、昇は例の如く、好もしさうな目付をして、お勢の顔を視て、挨拶よりまづ戯言をいふ。お勢は莞爾ともせず、眞面目な挨拶をする。――彼此齟齬ふ。（浮雲）

○此方は、なに、返答をするものか、と力んだ（?）面相（同前）

○來年は四十だといふ、もう鬢に大分白髪も見える、汚ない髭の親仁の私が、親に繼いでは犬の事を憶出すなんぞと、餘り馬鹿氣てゐてお話にならぬ――と、被仰る方が、有るかも知れんが、私に取つては、ポチは犬だが……犬以上だ。犬以上で一寸まあ、弟……でもない、弟以上だ。何と言つたものか?……さうだ、命だ、第二の命だ。（平凡）

などの例にも明かな如く……とか――とか（　）とか或は!とか?などの記號を巧みに使ひわける事によつて、從來の文章よりも遙かに近代の文章をして讀み易いものとさせないではをかなかつたやうである。

山田美妙は好んで新しい表現をとつただけに、かゝる方面においても亦珍らしい工夫をこらしてをり、

○「おや杉田素清! や、此處に居るのか。すぐ傍だ、己の下宿の。どうしてそれを己は知

らなかツたか。して見れば此間の晩載せたのは‥あツ。胸の金時計‥なるほど左様言へば杉田も金時計。こりや意外な。はてな、杉田はあの時己が車を曳くと知ツたか知らん、杉田が‥己を‥車を曳くと。」（美妙・花ぐるま）

○「此處を讀んだらさぞ御兩親も‥大よろこ‥」「‥び」とまでは言ひ切らぬ間、はやくも兩親のよろこんで居る笑顔が現れて――笑顔、父親のはうるほツた目、母親のはふるへる脣！（美妙・この子）

などの例に見える如く‥とか――とか！とかを用ひてゐるばかりでなく、と〻とを區別したり「　」の微妙な用法をも示してをり、更に歐文の花文字から思ひついたものか一節の最初の文字だけは特に繪によつて現してゐるのなども注目せらるべきであるけれども彼とても餘り奇に過ぎると思つたものか二三の作品に試みただけであつた。

小波の新八犬傳にも回の改る每に冒頭の文字を黑圓の中に白く浮出させ圓の上に犬を配して標題に相應しい工夫をこらしてゐるのが見られるけれども他の作品には跡を絕つたやうである。

或は小波と同じ硯友社門の石橋思案の乙女心を見るも

○年はモ早や五十の上を越して通常なら火桶へでも噛り附いて＝早く初孫の顔が見たい＝抔と云ふ處を夜中に此針仕事感心なものです。
○若者は矢庭に首を上げ＝ナアー＝…モウ…＝ト再び此女と顔を見合せましたが似て居る…生寫と云ふ感じはます／＼深くなりまして＝アノ貴郎…＝ト云ふ鹽梅は――五年前國を出立する時村盡までお雪が送ツて來て哭れて別れ際に＝貴郎…早く立派になツて妾達を迎ひに來て下さい…＝ト泪を流して云ツたアノ時の貴郎に寸分違はない＝トこんだは形ばかりでなく無形の音聲まで似て參りました＝どうして世間にはかうも似た者があるだらうか？…＝ト考へますとアラ不思議…妙に此女がこひしく慕はしくなツて來ます。偖も不思議なは心理學で云ふ思想の連絡でせう？

の如く――…＝。。？などを巧みに使ひこなしてゐるのが見られるのである。

更に硯友社の棟梁紅葉の文を見るに、これらの符號は手に入つて用ひられてをりこゝにも文章報國を念としてその形式に血の出るやうな努力を惜しまなかつた彼の工夫の跡を認めないではをられないのである。卽ち

○我是ない子供のやうに、（お前は何故死んだ、死ぬことはならん。死ぬといふ法は無い。）

と死顔の被(おほひ)を取つては、棺の前に坐つては、墓標を搖つては、位牌を眺めては、寫眞を取出しては、聲こそ立てぬが、心の中では悶え〳〵て絶叫した。

○彼の（兄樣！）と呼ぶのは今に始めたのでは無い、お類の存生中折々遊びに來た時分からの（兄樣！）で、又改めては一昨夜(をとゝひ)からの（兄樣！）である。けれども柳之助の耳には、今日の（兄樣！）は例(いつも)のとは違つて、別の意味でもあるやうに聞えたのである。

などは（　）を巧みに用ひたものであり前者にあつては口に出してではなく心の中の氣持を之によつて現したものであり、後者にあつては一種の強調に用ひたものの如くこゝにリズムをさへ感ぜしめるに至つたものである。

彼の金色夜叉を見るもこの方面の工夫は怠らずに施されてゐるのであつて、例へば

「金剛石(ダイアモンド)！」

「うむ、金剛石だ。」

「金剛石??」

「成程金剛石！」

「まあ、金剛石よ。」

「那が金剛石？」
「見給へ、金剛石。」
「あら、まあ金剛石??」
「可感い金剛石。」
「可恐い光るのね、金剛石。」
「三百圓の金剛石。」
の如く!とか?とか??などを用ひる事によつて不思議がるものとか感じ入つたものとかの程度の差をも示してゐるばかりでなく
「あゝ寒い！」
男は肩を峙てゝ直と彼に寄添へり。宮は猶默して歩めり。
「あゝ寒い!!」
宮は仍答へず。
「あゝ寒い!!!」
彼は此時始めて男の方を見向きて、

「如何したの。」
「あゝ寒い。」
「あら可厭ね、如何したの。」
「寒くて耐らんから其中へ一緒に入れ給へ。」
なる會話に於けるが如く！とか!!!!!などの用ひられてゐるのによつても段々聲を張り上げては默りこくつた對手の唇を開かせようとする技巧までもあり〳〵と看取せられるのであるが、しかも！!!!!と漸次上昇をつゞけて行つた會話も一度「如何したの」といふ言葉が女の口かられるや「あゝ寒い」と男は唯今までの餘韻をひゞかせては對手の心を引つけんとしてゐるのに過ぎないのであつて最早！一つさへ用ひられてゐないのも亦巧みと言ふべきである。
かくの如く硯友社一派によつて諸種の符號の文章に取入れられた事は文の理解を容易ならしめるのに役立つたのは勿論のこと更に話者の音聲の大小をも響かせうるものまで見受けられる事は甚だしい成功と言はねばならないであらう。
漢文脈に支配せられた明治初期の文章から漸次俗語を交へたものへと轉じ更に言文一致の出現に及んでは、地と會話とを判然と別行に書記して之を區別したばかりでなく、地の文も會話

の文と共に傳統的修飾的な辭句を漸次減少していつた事は近代の文章をして平易暢達なものとせないではおかなかつたのであるが、更に歐文の組織から暗示を受けては、。はもとより……——＝！!!!!!？??ゝ°°「」（）などと種々な符號を巧みに使ひこなしてゐるのも亦この新時代の文章を平明なものたらしめるのに役立つてゐるやうである。

五

近代文章の第四の特質としてわれわれはこゝに簡明精緻なる點を擧げなければならないであらう。

近代の文章も明治初期にあつては猶舊樣式の表記法を踏襲してゐたに過ぎず從つて假名垣魯文の文に見える如く

鴨の脛の短きも。鶴の脛の長きも。割烹の法を得。鹽梅の術を盡さば。豈憂ひ悲むことあらん哉、倩(つらく)惟るに。莊周が獻立。伊尹が會席は。板前の淸く。俎箸(まなはし)の直にして。然も陰(くも)らぬ庖丁なれども。七五三代の古風に傾き。八珍九獻の當世に協はず。今哉外國の珍客。交際の佳宴をひらき。互市(たがひ)に盡す饗應も。万里製を異にして。飲食の設け等(ひとし)類からず。然

れども佳味の佳味たるは彼我同一なり。云々（安愚樂鍋・西洋料理通跋）

などと間延のした冗長なものであつた。この文は跋のために少しは修飾誇張せられた點もあらうけれども、本文の冒頭を見るも

傳染病の新聞に。賣弘めたる牛肉の。功能もむなしくならんかと。牛肉舗の主人角を折り。肉を減しちからを落し。林涅爾孛斯土を病たる如く。豫防ぐ手術もなかりしに。他國は知らず掛幕も。あやに畏き

我邦は。八百万神達と。親類一家のよしみあれば。忽地例の神風に。吹はらうたる晴天白日。再び盛る牛店の繁昌。云々。

の如くさして變化を見ない程な遲緩さを示してゐるのであつて達意簡明を主とすると言ふよりは傳統的な形式美を尊んでゐるものとも考へられるのである。

これに反して近代の新文章は達意を主として簡明を旨とせるものであつて虚飾とか誇張とかをさけて有りの儘を忠實に描き出さうとしたものであるけれども、簡明と言つても舊樣式の表記におけるが如き不必要な修飾を捨て去つたものに過ぎず、近代的な複雑な想情を盛るにあたつて、もし必要となればいくらでも筆を惜しまなかつたのであつて、簡明と精緻との一見矛盾

するが如き特質を同時に備へてゐるものと言つても過言ではないであらう。
○轟然と驅けて來た車の音が家の前でパツタリ止まる。ガラ〳〵と格子戸が開く。ガヤ〳〵と人聲がする。（二葉亭・浮雲）
○此方も早くと。塗る。着る。車が來る。乘る。走る。（紅葉・二人女房）
○不圖應接室の戸を叩く音がした。急に二人は口を噤んだ。復た叩く『お入り』と聲をかけて、校長は椅子を離れた。（藤村・破戒）
などと句切の短い簡明な表現によつてきび〳〵と事件なり動作なりの推移を展開してゆく事は確かに近代の新文章の前時代の文章に勝れた點と言はねばならないのであるが、簡潔な表現の中にも複雜纖細な近代的想情を盛りえてゐる事も亦見逃す事は出來ないであらう。
「文さん、どうかお爲か、大變顏色がわりいよ。」
「イエ、如何も爲ませぬが……。」
「其れぢやア疾くお爲よ、ソレ御覽な、モウ八時にならアネ。」
「エー、まだお話し……申しませんでしたが……實は、さくじつ……め……め……。」
息氣はつまる、冷汗は流れる、顏は赧くなる、

如何にしても言切れぬ。暫く無言でゐて、更に出直して、

「ム、めん職になりました。」

ト一思ひに言放ツて、ハツと差俯向いて仕舞ふ。(二葉亭・浮雲)

などには、懸詞や枕詞まで用ひた遊戯的な手法はすつかり影をひそめてしまつて、簡潔な文章のうちにも、被免になつた文三の複雑微妙な氣持を描き出してゐる事は巧みといふべきである。更に藤村の春を見るも子供の看病のため一週間ばかり碌に眠つた事もない父の三吉を描くにあたつても

何時電報が掛つて來るか知れないといふ心配は、容易に三吉を眠らせなかつた。身體に附いて離れないやうな病院特別な匂ひが、プーンと彼の鼻の先へ香つて來た。その匂ひは、何時の間にか、彼の心をお房の方へ連れて行つた。電燈がある。寢臺がある。子供の枕頭へは黑い布を掛けて、光の刺戟を避けるやうにしてある。その側には妻が居る。附添の女が居る。種夫も下婢も居る。白い制服を着た看護婦は病室を出たり入つたりして居る。未だお房は、子供ながらに出せるだけの精力を出して、小さな頭腦の内部が破壞れつくすまでは休めないかのやうに叫んで居る。——思ひ疲れて居るやうに、三吉は深いところへ陷

入るやうに眠つた。

の如くに深い眠に陥るまでの夢をまで歴史的現在法を用ひて極めて詳細に寫してゐるのも亦簡明の反面にあつて精緻を目指す新文章の特質をよく物語つてゐるものである。

かくて虚飾を避けて簡明率直な表現をとるやうになつたのと共に複雜な近代的想情を寫すにあたつては亦忠實精緻を極めてゐる事も舊樣式の表記法とは全く異るものと言ふ事が出來るのである。

六

近代文章の第五の特質として次に數へらるべきものは個性的なる點であらう。

從來の文章といへども源氏には源氏の特質があり、今昔には今昔、軍記には軍記、狂言には狂言とそれぞれその差異を有してをりその他の浮世草子・淨瑠璃・讀本・人情本などにも各表現上の特徴を見出す事は出來得るけれども近代の作家ほど各人各樣の文章を示し從つて個人差の甚しい表現の見られるやうな事は到底他の時代にあつては望めない所である。

即ち他の時代にあつては物語には物語體淨瑠璃には淨瑠璃體讀本には讀本體とでも言ふべき

一種の型はあるけれども、同じ文學形態の作者の間にあつては甚しく個人差を見出しえないのに對して近代の新文章にあつては各人各樣の表出法が見られるのであつて從つて各作者間の個人差は時代の下るのと共に增加の傾向を示してゐるものとも言はれるであらう。

近代にあつても明治初期に於いては假名垣魯文の如く舊樣式によつてゐるのであつて未だそこには

▲たらじひらけし人力の車力二人づれきのふきんざいゆきのなが丁ばにてしつかりとせしめたるほねやすみからだのやしなひにうしをくひにきたると見えひとへものの下タへ白きつゝぽうをきてらしのせゐとさけのあたゝまりでさむさをわすれりやうはだをぬぎつゝぽうのはだぎをあらはしたるてい圖のごとし五郎八ちやわんでさしつおさへつよほどどろけん　（「安愚樂鍋」人車の引力語）

▲なりはつむぎの紺地へ魚がしと白ぬきの大文字にて染めぬきもつとも白字へらすねずみをかけたる上ハ着下タ着はかへツてぢみなるものどうらはもみとしるべしあかいじゆばんのそでをびら〳〵出しかけとくい客と二タ人づれにてさるわかまちをしりぞきうるさくとりまく仲間のものをとほざけたるはひとりでうるほふつもりなるべしさいぜんからうしなへにてさしつおさへつのみかけてよほどまはりしゐひきげん　（「同前」芝居者の身贔屓）

などと何等新しみを求める事は出來ないのであり從つて個性色の躍動をも亦見出す事は出來ないのである。

けれども明治も廿年以後、新文章の育成せらるると共にそれ〴〵個性色のけざやかな表現を見るにいたり、

文三が二階を降りて、ソッとお勢の障子を開ける途端に、今迄机に頬杖をついて何事か物思ひをしてゐたお勢が吃驚した面相をして、些し飛上ツて居住者を直した。顔に手の痕の赤く殘ツてゐる所を觀ると、久敷頬杖をついてゐたものと見える。

「お邪魔ぢや有りませんか。」

「イヽエ。」

「それぢやア。」

ト云ひ乍ら、文三は、部屋へ這入ツて、座に着いて、

「昨夜は大に失敬しました。」

「私こそ。」

「實に面目が無い。貴嬢の前をも憚らずして……今朝その事で慈母さんに小言を聞きました。アハヽヽ。」

「さうオホヽヽ。」

ト無理に押出したやうな笑ひ聲、何となく、冷淡い。今朝のお勢とは、全で他人のやうで。

（二葉亭・浮雲）

の如きには今迄の文章に屢見られた舊い型は漸く影をひそめてをり、「些し飛上ッて居住居を直した。」とか「無理に押出したやうな笑ひ聲」とかに人物の表情をも巧みに描出してゐるばかりでなく、お勢を寫すにあたつても顏に殘つた赤い手の痕から「久敷頬杖をついてゐた」ことまで見逃さなかつた所に作者の深い觀察の跡を認める事も出來ようし、「今朝のお勢とは、全で他人のやうで。」と故意に中斷させてゐるのなども終止樣式に變化を求めようとした作者の技巧と言はねばならないのであつて、清新緻密な二葉亭の文章の特質はこの短文の中にも窺ひえられるのである。轉じて

鷲見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては今朝のやうに、唯の今のやうにも思ふ。餘り思ひ窮めては、未だ生きてゐるやうに想つてゐる。なるほど病の爲に敢無くはなつた、氷のやうに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも斂めたれば、葬送も出した谷中の土に埋めて樒の位牌になつて了つて、現在此に在るからは、假でもなければ、夢でもなく、確

に死ぬだに極つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の内には、その可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。（紅葉・多情多恨）

を見るに、ねばりのある文によつて顯然と胸中にうつる妻の影像をかき消す事も出來ず、第二の生命を奪はれたのを歎いては戀々としてわびしい日を送つてゐる主人公柳之助を描き得て妙であるが、「未だ昨日のやうに想つてゐる」、「時としては今朝のやうに、唯の今のやうにも思ふ。」と疊みかけたり、「確かに死んだ」證據としては「病の爲に敢無くなつた」とだけではまだ承知が出來ず、「氷のやうに冷えて、美しい目」の固く閉ぢてしまつたことや、棺へ斂めたこと、葬送を出したこと、谷中の墓地に埋めたこと更に現在目の前にある樣の位牌を採り上げるなど、一見馬鹿げた大人氣ない理由を列べあげてゐる所にかへつて妻の死を信ずる事の出來ぬ主人公の氣持を表すのに充分役立つものがあるのであつて、紅葉の非凡な筆力はこゝにも見受けられるのである。しかも「去る者は日に疎しであるが」とか「如何にも其の軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが」とかにとかく雅俗折衷の文の臭味があらはれてをり、永く慣れ切つたこの文體から足を洗ふ事の甚だ困難だつたにも拘らず新文體へと潔く轉向した紅葉の偉大さを物語つてゐるのである。しかも「去る者は日に疎しであるが」から最後の句點までの間に

三つの句點があるけれどもこれとても「彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる」、とか「なるほど病のために敢無くはなつた、」とかその他數多く用ひられてゐる如くに、讀點でも一向差遣へない程前後の接續が緊密である事も舊い様式の陰影とも見られるのであるが、これがためかへつてこんな場合の主人公の愚痴つぽい氣持を表すのに役立つてゐる事もたしかである。

かくて我々は二葉亭の文章には見られなかつた凝つた表現をこゝに見出し得るのであるが、紅葉の特徴もこゝに認められるのであつて、個性色の鮮かな新文章の潮流に棹すものなる事を如實に物語つてゐるものと言ふ事が出來る。更に

「隨分遠いね。元來何處から登るのだ。」

と一人が手巾で額を拭きながら立ち留まつた。

「何處か己にも判然せんがね。何處から登つたつて、同じ事だ。山はあすこに見えて居るんだから」

と顏も體軀も四角に出來上がつた男が無雜作に答へた。

反りを打つた中折の茶の廂の下から、深き眉を動かしながら、見上げる頭の上には微茫な

る春の空の、底迄も藍を漂はして、吹けば揺ぐかと怪しまるゝ程柔かき中に屹然として、どうする氣かと云はぬ許りに叡山が聳えてゐる。

「恐ろしい頑固な山だなあ」と四角な胸を突き出して、一寸櫻の杖に身を倚たせて居たが、

「あんなに見えるんだから、譯はない」

と今度は叡山を輕蔑した樣な事を云ふ。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つ時から見えてゐる。京都へ來て叡山が見えなくなつちや大變だ」

「だから見えてるから、好いぢやないか。餘計な事を云はずに歩行いて居れば自然と山の上へ出るさ」

細長い男は返事もせずに、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで居る。日頃からなる廂に遮られて、菜の花を染め出す春の強き日を受けぬ額丈は目立つて蒼白い。(漱石・虞美人草)

なる漱石の文を見るに、前掲の二つの文とはまた變つた味を容易に見出しうるであらう。卽ち會話を以て文をおこしたのも面白いし、人物の名前を初からあらはさず「顏も體軀も四角に出來上つた男」とか「細長い男」位に簡單に呼びすてゝおき、その性格を讀者にはつきりのみこ

ませて後、漸くその名を表さうとしたのなども亦巧みと言ふべきである。更に「どうする氣かと言はぬ許りに叡山が聳えてゐる」とか「恐しい頑固な山だなあ」とか「今度は叡山を輕蔑した樣な事を云ふ」とか擬人法を多く用ひてユーモアを漂はせたり、「見上げる頭の上には」「叡山が聳えてゐる」とすれば、それでいゝところを「微茫(かすか)なる春の空の、底迄も藍を漂はして、吹けば搖ぐかと怪しまるゝ程柔かき中に屹然として、どうする氣かと言はぬ許りに」と極めてゆつくりと逼らぬ筆の運び振りを示したり、「日頃からなる廂に遮られて」「廣き額丈は日立つて蒼白い」と言つておいてもすむ所に「菜の花を染め出す春の强い日を受けぬ」との言葉を途中に挿入しないではをられなかつたのは、文章にも餘裕の必要を力說した作者漱石の筆になる事を物語つてゐる。しかもその餘裕なる態度も純東洋的なものなることと、彼の漢籍に對する愛情の念、及びどちらかと言へば文章體或は漢字假名交り文が好きであると彼自ら言つてゐるのなどを合せ考へるとき、漱石の文章における悠揚として逼らぬ餘裕と口語文の中にも兎角文章體若くは漢文脈の間々混入してゐる事情をも推察するに難くないのであり、彼の文章における特質をも容易に諒解する事が出來るのである。

かくの如く二葉亭紅葉漱石の三人の作家の表現形式を採り上げてみてもそれ〴〵その特質を

備へてをり、舊時代の文學におけるが如く一つの型をこゝに見出す事は到底出來ないのであるが、新時代の文章の一つの大きな特色は確に類型的より個性的となつた所に求められるものと考へられるのである。

七

更に修辭的に眺めて歴史的の現在を好んで用ひたり、擬人法を多く用ひてゐる事や、或は難かしい漢語につとめて平易嶄新な振假名をつけようとしてゐることなども亦近代の新文章の第六の特質としてこゝに列擧するのを至當と思ふのである。

歴史的現在はその事件が眼前に展開してゐるかの如き強い感じを讀者に與へうる點において、かの過去形を用ひたのと大いにその趣を異にするものであるが、舊樣式の表現には全く見られなかつた所であり、歐文の影響によつて近代の文章に始めて採入れられたものなのである。

二葉亭の浮雲を見るに

高い男は玄關を通り拔けて、椽側へ立出ると、傍(かたへ)の座鋪(ざしき)の障子がスラリ開いて年頃十八九

の婦人の首チョンボリとした摘ツ鼻と、日の丸の紋を染拔いたムックリとした頬とで、その持主の身分が知れるといふ奴が、ヌツと出る。

の如き書き振りが殆んど全卷を貫いてをり寧ろ過去形を用ひた表現の方が數少いのによつても如何に浮雲が文體の上から見ても嶄新なものだつたかを證する事が出來るのである。この歴史的現在を用ひて最もよくその狀景を描出してゐる例は同じく二葉亭の平凡の一篇に見出しうるであらう。

ジヤン〳〵と放課の鐘が鳴る。今迄靜かだつた校舍内が俄に騷がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して慌だしくパツ〳〵と開く。とその狹い口から、物の眞黑な塊りがドツと廊下へ吐出され、崩れてばら〳〵の子供になり、我勝に玄關脇の昇降口を目蒐けて駈出しながら、口々に何だか喚く。只もう校舍を撼つてワーツといふ聲の中に、無數の圓い顏が默つて大きな口を開いて躍つてゐるやうで、何を喚いてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又紛々と入亂れ重なり合つて、腋の下から才槌頭が偶然と出たり、外齒へ肱が打着かつたり、上を下へと捏返した擧句にワツと門外へ押出して、東西へ散々になる。

の如きは放課後の喧騒を言ひ得て妙であるが、かゝる手法は歐文脈の侵染と共にあらゆる作家に迎へられて、美妙（「花ぐるま」「蝴蝶」など）紅葉（例「三人女房」「多情多恨」）をはじめ、漱石（例「吾輩は猫である」「坊ちゃん」「虞美人草」）なども亦好んで現在法を主流とした作品を示してゐるのであるが、特に漱石の如きはこの文體によつたがためにその表現に眞率味を漂はすと共に遁らない餘裕を盛るのにも甚だしく效果的だつたとさへ思はれるのである。

擬人法も亦歐文脈の流入と共に近代の文章に好んで攝取せられる事となつたのであるが、美妙の情詩人（明治廿一年・我樂多文庫）を見るも既に

夢となれバやがて誰やらの美くしい顏を見るべき眼も空しく天井に垂線を立てゝ、薄暗いランプが畫いた圖の邊をさまよつて居ます。

の如く用ひられてをり流石は新奇な表現を好んだ彼だけあると思はれるのである。

更に巖谷小波の五月鯉（明治二十一年・我樂多文庫）にも

その梢の頂きハ遙かに遠山の入日と睨め合をして居るが太陽は先を急ぐから態と勝を譲てソロ〳〵山の陰に逃げて入らつしやる、然し名殘りは盡きぬかしてヲシイ〳〵と泣き立て居る蟬の聲、さうかと思へば頻りに急がして居る蜩の啼く音、イヤ中々賑かなことだ、

と引續いていくつもの擬人法が使用せられてをり、國木田獨歩の武藏野（明治卅四年）にも

〇此溝の水は多分、小金井の水道から引たものらしく、能く澄で居て、青草の間を、さも心地よささうに流れて、をり〳〵こぼ〳〵と鳴ては小鳥が來て翼をひたし喉を濕ほすのを待て居るらしい。

〇雲の影が流と共に、瞬く間に走て來て自分達の上まで來て、ふと止まつて、急に横にそれて仕了ふことがある。

などといくつもその例を見受けられるのである。彼の漱石の草枕とか虞美人草を見るも亦この手法を採り用ひて

〇枝繁き山櫻の葉も、深い空から落ちた儘なる雨の塊りを、しつぽりと宿して居たが、此時わたる風に足をすくはれて、居たたまれずに、假の住居を、さら〳〵と轉げ落ちる。（草枕）

〇微茫なる春の空の、底迄も藍を漂はして、吹けば搖ぐかと怪しまるゝ程柔かき中に屹然として、どうする氣かと云はぬ許りに叡山が聳えて居る。（虞美人草）

などと巧みな表現によつて讀者に逼らない餘裕を感ぜしめるものもあれば、更に一歩を進めて終始この手法によつて貫かれた作品とも言はるべきものは「吾輩は猫である」であらう。猫は

輕妙な筆致によつて有名であるばかりでなく、擬人法を極度に生かして用ひてゐる點においても亦注目すべき作でなければならないのである。

かくの如く近代の新文章には擬人法は盛に用ひられてゐるのであるが、特にこの用法の具體的な事物のみならず抽象的なものにまで及んでゐる事は新文章の大きな特色と言ふべきである。舊時代の表記法にも擬人法はその數こそ少なかつたが全然用ひられないのではなかつた。けれどもそれは單に一部の具體的事物に限られてをり

○シスターといふ言語(ことば)ばかりが腦で競馬をしてゐます(美妙・花ぐるま)

○次第に精神(こころ)は身體を脫けて身は無何有の鄉へ轉居したものと思はれるものです(同前)

○これだけの愚案がしば〳〵往復して居るばかりです。(同前)

○魂が何時の間にか有頂天外へ宿替をすれば靜かに坐つてもゐられず(二葉亭・浮雲)

などと言語とか精神とか魂とかの如く抽象的なものにまで及ぶには明治を待たねばならなかつたのである。

有島武郎の如きもこの手法を巧みに用ひてゐる事は既に前篇第三章に於て述べた所である。難解(むつか)しい漢語に容易(やさ)しい振假名を付ける事は既に江戸時代に於ても盛に用ひられた所である

けれども、明治以降の新文章にあつても個性色を出さむとして屡この手法の採り用ひられてゐるのを見るのである。即ち假名垣魯文の如きにあつては

墮落個(なまけもの)　詔諛(おべつか)　江湖談(うきよばなし)　文盲(ものしらず)　無益(むちや)　（安愚樂鍋）

などと舊様式そのまゝに振假名を付けてゐるに過ぎないのであるが、山田美妙の花ぐるまには

燈火(あかり)　幽靈(おばけ)　巡査(おまはり)さん

などの平易な言葉にまで猶別の振假名を付ける事によつてこの方面にも新味を出さんとしてゐるけはひを感ずるのであるが、この傾向は二葉亭にも現れて

全然(まるツきり)　擧動(そぶり)　服裝(こしらへ)　（浮雲）

生計(くらし)　不覺(つい)　路傍(みちばた)　混雜(ごたく)　區劃(しきり)　判然(はつきり)　（平凡）

などとその例を見出されるばかりでなく、國木田獨歩にも採り用ひられて

光澤(つや)　微溫(ぬる)き　空車(からぐるま)　（武藏野）

圓形(まる)　普通(なみ)　勸告(すゝめ)　（置土產）

突然(だしぬけ)　用意(したく)　銃丸(たま)　（鹿狩）

兩親(ふたおや)　斷念(あきらめ)　（少年の悲哀）

など好んで使用せられてゐる。更に紅葉の金色夜叉にも

服裝　相貌　前面　午餐

の如くこの流を引くものを見出しうるのであり、漱石の虞美人草にも

體軀　袖無　隣家　判然　暗夜

などと用ひられてをり、荷風の「すみだ川」とか「あめりか物語」などにも

歩調　經歴　戸外　（すみだ川）

談話　外部　路傍　平常

などと多くの例の見られるのによつても、この流風の漸く盛になつたのを知りうると共に、舊様式の表記にも見えるが如く難解な語に平易な振假名を用ひるばかりでなく、平易な語にまで新しい假名を振る事によつて文に個性色を濃かならしめようとした作家の努力の跡も見逃す事は出來ないのである。即ち振假名一つの問題においても舊様式から漸次新様式に移らんとする努力と精進の跡を我々は容易に之を認めうるのであつて、近代文章の一つの特色はこゝにも求められねばならないのである。

八

近代文章の第七の特質として吾々はこゝに形式中心より內容形式融合へと移つていつた點を擧げねばならないのである。即ち明治も廿年頃までは舊樣式を墨守してゐたに過ぎなかつたが廿年以後新文章の誕生を中心として、小說家はまづ自己の文章によつて如何に讀者にうつたへるべきかを考へねばならなかつた。

新文章をめぐつて將來の文章ともいふべきものが未だ見透されなかつた時代にあつてはまた止むを得なかつたらうけれども、とにかく此處に形式中心の時代を誘致した事は爭はれない事實である。

かくてこの時代の作家にして小說にに筆を染めるものは自己の目新しい文體を讀者に指示するがために我樂多文庫に於けるが如くその目次にも

五月鯉　第一回（言文一致體）漣山人
風流京人形　第一回（雅俗折衷體）紅葉山人
情詩人　第一回（言文一致體）美妙齋

などとあだかも文體の展覽を見るかの觀を呈してゐるものもあれば、更に二葉亭の浮雲のはしがきに

薔薇の花は頭に咲て活人は畫となる世の中獨り文章而已は黴の生えた陳奮翰の四角張りたるに頬返しを附けかね又は舌足らずの物言を學びて口に涎を流すは拙し是はどうでも言文一途の事だと思立ては矢も楯もなく云々

と言つてゐるのをはじめとして、美妙のこの子にも

文體は言文一致の中流ですが出來るだけ敬語と助動詞の數を減らしました。時（テンス）（過去、現在、および未來）の用ゐ方も今度は成るたけ律で推せるやうに勉めました。

なる但書があり、小波の妹背貝にも讀者心得として

第三條　文體は例の言文一致ゝ少し何かがかぶれた所あれども、此作者ならでは斯うは書けず。有り難く拜讀すべき事。

第四條　此の小説は、句讀無くして讀めるものに非ず。乃ち、ゝ。の三通りの句點を設けたり。一生懸命之に便る可き事。

第五條　此の小説には――（ダッシ）……（リーダー）多く、＊＊＊（スター）や（　）（クヮッコ）を用ひて、大いに妙味を助けたる處あり。

根岸のお爺さんの云ふことなんぞ、ゆめ〳〵ほんとにすべからざる事。

などの表現形式について細々と書き記さねばならなかつた事によつても如何に文章が作者並びに讀者の關心する所だつたかを證するに餘りあると思はれるのである。

彼の硯友社の總師紅葉の如きは文字通りに文章に腐心した人に外ならないのであるが、讀者も亦彼の豐麗な表現には恍惚とならないではをられなかつたのを見ても表現中心の時代だつたと言つても過言ではないであらう。

硯友社の時代を經て自然主義の世に迎へられるに及んでは一人として文章第一をその旗印とするものはなく藤村の如きは寧ろ硯友社一派の虚飾を清算する事によつて「家」以下の優れた作品を示したのであつて、こゝにあつては內容と形式とは渾然融和しきつてをり、かの文章中心時代のそれとは同日に論ずる事は出來ないのである。

內容によつて形式を決定してゆかうとする傾向は自然派に啣まれたものであるが、更に白樺派に至つて一段の進展を示し、武者小路實篤の如きは調子にのつた文章とか空虛な文章を嫌ひ、「內容に一番ぴつたりあつた」表現を用ひようとしてゐるのである。

更に新思潮派に至つては芥川龍之介の內容卽形式論とか菊池寛の文藝の內容的價値とかの如

く最もけざやかにその形を備へてゐるのである。

かくて近代の文章の一つの大きな特質は形式中心より内容形式融合へと轉換して行つた所に求められねばならないであらう。

九

以上私は近代文章の特質として七ヶ條を列擧したのであるが、中でも特に大書しなければならないのは「歐文脈の流入」と「言文一致」とである。

卽ち歐文脈の流入によつて我が國の文章は全くその面目を一新したのであり、近代文章の方向は實にこれによつて決定せられたと言ふも敢て過言ではないのである。

「文明開化」を合言葉とする明治の新人によつて西歐の文物の輸入せられ、彼等の生活の歐化せられると共に、彼の地の表出法も亦自然と採入れられないではをらなかつた。

明治期にあつても旣に漱石とか藤村とかの如く巧みに之を用ひてゐるものも見受けられるのであるが、大正期の白樺派の作家有島武郎によつてはじめて自由に驅使せられるに至つてゐる。更に新思潮の菊池寛の如きにあつては目立たないまでに生活に卽して用ひられてゐるのが

見られるのである。

歐文脈も美妙などの時代には耳障りなほど新奇なものであつたに違ひないのであるが、歐風生活の一般化と共に近代人の想情を發表するに必要缺くべからざる媒介となり了つたのであつて、その例は最もよく寛の長篇物において認められるであらう。

更に近代人の複雜微妙な生活感情を描くにあたつては話言葉と甚だしく隔絶した不自由な文語表記に甘んずることは出來なかつた。しかも時あたかも歐化の潮流に乘り、舊物破壞の盛に行はれた事とて、文章のみ獨りその俎上にのせられないではをらなかつたのである。

かくて近代文章は Written language を淸算し、つとめて Spoken language に近づからとしたものとも言ひうるのである。

明治期にあつても漱石とか藤村とかの如く言文一致の優れた作品を示したものもあるけれども、そこには未だ文語的な臭味を帶びてゐる事も亦爭はれない事實である。

言文の眞の一致が文章として最も望ましいものであるか否かは別として、その例は白樺派の作家武者小路實篤によつてはじめて示されたものである。

武者小路に至る近代文章の歷史は言と文の一致に向つて進展していつたものであつて、子規

とか藤村とか漱石などはそれ〴〵この運動に參畫したものであつた。

かくてわれわれは近代文章の最も著しい特徵として「歐文脈の流入」と「言文の一致」とを擧げれば他は自ら導き出されるものと信ずるのである。

第四篇　文章論の推移

一

傳統的な舊様式の殻を破つて新たに生れ出でた言文一致の表記法は近代文章の新方向を指示したものであり、その誕生より完成への歷史は卽ち近代文章史を形造るものに外ならないのである。かゝる新文章の育成に最も緊密な關係を有するものは何と言つてもその文章論であつた。既に近代文章の變遷特質を眺め來つたわれわれは此處に新文章をリードした文章論の推移へと考察の眼を轉ぜねばならないのである。

明治十二年五月文部省印行の菊池大麓譯修辭及華文は純文學理論としての最初の出版であつて、その中に「一般文體ノ品格ヲ論ス」として簡易（シンプリシテー）・明晰（クリヤネス）・感動（フイーリング）・徹底（エクスプレツシーブネス）・洗新（フレツシネス）其の他を列擧しては一々詳しい說明をしてゐるのであるが、當時としてはあまり顧みられなかつたものの如く、わづかに明治十八年三月出版の小說神髓に引用せられてゐる位に過ぎないのである。

小說と言へば馬琴種彦の糟粕が一九春水の賢物のみ多かつた當時にあつて、坪内逍遙の小說神髓は明治新小說の正しい進路を指示したものであるが、その中の文體論も亦最も早く文章の事に論及してゐる點において注目せられねばならないであらう。

彼に從へば「文は思想の機械」であり、また「粧飾」でもあつた。脚色のみ如何に巧妙にても、文をさなければその意味をうまく讀者に通ずる事は出來ないのである。更に

支那および西洋の諸國にては言文おほむね一途なるから、殊更に文體を選むべき要なしと雖も、わが國にては之れに異なり。文體にさま〴〵の差異ありて、各々一失一得あり、利不利その用ひどころによりて異なる由あり。是れ小說に文體を選まざるべからざる所以なり。

と言つてゐるのも、雅文・俗文・雅俗折衷文などと混戰狀態にあり、未だ文體の確立してゐなかつた當時にあつては然るべき事であるが、轉じてこれら三文體の說明に入り、第一に雅文體を擧げ

雅文體はすなはち倭文なり。其質優柔にして閑雅なれば、婉曲富麗の文をなすにはおのづから適へりといへども、惜しいかな活潑豪宕の氣なし。

と言つてゐるのである。卽ち小說に畫くべき事物のうちには優柔閑雅なものばかりでなく、激昂雄快なものも悲凉沈痛なものも或は抱腹絶倒すべきものもある筈である。然るに雅文にしてはこれら激切な感情を描き出すには不適當であるとして

假令紫女の大筆をもてするといふとも、我が文明の情態を彼の純粹なる倭文をもて寫しいださむはかたかるべし。

と言つてゐるのも尤もな見解と言はねばならないのである。

第二には俗文體を擧げて

俗文體は通俗の言語をもてそのまゝに文をなしたるものなり。故に文字の意味平易にして、審に解しやすきの德あるのみかは、別に活動の力あるから、所謂華文に必要なる簡易の品格・明晰の品格はいへばさらなり、峻拔雄健なる勢力あり、追懷愛慕の想念をも惹起しつべき品格あり。加之、時としては文字の音調、氣韻共に頗る情趣に適應して、よく心底の感情をば表しいだすに妙なることあり。

の如くその利點を述べたててゐるのは、頗る進步的な見地を示してゐるものであるが、これとても漢土とか泰西の諸國を考に入れてはじめて言はれた言葉であつた。日本のみは言文一途で

あり、文章語と談話語との相違が甚だしいために

> 俗言のまゝに文をなすときは、あるひは音調侏離に失し、或ひは其氣韻の野なるに失して、いと雅びたる趣向さへに爲にいとひなびたるものとなりて、俚猥の譏りを得ること多かり

と言つて、直ちに俗文を採用する事の不可なるを述べたてゝゐるのも、その時代の傾向をその儘に反影してゐるものとして注目せられねばならないのである。ついで時代物の小説にこの文體を用ふる事は極めて不便であり且つ不都合でもあるが、たゞ世話物語をばこの文體にて綴つたならば、情文相適つて精妙であらう、けれどもそれも幾分斟酌して折衷した方がよいとさへ言つてゐるのである。この考へ方は前に俗文の利點を一般的に認めたものを更に具體的に發展させた所に見出されるのであるが、未だ餘りにも舊來の風習にとらはれ過ぎてゐるとの感をまぬがれぬのである。けれどもまた最後に

> 俗言には七情こと〴〵く化粧をほどこさずして現はるれど、文には七情も皆紅粉を施して現はれ、幾分か實を失ふ所あり。俗言のまゝに詞をうつせば、相對して談話するが如き興味あり。雅俗折衷の文をもて詞をつゞれば、書簡（てがみ）を讀むの思ひあり。

と言つて雅俗折衷のなまぬるいのに對して俗言を以て綴られたものの如何にも生々としてゐる點を認めてゐるのは多とすべきであり、

唯憾らくは世に其不便を除くの法なし。嗚呼、我が黨の才子、誰れか此法を發揮すらむ、おのれは今より頸を長うして新俗文の世にいづる日を待つものなり。

と言つてゐるのによつても、自らは書生氣質の文章の如く雅俗折衷の筆を遣つてはゐるものの二葉亭に助言しては浮雲に講談筆記體を用ひよと言つた彼の氣持も諒解するに難くないのであつて、新文章の創成にも彼の功績の與つて力のあつたものなる事は明かである。

第三には雅俗折衷文體を擧げこれを大別して二とし、一を稗史體(よみほんたい)一を艸冊子體(くさざうしたい)と言つてゐるのである。

稗史體とは「地の文を綴るには雅言七八分の雅俗折衷の文を用ひ、詞を綴るには雅言五六分の雅俗折衷文を用ふ」るものであるが、「雅なる趣きを敍するには雅言をもてし、野なる趣きを寫すには俗言をもて」するがために「貴賤雅俗を寫し分つ」のに便であり、時代物語にはこれに比すべき好文體は「またありしとも思はざるなり」とさへ極言してゐるのである。

これに對して艸冊子體は俗言を用ひる事の多く漢語を使用することの少いものを言ふのであ

り、しかもこの文體は世話物の小說のみに用ふべきものとしてゐるのである。猶將來の小說作者はよろしく此體を改良して完美完全なる世話物語を編まなくてはならぬと言つてゐるのもこの文體の改良に意を用ひてゐたものとして注意しなければならないのである。

更に小說の內容たる人情風俗を活るが如く讀者に感ぜしめるためには假令俗言俚語と雖も「其文章に神ありなば、他の繪畫にも音樂にもまた詩歌にも恥ぢざるべき一大美術といふべきなり」とまで極言してゐるのも俗文に對して大いに期待してゐた作者逍遙の氣持を窺ひうるに充分であらう。

新文章創成以後にあつても既に筆くせのついた人々の新文章への轉向は最も困難な所であつて、逍遙鷗外の批評家をはじめ紅葉露伴一葉綠雨などと當時の大家が齊しく雅俗折衷體を繰つたがためにこの文體は非常な隆盛を示し、一時は明治の新文章にさへ大きな影を投げたのである。

この點を考へるとき逍遙の文體論に雅文・俗文・雅俗折衷文の三體を區分しながらも、特に雅俗折衷體を強調して、雅俗の配分に程度の差こそあれ、時代物も世話物も共にこの文體によるべきであるとの主張も亦無理のないことだと考へられるのである。

しかも既に早く俗文の利點に着眼して新俗文の世に出づる日を待望したのなどは二葉亭への助言と共に彼の功績として何時までも記憶せられねばならないであらう。

二

新文章言文一致體の最も穩健な議論は物集高見の言文一致（明治十九年刊）であつた。彼は先づ、「文章は、話しのやうに、書かねばならぬ、わけ」と題して文章は話を書いたものだから、それを讀みあげれば當然口の話とならねばならぬのに、日本の人のは幾たび讀み上げても到底口の話とは聞えないとし、その理由として

自身も、自身の口を、明治十九年の、此世界に、ありながら、自身の、持ちて、をる、筆を見れば、古いところは、千年前の製造、新しいところでも、五百年前の、製造ゆゑに、其筆から出す、はなしが、新らしうならう、道理がない。

と言つてゐるのである。即ち言語と文章とは當然一致すべきものなるに拘らず、我國の現狀は「口は、生きた、自身の口でも、手は、死んだ古人の、手だ」とも言ふべく、言文一途に出でてゐるのを歎いてゐるのである。

しかも「何とかして、此手ばかり、ふるくする、癖をやめて、手も口と、ひとつに、自身のものに、したいものだ」が、世間では「とても、出來ぬことだ」とか「無益の事だ」と言ふ人も澤山ある。

「ぢきに出來る」と言ふ事は後に示す文例によつても明かであるが、如何に話す通りに書いたからとて、全く話の通りにはならぬものだからなるたけ文章は「わかり易く」する必要がある。「わかり易い」といふ事を文章の主眼とすれば、間違から起る訴訟もなくなり、血税を血を搾るかと考へ違つたのなどは全く昔の話となり了るであらう、と言つてゐるのも、巧みに言文一致體の將來を豫言したものとして注目せられねばならないのである。

ついで、「文章が、はなしと別れた、わけ」を説明して、むかしは日本でも「はなす通りに、書いたものであらう」が、漢文の隆盛と共に話の書取りは中止の形となる一方、小說物語などもその手本を昔に求めたがために、「文章の巧拙と、ことばの、ふるい、新しい」の差こそあれ「文章の脈」とでも言ふべき言ひまはしはどれも同じやうになつてしまつたがためであるとしてゐるのである。

ついで「文脈といふ、わけ」を説明して「ことばのいひまはし」であるとし、文脈をよく見

ると、その書かれた時代までもわかるものであると言つてゐる。

或は「文章は、はなしにはおとる、わけ」と題して人眞似の鸚鵡文は生々とした言葉には及ばないものであるとし、「日本語には敬語が、多い、わけ」とか「話し通りに書けば、全國の語が、一様になる、わけ」とかを說き、更に「話しと文章との、ちがひどころ」として時の所と接續の所との二つを擧げ、「其ふたところを書き直して、見ますれば、千年むかしのも、五百年、むかしのも、ことばこそちがへ。脈は、今の脈になりて誰れでも、すきにわかる樣に、なります」と言つて試みに古人の文章を書き直してゐるのである。卽ち伊勢物語の

むかし、男うひかうぶりして、奈良の京、春日の里に知るよしして、狩りにいにけり。

を言文一致に直しては

むかし、男、元服して、奈良の京春日の里に、知行所ありて、狩りに行いた。

とし、落窪の

今はむかし、中納言なる人の、むすめ、あまたもたまへる、おはしき。

をば、

今では、昔だが、中納言で、むすめ、あまた、持ち給うた、人がおはしました。

と言ひ、狹衣の冒頭

少年の春は、をしめどもとゞまらぬ、物なりければ、やよひの、二十日あまりにも、なりぬ。

を言文一致に直しては

少年の春は、をしんでもとゞまらぬ、物である。それ故に、やよひの二十日あまりにも、なりた。

と言ひ、更に徒然草の

つれ〲なるまゝに、ひぐらし、硯にむかひて、心にうつりゆく、よしなしごとを、そこはかとなく、書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

をば、

つれ〲なまゝに、ひぐらし、硯に、むかひて、心にうつりゆく、よしなしごとを、何といふことなく、書きつけをれば、あやしう、ものぐるほしい。

の如く記してゐるのである。

その言文一致には未だごつ〱した所も齒切のよくない所もあるけれども美妙とか二葉亭な

どの漸く現れようとする明治二十年前後に國文學者たる著者が早くも言文一致に穩健な說をなし、進んで古文と新文章の相違を古典の譯出によつて明示してゐるのは甚だ時宜を得たものであつて、その功績は永く記憶せらるべきである。

三

言文一致の新文章の擡頭と共にこれを繞つて賛否交々の議論が批評界を賑はす事となつた。學海指針に載する所の辰巳小次郎の駁言文一致論（明治二十年八月）は直接には同誌に掲載のチエンバレーンの說を駁撃したものではあつたけれども、一般に言文一致を攻擊目標としたものとして注目に値するものである。卽ち先づ

若し言文一致と云ふ時は小兒の單語、老人のオヨヅレゴト共に皆文なりと云はざるを得ず。去れど之を以て文といふ人は世の中に一人もあるまじ。

と言つて言文の一致を否定し、つゞいて西洋にも純然たる言文の一致は認められない所であるとし、

彼の高名の日耳曼哲學者カント（Kant）は文章を綴るに句讀長くして一讀に關係代名詞の

十五六づゝもある事常なり。此如き長讀は兩手十本の指にて關係代名詞を差し押さへて主句從句の關係、主格客格の關係を搜索するに非ざれば其意義を通解するを得ず、決して走り讀みに讀みては解せられず。まして人の讀むを傍に居て聞くに於てをや。かくの如き文章ある國に於て何ぞ言文一致を望まん。

の如くカントの文章を論じ、更に時間的に言語と文章との差異を述べては

言は時世によりて變ずること甚だ大なり。文は時世によりて變ずること甚だ小なり。故に言は一代の俗事を述ぶるによく、文は數百十年間に事を傳ふるによし。

と言ひ、野蠻人に文なきを思へば言文を兼ね存するのは開化の賜であり、

愚生の管見に據るに言文は開化の進むに隨て益々其の趣向を異にすべき樣に思はるゝなり。決して言文一致は望むべからず。言文一致の望むべからざるは猶平服禮服の一致を望むべからざるが如し。

とさへ言つてゐるのである。

かゝる議論は今日から見ればそれ程にもないものだけれども、孤々の聲を擧げて間もない足取の定まらぬ言文一致の新文章にとつてはかなりの痛棒だつたと思はれてチエンバレンの如き

もこのために默止させられた程である。

これに對して雄々しくも論難の矢面に立つて新文章のために氣をはいたのは言文一致の名付親山田美妙齋であつた。

美妙は同じ雜誌に言文一致論概略（明治二十一年二月以降）を載せ、先づ普通文論者の俗文論者を駁擊する點として

第一　若し我々が今日の俗語を其儘文章に用ゐるなら日本國中で通ぜぬ事があるだらう。

第二　今日の俗語は明日の古語となるだらう。

第三　今日の俗語は不完全な物で文法も何も持つてゐない。

などの三點を擧げ、第一に對しては一應尤もではあるが、大阪の「さかひ」や奧州の「なす」や長崎の「ばつてん」などの極端な方言を用ゐない限り、東京語の歷史に徵するも充分之によつて全國に用を通ずる事が出來るとしてゐるのである。ついで第二の非難に對してはそんな破壞主義を唱へてゐては言葉や文章の改良はおろか新發明も新工夫も到底出來ないものだと輕くあしらひ、俗文のみならず普通文さへも矢張り明日は古語となる運命にあることを指摘してゐるのである。更に第三の駁擊に對しては

是は今の世の學者といふ學者達が得意で主張する說ですが、些と疎漏では有りませんか。果して此人達は俗語の性質を充分硏究した上で斯う言出た事ですか。全く左樣なら失敬ながら硏究の甲斐は有りません。俗語の文法を探出し、その原則に從つて後の俗語を正して行く人が實に不幸にも一人も無いので天賦の麗質は有りながら小町も貧家の少女と思はれ、今も今とて度外に置かれて居ます。俗語には自然に一定の規則が有ります。俗語は無茶苦茶の物ではありません。匡して吳れる規則がないので成程多少不規則な敎育をば爲ましたが、併し全體に於ては決して亂果てゝ居ません。

と言つて例まで擧げて說明してゐるのは如何に彼が言文一致の文章について深い興味を持つて居たかを知りうるばかりでなく、口語文法の確立しなかつた時代に早くも俗語の文法にまで目をつけてゐる所に先覺者としての彼の面目の躍如たるものがあるのである。

美妙は以上の三つの點においてその非難を駁擊したのみならず、更に第四として「俗語は如何にも陋しい。雅語のやうに優美でない」と主張する人々に對して「人間の心は妙な物で、近いのを陋しんで却つて遠いのを崇びます」と言つては、兎角古いが故に尊いとする一派を冷やかに批判し、古文とさへ言へば一切優美なものと思ひ、其極終に『雅文』といふ言葉に『古文』

の代用をさせる程に有難がるのを戒めてゐるのも、亦俗文として蔑視せられた言文一致の新文章のために大いに氣を吐いたものであつた。

美妙の思ひ切つて嶄新な表現をその創作に採り用ひて當時の讀者を魅了したばかりでなく、自ら論難の矢面に立つて言文一致の發達に努力した功績は文章史上特筆せられねばならないのである。

四

これより先き矢野龍溪は日本文體文字新論（明治十九年三月刊）を著しては、その第三章に「日本ニ用フ可キ文字及ビ文體ノ事」と題し、日本の文體として古代より世に現れたものを考へ、一、漢文體。二、漢文變體。三、雜文體。四、兩文體。五、假名體の五つに分類し、其の變遷の性質は難を避け易に傾いたものであり、今日にあつては全く日本の語法を用ふる雜文體と、雜文體に假名を施した兩文體との二體が、最も廣く世に行はれるに至つたと述べ、特に兩文體の利點を强調しては、

兩文體ハ音ノ紛ラハシキ不便ヲ補フガ爲メニハ漢字ヲ用ヒ漢字ノ讀ミ難キ不便ヲ補フガ爲

メニハ假名ヲ施ス者ナレハ漢字ト假名トノ兩便ヲ有シテ漢字ノミト假名ノミトノ不便ヲバ削リ去リタル者ナリ。

と言つて假名の學び易き便と漢字の見易き便とを兼ね具へてゐるがため、兩文體を以て最上便利なものとしてゐるのは、一般大衆を讀者とする今日の通俗小説などの文體の繁榮を豫言したものとして傾聽に値するばかりでなく、布告布達の文章の如きは廣く人民に之を知らしめ又容易に之を覺らしむるの必要あるに拘らず「其ノ目的ニ反對スル方向ニ傾キ以前ニ比スレハ人民ヲシテ是ヲ解スル事甚タ難義ナル方ニ變セシムルカ如キハ誠ニ遺憾ナラスヤ」として警告を發してゐるのなども近代文章の一特質たる平明達意を希求してゐるものとして注目に値するものがあるけれども、未だ言文一致の新文章に觸れてゐないがために、こゝに取り立てゝ論ずるほどではないのである。

　これに反して明治二十三年四月のしがらみ草紙第七號の卷頭に見える森鷗外の言文論は山田美妙の新文章に論及してゐる點において注目せられねばならないであらう。

　古は言と文との差別とてもなく、文字ありてより言を寫し出すこととはなつたけれども、之を讀ませるためではなく、多分之を忘れないがためであらうが、轉じて人に讀ませんとする意

識漸く盛となると共にこゝに初めて言と文との懸隔を見出さねばならないやうになつたと言ひ、言文相關の道理に言文しては

夫れ死文は既に作るべからず今の文は今の言と甚しく相乖戻せざらむを要すといはゞ之を救濟する道、二あらむのみ今の文は古の文のまゝにて置き今の言を古の言にかへらせむとするは文を言とせむとするなり今の言を直ちに今の文となして復古のまゝの文を作らじとするは言を文とせむとするなり

と記してゐる。文を言とするの不可能なる事は「歴史の製造すべからざると一般」であるが、今の言を直ちに文とせんとするものにも雅俗の差別のあることを述べ、落語筆記の如きも言のまゝを寫したものではあるけれども、「未だ必ずしも美術なる文ならず」と言ひ、山田美妙の文を論じては

落語筆記の類より一層、高き趣味あるは世間に所謂、言文一致體なり言文一致體は假名を正し或る一定のてにをはを用ゐて今の言を綴りたる文なり、此體の雄ともいふべき山田美妙齋氏の如きは美術なる言文一致體の文を作りて大に國文の進歩を圖られたり

の如く文章史上の美妙の功績を認めてゐるのであるが、世に屢々言文一致と言へば「文は即、

言、言は卽、文なり」とやうに思ふ人のあるのを見て
言文一致も亦た今の言を取りたりといふのみにて其質は則ち儼然たる文なり、讀ませむためめの文なればぞ一種の烹錬の迹、見えて自ら平話と相殊する處はあなる。
と言つてゐるのを思へば、言文一致とは言ふものの話す通りをそのまゝ書記するのではなく、文章たる以上そこに平話とはちがつた技巧の加へられるのは當然と考へてゐたやうであつて、この點においても穩健な說を持してゐたものと言はねばならないのである。
更に美妙一派の文章を「日本新文章の先登」と見、間々奇警に過ぎる表現をとつたことについても
此手段には或は瑕瑾もありしならむ而れども此に非ざれば、一時文海の驚瀾怒濤を捲起して天下詞客の懶眠を打破するに足らざりしなり
と言つてゐるのは彼の見識の凡ならざるを示してゐるものであるが、所謂言文一致家とは餘程遠い距離にある彼の落合直文の說
私も言語と文章とは離るべからずといふ論者であります。さりながら、これは餘程注意せねばならぬと思ひ居ります、卽ち言語を今少し上品に進め文章を少し引下げやうと云ふこ

とであります今日世間に行はるゝ所謂言文一致の文章を見るに殊更に野鄙陋劣なる言語を列擧するが如し是の如きは私の取らざるのみならず大に排撃せんとする所であります

を擧げて

山田氏にして舊來の語格を散文にも應用せむとせば（著者云。美妙も新體詩には文語表記を採れり。）此兩極端の間に立ちたる幾多の家數は皆力を合はして斯文の改良更新に従事することを得べし是れ余等が切望に耐へざる所なり

と結んでゐるのも、當時の新奇に過ぎた所謂言文一致體に對する彼の口吻を示してゐるばかりでなく容易に言文一致の新文章に移らうともせず逍遙などと共に永く舊文體を固守してゐた事情をも説明してゐるものと見られるのである。

兎角筆くせを持つた既成作家達の容易に新文章に轉換出來なかつたのも無理からぬ事であつて、鷗外が言文論において美妙の價値を認めながらも猶積極的に之を支援出來なかつたのも亦止むを得ないであらう。

五

明治三十三年七月高松茅村によつて著された明治文學言文一致も明治の新文章たる言文一致についてはじめて最も同情的に史的考察を試みたものとして重要であるが、文章論の上からも亦これを認めなければならないのである。

言文一致の著者とても當時の文體を以て完成したものと考へず、それが見事に出來上るまでにはまだ幾年か後を待たねばならぬとその發達を將來に期待してゐるばかりでなく、言文一致はすなはち明治の理想言語文學風俗に適應して出來た文體で、雅文が大宮人の文體であるが如く、混淆文が鎌倉武士の文體である如く、そして折衷文が江戸國俗の文體である如く、明治の文體であるのであるとさへその出現を喜んでゐるのである。更に

言文一致は天下の輿論で、今でもだん／＼共範圍をひろめて居るが、これから、ます／＼弘くなつて、遂に明治時代の文章となるであらう。

と言つてあらゆる文章樣式のこの文體によつて統一せられる日の必ず來るべき事を豫言してもゐるのである。かゝる言葉は今でこそ何でもないやうにも見えるけれども、四十一年頃になつても猶文章世界が「言文一致體以外に文章を學ぶ必要ありや」などの問を諸家に發してゐるのを思ふとき、流石は深く詳しく文章の變遷を考察した著者の言だと感心させられるのである。

かゝる進歩的な態度を持したればこそ、新文章の歴史を考へその將來をも祝福せんとして「言文一致」なる著を現したものであらうが、文章論として特に注意すべきは本書の終に載せられた言文一致記述法である。

言文一致變遷史なる消極的方面のみに滿足出來ず、一人でも多くの人々に新文章の恩惠を分ち與へようとする著者の親切心の迸り出でたものに外ならぬのである。

彼は第一に言文一致は其の歴史に鑑みて、特に折衷體の保護によつてその發育を期せねばならぬとし、

言文一致體は、既に幾百年の久しい間研究されて得た文章の極致をとつて之を利用し、之によつて美しく正しい健全な發達を遂げねばならぬ、之については深く雅文を研究する必要もあるが、之より手近かな雅俗折衷調を研究するの要も亦極めて大である。

と言つてゐるのは、新文章家のともすれば文章研究におろそかなのを戒めたものである。

第二に明晰を擧げ、言文一致は、とかく冗漫に流れ易いから「そこに彼女が居たのであるといふのである」などと長くまはりくどい表現を避け、力めて單簡明瞭とする事が必要であると言つてゐるのも、新文章の特質の一つをよくつかんでゐるものと考へられるのである。

更に第三に華麗と雅致とを擧げてゐるのも言文一致と言へば言葉の儘で直樣文となるものの如く考へてゐるものに注意を與へ、言文一致體と言へども美麗と雅致とを必要とする事は古來の文章と少しも異る所のない事を力說したものであつた。

第四に語法、語句を擧げて美妙の條件五ヶ條をその儘引用してゐるのも、美妙が俗語文法まで編んだのと共に新文章の品位を保たんとした著者の苦心の跡とも考へられるであらう。

以上の四つは言文一致記述法の條件において「言文一致」の著者高松茅村の擧げたものであるが、共に新文章をものせんとする人への啖かな贈物として言文一致に對する深い理解のあつた著者によつてはじめて發せられた言葉であらう。

ついで三十五年一月には排言文一致會の著書大日本と文章的國民（美育社刊）が公にせられ、間もなく五月には言文一致講說會の速記を集めた言文一致論集が出版せらるるに至つて、言文一致問題はその頂點に對したかの觀があつた。

さきに早くも小說神髓の文體論において俗文の價値を認めその發達を將來に期待した坪內逍遙は、言文一致體の漸く流布せらるるに至つた三十九年の頃、文章世界に「言文一致について」を載せて再びこの文體に對する彼の意見を發表してゐるのである。

彼は先づ當時世に行はれた言文一致を四種に分類し、一に演説の速記そのまゝのもの、二に文章語を主體とし語尾だけ平語とするもの、三に口をついて出る言葉を成るべくわかりよいやうに細工氣なく綴つたもの、四に小説家たちの多年の工夫になるものを擧げてゐる。しかも前の二種は實用もほんの當座だけのものであり、修辭上の價値も乏しいものでこゝではこれを省くとして、後の二つをそれ〴〵俗談體美文體と名づけて論じてゐるのである。

その中俗談體は多分「理想的言文一致體の主な土臺石」となるものとし、その長所として一に語法を二三にしまいといふ用心、二に漢語とか雅語鄙語などの混用を避けて耳に聽いたばかりでも意味の解るやうに力める點、三に眞率で虚飾や細工氣の無い所などを教へ、

此の體は言文一致中の最も厭味氣の無い一體と見做すか若しくは修辭上に謂ふ純正といふ格だけを得たものと見做すのが當然でありませう。

と結んでゐる。

更に美文體を論じては、十人十色で一概には言へないけれども、雜然としてゐるうちにも統一調和の美さへあれば何も非難するに及ばぬばかりでなく、時としては却つて面白いとさへ言つてゐるのである。しかしこれは小説の文體についていふのであつて世間一般の文章の模範と

ならない事は、謠曲が幽婉だからと言つてこれによつて追弔文を綴る事の出來ないのと同じであるとの但書をつけてゐる。

けれども當時の所謂言文一致體について未だ多くの不滿を持つてゐた事は併し困るのは敬語と語尾。名詞どめもそうそうはうるさく、「だ式」、「である式」、共にあんまり自然でない。「です式」が一番口語的だと思へど、どうやら讀みなれぬせいかして女女しく、輕く、それに何だかさし向ひ式のやうにも聞える。

などと言つてゐるのによつても知りうるであらう。しかもこの新文章のはるかに廣範圍に使用せらるべきを豫言して、小說家のみならず誰でもが用ひ何にでも用ひて差支のない樣式の成立してこそはじめて言文一致の天下と稱する事が出來ると言つてゐるのである。卽ち

新聞でいふなら、論說から電報から廣告までを此體で押切ることが出來ぬうちは無效だ。記事でも叙事でも詔勅でも法令でも何でもござれと八面に涉つて自由自在に、現代の思想感情を深く、細く、强く、旨く言ひあらはし、典雅、莊重、跌宕、雄渾などいふ漢文や雅俗折衷文の本領をも取入れてしまはぬうちは、迚も言文一致萬歲の天下とはなるまい。

と言つたのなども、常に遠き將來を眺め拔いてゐる逍遙の言として相應しいものなるのみなら

ず法律などは今日とても猶依然として文語文を主體としてゐるのを思ふとき彼の考へ方の甚だ進んだものだつた事を知りうるのである。

彼のこの持論は大正五年九月號の「日本及び日本人」所載の「文章上の擧國一致」へまで發展して行つてゐるのが見られるのである。これは雜誌社よりの「現代の文體は如何に統一せらるべきか」なる問に答へたものであるが、「一日も早く所謂口語體を完成」せん事を望む彼としては、それが迚も少數の者の決心や一致や努力などでは到底出來るものではないとして、こゝに文章上の擧國一致を叫ぶに至つたのであつた。

しかも逍遙の言ふ口語體とは最も廣義に解された現代語から成つたものであり、成るべく自由に雜多な語をも收綴したものであつて、必ずしも實際の談話語とは其の範圍を一にすべき必要はないと言つてゐるのによつても、一日も早く口語體の天下にしようとする著者の熱意を汲み取る事が出來るのである。

逍遙自身の言葉にも「平生談話の際に用ひてゐる言葉づかひを其儘文とするのは昔は言文一致體といひ今では口語體を總稱する」とあるが如く、明治より大正に移ると共にいつしか言文一致より口語體と呼び換へられるに至つた新文章は時代の下降するのと共に、その使用區劃を

擴大して終に今日の如く書簡文をもその領域に入れ、法令その他も只時期の問題とさへ見なされるに至つたのも既に早く逍遙の豫言したが如くである。

六

明治四十一年十一月博文館より出版された露伴の普通文章論は從來の文章指導書の兎角美術的文章と實用的文章とを混用して一樣に之を論じてゐたのに着眼し、實用的の文章のみを取扱つたものとして注目せらるべきものである。

實用的文章とは露伴に從へば「書かる可き必要が有つて書かるゝもの」であり、藝術的文章の「作り出さうといふ希望が有つてから作り出さるゝ」ものとは當然そこに差異を認めねばならないわけである。又實用的文章にあつては文章は或意義を現すまでの手段として用ひられるものであつて、藝術的文章の文章を作る事その物が目的なのとは大いにその趣を異にするものである。

しかも文章と言語とは其の性質においてもその作用においても或はその體形においても更に人間との交渉關係に於ても殆んど相近いものであり「場合に依つては文章も言語も同じ物では

無いかと言つても差支無い」ものであつて、特に實用的な文章にあつては、言語と餘り異ならぬものである。從つて之を書き綴る事も亦容易と言はねばならないのである。

「文章善くし難き」の論も常に聞かされる所だけれども美術的文章なら兎も角實用的文章はさ程難かしいものではないとして、「文章は爲り難いものであるとの前提觀念を打破する事が大必要である」とか、「樂んで苦めば才能は進む、厭々苦めば苦み甲斐は少い」とか「樂んで事に當るといふ事は成功の祕訣である」とかの點を列記してゐるのによつても著者が世人一般の文章觀を正しく導かんとした努力を認めうるであらう。

更に進んで實用的文章は如何に書くべきかに至つては、平易、通俗、明確などの點を強調してゐるのも亦穩健な說と見るべきである。

かくの如く露伴の普通文章論は世人一般の實用的文章についての正しい指導書であるばかりでなく、兎角まぎれやすい美術的文章から截然として實用的文章を引きはなし、しかもその作法は「一枚の風呂敷を取り除けると同じ程容易」なものだとまで力說して世人の文章觀の誤謬を指摘しえたのは當然彼の功績として特記せらるべきものであらう。

子規によつて唱導せられた寫生文は自然主義の作家に影響して新文章の興隆に與つて力のあ

つた事は既に第一篇において述べた所であるが、寫生文についての理論は明治四十年一月にものせられた漱石の「寫生文」によつてその一般を窺ひうるであらう。

彼に從へば寫生文家の人生に對する態度は、「貴人が賤者を視る態度」ではなく、「賢者が愚者を見るの態度」でもない。或は「君子が小人を視るの態度」でもなく「男が女を視、女が男を視るの態度」でもない。つまり「大人が小供を視るの態度」「兩親が兒童に對するの態度」でなければならないのである。

普通の小說家は作中の人物と「同じ平面に立つて、同じ程度の感情に支配」せられ、「飽く迄も、其の社會の一員であると云ふ態度で筆を執る」がために、「隣りの御孃さんが泣く事をかく時は、當人自身も泣」かねばならないものである。しかるに寫生文家は自分自身ば「泣かずして泣く人を覗いて居る」のであつて、この點は大いにその趣を異にするものである。

他の作家の如く「吾が精神を篇中の人物に一圖に打ち込んで、其人物になり濟まして戀を描き愛を描き、もしくは他の情緒を描く」のでは或は人を泣かしめるやうな熱烈なものが出來るかもわからないけれども餘裕のある作品をそこに期待する事は出來ないのである。これに反して

寫生文家のかいたものには何となくゆとりがある。逼つて居らん。屈托氣が少ない。從つて讀んで暢び〳〵した氣がする。全く寫生文家の態度が人事を寫し行く際に全精神を奪はれて仕舞はぬからである。

と言つてゐるのによつても「我を寫すにあらず彼を寫すといふ」客觀的な態度を好んでゐた事を物語るものでなければならないのである。

かくの如く泣く人を寫すにあたつても自ら泣く事なく極めて冷靜な純客觀的な態度を取らねばならぬと主張したのは一に漱石の藝術觀から導かれたものであつた。即ち彼に從へば藝術は住み憂い世の中を少しでも住みよくするために存在するものであり、從つて當時の作家とは著しくその色彩を異にする餘裕派なる一派を樹立するに至つたものである。

草枕の如きは眞に迫つて人を泣かしめる力こそないけれども、ゆつたりと畫の世界にでも遊ぶやうな感を抱かせるものがあり、餘裕派としての彼の特色を最もけさやかに現してゐるものであるが、それにはゆとりのある輕妙な筆致の與つて力あるものと言はねばならないであらう。

子規によつて唱導せられた寫生文は漱石によつて最もよく理解せられたのであるが、又一方

自然派の文章に攝取せられて永く後の表現にまでその影を留める事とはなつたのである。

明治四十二年から三年にかけて紅葉門下の泉鏡花も文章の事に言及し「會話、地の文」においては「會話は、成るべく、東京語を以て統一したい」と言つて東京語中心を主張し、しかも會話の中に「人物の調子を現はす」ことに力め

怒つた時、沈んだ時、嬉しい時、せきこんだ時、ゆつくりした時、その時と場合に依つて聲の調子も亦違ふ。(話)

などと言つたのなども文章特に會話の聽覺的效果をねらつたものとして注意せらるべきである。

更に「小說の地の文の語尾」については

私は「だ」より「である」と言つた方が小說の地の文としていゝと思ひます。勿論場合によりませうが「だ」と言ふのは讀者に對して失禮です。「である」と言つた方がいゝようですね。

と語つてゐるのもその師紅葉によつて創始せられた「である」止を好んで踏襲してゐるものとして興味がある。

或は談「文章の音律」（明治四十二年五月）に及んでは、
予は今の文章が眼にのみ訴へて、耳に聞かす文章でない、耳に聞かすなどいふ事を考へてもゐまいかと思ふ。

とか、

音律といふことは、文章の一機能である。文章に音律を沒却しては何も文章とは云へない。さうでせう。「いづれのおんときにかありけん」と源氏の書出しであるが「何時だつたかね」と云つては、源氏も何もあつたものぢやない。曉台の句に

まくり手に踊くづして通りけり

といふのがある。此句に音律があるから、讀んで――見たゞけではない、如何にも腕まくりした男が、盆踊か何かの踊の一團を崩して、悠々として通るのが表れてゐる。「まくり手して踊を崩して通つた」では其趣が出ない。

と言つてゐるのなども前にも述べたが如く文章には特に聽覺的要素の重大な點を說いたものである。

或は又當時流行の「平面描寫に就いて」（明治四十三年）も

總て世の中の事どもは、平面描寫――即ち、單に觀たまゝに、自分を加へず書き並べて行つたところで、その形が、讀む者の前にはつきりと現れるものではないと思ふ。

と言つたり、繪の透き寫しに譬へては

一分一厘違へぬやうに書いても、下の繪よりはどうしても寫した繪の方が小さく見える。之れは筆の勢ひや、意氣込みで然う見えるのだ。此の微妙な作用は、到底平面描寫と云ふものでは現はれないと思ふ。

と語つてゐるのである。これによつても「自分と云ふものを挾まないで、觀たまゝを書く」所謂平面描寫にあきたらなかつた事を窺ひうるであらう。

ついで我々は自然主義文章理論の代表として明治四十五年に著された花袋文話を考察しなければならぬ順序となるのである。

先づ描寫論においては記述と描寫との區別を說いて、前者は意味が分り筋が飮み込めればよいのであり、從つて說明をも必要とするのであるが、後者は「其の光景を其のまゝに生々と再び現はして見せようとする」のであつて說明は之を必要としないばかりでなく、かへつて有害となるものだと言つてゐる。例へば「梅が咲いて居る」と言つただけでは記述であるが、「白く

梅が見える」とするといくらか描寫の氣分が出ると言ひ
　かれは雨戸を閉めた。
　雨戸を閉める音が聞えた。
　波の音がした。
　波の音が聞えた。
などの例にあつては何れも後の方が描寫の氣分に近いものであるとし、更に
「鱗を書いた魚の形」とか「煙草を勸める女」とか言ふもさういふ處から來て居るのであらうと思ふ。
と言つて藤村などの自然主義作家にその描寫の氣分の濃厚さのあることを述べてゐるのである。
　ついで說明とか叙述とかの文章を排斥して態狀描寫を唱へ、狀態は描いて見せなければ、出て來ない。描くのには、筆者の頭にその狀態が分明に映つて居なければ出來ない。
口で言へないことをも筆で見せる。描いて見せる。此處に細かい文章の苦心も價値もある

のである。

と言つたり、印象的描寫を力說しては

「長い叙述よりは短い描寫」と私はいつもかう思つて筆を執る。

何んな文章や小說を讀んで見ても、生々としていつまでも頭に殘つて居るのは、矢張描かれた箇處である。理窟でもなければ思想でもない。

と言つて具象的嶄新な表現を讃へ、その頃唱導された新傾向の俳句の「印象的といふところを深くねらつて入つて行つた」點に敬意を拂つてゐる。しかも描寫に入るには「離れた氣分を修養することが一番肝心である」とし、かゝる態度を傍觀的態度と名付けてゐる。

卽ち說明を避けて描寫を重んじ、それがためには對象から離れた傍觀的態度を持すべきであると言つてゐるのは自然主義作家の文章論を代表するものとして注意せられねばならないのである。

七

漱石はまた大正五年秋の頃「日本及日本人」に文體の一長一短なる文章を載せ新文章たる言

文一致體を論じては、

言文一致體はかなりに擴がつて居る。其擴がつて行く力はかなりに盛んなやうである。この數年來の傾向として、官廳の布告などにも、此文體を採用して來た樣である。郵便局、鐵道院などの注意書などを見るとよく分る。

と言つてその使用範圍の漸く擴大せられてきた事に着目し、更にその限界を示しては、

言文一致が如何に便利であると云つても、どの場合にも之を使ふと云ふ譯には行かぬ。莊重なる文辭を尙ぶところの勅語に於て「であります」とか「さうなさい」と云ふが如き文字を用ゐられたとしたら果してどう受け取られるであらうか。時にもよる。場合にもよる。

と言つてゐるのも穩當な見解として傾聽せらるべきであらう。

同じ「日本及日本人」誌上に坪内逍遙によつて文章上の擧國一致の叫ばれた事は既に述べたところであるが、更に大正十年には文部省も口語文用例集を出版して新文章の流布に力めてゐるのである。本書は一、屆書願書及ビ證書、二、通牒照會及ビ回答、三、招待及ビ案內、四、報告及ビ通知、五、挨拶及ビ謝禮、六、葬祭及ビ弔慰、七、紹介及ビ依賴、八、商用廣告、九、

雜用廣告、などの項に分つてそれ〴〵口語文の範を示したものに過ぎないけれども、文敎の府自らが率先して各方面に新文章の範を垂れた事は口語文の弘通に與つて力のあつたものと考へられるのである。

例へば屆書には

缺勤屆

本日病氣ノ爲缺勤シマスカラ、御屆致シマス。

年　月　日

何　誰　㊞

…………殿

とし、通牒の如きも

近視豫防ニ關スル件

近視豫防ニ就イテ、此度文部大臣カラ地方長官ニ對シテ別紙ノ通訓令サレマシタカラ、貴

校デモ訓令ノ趣意ニ基イテ、各注意事項ヲ御斟酌ノ上然ルベク御措置ナサル樣命ニ依ツテ通牒シマス。

年　月　日　　　次　官

各直轄學校長宛

などと記してゐる。しかもすぐ後に參照として

近視豫防ニ關シ今般文部大臣ヨリ地方長官ニ對シ別紙ノ通訓令相成候ニ就イテハ貴校ニ於テモ本訓令ノ趣意ニ基キ各注意事項御斟酌ノ上可然御措置相成候樣致度依命此段及通牒候也

と小書してあるのは、從來の形式と新樣式とを判然對照せしめ、舊樣式に慣れ切つた人々の便を圖つたものであらう。

更に醫師開業の通知には

私事之まで大學病院に勤務して居りましたが、此段辭職の上左記の處へ病院を開設し專ら

診療に從事致しますから、何分よろしく御願申します。

とし、工場參觀の紹介には

此度梅田一郎君工場見學の爲御地方へ出掛けられるさうですが、御差支のない限り、同君に貴工場の參觀を御許下さるやう御依頼致します。

なる文を示し、電車運轉復舊の廣告には

當局電車從業員待遇問題で、昨冬以來運轉力の減退一部運轉の休止等交通上一般に御迷惑を掛けて申譯がありませんでしたが、今回一切復舊致しました。取敢へず紙上で御挨拶申し上げます。

をその例としてゐるのである。

かくの如く口語文用例集は從來舊樣式の書記法のみを以てした屆書、通牒、紹介、廣告などにいたるまで新文章の使用圈を擴大していつた所にその價値を見出さるべきものであるが、文部省自らの手によつて行はれたがために、その影響する所も比較的大なるものであつた事も亦疑ふべからざる事實である。

ついで大正十四年にものせられた芥川龍之介の文藝講座を一瞥することにしよう。

彼は先づ文藝を定義して「文藝は言語或は文字を表現の手段にする藝術であります」と言ひ、更に、

文字は言語の具へてゐない形と言ふものを具へてゐます。この形と言ふものは古來等閑に附せられてゐますが、決して文藝に緣のないものと片づけてしまふ譯には行きません。言語も表現の手段ならば、文字も表現の手段であります。言語の意味や音を大事がりながら文字の形に背中を向けるのはどう考へても片手落ちであります。

と言つたのは文字の視覺的效果まで等閑に附しなかつたものとして注意すべきである。或は內容を說明するのに「言語の意味と言語の音と文字の形」との三要素を以てし、しかも言語の意味以外にその音を重視したのは聽覺的效果を强調したものとも言ふ事が出來る。

更に內容と形式との關係に論及しては、

內容は上に述べたやうに絕對に形式を必要としてゐます。同時に又內容を持ち合せない形式と言ふものも存在しません。わたしは「形式を缺いた內容は机の形を成さない机とか、椅子の形を成さない椅子とかに同じものである」と言ひました。すると內容を缺いた形式も机を成さない机の形とか、椅子を成さない椅子の形とかに同じものになる譯でありま

す。これは勿論考へることも出來ないものに違ひありません。

と言つてゐるのも內容と形式とは互に不卽不離の關係にあるものであつて、形式を伴はない內容、又は內容を度外視した形式なるものは共に存在しないことを述べたものである。

更に我々は菊池寛と里見弴との內容形式の論戰へと眼を轉ずる事によつて芥川の所說の雰圍氣を感じたいと思ふのである。

この論戰は既に早く菊池寛の「文藝作品の內容的價値」（大正十二年七月新潮所載）を中心としてなされたものである。卽ち菊池氏は

ある作品を讀んで、うまい〳〵と思ひながら、心を打たれない。他の作品を讀んで、まづい〳〵と思ひながら、心を打たれる。ある作品を讀んで、よく描けてゐると思ひながら、心を打たれない他の作品を讀んで、ちつとも描けてゐないと思ひながら心を打たれる。この二つの場合を、誰でも經驗してゐると思ふ。文壇有數の名家の作品を讀んで、うまいと感心する。が、心は動かない。投書家程度の人の書いたまづい短篇を讀んで、つい心を打たれることがある。

の如く藝術的價値以外にある價値の存在を認め、

文藝作品の題材の中には、作家がその藝術的表現の魔杖を觸れない裡から、燦として輝く人生の寶石が澤山あると思ふ。

これは所謂表現とは別に他の價値の存在を肯定したのであつて、彼とても藝術至上主義者乃至とも言つて、その價値を假に內容的價値と名付けてゐる。

かくの如く彼は作品を評價するにあたつて、單に「作者が描かんとして居ることを、立派に表現してゐる」のを見るばかりでなく、所謂內容的價値の有無を以てしたのである。從つて藝術的價値を作る丈けで滿足してゐる所謂藝術家なるものは「自ら好んで象牙の塔に立てこもる人である」と考へてゐるのである。勿論藝術的價値とか藝術的感銘の如きものも人生に不必要だなどとは言へないけれども、道德的價値とか思想的價値或は生活的價値とも言はるべきものを含むことによつて文藝作品ははじめて人生と密切な關係を保ちうるものであり、しかもこの點は畫家などに比して文藝の士の特權とも言ふべきものであると述べてゐる。更に

私は、藝術が藝術である所以は、そこに藝術的表現があるかないかに依つて、定まると思ふ。が、その定まつた藝術が人生に對して、重大な價値があるかどうかは一にその作品の

内容的價値、生活的價値に依つて定まると思ふ。

私の理想の作品と云へば、内容的價値と藝術價値とを共有した作品である。語を換へて云へば、われ〳〵の藝術的評價に、及第するとともに、われ〳〵の内容的評價に及第する作品である。

と言つてゐるのによれば彼とても藝術的價値と共に内容的價値を認めてゐるものであり、一方においてはまた「藝術は表現なり」との說に「可なり大きい疑問を持つて居」ながらも、この批評の立場の無害公平なる點を認めて之を紹介してゐるのを見ても、内容と共に表現を重んじてゐるかの如くであるけれども、「文藝作品の内容的價値」には兎角表現たる藝術的價値以上に内容的價値を重んじてゐるが如くに考へられ易いのであり、こゝに里見弴の駁論の現れる理由も充分に存在したのであつた。

里見氏の駁論には先づ所謂内容價値なる言葉の内容を菊池氏自身の文字によつて說明し「心を打たれる」「人を動かす」「涙ぐまずにはゐられない」などの三者によく現れてゐるとし、之と相對するものとしての藝術的價値は又「うまい」「ヴヰヴヰツドに書けてゐる」「よく描けてゐる」などの三語によつて代表せられてゐるとしてゐるのである。從つて「内容的價値は内容

に、藝術的價値は表現に」よく當塡るわけであるが、藝術的價値以上に內容的價値を評價してゐる點において里見氏の反駁となつたものである。

卽ち菊池氏が自身の「恩讐の彼方」の筋書とか芥川氏の「蜜柑」の題材の中にはあの形をとらない以前既に讀者を感動せしむるに足る、あるものを含んでゐるものとし「文藝作品の題材の中には作家がその藝術的表現の魔杖を觸れない裡から燦として輝く人生の寶石が澤山あると思ふ」と述べてゐるのに對して里見氏は、

何も「文藝作品の題材の中」に限つたことではなく「燦として輝く人生の寶石」は行きずりの見聞にも日々の新聞紙上にもいくらも見出すことが出來るのは知れきつた話である。

として所謂內容的價値を强調しすぎるのを駁し、かくの如きものを求めるのならば、よろしく文藝を去つて哲學にでも行くべきであるとしてゐるのである。更に菊池氏が「藝術は表現なり」との說を紹介しながら、「文藝の內容的價値」にあつては、寧ろ「藝術は內容なり」と結論したくてたまらないやうな論勢を示してゐるのを看破してゐるのも尤と言ふべきである。

里見氏は反駁の文章の最後に

藝術には表現とか內容とかの區別はないとも云へるし、表現がすなはち內容で、內容が直

に表現だと、そんな風にも云へるのだが、兎も角私にとつては「うまい」と云ふ言葉は、もうその一元の境地を蓋ふ賛辭となつてゐるのだ。

と言つてゐるのは內容形式の一元論を唱へてゐるものに外ならないのである。

この反駁に對して菊池氏もだまつてはゐなかつた。「再論文藝作品の內容的價値」は卽ち之に答へたものなのである。

私が「文藝は表現なり」と、あれほどハツキリ云つてゐるのが分らないのか。藝術の眞諦が一元に歸することや、內容卽表現であり、內容は表現されてゐる限りに於て、藝術品の內容であり、表現とは內容の形式的存在化であり、從つて、一つの內容に對しては、二つの形式なく、一つの形式に對しては二つの內容なく、ある內容は必然的に、それのたゞ一つの必然的な形式を自發的に釀成する。さう云つたやうな、內容卽表現論は、近世美學の常識である。

の如く、自らも勿論內容形式一元論を唱へてゐるものであるが、藝術的感銘だけでは段々滿足しきれなくなつて藝術作品の內容的價値などと云ふものを求め出したのだと言つてゐる。而して內容的價値とは藝術的活動の機緣となる題材思想題目事件などに含まれる生活的價値道德的

價値を呼ぶものとし、

私は作家が今でも、われ／＼の生活と少しの關係もない題材を機緣として、立派な藝術を作り得ることを肯定し、それを作つてはならないなどとは云はないのである。たゞ浮世の悲しさで、さうした作品の藝術的感銘丈けで滿足しない人間が、澤山ゐるのである。

と言つて藝術的價値以外に內容的價値を强調して筆を結んでゐるのである。

以上によつて菊池里見兩氏の論戰の大樣を述べたつもりであるが、この梗概によつても略ゝ明かな如く菊池氏は藝術的魔杖に觸れない以前の所謂內容的價値を强調し、里見氏はどちらかと言へば藝術的價値以外のものを文藝に要求するのは邪道であると見るものである。從つて菊池氏の辯駁あるにもかゝはらず氏の論勢は內容を中心としてゐるのに反して里見氏はその力點を表現においてゐるものと考へられるのである。しかも兩氏共に藝術一元論を唱へて內容卽形式形式卽內容と言つてゐるのなどは表現中心の文章論からの著しい進展を示してゐるものとして注目に値するものでなければならないのである。

かくてこの二人の論戰はたゞに內容形式の何れを重んずべきかを爭つたのみならず、漸く新時代の匂ひを潛めてゐる所に新文章創始當時の文章論とは到底同日に談ずる事は出來ないので

あるが、その進展の姿としてこれを一望の下に俯瞰するとき、文章論も落ちつく所へ落ちついたものだとの感を強くするものがある。

大正十五年三月に行はれた佐藤春夫の講演筆記「藝術の內容は何か」を見るに、菊池里見二氏の論戰に言及して、

二三年前、菊池寬君と里見弴君との間に、里見君は藝術は表現だといひ、菊池君は又內容さへあれば表現などはどうでもいいと論じて、雙方一歩も讓らなかつたが、結局はつきりしないうちに物別れになつてしまつた。第三者たる我々には終に分らずじまひであつた。

併しこれを、よく考へてみると兩方とも間違つてゐはしないかと思ふ。

と言ひ「藝術の本質は表現でもなければ又內容でもない。どちらかといへば表現だといふ方が幾らか正しい氣がする」と斷じてゐるのである。

而してこゝに言ふ內容とは、「題目を創作するに際して持つ作者の熱情」を言ふのであり、從つて彼によれば「作者の心持に高く深く感興が燃えてゐればゐるほどその藝術の內容は豐富だといふことが出來る。」のである。

かくて藝術の內容たる作者の藝術的感興を度外視して一般の批評家の「表現が巧く出來てゐ

るかどうか」とか「中味が多くの題目を持つてゐるかどうか」とかを吟味することにばかり急であつて各々偏頗な批評にのみ片寄り過ぎてゐるのを非難してゐるのである。しかも特に多いのは題目をのみ重んじ過ぎて、「その興味なり感情なりがどれだけ高いか」をも論ぜずにたゞ「この小說にはテーマがないとか、焦點がないとか、わけが判らないとか」と言つてゐるのを嘆いてゐるのによつても菊池氏との見解の差異はともかく、內容中心の時代へと動いてゐるのを看取する事が出來るのである。

八

以上によつて大體文章論の推移を窺つたつもりであるが、明治の文章がさうであつたやうに、之を導いた文章理論においても大正期を待つて著しい轉換を示したものと言はねばならないのである。

しかもその史的展開を大別して三期とし、二十年前後から三十五年前後までを創成期、三十五年前後から明治末年までを守成期、大正年代を完成期とでも呼ぶ事が出來るであらう。

明治十八年出版の小說神髓によつてその幕を切つて落されたものであるが翌十九年の「言文

一致」(物集高見)を隔てゝ二十年發表の浮雲(二葉亭四迷)に呼びかけたものとして甚だ賑かな第一幕であつたのである。しかも同二十年には美妙の「花の茨茨の花」なる新文章も現れてをり翌二十一年には「あひゞき」「めぐりあひ」(二葉亭四迷)などの名譯ものせられて言文一致の華やかな將來を約束するかの觀があつた。

時に辰巳小次郎の如き言文一致に反駁を加へるものもあり、美妙の如き聲を大にして新文章の育成に努めるものもあつたが、二十四年には久しく雅俗折衷體に親しんでゐた紅葉までが新情勢を早くも見抜いてか「二人女房」なる言文一致の小說を世に問ひ、更に二十九年には「多情多恨」なる作品を著して「……である」止を完成し新文章の大きな基礎を堅める事となつたのである。

かくて三十年代ともなれば、正岡子規は寫生文を提唱して後の自然主義時代に呼びかけ、自らも小園の記(三十一年)とか墓(三十二年)夢(三十二年)ランプの影(三十三年)などの佳作を示してをり、三十三年には新文章の史的考察書たる「言文一致」(高松茅村)さへ世に問はれることとなつたのを見ても言文一致の勢の如何なるものだつたかを容易に推測せられるであらう。

けれどもまだ世を擧げて新文章を謳歌するまでには至らず排言文一致會なるものさへあり三

十五年一月には「大日本と文章的國民」なる新文章排斥の著書さへ現れてゐるのである。

この著に對して言文一致講說會も亦同年五月その講演筆記を出版して言文一致論集と言つた。こゝに至つて新文章を繞る賛否兩論はその大詰に達したものとも言ふべくわれわれのこゝに一線を劃する所以である。

創成期にあつては終始その反駁者も現れはしたけれども、その末期に近づくに從つて新文章は優れた作品と共に漸く非難の聲を靜め、三十五年に至り排言文一致會の最後の逆襲を退けて幕を閉ぢたものとも言へるのである。

ついで守成期に入つては三十七年に「破戒」が現れ翌三十八年には「猫」、三十九年には「坊ちやん」「草枕」などが現れて言文一致體の一の頂點をさへ示したものとも言へるのであるが、同じく三十九年には逍遙は「言文一致について」なる文章をものして俗談體を以て「理想的言文一致體の主なる土臺石」たるものだとしてその利點を三つまでも數へ立てゝゐるのである。

更に四十年には漱石の「寫生文」についての議論が世に問はれたばかりでなく、「春」(藤村)とか「平凡」(二葉亭)とか「虞美人草」(漱石)とかの優れた作品も現れてゐる。

四十五年に著された花袋文話に見える印象描寫とか傍觀的態度とかも自然主義作家の文章論

を代表すべきものとして注目せらるべきであらう。

この期にあつては言文一致そのものについて論じたものとしては逍遥の言位だつたのによつても新文章も漸くその實績を認められて、創成當初に於けるが如く贊否兩論の喧騷さは最早や見受けられないのである。しかも「虞美人草」にあつても「平凡」或は「春」に於ても未だ舊様式の臭味から完全に離脱し切れない部分を幾らかでも存してゐるのを思ふとき、文章の實際においても或はその理論の上にあつても守成の時期であつたと言はねばたらないのである。

大正期ともなれば今まで言文一致體と呼ばれてゐた新文章が何時の間にやら口語文と呼ばれるやうになり、しかもその使用圏を擴大して官廳の布告にまで及んだ事は漱石の「文體の一長一短」(大正五年)に語る所の如くであるが、同じ年彼の逍遥は「文章上の擧國一致」を叫んで口語體の將來を豫言して、書簡文をもその領域に獲得し法令その他もたゞ時期の問題とさへ見なされるに至つた今日あるのを早くも見拔いてゐるのである。

大正元年には武者小路の「世間知らず」が世に問はれて滑らかな口頭語的な表現が見受けられるばかりでなく、まゝ冗長と思はれるほどあらゆる角度から具體的に縷述しようとする傾向も見られるのである。

更にこの傾向は「彼の三十の時」(大正三年)に至つて一層著しく、眞の言文の一致の姿を示してゐるのみならず、素樸自由な文章を開拓していつてゐるのである。

大正五年には菊池寛の「身投救助業」が現れてゆとりのある歐文の筆致を示し、翌六年には有島武郎の「カインの末裔」によつて巧妙な擬人法清新な比喩などが試みられてゐるのである。

ついで七年にもなれば「勲章を貰ふ話」(菊池寛)「無名作家の日記」(同上)「忠直卿行狀記」(同上)などの中には彼の自然主義作家とは全く趣を異にした簡素平明な筆觸を感ずるのであるが、更に有島武郎の「小さき者へ」(大正七年)「或る女」(大正八年)などには華麗奔放な歐文表記の心ゆくまで驅使せれてゐるのを見るのである。

大正八年には武者小路の「A夫婦」が現れ短篇とは言ふものの對話を以て全篇を貫いてをり彼の表現形式の自由さを物語つてゐるのである。

ついで大正十年に文部省の手によつて「口語文用例集」の出版せられるに及んでは口語文の使用範圍を一層擴張するに力のあつた事は改めて言ふまでもないのである。

大正十二年發表の武者小路の自叙傳小説「或る男」には獨語的な傾向の頂點を示してゐるばかりでなく全くの話言葉を以て全篇を貫いてゐる點において注目せらるべきものである。

内容によつて形式を決定してゆからうとする傾向は既に早く自然派のうちに萌しつゝあつたものであるが、白樺派に至つて一層その傾向を明かにし、更に新思潮一派によつて内容即形式論にまで築上げられていつたのである。

芥川龍之介は大正十四年の文藝講座に内容即形式論を唱へ、更に菊池里見の兩氏は文藝の内容形式を繞つて論戰を展開したけれども、これらは何れも明治初期における如き形式中心の時代から内容中心の時代へと大きな轉換を試みた事を物語るものでなければならないのである。

即ち明治初期にあつては作者も讀者もその文章の新奇なる事を望んだものであり、甚しきに至つては小說の題目と共に言文一致體とか雅俗折衷體などと文體上の見出しまで附けてゐるのによつてもこの流風の如何に熾烈だつたかを知りうるであらう。

しかるに大正期ともなれば最早表現にのみ心を專らにする事を慊らず思ふやうになり、こゝに内容即形式の議論の確立を見るに至つた事は文章論上著しい進展を示したものと言はねばならないのである。

しかも文章の發展上より之を見るも新文章に最も重大な役割を有する歐文脈をも極度にまで

融和して自由に之を驅使する事さへ出來るやうになり、更に言文の一致を望んだ明治當初の希望も遂にかなへられて純口頭語的な表現も亦見受けられるに至つたのである。

かくて近代の新文章は理論的にも實際的にも大正期を待つて大いに目覺ましい發展を示したものであつて、新文章の基礎はこゝに全く成つたと言つても過言ではないのである。

近代日本文章史　終

校正を了りて

本書は滿鐵教育研究所において一箇年半に亙つて講じた講義の手控に多少の筆を加へたものである。勿論葦舟にでも載せて流しやるべき未熟な作品ではあるが、文章研究の潮流に棹し幸にこの方面の一里標ともならば著者の喜とする所である。

尙この研究にあたつて、恩師春日・小島兩先生より何かと御指導に與つた事はいつもながら何ともお禮の言葉もない。

更に保々・三澤・藤本・寺田・畑中・八木・田村・唐木・生田・西山の諸先生をはじめ池上・堀・中村・西・竹中・馬場の諸兄その他先輩同窓の方々から、或は激勵の辭を賜り、或は研究の便宜を與へられた事などを思ふ時、このささやかな作品の中にもこれら幾多の溫い人の心が封じ

込まれてゐるものとして有難いと言ふ感じにうたれないではゐられないのである。

材料の集輯の思ふにまかせぬ土地にあつて、本書を纒めるにあたつては、特に大連圖書館の橋本八五郎氏並びに恩師堀越喜博先生を煩した所が多かつた。こゝに記して感謝の意を表しておきたいと思ふ。

既に拙著「大伴家持の研究」にも附記しておいた所であるが、私は故國を離れて國文學の研究にいそしむ一人として、今後とも本書を機緣として未知の方々にも御交誼を願ひ何かと御指導を仰ぎたいと念じてやまないものである。

昭和十年天長の佳節に

瀨古確

（滿洲撫順北臺町五丁目一ノ二）

昭和十年五月十五日印刷
昭和十年五月二十日發行

近代日本文章史

定價貳圓

著者　瀬古確

發行者　東京市澁谷區千駄谷四丁目七百二十番地
倉田八十八

印刷者　東京市神田區小川町二丁目十二番地
西川喜右衛門

秀工社印刷

發行所　東京市澁谷區千駄谷四丁目
振替口座東京七四二一番
育英書院

發賣所　東京市神田區駿河臺三丁目
振替口座東京二八〇九番
目黑書店